



188.84
Ki126k2



〇
複写



國譯禪宗叢書刊行會編

國譯
註解

虛堂和尚語錄

上卷

附原漢文

東京二松堂發行

18884

Ki/26r2



689185

凡例

虚堂和尚語録は、古來より宗門七部の書の第四に入る「言句の麤細を知らしむるが爲なり」こいふ、亦碧巖録と併行して、禪門の間に於て、提唱擧揚せられ、參禪者の重視する所の書なり、虚堂和尚は、南宋の名知識なり、吾朝鎌倉時代の南浦紹明和尚の師にして、東山下一流の豪者なれば、現今吾邦に流布する、臨濟一派は、皆此の一流の傳統のみ存す、所謂東海日多の懸記を與ふる名匠なり、苟も臨濟禪に參する者の、最も熟讀翫味すべき語録中、唯一のものとする、此の語録の和刊本、正保四年版の七卷本、及び萬治元年版の十卷、又は或抄本二三を、彼此對照して、約一ヶ年を費して、之が譯註を執

筆し、十卷として巻尾に註したれば、請ふ参照せられんことを、實に本書は禪門の語録中の一大名著なり。終りに原文を収載せるを以て國譯この對照を便せられんことを。

編者識す

國譯虛堂和尚語錄

解題

虛堂和尚語錄の、吾邦に渡來せしことは、無着忠和尚「妙心龍華院」曰く、此の録序なく、以て闕典と爲す、蓋し師は、蒙古騷亂の際、滅を唱ふ未だ幾くならずして趙宋亡ぶ、諸徒大手筆を請ふて、序を作つて編に蒙らしむ暇あらず、幸に此の録日本に傳へて盛んに流行するのみ」と、又曰く、「師徽號なし、是れ天下騷屑に屬し、朝廷狼狽、度宗早く崩じ、元朝に至りては、前朝歸崇の僧の諡號を奏請することを得ず、故に此の項を闕くか」と、又云く、按ずるに此の録は、南浦和尚携へ來る、後録又南浦現存の來時、何を以てが之を知る、録尾の絶崖（名は宗卓南浦は嗣ぐ）新添の跋に曰く、祖翁（虚堂）在世の語録二帙、刊つて天下に流ふ、宋の咸淳五年「この年虚堂寂す」、晋之妙源續いて後集を録す、已に三卷を成す、本朝「日本」未だ之を刊行せず、先師「南浦」常に言を爲せども未だ成ることを果さず」と、本録は各卷、みな會裡の門人が編集するところにして、南宋の度宗、咸淳五年の十一月、即ち虚堂和尚の遷寂の十月七日を過ぐることに、僅に二ヶ月にして、嗣法の弟子晋之妙源之を編集するところなり、その弟子梵華

清塞が、衣資を抽んで刊行す云云、吾邦にては、足利時代に刊本のありし事を古記に載せたりと、無着和尚はいへり、今現存するものは、正保四年版は七卷となし、萬治元年版は十卷となし、龍溪性潜之が序を製し註を加へて、溪抄といふて流布せり、虛堂和尚の詳傳は、本録の後に行狀を載せたれば、こゝに略するも、一端を述べんに、虛堂は南宋の第二主孝宗、淳熙十二年に生る、無準師範は同四年に生るを以て、その後ること九年なり、日本の後鳥羽院天皇文治元年鎌倉に於て、源頼朝が、霸府を開き、安徳天皇は、西海に崩じたまひ、又その明々年の文治十四年には、建仁の開山榮西は、再び入宋せり、南宋この時代は禪宗最盛の時にして、松源、運菴、無準、癡絶、等みな化を旺んにし、元無學、曇西礪も在宋の日師に參ぜり、儒家は、蘇軾、朱熹、呂祖謙、等みな盛んに門戸を張りし時なり、本邦に來期せし高僧には、建長の蘭溪、兀菴、大休、圓覺の無學、一山、等の如きあり、入宋せし高僧には、東福の聖一、永平の道元、興國の法燈、建長の南浦、等あり、彼此往來し、鎌倉時代禪宗の最も旺盛を極めしことを、參照するの要ありと思ふ、この卷は、第一卷には、虛堂和尚が南宋の理宗紹定二年五月行年五十餘、勅を奉じて興聖禪寺に住する語録に始まる、山門の誦疏は揚旛の撰するところ、諸山の諸疏は別浦法舟の撰するなり、後代の支那、日本、の諸大本山住持の、誦疏の大槩は、之を模範として製作せらるゝもの多かりしならんか、又報恩、顯孝、瑞巖、延福等に住する語録を載す、凡そ上堂その他の禪門の規式、之を準據とするもの多きか、第二卷は寶林寺に住するの語

録を、第三卷は育王、栢崑、淨慈、徑山等に住するの語録を載す、この時、虛堂和尚、暮齡八十一にして徑山に住せり、度宗咸淳元年八月なり、それより同五年十月、八十有五に至るの語要は、欲ぎの徑山後録として之を載するるとせり、第四卷は法語、序跋、眞讚、普說、等の禪餘の文辭類を載するなり。

第五卷の頌古は、古人の機緣精粲のもの一百則を取つて、爲に之を頌じて、入門の要を示す、其の旨趣は、虛堂和尚自ら後に跋を書して、之を證す、弟子無隱の編する所なり、第六卷の代別は代語五十二則、別語四十七則、合して一百則を擧ぐ、是れ亦同じく無隱の編する所にして、五卷と同時に頌出するなり、次に佛祖讚も、編者前に同じきか、次に禮祖塔は、石帆衍老淑と盟を結んで、江淮湘漢の敷地に、祖跡を巡禮して、一々頌出するなり、虛堂が其の師運菴岩和尚に嗣法して後の事に屬す、次に佛事とは、事と托して佛法を開示し、縦に禪門の一大盛事を現す、第七卷は、上と同じく無隱の編集するところか、其の偈頌一百七十七首は、最も言句の子細を識らしむる、好句多く、實に金聲玉振といふべし、彼の雪竇の祖英集に、讓らざるの佳作にして、雅懷を伸ぶること、禪林偈頌の軌範と謂つべし、第八卷は、本録の續輯として、弟子の以文、無補、法光等の合編に成るものにして、前の興聖、寶林の兩録の遺落を拾ふて、之を續輯とせしものなり、次に淨慈後録は、同じく道準、禧會、紹賢等の參徒の合編せしところ、前の淨慈録の拾遺なり、第九卷の徑山後録は、正一、液喜、尙賢の三人が合編する所にして、虛堂和尚の最後の語録と

いふべし、第十卷の偈頌後録は、前の偈頌の拾遺、次に佛事後録は、侍者慧明の編する所、前の佛事の拾遺、次に乗炬も前の拾遺、次に法語、眞讃も、前に脱落せしを拾遺せり、言々句々、眞に禪宗語録の好典型ならざるはなし、その嗣法の弟子、晋之妙源は、師の十會の語録なることを證記するが爲に、後跋を附せり、實に師が遷化の、南宋の度宗咸淳五年十月七日以後の、十二月佛成道の日なり、次に新添とは、本録の十會中に遺脱せし、偈頌、佛事、法語、辭世の頌を、師が嗣法せし、日本建長寺に住する、南浦紹明和尚(大應國師)の弟子にして、京師の萬壽寺に住する、絶崩宗卓が、之を集めて、添ふるに、虚堂の參徒なる法雲閑極が撰する所の行狀數紙とを以てして、日本の花園院天皇正和二年「虚堂滅後四十五年」冬、京師安井の龍翔寺に開板することを後に書す、我邦の臨濟宗の名山に、師の自讃の肖像を珍藏するもの三四を見るに、師が鳥髮にして、風手威容の嚴然たる、參照するに、請ふこの行狀を熟讀して、往時入宋入元して、傳法せし、諸祖中、ひとり、南浦和尚の傳法せし、虚堂の正脈一流のみが、現今存在し、他は絶えてなし、只だ惟だ本録の江湖に博く傳播するもの、故なきにあらず、まことに至祝すべきである。

目次

國譯虛堂尙語錄解題……………一—四

國譯虛堂和尙語錄解題……………一—四

國譯虛堂和尙語錄解題卷之一

興 聖 錄……………一—二五

報 恩 錄……………一—四二

顯 孝 錄……………一—二一

瑞 巖 錄……………一—二四

延 福 錄……………一—二五—四

同 上卷之二……………一—二六

寶 林 錄……………一—二六

同 上卷之三……………一—二六

育 王 錄……………一—二六

目次……………一—二六

栢巖錄……………一—三

淨慈錄……………一—八

徑山錄……………一—四

同 上卷之四

法語……………一—七

序跋……………四

眞讚……………六

普說……………一—五

國譯虛堂和尚語錄卷之五

頌古……………一—七

同 上卷之六

代別……………九—一四

佛祖讚……………一四—一六

禮祖塔……………一七—一八

同 上卷之七

偈頌……………一三—一六

同 上卷之八

續輯……………一三—一五

淨慈後錄……………一四—一四

同 上卷之九

徑山後錄……………一五—一八

同 上卷之十

偈頌後錄……………四九—五〇

佛事後錄……………四七—四八

乘炬……………四三—四四

原文目次

虚堂和尚語錄原文

同 上卷之一

興聖錄 一—六

報恩錄 七—七

顯孝錄 一八—三三

瑞巖錄 三三—三五

延福錄 二六—元

同 上卷之二

寶林錄 三〇—五

同 上卷之三

育王錄 五—九

同 上卷之四

法語 八三—八七

序跋 八八

眞讚 八九—九〇

普說 九一—一〇五

同 上卷之五

頌古 一〇六—一三

同 上卷之六

代別 一三—一四〇

佛祖讚 一四—一五三

禮祖塔 一五—一五四

佛事 一五—一五

同 上卷之七

偈頌 一五—一八

同 上卷之八

續輯 一八—一九

淨慈後錄 一九—二〇

同 上卷之九

徑山後錄 二〇—二三

同 上卷之十

偈頌語錄 二三—二三

佛事後錄 二三—三四

秉炬 三五—三七

法語 三六—三九

眞讚 二四〇—二四二

新添 二四二—二四六

行狀 二四六—四六

法語 二四六—二四九

眞贊 四七—四五二

新添 四五—四六六

行狀 四六六—四七〇

國譯虛堂和尚語錄卷一

嘉興府興聖禪寺の請疏

朝請郎 知嘉興軍府主 管學事 兼管内勸農公事 借紫 楊璘 撰

參學妙源編

右伏して以れば、者の寺は是れ尋常にあらず。

孝宗聖跡の去處爲り、諸山皆懽喜を生ず、相公の鈞旨を承つて請じ來らしむ。此の住院に當るの人は、箇の作家の漢ならんことを要す。伏して惟れば、新命虛堂愚公禪師は、遁謙の聲價、馮仰の工夫、

① 虛堂。傳記は本語錄第十卷の末に見ゆ、日本の龜山天皇文永六年己巳、宋の度宗咸淳五年十月七日に示寂せらる、今を距ること(昭和三年)六百五十七年。

なり、語は師、錄は門人。參學。其の師に參じて學道す蓋し學徒の自ら稱する所なり。妙源。定水の寶業源禪師、飾の法嗣、泉州承天に住す。編。簡を次づるなり。嘉興府。古の秀州なり、浙西に在り、宋の慶元中、嘉興府と改む。

興聖。もと嘉興縣丞廳、日本

① 法法無心、② 鄧水一輪の月を湛ふ。③ 句句眼あり、④ 北山半嶺の雲よりも高し、⑤ 正に宜しく、⑥ 戒香・定香・解脫香を、薰取して、便ち來つて、佛界・魔界・衆生界を、坐斷すべし。⑦ 矧んや惟の

⑧ 御殿、⑨ 肅悶たる、梵坊なるをや。⑩ 皇覺の莊嚴に、憑るに非ずんば、曷ぞ、清朝の崇奉に副はん。⑪ 臣子義重く、菩薩願宏なり、請ふ師、九帶の禪を提起して、我が爲に、兩宮の壽を祝延したまへ。⑫ 垂虹橋畔、争つて動地放光を看ん、冷泉亭邊、切に車を停め歩を卻くること莫れ。⑬ 謹しんで疏す。

の政所なり、宋の孝宗、此に誕育す、寧宗の嘉定年中、額を興聖院と賜ふ。
① 禪寺。律寺や教寺に簡別するなり、百丈のとき始めて坐禪を行するの場となし、この名稱始まる。
② 請疏。嘉興府の城主の疏なり、疏は條陳なり、記なり、通なり、具に山門の盛事を陳べて、兼れて教誨の旨趣を記して、新命の人の疑滞を疏通するなり、之は雲門偃禪師をして靈樹に住せしむるに、何希範等が請疏を製して請じたるに始まる乎。
③ 朝請郎。日本の朝散大夫從五位上に當る、朝會召請に奉ずるの官。
④ 知嘉興軍府主。知行守護する太守知事なり。知はつかさどる。

⑤ 管學事。學校の事を管領す。日本の外記と同じ。
⑥ 兼内勸農。農桑力田を勸し兼ぬるなり。
⑦ 借紫。紫彩金帯を借すとて、借は假なり、本紫に非ず、唐の則天の時より始まるといふ。
⑧ 楊璘。傳記は宋史になし、不明なり。
⑨ 撰。述なり、造なり。
⑩ 右伏以。この三字は發句、山門の疏等、みなこれを用ふ、疏語の前面の序言なり、日本にてはよみ上ぐるに、「いふうい」とか「右伏請」とか音讀にてよむの慣習。
⑪ 者の寺。この寺はなみくの寺にあらず。
⑫ 孝宗聖跡。孝宗は南宋の二代なり、在位二十七年、壽六十八、孝宗の母張氏、秀州に生

む、父は太祖六世の孫の秀王なり、後に捨施して寺となし、興聖禪寺と稱す、勅願道場なり。
② 去處。去は捨なり、臯居を捨て、寺となす。
③ 諸山云々。其れ故天下の禪宗、この寺の繁昌をば愛重するなり。
④ 諸山は嘉興府中の天寧、招提、眞如、景德、東塔、慈雲等なり。
⑤ 相公。忠獻史衛王、釣軸を乗る。
⑥ 釣旨。將軍、宰相などの命令なり、釣は重しといふ意、楊璘が一分の料簡にあらず、攝政、翻白の思召なり。
⑦ 要箇作家漢。法幢を建て、宗旨を立てる底の一家を作すの人でなくくてはならぬ。
⑧ 伏惟。夫れに就いて、よく分けて見ればなり。これより以下衆生界に到るまで師の徳を贊す。
⑨ 新命。新に命を受けて進院するなり。
⑩ 禪師。人天の凝滞を開發するを禪

師と名づく。
① 遁。支遁、字は道林、晋の高僧、或は龍牙遁か。
② 謙。支謙、字は恭明、晋の高僧、或は明招の謙か。
③ 聲價。智徳一切が稱揚すること、又名を謂ふ。
④ 瀉仰。瀉山、仰山なり。五家七宗にても微細の宗旨は瀉仰宗なり。
⑤ 工夫。工夫の高邁なること、謹嚴なること、稱嘆するなり。
⑥ 法々無心。無心の心法を相續して一點の妄塵なし、少しも動ぜずにて、見聞覺知心意識情なし。
⑦ 湛鄧水一輪月。鄧水は唐には明州宋には慶元府にあり、鄧は府城の東に在り、師は明州に生るゝが故に鄧水の月をうつすが如し。湛は沈なり、印なり。
⑧ 句句有眼。凡そ所説の法、言言句句活眼を具す、意到句到と云ふことあり、師常に活殺一句下にあり
⑨ 北山半嶺。北山は靈隱の境致、北

高峯は乃ち靈隱の最高峰なり、石磴百級、曲折三十六灣なり、師この時に北山の靈隱寺に在つて、請を受くるを云ふ。
⑩ 正宣。今日その時節なればなり。
⑪ 戒香定香。五分の香の中の三を掲げて餘を總ぶる。瓔珞經に云く、「五分法身は識性を以て別なり。戒香は身を攝し、定香は意を攝し、慧香は亂を攝す、解慧は倒見を攝し、度知は無名を攝す。」
⑫ 無着考に曰く、「香を熏するは虚堂自ら熏すといふに非ず、孝宗の靈及び今上帝に祝熏し奉るなり。」
⑬ 熏取。熏はたくなり、取は語の助なり、薦取又は間取の類なり。
⑭ 佛界は順境界。魔界は逆境界。
⑮ 衆生界。順逆境界、衆生は能修の人、佛は所修の法、所謂正知正見なり、魔は無修の方、所謂越格自在なり。
⑯ 坐斷。ひつしかれる、把住なり、坐定なり、教外別傳單傳心印の眞

風を興起めされかしと。
 ② 矧。上を受けて、虚堂を請すべき所以を説く。
 ③ 御殿。興聖寺は孝宗誕育の處なれば御殿といふ。
 ④ 肅閣。閣は閉なり、嚴肅に閉閣して地下の常流の來往を許さず。
 ⑤ 梵坊。梵は清淨の義、坊は區なり、清淨の伽藍、天下傑出の道場なればなり。
 ⑥ 皇覺云々。皇覺は覺王と云ふが如し、佛を大覺王と稱す、故に莊嚴は莊飾端嚴福智の二莊嚴なり。
 ⑦ 非憑。禪師のやうなる福智具足の人をたのみにするにあらずんばの意。
 ⑧ 清朝云々。理宗帝の清明なる朝廷の尊崇奉持なり。

⑨ 臣子義重。忠義重きが故に史彌遠や私ども楊璘が清朝の鈞命を承つて國の爲に師を請す。
 ⑩ 菩薩願宏。悲願宏き故に、化度の爲に命に應ず。
 ⑪ 孝宗をあなたはと菩薩にたとへる誓願宏度なりと。
 ⑫ 九帶禪。濟下の宗匠なる故に之を用ふ、浮山の九帶とて人天眼目に
 出づ。
 ⑬ 楊璘は不案内ゆえ、いつかど向上宗乗のつもりで兩宮壽の對に書かれたるものなり。
 ⑭ 爲我。相公又は楊璘又廣くは天下國家のためにの意。
 ⑮ 兩宮壽。理宗皇帝と皇后との聖壽を、祝願延長の御祈禱をなされたしと。

⑯ 垂虹橋畔。興聖寺の傍にある橋なり。
 ⑰ 争。不可思議の神變に出合つては如何なる惡業煩惱もなくなる。
 ⑱ 動地放光。一佛出世説法の故なり事は法華等の諸經に見ゆ、六種震動白毫相好、東方八千土を照すなり。
 ⑲ 冷泉亭。靈險寺に在り、五亭の
 一なり。
 ⑳ 切に車を停め。冷泉亭のあたりに愚圖々々とせず御越した願ひたしと。
 ㉑ 謹疏。具に山門の盛事をのべて、敦請の趣旨を書す。

諸山勸請の疏

在城の住持 報恩光孝禪寺 嗣祖 比丘 別浦

法舟 撰

① 臨濟を祖とし、運菴を師とし、聲名透徹す、廣覺を辭し、興聖に住す、去取分明なり。
 ② 吾が軍を張るに足れり、衲子に愧づることなし。恭しく惟れば、新命虚堂和尚は眞實諦を得、清淨身を現す。其の南北の兩山に、閑に霧隱を爲さんよりは、東西の二浙に、高く雷鳴を作さんに孰若。況んや此の龍宮、實に虹渚に當るをや。大亟相、親り會て我に問ふ、賢邦君、妄に人に予せず、速かに來れ速かに來れ。希有希有閭丘 尙前して作禮す、豊干に在つて、豈に

國譯虚堂和尚語錄 卷一

③ 諸山勸請疏。諸山の疏は大槩慶賀の儀と隣交の好みを疏す、此は別浦吹嘘の故に、單に勸請の意を疏す。
 ④ 在城住持。嘉興府の城内にある寺に住せるなり。
 ⑤ 報恩光孝禪寺。天寧寺なり、國に一ヶ寺づゝあるなり、この府にあるは天寧報恩光孝禪寺なり、秀州嘉興府内にあり
 ⑥ 嗣祖。祖師の命脈を嗣ぐ意。
 ⑦ 比丘。譯して乞士といふ、清淨活命の故に、或は淨持戒、或は能怖魔との義を兼ねるなり。
 ⑧ 別浦法舟。別浦は道號、法舟は諱なり、空叟印に嗣ぐ。

大惠宗果―佛照惠光―空叟印
 ① 別浦法舟
 ② 祖臨濟、師運菴。祖師の承繼道徳據るあるが故に、運菴は臨濟の十七世の孫なり、祖は始めなり、本なり。
 ③ 聲名透徹。その名法界に透徹す、四百余州歸敬せざるものなし。
 ④ 辭廣覺。笑翁和尚が靈隱に在るとき、師に命じて藏事を尸らしむ、擧げて杭州の廣覺に住せしむ、力めて辭す。
 ⑤ 住興聖。この度興聖寺に住す去取分明。廣覺と興聖とは事がちがふ、内證ことではない、天子の命ある故に、進むも退

① 饒舌の人ならんや。 ② 黃梅勉めて爲に山を下つて、馬祖に代つて、悲心の偈を説きたまへ。 ③ 師紹定二年五月一日、靈隱に在つて請を受く、 ④ 入寺陞堂祝聖畢つて、座に就く。 ⑤ 僧問ふ、呼猿洞口、無心にして月に臥し雲に眠る、長水江頭正に好し綸を抛ち釣を擲つに、 ⑥ 只だ、靈山の密付の如きんば、還つて學人が咨參を許さんや也た無や。師云く、「崑崙生鐵を嚼む。僧云く、「與麼ならば則ち要津を把斷し去れり。師云く、「將に謂へり、爾是れ箇の ⑦ 厩を出づる良駒と。僧 嘘一聲して、便ち禮拜す。師云く、「果然。」乃ち云く、「大機圓應、大道無方、去來象を以てせず、虚空を撥轉す、動靜心を以てせず、當軒大坐。 ⑧ 兵は印に隨つて轉じ、將は符を逐

くも智鑑が明かなり。 ② 足張吾軍。此の師を得て吾が宗を恢弘するに足れりと。作家の戦將の大軍を法戰法軍として、宗門の關羽や張飛の百萬軍兵も事ともせぬ意。 ③ 無愧衲子。英靈の衲子坊様なりと。 ④ 得眞實諦。これは八字稱と云ふ句のならばかたなり、諦は眞實不虛の義、眞諦俗諦などと云ふに「清淨妄を絶するを眞實と名づく」と大乘義章に出づ、得は自利利他、解行相應を云ふ。 ⑤ 現清淨身。見聞利益を得ることにて、現は利他なり。 ⑥ 南北兩山。南山は淨慈、北山は靈隱、師は之の時靈隱に在り、淨慈には南屏山、靈隱には北山と云ふあり。 ⑦ 閑爲霧隱。靖退長養の意、靜にしやがんでござらうより、

まう時縁熟してあればと、理を推して之を責むるなり。霧雨七日にして下り、食ますなどより出づる語なり。 ② 東西二浙。浙東、浙西なり。嘉興府は浙西に屬す。 ③ 高作雷鳴。説法の雄音普く諸方に達するに譬ふ。十法界に入り涉つて、隨類他利を得ることにて、爲人説法で、大菩薩心の説法をなさらんにはと。 ④ 龍宮。興聖はもと孝宗の御殿ゆゑに龍宮と稱す。 ⑤ 唐詩の賈賈玉の句にも「龍宮鎖して」とあり。 ⑥ 虹渚。悉くも孝宗皇常の誕生の靈地なりと。史記に「火星虹の如く華渚に下り臨む、母即ち感じて少昊を生む、黃帝の子なり、」これより出づる語なり。 ⑦ 大丞相。史衛王なり。

ふて行く。 ② 物に遇ふて縁に應じ、處に隨つて主と作る、直に得たり、嘉禾穗を合し、秀水朝宗し、鳳凰來儀し、麒麟瑞を現して、西來の祖意を發揮し、興聖が門庭を成就することを、然も是の如くなりと雖も、畢竟何を以て ③ 驗と爲ん。良久して、「一氣言はず有象を含む、萬靈何れの處にか無私を謝せん。」 ④ 復た擧す、三聖道く、「我れ人に逢ふときは則ち出づ、出づるときは便ち人の爲にす」と。師云く、「二大老、一人は占波國裏に向つて鼓を打ち一人は、大食國裏に向つて舞を作す。若し臨濟の正宗を、扶樹せんと要せば、大いに竹を接いで月を點するに似たり。山僧今日出世、

① 問我。この別浦に住院に當人を問はせらる。正に其の人は虛堂和尚なりと。 ② 賢邦君。邦君は諸侯、則ち日本の大名なり、府主楊璘のこと。 ③ 不妄予人。予は賜なり、通じて與に作る。 ④ 巨細に吟味を遂げて請待せらるるなり、人とは凡庸のものにはなり。 ⑤ 速に來れ。時縁熟する故に、擬議をせずに来れと。 ⑥ 希有。名藍といひ、丞相や府主の請待といひ、諸一統が盡く勸請といひ、珍しき極みなりと。 ⑦ 閻丘。丞相や邦君に比す、これは閻丘、唐の貞元の末に豊子を敬したる因縁あり、今は略す。 ⑧ 向前作禮。進んで禮義を盡して尊重す。

① 在豐干。別浦が自ら比するなり。 ② 饒舌人。此方が口やかましくてのことではない、申しぞこなひではないと。 ③ 黃梅。これは大梅の誤りなり、虛堂に比す、大梅は明州なれば師の生縁ゆゑ、之を用ふ、燕處せずして勉めて山を下りしなり、山は武林の靈隱なり。 ④ 代馬祖。運菴に比す、先師の法幢を主張するは師にあらずして誰ぞやと。 ⑤ 說非心偈。即心即佛、又道ふ、非心非佛と、祖師門下の眞の種艸を接得めされよ。 ⑥ 師紹定二年。師は此の時四十四歳なり。南宋の理宗（五代）日本では八十五代後堀河天皇寛喜元年己丑に當る。 ⑦ 在靈隱。笑翁和上の會下に在りしなり。 ⑧ 入寺陞堂。次第に嗣香等まで

で開堂の式畢る。

就座。椅上にすわつてこゝには案

話を擧ぐ。

僧問。出たは出たが晴漢じや四六

文章文字のはしくれ位は少し覺え

て、智解分別を悟りと思つて居る。

呼猿洞口。靈隱の境地なり、武林

山にあり。

無心臥月。此れは師の從前の靈隱

に在つて、跡を晦し徳を養ふこと

を序するなり。

あなたは打成一片、聖胎長養なり

と。

長水江頭。嘉興府の城南六里にあ

り、長さ五十余里。

正好拋倫。此れは師の即今興聖に

住して、接物利生するを云ふ。行

他蝦蟹鬼龍、向ふまゝに釣り得ら

れる丁度の時節なりと。

只だ。今が日出度き時なり。

靈山密付。世尊不説の説、迦葉不

聞の聞にて、世尊拈花、迦葉微笑

す、世尊の玉はく、「我に正法眼藏

あり、摩訶迦葉に付屬す」と。以心

傳心も未だ密付と稱するに足らず

呑參。俺とちつと御相談はあるま

いかなり。

崑崙嶺生鐵。沒滋味のことなり。

興廢則。さうならばとの意。

把斷要津。湊泊し難しとの故に、

それでは寄り附かれぬ何卒二義門

に下りくださいと。

將謂。始めの言ひ出しは子細らし

いがと、抑下の意なり。

出厩良駒。俊逸にして繋いで置け

ぬ天晴れのものと思ひたり、生嗟

(いけづき)磨盡(するすみ)と思

ひたりと。

嘘一聲。方語に不肯の義、からう

そ吹くなり、餘り手合の違ふ故、

まあ引取りますで御座らうと禮拜

したり。これが全機作用のところ

なり。

果然。それ見たか、再び完全を得

るものは能く幾箇ぞとなり。

乃云。提綱の語なり。

大機圓應。應ぜざる所なしである

大機大用。地獄は地獄、餓鬼は餓

鬼、圓應す。

大道無方。方所あることなしとな

り、西でも御座らぬ、ござらぬ所

は御座らぬと。

去來云々。これは涅槃無名論の意

に出づる語、佛に佛の相なく、女

に女の相なし、往くの還ると云

ふ沙汰はなし、器として形とらず

と云ふことなし。

撥軒虛空。上句の著語なり、何に

せよと、自由自在、去彼來此なり

動靜不以心。これも上と同じ、無

名論より出づる語、少しも心を用

ひず、感じて應ぜずと云ふことな

し。

當軒大坐。上の句の著語、立つて

ゐてもとなり、山を見川を見て居

る。

兵隨印轉。將軍の印なり。

將逐符行。天子の符なり、この二

句は上の大機圓應以下の文を承け

亦禪道佛法の人の爲にするなし。只だ一味に

口あれば飯を喫す、忽ち箇の漢あり、出で來

つて和尚の指示を謝すと道はど、拄杖を拈じて

便ち打たん。何が故ぞ、一做さざれば二休

せず、風流ならざる處也た風流。」

上堂、擧す、龍濟、衆に示して道く、「是

柱、柱を見ず、非柱、柱を見ず、是非已に去

ぞけ了りて、是非の裏に薦取せよ。」拄杖を

卓して、「向に道ふ、山下の路に行くこと莫れ

と、果然として猿叫ぶ斷腸の聲。」

解夏。小參、「靈山に結夏す、結本曾て結せ

ず、興聖に解夏す、解も亦曾て解せず。解結既

に拘りなく、去來作相なし。所以に道ふ、

大圓覺を以て我が伽藍と爲して、身心安居

すれば、平等性智なりと。」喝一喝して、「者

て、譬を引き下つての二句を説

く。

遇物應緣。有情非情の物や、

順緣逆緣のものにてともとなり

と、已下開堂祝贊の語。

嘉禾合穗。嘉興府に嘉禾郡、

嘉禾墩あり、一莖九穗あるの

瑞ありしこと、光武の生れた

る時、これは天下和同の象な

り、これによりて秀と名づく

秀水朝宗。秀水縣なり、嘉興

府にあり。朝宗は海に朝する

が如く、天下王化に服せずと

云ふことなく、我れ後れじと

走り付くこと。

鳳凰來儀。仁徳の香に依つて

來り舞ふて天下太平なり。

麒麟現瑞。麟も仁獸なり、吉

瑞なり。

發揮西來。達磨大師が十万里

の波濤を歴て、釋迦の大法を

傳へんが爲に來り、今日又虛

堂が興聖の門庭を成就したの

もそれじやと。

雖然。それはさうなれども、

畢竟どんづまりはなんぞ、證

據がなくては請け取られまい

と。

驗。證なり。

良久。何食はぬ顔で、や、久

しくしてなり。

一氣不言。何程の天文家でも

役には立たぬ、先づ話頭に參

ぜよと、萬有の物象はみな萬

靈なり、百姓でも町人でも天

鑑の天理に私ばなし、佛法と

王法と一般なりと。

復舉。拈提なり、後は皆其の

通りなり、拈弄擧揚すること

なり。

三聖興化。二人共に臨濟の法

嗣、臨濟下の二郎、三郎なり。

我逢人則出。一機一境の上な

り、この拈提は前の一氣不言

の講釋なり。

の 草索子は 諸方共に用ふる底なり、只だ花街に入り柳巷を穿つて、波波 擧擧として、九句を過了するが如きんば、尅期取證又作廢生。喝一喝して、「國に憲章あり、三千條の罪」復た 文殊三處に夏を度るの公案を擧して、師云く、「迦葉 當時性燥に 一椎を下し得ば道ふことなけん文殊 三處に夏を度ると、直饒ひ 黃面老子、 別に神通ありとも也た須らく 腦門著地すべし。」

次の日上堂、 秋風淅淅、 秋水冷冷、 千辛萬苦、 笈を負ひ笈を擔ふ。 張公が 喉了つて李家が店、 草舍茅庵知に程を作す。

知府 吳狀元 蕭祖を獨いて 公據より石を立つる上堂、 拄杖を拈じて云く、「黃面老漢末上に 他に遭ふて、 雪山深き處に向つて、

不爲人。點滴も施さねと。不垂手なり。

不出。胡來り漢來るも、寄せ附けぬと。

占波國。安南地方の或國、現今は何に當るか不明なれども我國でならば蝦夷、松前などに當る。

大食國。西域の波斯國、西都婆羅門にありと、我國でならば琉球、朝鮮などに當る。

是の二ヶ國は一味知音底なり扶樹。取り立てんと思はばなり。

接竹點月。竹を接いで接いで、それは月に届かぬ、勿交涉の義なり。

無禪道云々。二老を點す、三聖や興化等が云ふたやうな六づかしいことは云はぬ。

一味有口。一向に口を以て居ればなり。

節漢。胡人は中原を漢と云ひ

中原は胡人を虜と云ふ。

一不做。この語が云ひたいばかりに不成就、元來は無一なるに、はや二となり。

二不休。不做處は風流でなし不風流處。流はわちく清潔の風、各條流あるを言ふ。

是非の沙汰に及ばぬこと。

上堂。凡そ宗乘向上の大事を擧揚するを上堂と云ふ、拈古なり。

龍濟。撫州の龍濟、紹修山主地藏琛に嗣ぐ、雪峯の法孫、法眼の同行なり。

是柱不見柱。止觀の語、柱は助語なり、是非と云はん爲なり、有句無句の如し、衲僧は是非の中で是非さつばりなし是非已去了。異體なきが故に無是非の處、舊に依つて是非は自ら是非なり。

行脚遍歷も、參禪辨道も、看經看教も、全體不是なり。

是非裏薦取。薦取は會得せよとなり、たとひ彌勒が下生しても埒あかぬとなり。

卓拄杖。それ見たかと、氣を付けて云はるゝなり。

山下降。寒山子の語なり、向上の一路なり、是非の窟なり。

果然。案の如くさうなり、それ見よ。

猿叫。餘り痛ましいので、心混亂して、心肺の府もきれん、すたすたになると、是等の妙唱は我が虚堂も感發するとなり。

解夏。五月一日に入寺、今七月十五日なり、その解制なり。

小參。百丈清規には、晚參の章あり、凡そ衆を集めて開示する、皆之を參と謂ふ云云、昏鐘鳴に移す而して之を小參と謂ふ、住持登座提綱、叙謝、擧古、結座等あり、此れば提綱、次の文殊の縁は即ち擧古なり。

靈山結夏。靈山は靈隱なり、夏中

に五月一日に請を受けたる故に結夏す。

興聖解夏。今日こゝで解夏せり。

去來無作相。靈山を去り、興聖に來り、走作の相なし。

所以道。言ひ譯に古語を引いていふ

以大圓覺。圓覺經の圓覺菩薩章に出づ、伽藍は此に衆園と譯す、人入本具足の圓覺は萬徳の所依なり

身心安居。須彌山の如く安住不動なればなり。形心靜かなるは安要期、此に住するは居なり」と南山はいへり。

平等性智。南方の位にて、七識を轉じて云ふ、性縁の性寂なれば能縁の七識自如なり、如の性皆同じ故に平等なりにて、波瀾を動ぜず如來の大寂滅海に遊ぶ、所謂齋動含靈、一一放光明の境界なり。

喝一喝。やい大衆たち、見たか、聞いたか、どうじやとなり。

紳索子。此の絡索と云ふが如し、藁繩さつとしたもの、上の解結安

居を指す。

諸方共用底。順境界の故に分外とせず、後面に遊境界を説かんと要す、それ相應に用ひ所があるとなり。

只如入花街。嬉坊酒肆、無礙自在の無功用道なり。

波波。波は當に跛に作るべし、行いて正しからずとなり「ちんば」なり。

掣掣。ちく、不具足の辭、百醜千拙、一夏を了りたり。

尅期取證。是れば縁起を記するのみ。尅期は定るを約するなり、長期百二十日、中期百日、下期八十日と圓覺經にはあれども、今は九十日、龍溪抄に「取と證とを二事となすは非なり」とあり、無着の説なり。

國有靈章。國家に憲法條章あり、罪品三千を分つ、如レ此規矩嚴令なるが故に、遊境界に打入することとを許さず、今解夏、隨往無礙の節

鬼を引く。三百六十日、交頭結尾、別に生涯を展ぶ。二千年の滯貨行はれず、重ねて新に價を増す。楳柑の火村田樂、露地の牛、拈出するに勞せず。金剛圈、栗棘蓬、鐵酸礫、正に好し施呈するに。南來北往、呑透するに門なし、鵝眼鷹睛怎生が、啞嗽せん。興華恁麼の告報、早く是れ、雲頭を按下さ。何が故ぞ、江南地、暖に塞北天寒し。師復た云く、「諸方は、龍肝鳳髓を烹る、我が此間は、荒涼にして供養すべきなし。深山、嵩崖人跡不到の處に向つて、一物を拾ひ得て、無事甲中に颯在すること多年矣。今夜情を盡して拈出して、諸人と與に分歳す。拄杖を卓すること一下して、一切に忌む。渾崙に呑むことを。」

越の吳元狀を指すなり。
 不施す又。餘力を勞せずとなり。
 削却除根。已墜の宗風を振起するにたとへる。
 さつぱりと綺麗に掃除が出来て清淨の境となり、蘆税をも取らぬこととなりぬ。
 便見坐致太平。蘆税も免許をせられ、心安く四海浪平かなり。
 高歌舞日。寺門の無爲安平なことは、聖代の御蔭なりと。
 有何憑據。どういふわけで太平舜日なるか、證據がなくてはすむまい。
 公驗分明。公府より碑まで立てられたれば、これ好心得ではないとなり、佛法王法の繁昌これほどの證據はない、眼を着けよとなり。
 除夜小參。大晦日の夜、去舊迎新なり。

一四
 灰寒火冷。興華寺裏は上を下へとひつくりかへつてゐる。
 爆竹送窮。支那の風俗で、厄鬼を祓ふこと。
 燒錢引鬼。紙錢を焼いて窮鬼を接待して、後に送り去らしむ、除夕に行ふのである、東村の王老夜燒錢などの語あり引は引き去らしむなり。
 交頭結尾。交は「あはひ」と云ふ意、來年と今年との際なればなり。
 別展生涯。好箇の時節、よろしく本分の事施設すべし。世間の世渡とは別なり、衲子向上の生涯をば展べよとなり。
 二千年滯貨。佛祖は已に去れども未了の公案なり。滯貨は店ざらし、「れきもの」佛が滅度よりもば二千年餘にもなる、不行の行は「はやる」といふの意、「うる」のころなり。

元宵上堂、人間の燈、天上の月、明あり暗あり、圓あり缺あり、底事ぞ、貪り觀て心未だ歇まざる。興華室内油なし、龜を證して鼈と作すことを免れ得たり。
 中秋上堂、「金風落葉を吹き、王露清秋に滴つ。厨耐なり寒山子、言なうして笑つて點頭す。且く道へ、箇の甚麼をか笑ふ。」拂子を撃つて。「既に能く明かにして鏡に似たり何ぞ用ひん曲つて、鉤の如くなることを。」
 上堂。「天晴れて屋を蓋却し、時に乗じて禾を刈却す。皇租を輸納し了つて、腹を鼓して謳歌を唱ふ。師云く、「洞山謂つべし、枕を高うして憂なしと、惜しい乎、者裏に坐在すること。興華今日亦手を下して屋を蓋ふ、只だ是れ未だ官賦を納めず、還つて、古人と相見の分あり」

重新増價。重ねてあらたに興華が者裏にあたひをます。
 楳柑火。ほだの火、賤民の燒く所の火なり。村田樂は歳暮に土風を詩に賦するを云ふ、こればものに托して佛法を述ぶるなり。
 露地白牛。法華の譬喩品に云ふ、「一色明邊無差別」の本體なり、而前了々分明なるを云ふ。露地とは青天井の下の意。白牛とは一切の塵欲俗情を脱却したる當體を表現したる語なり、要するに神の御姿を意味す、熟語なり。露地は見惑思惑の迷心を去るにたとへ、白牛は無漏の智慧を以て一切を牽くにたとふ。太兵衛は門松をかざり、五兵衛はかけとり、婆子は御祝のしたく、爺は宮へまゐるといふやうなものなり。
 金剛圈。小さき丸きもの、至

一五
 小跳出し難し。至辣呑み難し。
 栗棘蓬。惡辣なること。
 鐵酸礫。「まんぢゆう」なり。
 正好施呈。諸人に分與す。
 南來北往。諸方の行脚僧を云ふ。
 呑透無門。金剛圈と栗棘蓬とを結ぶ。
 鵝眼鷹睛。明眼の漢を云ふ。
 啞嗽。食ふこと、これは鐵酸礫を結ぶ。
 按下雲頭。雲の首を抑へること、無着は云く、「宗門向上より向下に下るにたとへるなり」と。又この語は學者に係ることあり、師家に係る事あり、今は師家に係るなりと。第二義門に就いて説けばなり高貴を下るとなり、あまり向上過ぎては買手がな故に。
 江南地暖云云。任運天真、各々自知すべし、學者の根柢も同一にあらざるが故なり。

●龍肝鳳髓。美味の禪を謂ふにたとふ、美味ばかり御馳走ばかりなり。
 ●我此間。道理と同じ、俺の所はの意。
 ●荒涼云々。荒れすすんで貧乏なる故たべさせるものもなし、これは峻峻にして義理の禪を説かずとのたとへなり。
 ●深山云々。こんな土地は唐でも天竺でもすくなしとなり。
 ●拾得一物。これなに物ぞじや。
 ●無事甲中。空閑處を云ふ、棚の上下、重重に名あり、併し最上は物を置かぬがちなれば、これを云ふ處在は抛り上げて置くと云ふこと
 ●今夜盡情。今夜は拾ひて来たもの盡情は。精出してかの一物をとり出して拈出するなり。
 ●分歲。除夜に先祖だちを祭り、長幼集りて御祝酒でも飲んで、祝の詩でも作る、之を云ふ。
 ●渾崙吞。まる呑みにすることはならぬと、切に忌むと答へてある。

そこで細かに噛めと、併しこれは拾ひ得たる一物に問はれば分らぬ
 ●元宵。正月十五日、上元節なり。
 ●人間燈。支那風俗、元宵觀燈なり。
 ●天上月。立二柱なり。
 ●有明有暗。燈を云ふ。
 ●有圓有缺。月を云ふ。
 ●食觀。馳求の心なり、大いに蹉過す、この心が歇ますば當に激勵するに好しとなり。
 ●證龜作鼈。香林の話の三人云云の話を轉じて用ふるなり、龜は龜、スツボシはスツボン、山は山、川は川と分明に云ふことが出来ると向上の第一機をいふ。
 ●中秋上堂。八月十五夜なり。
 ●金風吹落葉。秋を金氣となす、故にはら／＼雨の降るべきなり。
 ●玉露滴清秋。皆時候を序いづるなりいつとも無く衣もしぼつて、外に立つて居られぬ。
 ●耐。耐へられぬといふこと、別けて秋の月を見ては、寒山子でも

となりと、「ほない」は忍ぶべからざることあるものを云ふ、吾心似秋月の所なり。
 ●無言笑點頭。寒山が月を見て笑ふの圖像、古今あり、未だ何のよりどころかわからぬが、これは何とも言ひようがない、げらく／＼わらつてひとりがつてんしてある。
 ●且道。さあ皆云つて見よ、何が可笑しいのぢやと。
 ●既能明似鏡。この一句は古句を襲案して、中秋の落句と作したるものなり、十五夜は圓滿、これを心月のなんのと云ふが、何ぞ用ひん曲げて釣の如きことをと云つてある。
 ●天晴蓋却屋。この偈は四句、五言である、これは洞山の聰禪師の因事示衆の偈なり、五燈會元十五の本傳にある、全篇は任運無爲の境界を示す。蓋却は屋根換へ、乗時は公儀の檢見はすむ收獲しほになつてである、阜租は年貢、輪納は

麼。「拄杖を卓して、」惜しい乎者裏に坐在すること。
 上堂舉す、「楊岐、衆に示す、薄福にして楊岐に住す、年來氣力衰ふ。寒風葉を凋敗す、猶ほ喜ぶ故人の歸ることを。」囉囉哩。死柴頭を拈起して、且つ無煙火に向ふ。「師云く、「楊岐和尚、其の便を得るに慣へり、争か奈せん美食他人に中らざること。」

●新方丈に歸する上堂、「松花荷葉、橡栗蹲鴟、虎豹を驅つて禪徒を聚め、荆棘に坐して寶所を興す。此れは是れ前輩住持の様子なり。」興聖薄縁にして、道古に及ばず、二百日の内、區區役役として、我が諸人を勞して、此の丈室を成す。今日遷歸如何が受用せん。「拄杖を卓すること一下して、「佛祖を

運送上納、鼓腹は年貢はしまひ、やれ安心と謳歌し、太平のはなうたでもうたふてなり
 禾は「いれ刈」、却は「かりとる」なり。
 ●洞山。聰禪師、文殊眞に嗣ぐ、雲門四世なり。
 ●高枕無憂。結構なることなり
 ●浦山しいことなりとの意。
 ●坐者裏。活脱の外なきの意。
 ●無事平常のこと。
 ●與古人云々。對揚すべきや否やなり。
 ●古人は抄して洞山と虛堂と眼一般か兩般かと云ふてある。
 ●分は分限なり。
 ●惜乎云々。惜しいかなば虛堂自らを檢點するなり、坐在下にて跡を拂ひ跡を滅す、者裏とは官賦の年貢を濟さぬにてこれはすべて洞山の境界を羨むなり。
 ●楊岐。袁州楊岐山普通禪院の

方會禪師、慈明圓に嗣ぐ、楊岐山は小院なりといふ。
 ●示衆云々。前頭は無心にして縁に應じ、後面は大活機用なり、蓋し人の者裏に坐在するを恐るればなりと、龍溪和尚は註してある。言うは薄福で老いすばりて氣力は衰へ塞き風がこの葉を吹き散らかす様な貧小院のありさまなりと所謂適々冬暮に臨めば、滿床雪の眞珠を撒して居るに暇あらずじやが、猶ほ喜ぶ、故友同參の歸し集るので之を喜ぶとなり。
 ●囉囉哩。無語の語を奏して活起せしことを要すと。囉々は歌調を助くるの聲。やれこそやれこそといふ聲など。學者を接待するに譬ふ。
 ●拈起死柴頭。本分撞合の義にて、これは前の故人に祇待するの句なり、枯れ柴を引握つ

排するに心あり、諸方を笑ふに口なし。」

徑山の倫藏主至る、上堂、無義の漢、誰か

爾を誦らん、口吃し耳聾して、驢、底に

到る。一氣一藏を轉ず、是非終に洗ひ難し

大法下衰して人の唇齒を汚す。

上堂、方竹杖を削圓し、紫茸氈を靴却す。

是れ爾衲子尋常の用處なり、只だ月波樓跳

つて、蠅螟眼裏に入り、千聖小王怒發して、

鴛鴦湖を將つて一脚に、踢翻するが如きんば

又作麼生。

冬至小參、天地不仁、萬物を以て芻狗と爲

す。衲僧不仁、自己を以て臘月の扇子と爲

す。所以に、儻儻侗侗として、日に用ひて知

らず。直に得たり、古風再び振ひ、大朴全く

彰はるゝことを。一氣言はずして、九淵の底

團擔の因縁をいふ。

躡鳥。芋がしらのこと、懶賈

の因縁、煨芋の故事なり。

驅虎豹。これは嵩山靈祐禪師

の因縁、とらや豹を狩りのけ

て説法せられたれば、大叢林

となりて一千五百人の禪徒が

聚りしとなり。

坐荆棘。先徳の山を開き寺を

創む、みな是の如くならずと

云ふことなし、寶は大法寶

の在る所なり。法華の化城喻

品に、「當至寶所」とあり。

住持。住持とは人に藉つて其

の法を持して、之を以て永く

住して泯せざらしむるを謂ふ

なり。

興聖薄緣。これ以下は大衆へ

の謝語なり。

區々役々。せか／＼と働くこ

と。誰々は典座、誰々は材木

出し奉行、誰々は地形の世話

誰は職人の目付け方と、十方

毛の長き天鷲絨氈、靴却は引延は

すこと。

桂苑叢談に曰く、

「方竹の故事は、李德裕と云ふ人が

或は潤州の甘露寺の僧に道行孤高

の人あり之に方竹杖一本を贈る、

再び浙右に知事となるとき、その

僧尙ほ在り、問うて曰く、前にを上

げしたる竹杖は恙なしや否や。僧

は喜んで對へて曰く、已に規圓に

圓う削りて之に漆を塗りましたと

李公は情けないこととしてくれたと

て幾日も泣たと云ふこと。」

「紫茸氈は外國の珍産なり」と古來

注す、今の天鷲氈なり。此の兩句

は物と拘はらず透脱自在の境界を

云ひしもの。

是儂衲子。これは禪宗坊主ならば、

て無煙火に向つて、常に焚か

ぬへつゝひへ蛛の巢だらけの

ことなり。珠曰く、「陽春か白

雪か」と。

美食不中飽人。飽參の故人、

已に無生の話を會する故にと

飽人は虚堂自を云ふ、「こちら

も極貧なれば其の方の薄福も

とんと聞きたくはなし」とな

り。珠は注せり。

歸新方丈。方丈のことば之れ

を略す、歸は遷歸で「わたま

し」なり。

松花荷葉。大梅法常禪師の因

縁なり、荷衣沼の偈に、「一池

の荷葉衣盡くることなく、數

樹の松花食餘りあり」と、新

方丈を造るを言はんとして、

古人の艱苦を並べたてたるも

のなり。

松花は松の緑、荷葉は蓮な

り。

椽栗。とちの實やぐりの實、

ぬ、把本の修行に若かずなり。

驢倒底。驢馬はとんと歩かぬじ

やうばりなるが故に倒と云ふ、到

底は其の甚だしきを云ふなり。

一氣轉一藏。一藏は藏主の職にあ

るもの、一代藏教を一息に轉讀し

ても、如是我聞などと云つてゐて

てはだめなり。

是非終難洗。これは古句の「是非

已に傍人の耳に落つ、洗つて驢年

に到るも也た清からず」といふを

轉用したもの、黄卷赤軸を離れず

してはとなり、偷藏主がにじりく

じりと悪い所を洗濯せればならぬ

と。

大法云々。一氣已下、言ふは如此

後快でも、その名は人耳に落つる

と。これ大法が衰ふ故に、高德も凡

人の口に傳ふとなり。至人もと名

なしとなり、唇齒は「ほまれ」なり

削圓方竹杖。方竹は四方竹なり、

削圓はけづりてまるくすること。

靴却紫茸氈。紫茸氈はむらさきの

にこそ／＼と使ふことなり。

遷歸。わたまし、屋移りの義。

如何受用。どう住持してやらうか

となり。

有心排佛祖。排は斥なり、心にて

は佛祖も排斥するの氣なれども、

止むことを得ず、學者の爲に挖泥

滯水するなればなり。

無口笑諸方。抑揚文を互す、これ

丈室受用底なり、諸方の宗匠の落

草するのを笑ふとならぬとなり

偷藏主。斷橋妙倫禪師は無準師範

に嗣ぐ、淨慈に住す、人と爲り峻

硬なりと傳にあり。この人は徑山

の分座説法の藏主なり、故に爲に

上堂して以て禮重するなり。斷は

「どん」よます讀みくせなり。

無義漢。無義は脱體本分底なり、

故に佛眼魔外も窺ひがたし、無義

は偷藏主を指す、誰れか藏主がど

んぞこを知るであらうと。

口吃耳聾。吃は「どもり」、聾は「つ

んぼ」口吃で無聞無説底で、聞え

ない

ない

ない

ない

ない

ない

ない

ない

ない

ない

ない

ない

ない

ない

ない

より發し、^①初爻象なうして肇めて萬化の宗たるに及んで、^②舊に依つて 仲冬嚴寒 又見る 果州の飯布、^③作麼生か 遷變に落ちざることを得去らん。^④嗚啞嗚啞、^⑤只だ自知すべし。^⑥復た云く、「^⑦諸方は今夜 盤に 堆く滿て釘る、^⑧此間は鬪鬪揆揆として、^⑨半青半黃、且つ諸人をして吞吐不下ならしむ。何が故ぞ、^⑩鄭州の梨青州の棗、萬物は出處の好きに過ぎたるはなし。^⑪上堂、^⑫盡乾坤の内、^⑬一人の眞を發し元げんに歸するあることなし。盡乾坤の内一人の 佛法の名字を知るあることなし。直に得たり堯風 蕩蕩、舜日輝輝、野老謳歌し、漁人棹を鼓することを。會す麼」喝一喝して、「^⑭瑕生せり。」^⑮新修の僧堂に歸する上堂、「^⑯石霜 ^⑰千衆を坐

① 蟻。細小微蟲なり。
② 千聖小王。興聖寺の土地神の名。
③ 鷺鷥湖。嘉興府城南三里あり。
④ 踏。跌踢「げりとばす」と。只如已下は大活現成の境界を云ふ。
⑤ 天地不仁。老子經に「天地不仁」の言見ゆ、自己本分の上を言ふために、下の大朴金彰まで一段の掃蕩門なり。
⑥ 芻狗。祭の時用ゆる人形なり祭には入るが祭が済めば入らぬものである、これに譬へていふ。
⑦ 柄僧不仁。骨を折つて父母未生以前を悟つて、その上銀へ々々すればとなり。
⑧ 臘月扇子。無用のものをいふ。
⑨ 備々何々。備は未成器、備は無知。無知無心底不遇の貌。
⑩ 日用不知。百姓日々用ひて

知らず、咳唾掉臂も祖意なりと、尋常受用して居ると云ふことを知らずに居るをいふ。
① 古風。釋迦、達磨も外にない。
② 大朴。大朴は白本造りなり、上古質朴の大道が再び彰る、諸佛無上の妙道が、不知無心にあらはるるなり。
③ 一氣。冬至にて、初めて一陽生ず。
④ 九淵之底。黃泉の下にて、一番地の下のどんぞこ。
⑤ 初爻無象。初爻は乾元の一爻形象はなきもの、則ち萬物化生の宗本なり、人の爲め建立の機を説きたるものなり。
⑥ 仲冬嚴寒。遷變の上に於て、不遷變を示すなり。
⑦ 東州飯布。四川の順慶府は古の果州なり、粗末なる衣布のこと。果州は布を出す所、これにて飯の上を覆ふ、方語に漏返不少と云ふ、

枯するも、^①己見未だ忘れず、^②南泉 牛を牽いて巡堂するも、^③乞兒富を鬪はしむ。興聖が古屋、一旦に鼎新す、^④坐臥經行、各宜しく記取すべし。且く道へ、^⑤箇の甚麼をか記取せん。「喝一喝」
上堂、「^⑥槿花露を凝し、^⑦梧葉秋を鳴す。^⑧景に遇ひ物に觸れ、^⑨分に随つて差を知る。「拄杖を卓して、「^⑩住みね住みね、^⑪諸方聞き得て道はん、我れ 老婆禪を説くと。」
中秋上堂、一年十二箇月あり、毎月一度團圓、其餘は盡くこれ缺く。中間の 晦明 出沒、^⑫太半見えざるものあり、^⑬惟だ今宵のみあつて、^⑭分外に皎潔なり。^⑮物の比倫するに堪へたるなし、我れをして如何が説かしめん。上堂、擧す、趙州因に僧問ふ、「^⑯學人 乍めて叢

龍溪は閑家具を拈起して、關板子れを撥轉すといへり。
① 遷變。四時のうつりかはり不落にてその沙汰もなしとの意。
② 嗚啞。歎辭「あゝ、あゝ」なり。
③ 只可自知。たゞ手前で知らにやなるまい。
④ 復云。冬至小參の提綱なり。
⑤ 諸方。世間の叢林は、みな豊饒なり故にいふ。
⑥ 堆盤滿釘。堆盤は鉢に思ひきり高くなり、釘は食を置くなり、貯ふるなり、御馳走がたくさんなり。
⑦ 此問云々。俺の所は何もかもごたまぜなり、鬪揆は彼此投合するの意。
⑧ 半青半黃。果の生熟なり、なまにえやら、にえくさりやら。
⑨ 鄭州梨云々。それく名物ばかりなり。

① 盡乾坤之内。これ以下の二句は、釋迦も出世せず、達磨も西來せずの本地なり。
② 一人發眞歸元。これ楞嚴九の上に出づる語。眞諦を發し、根元佛性に歸するものをいふ。
③ 佛法名字。南無佛と云ふことも、心地法門と云ふこともなし。
④ 蕩々。廣遠なる貌、大平の時節をいふ。野老謳歌も、漁人鼓棹も、みなこれ同じ、無修無證、無爲、天眞の法を明すことを要すと云ふ。
⑤ 瑕生せり。早や後廻りなり。
⑥ 新修云々。歸は遷入（わたまし）なり。
⑦ 石霜。慶諸禪師、道吾智に嗣ぐ、石霜山にあること二十年なりと。これは僧堂の古因縁を擧ぐるなり。
⑧ 坐枯千衆。學者が眞刻（まだ）め、師慕して堂中に臥せすに

まるで枯株の如きものあるに至る
天下中之枯木衆といふ。

●己見未忘。化他を専らにするを云ふ。

●南泉。普願禪師、馬祖に嗣ぐ趙州の師なり。

●牽牛巡堂。趙州錄下に出づ、趙州の南泉に在るとき、泉一頭の水牯牛を牽きて僧堂の内に入つて巡堂と云ふて、大衆の坐禪するのを検査したることあり、この因縁なり

●乞兒鬪富。首座と趙州とは互に見解を呈する故に云ふ、乞食が貰ひだめの自慢くらべをするようなものなり。

●古屋。僧堂なり、鼎新は鼎は改むるなり、鼎にてものを熔し改める故にいふ。

●坐臥經行。經行は僧堂の中にての運動なり、へめぐる意。

●記取。覺えて居れとなり。是れ何物を覺えて居るのじやと次に云へ

●上堂。初秋の上堂なり。

●槿花。わくげの花。

●梧葉。桐の葉、鳴秋は秋風が吹いて鳴るなり。

●遇景觸物。そよ／＼と吹く秋の上風、秋の下風を見るにつけて、聞くに付けの意。

●隨分知羞。衲僧の境界に於て、ほろりと涙をこぼす所。

●住住。もう止めよ止めよとなり。

●老婆禪。虚堂も年の加減にてか老婆心切なる所を悟り教へてやるといはれては。

●中秋。八月十五夜の月見なり。

●一度。十五夜の月、團圓は望を云ふ。

●晦明。曇つたり晴れたり。

●出沒。東川西沒なり。

●大半。三分の二を大半と爲す、大方は見えぬがちじや。

●無物堪云々。これは寒山詩の「吾心似三秋月」、碧潭清皎潔、無三物堪云

比倫、教三我如何説この語を引く月に托して佛事を作す、比況見るべし。白隱禪師は「和レ盤托出底驢珠」と評せらる、比倫はくらべものがなし、良に言語道斷で何とも説くべき語がなしとなり。

●乍。はじめてなり、乍入などと云ふ、たちまちなり。

●乞師指示。何卒入路を御示し下されたしと。

●鉢盂。自分の持てる持鉢とて、めした食ふ五つ重ねか四つ重ねの椀を云ふ。佛時代は一つの大きな鉢を云ひし様子なり、今は日本式では右の通りなり。

●有省。悟つた氣がついた。

●趙州。從諗禪師、南泉に嗣ぐ。

●運斤。斧を振りまはすこと。

●具就斷。けづりに就くは、參禪の荷參に譬へるなり。

●資。氣質なり、この二語は莊子の徐無鬼篇の語を轉用したるなり、「主客相應の境界を言ふ」と龍溪は

林に入る、乞ふ師指示せよ。州云く、「粥を喫

し了るや也た未だしや。僧云く粥を喫し了れ

り。州云く、「鉢盂を洗ひ去れ。」其の僧省

あり。師云く、「趙州、斤を運すの手あり、

者の僧 斲に就くの 資を具す。然りと雖も也

た是れ 地に就いて雀を彈す。」

結夏上堂、天下の禪和、今朝 盡く 野狐窟裡

に入つて 伎倆を做す。山僧則ち 水に退いて

鱗を藏すと雖も、終に 鷺股に向つて肉を割か

ず。

上堂、擧す、雪竇、春山亂青を疊み、春

水虚碧を漾はす。寥寥たる天地の間、獨り

立つて望み何を極らん。乳峯 年老いて郷を

思ふて、東に望み西に望む。興聖 豈に道ふ

ことを知らざらんや、春波門外、水あつて

注せり。就地彈雀。地に落ちて死んで

ある雀に弾き弓をばちくなり

これは小僧でもすることとなり

功勞多しとせずとなり。

●野狐窟裡。黒暗鬼窟なり。

●伎倆。「うでまへ」にいふ。

●退水藏鱗。跡を閉靜の處に晦

ます義。結夏、安居、禁足を

云ふ。

●向鷺股割肉。鷺の股は方語に

無用の處とあり、悟れの何の

といひばせぬと、柔かに言ひ

聞かせるなり、割肉は刻期取

證なり。衆に對して辛辣なら

ざるを云ふ。

●春水。雪も消えて水も増せば

水の面もことごとく緑なり、

虚碧は水の澄みきつたること

寥寥。ひろひろしたる天地の

内。

●獨立。この景色何ともどうも

云ひようはなし。「この句は全

く任運無事、天真獨露の境界

を云ふ」と龍溪も註せり。こ

れが雪竇の宗旨なり。

●乳峯。雪竇山の別名、又乳竇

とも曰ふ。

●年老云々。望むと云ふことを

破するなり。

●豈不知道。興聖も負けばせぬ

歌ふて見せやうかとなり。

●春波門。嘉興府東門なり。

●有水無山。興聖の境内は山は

なければども、海水渺々なり。

●路途雖好云々。何ほど馳走が

在つても、虚堂がうちに居た

る方が好し、雪豆は望み何ぞ

極らんと云ひ、虚堂は家に在

山なし、尋常只だ是れ望み得ること能はず。何が故ぞ、^①路途好しと雖も、家に在るには如かず。

上堂、^②鳧を續ぎ鶴を截り、^③嶽を夷げ壑に盈つ。^④衲僧家、油の麵に入るが如し、還つて

招寶山の^⑤等子秤を把ることを知る麼。知得せば、^⑥南海東頭底、爾に許す商量することを得ず。

然らずんば、^⑦市塵邸店、^⑧耳語だもすることを得ず。

上堂、^⑨暮春には春の服既に成りぬ、冠者五六人、童子六七人、沂に浴し、舞雩に風して、詠

じて歸らん。夫子喟然として嘆じて曰く、「吾れは點に與せん。」師云く、「^⑩臆を隔てて馬騎を看

ることは、^⑪故に之あり。衲僧家、^⑫黒衣を著けて黒柱を護ることは、終に^⑬爾に向つて道は

るに如かずとは何故云ふたかこゝが心を付けて看るところなり。好しとは風景の好きを云ふ。

② 續鳧截鶴。短しとて接がば憂へん、長しとて斬らば悲まん

③ 夷嶽盈壑。日本ならば比良が嶽を毀ち湖水を埋めて眞平にしたがる、何もかも一つにして平等にしたがること。

④ 衲僧家。この禪宗坊主の所にてはの意。

⑤ 如油入麵。出期なきを云ふ。

⑥ 招寶山。寧波府に在り、無着の註に、「海商の乗る津」と。

⑦ 等子秤。大は秤といひ、小は等といふ、「てんびん」、又「はちぎ」、「ばかり」。今の税關のある所と見ゆ。これは禪話の不可思議なり。

⑧ 南海東頭底。東南海上の法窟に横行して、高談闊論すること、爾が商量することを許

すと。

① 市塵邸店。町の店や宿や、はたごやを邸といふ、處々の叢林に比す。

② 耳語。さ、やくこともならぬと。

③ 暮春者云々。この語は論語の先進篇にあり、春服、ひとへもあはせもできたり、冠者として元服したる二十ばかりのものを連れ立ちて、童子なる次郎も太郎も來れと引き連れて、沂と云ふ魯の城南の温泉に浴して舞雩とて祭天祈雨の境に冷しき風にあたり、歌をうたふて歸らんとす。冷しき風に乗るるを風と云ふ、詠じては歌ふなり、夫子は孔子、喟然は大息、「ためいきする」こと嘆は稱嘆しての玉ふ、點は曾參の父、曾皙の名、與するは夫子は深く之を許すことなり

④ 隔窓云々。まどの内から競馬

じ、^⑭依稀たり松の屈曲、^⑮髣髴たり石の爛斑。

報恩を受けて衆を辭する^⑯上堂、^⑰流虹^⑱七

載糞緣盡く。又^⑲天寧に向つて^⑳債窠を理す、^㉑驢胎を脱得して^㉒馬腹に入る、^㉓皮毛輕重多

きことを争はず。

を見ると、ちらりくと見えるばかりなり、故には「もとより」となり。これは擬議思量を容れざるの義なり。

⑭ 著黒衣。「吾黨は春服を著けず、風物を詠ぜず、只だふだんに黒衣を著けて三條椽下の黒柱を護つて坐す、その本分眞常の旨は、終に諸人に向つて道破せず」と、龍溪は註せり。東山下の左邊底を會得したるものは、暗でも明でもなし、明暗双々でもなしとなり

⑮ 向爾不道。爾とは諸人を云ふ

⑯ 依糞云々。糞は當に俗に作るべし。さもにたりなり、松は「うれ〜」なり。

⑰ 髣髴云々。爛斑はいろ〜のこもんまだら、是れは意解すべからざるを表示して、今諸

人の爲に道破するなり。

⑱ 受報恩。受は其の請待を受くるなり。

⑲ 上堂。退院上堂なり。

⑳ 流虹。無着云く、「理宗流虹聖地興聖之寺の八字を御書す。」興聖寺と云ふことなり。

㉑ 七載。紹定二年より端平二年に至る。

⑳ 天寧。始め報恩と云ふ。

㉒ 債窠。宿債の窠窟なり。

㉓ 脱驢胎。興聖寺を脱してなり

㉔ 入馬腹。報恩に入るを云ふ。

㉕ 皮毛輕重云々。寺縁の勝劣を較ぶ、相似て大小多分の不同なきを云ふ、驢と成りて債をかへすも、馬と成りて債をかへすも、格別違はなしとなり只だ箇の一虚堂叟なりと云ふこと。

興聖寺語錄終

嘉興府報恩光孝禪寺語錄

參學可宣編

① 師入寺、② 陸堂、祝 聖畢つて、次に拈香して云く、「此の香無事甲裏に 颺在すること多年矣。今日 貧時 舊債を思ふ、未だ免れず拈出して、前住 安吉州 護聖萬歲禪院先師 運庵和尚に供養して、用つて 法乳に酬ゆ。」

③ 師、座に就く、僧問ふ、「金鶏 曉を唱へ、玉鳳花を啣む、朝蓋筵に臨む、請ふ師祝聖。」師云く、「獨角の麒麟、海嶼に登り、九包の鸞鳳、神山に舞ふ。」僧云く、「三聖道く、「我れ人に逢ふときは則ち出づ、出づるときは則ち人の爲にせず」と、此の意如何。」師云く

① 報恩。天寧報恩光孝禪寺のこと。秀州の嘉興縣に在り、月波樓、妙莊嚴城、鴛鴦湖、南湖等の境あり。大宋八主の徽宗皇帝の香火に奉するなり、寺は諸郡州に在り、本朝の國分寺の如きものなり。

② 可宣。無宗禪師、明州象山縣の人。蓬萊長老といふ。法語眞實の部に出づるが、それなり、虛堂の法子なり。

③ 師。五十一歳なり。

④ 陸堂。上堂のこと。

⑤ 颺在。放擲して置いて思ひ出しもせなんだ。

⑥ 貧時。時は當に「兒」に作るべし。

⑦ 思舊債。師家と成りて見れば昔の事を思ひて親の恩を知りぬ。

⑧ 安吉州。湖州府なり、宋には安吉州と云ふ。

⑨ 護聖萬歲禪院。湖州府烏程縣にあり、道山といふ。

⑩ 運庵。字は少瞻、名は普岩、虛堂の師なり、運庵は菴號なり、松源に嗣ぐ。

⑪ 用酬法乳。燒香師の恩に酬ゆ乳は血脈なり、嗣香は興化が開堂に臨濟先師の爲に供養したるに始まる。

⑫ 師就座。立地佛事畢つて、法座に就くこと。

⑬ 金鶏唱曉。人間もと金雞の名

「地を掘つて深く埋む。」僧云く、「興化道く、

「我れ人に逢ふときは則ち出でず、出づるときは則ち便ち人の爲にす」と、又作麼生。」師云く

「釣絲水を絞る。」僧云く、「只だ判府侍郎、

和尚を請じて、開堂演法、相送つて寺に入るが如きんば、何の祥瑞かある。」師云く、「恐らくは

一城の人を動かさんことを。」僧云く、「還つて人の爲にする處ありや也た無や。」師云く、「獨

り爾のみあつて皮下に血なし。」僧云く、「夜來の鴈に因らずんば、争か海門の秋を見ん」といつて、便ち禮拜す。

師乃ち云く、「黄葉門を遮る、拄杖子者、死漢を打せず、蘆花膝を擁す、瞎驢兒甚の生涯か有らん。」大都ね法未だ情を忘せず、是を以て隠せば、彌露はる、普化の紅塵堆

なし、以て天上の金雞星に應ずと云ふ、星の名なり、六つ時に鳴く、東天光と曉を唱ふるは、出世の初に時を知るを云ふ。

- ① 玉鳳啣花。鳳は瑞鳥なり、師の開堂演法は、人天の昏夢を開覺す、何ぞたゞ百鳥花を啣んで來るのみならん乎。諸衲子の歸仰を云ふ、啣は外からふくむ、合は内からふくむと云ふ字なり。
- ② 朝蓋。蓋は車の屋根で、勅使の法會に入るを云ふ、即ち判府侍郎等なり。
- ③ 請師祝聖。どうか清代有道の君主を萬歳々々と至祝し玉へ
- ④ 獨角麒麟。王者至仁なれば麒麟出づ。
- ⑤ 海嶼。海中洲の上に石山あり之を神山とも云ふ、海上の三神山を云ふ。
- ⑥ 九包鸞鳳。鳳に九包あり、鸞

- ⑦ 青色多きもの、鳳の赤色多きものなり。
- ⑧ 神山。蓬萊、方丈、瀛洲なり
- ⑨ 我達人則出。この三聖と興化との語は、虛堂が出世出不出の時節なれば問を設くるなり
- ⑩ 掘地深埋。把住なり。こいつ婆婆に置くやつでなし、厄介もの、それ〴〵佛も魔も深く埋めて置けとなり。
- ⑪ 便爲人。出たら根機に應じてそれ〴〵に引き入れること。
- ⑫ 釣絲絞水。無用處なり。金鱗に遇はざるなり、みな此の禪客を抑ふ。絞は縛なり、糾なり、要は閑言語取るに足らぬことなり。
- ⑬ 判府侍郎。嘉興縣の刺史なり
- ⑭ 一城人云々。嘉興府滿城の人を驚動せしめんとなり。
- ⑮ 獨有爾皮下無血。盡大地爲人の所なり。汝のみ皮下無血で死人同様、慚愧を知らぬ可憐

裏、盤山の猪肉案頭、靈鷲の雄機を發揮し、少林の密旨を顯示す。然も是の如くなり

と雖も、山僧尋常、曾て人の奥に破口に箇の不の字を道はず、今日事已むことを獲ず、

威光を抑下し、諸人を普請して、同じく塵中の佛事を證す。」拄杖を卓して、「是は即ち是、只

だ是れ不合に踏歩向前す。」復た擧す、王常侍、臨濟を訪ふ、問うて

云く、「者の一堂の僧、還つて看經すや否や。」

濟云く看經せず。又問ふ、「還つて習禪すや否や。」

濟云く、「習禪せず。」侍云く、「經も看せず禪も習せず、箇の甚麼をか作す。」濟云く、「總に

伊をして成佛作祖し去らしむ。」侍云く、「金屑貴しと雖も、眼に落ちて翳と成る。」師云く、「好一局の碁、黑白已に分る、只だ是れ、最後の

生なりと。不因夜來鷹。これは宗師の指示に因つて、祖師門下の格外なることを承知したとなり。

南に歸る雁の鳴き渡るを聞いて、秋の様子を見ることのできようぞとなり、海門は浙江にあり。問はずんば知ること能はざるの義」と龍溪の註にあり。

師乃云。提綱なり。黄葉遮門。この葉に吹き埋められて、柴の編み戸を寄せもせぬが寄りつきもせぬ、山中曆日なしといへる古歌の「山里の心静かに栖み好きは、問ふ人もなし待つ人もなし」と云ふ態なり。南陽忠國師ありの境遇を云ひしものか。

不打者死漢。虛堂が拄杖は、この佛祖あることも四時あることも知らずに居るものも、師の氣には入らぬとなり。利

- ① 飯は死漢を斬らすとなり。
- ② 蘆花擁膝。上の句と同じく、只だ無意味に打坐して閑樂を食る。政黄牛の故事、青銚山の因縁等なり。
- ③ 瞎驢兒。めくら馬である、たゞ一日一日と空しく過すまでにて、何の生きかひがあるとなり、これは下語の體を以て刻破し了るなり。
- ④ 大都。畢竟する處、情を盡せよとなり。
- ⑤ 法末忘情。法塵分別は役に立たぬと、見地不脱と呵してある、見地にしがみ付いて變盡して五と成るの場などは、夢更に知らぬ、知識が多き故にと珠長老は書き添へたり。
- ⑥ 普化。鎮州の普化和尚は盤山に嗣ぐ。
- ⑦ 紅塵堆裏。町中の酒肆娼妓の所で明頭來也明頭打、暗頭來也暗頭打と、「ちりんちりん」

- と鐸を振ふこと一下す。
- 盤山。幽州の盤山寶積禪師は馬祖に嗣ぐ。
- 猪肉案頭。案は机のやうのもの、肉切り臺、この因縁は、ある日市肆に於て一客人の猪肉を買ふのを見て、よき所一斤私にもくれと云ふと、屠家は刀を放下して又手して曰く、これもこれもよき肉げかりといふ、師こゝに於て省あり。
- 靈鷲雄機。枯花微笑の大機大雄を開發振揮してなり。
- 少林密旨。二祖安心、達磨西來の極意を顯露指示す。
- 曾與人云々。與は相手にする、破口は口を開いてなり。不の字、不可の字を云はぬ、人天衆前なれば容易に口をあいて是非も何も云はぬとなり、本嫌ふ底の法なければなり。
- 今日事不獲已。今日入院開堂、辭退ならぬこと、故にいふ。
- 抑下威光。本分安住の威光を抑下

してなり、諸人は則ち人天四衆を集めて、同じく出世邊の塵中は山中の如し、市中と云ふこと、五濁世界茫茫たる中で、佛事利濟の道を證據「あらはす」となり。

是即是云々。是は是、何が悪しきにはあらず、不合は「でそこなひ」存じもよらぬこと、入院なれば踏歩向前、天寧に踏歩、あれのこれのと餘りすゝみすぎたと云ふことなり、出世のことなり。

復舉。拈提なり、府主の諸侍、朝蓋臨筵の處にて舉揚したるなり。

王常侍。鎮州府主、襄州の王敬初、瀋山祐に嗣ぐ、常侍は文官の名、日本の中宮の亮に當る官職なり。

臨濟。義支禪師、黃檗に嗣ぐ、唐の懿宗咸通八年四月十日寂す、この話は臨濟録に出す。

看經。古教照心のために、經文を研究して居るかと云ふ。

習禪。それならば坐禪辨道してあるかと。習は「しゆ」と讀くせなり

總教伊云々。すべて彼等を佛になるのなんのかんのと、くづくせすに、單刀直入せしめるとなり。

金屑雖貴。是れは淨名經にも出づ。やすり屑でも貴けれども、ちよつと眼へ入れると騒がざるべからず「譬と成る」は真くら暗になりて騒がればならぬ。

好一局碁。上手と上手の出会い、まう已に黑白分明なり、一局は一番賓主歴然なり。

末後一着。落處なり、末後の一着石の落處は、何處かと承知ができぬ、此の虛堂でなくては、落處を知るまいとなり。

當晚。入寺の晩なり。

與諸人相見。珠曰く「恁磨に相見するも、早く五須彌を隔つ」と大燈師も云へり。

世諦。これは涅槃經に、「出世の人の知る所は第一義諦、世間の人の知る所は名けて世諦と爲す」とあり、世間なみの面會ならばとなり

一着、人の落處を知得するなし。」

當晚小參、作麼生か 諸人と相見せん、若し世諦の相見を作さば、寒温已に畢る、若し佛法の相見を作さば、問答已に周し、況んや衲僧家、眉、箭筈の如く、眼、銅鈴に似て、未だ舉せざに先づ知り、未だ話せざるに先づ領するをや。甚麼の相見不相見とか説かん。然りと雖も、山僧乍めて、此間に到る、井竈の向背、門限の高低を知らず、未だ免れず頭めより問過することを、何が故ぞ、彼此知らんこと要す。

復た舉す、法燈、衆に示す、「本深く巖壑に藏れて、隱遁して時を過さんと欲す、奈せん清涼老人、未了の公案あることを。出で來つて他の與に了却せよ。」時に僧あつて出でて

寒温已畢。お寒いとかお暑いとか人事の問訊はもはや仕舞なり。

佛法相見。沙門出家の都合ならはばり。

問答已周。金鷄、玉鳳などに已に残る所はなし。

己周は済んだといふこと。この二相見は相見不相見の窠窟を、掃蕩せんと欲するなり。

衲僧家。この僧は「すれつからし」じやほとに。

眉如箭筈。筈は矢はす、眉の眞すぐなること、ちよつと見ても面相が悪し。

眼似銅鈴。銅眞鍮の如く、この二つは共に快活靈利の相なり。

未舉先知。一一英靈底の人等ばかりなりと、王常侍が臨濟を訪ふたば、云はぬさまに承知してゐる、未話は早や落處を合點する、すさまじき衲僧

此間。報恩寺の此所にの意。

井竈向背。井戸やかまどの向きよう、西向き東向きやなり

門限高低。門のかまが高いやら低いやら。

未免。頭より一々學者を勘辨するにて問過するなり。

彼此要知。はてさて何處もかしこも知らねばならぬとなり

法燈。泰欽禪師なり、法眼に嗣ぐ、清涼に住す。

本欲深藏。釣語なり。深く巖壑に藏して、椽栗松花を食ふて、過す時で一生涯を送らんとするなり。

奈。氣の毒なことにはとの意

清涼老人。清涼法眼なり。

未了公案。公案は中峯和尚は公府の案牘に譬へるとなり。また吟味の済まぬこと他の與とは清涼の老人のために了却す、諸勘定済まぬ、結算をせ

問ふ、「如何なるかこれ未了の公案。」燈便ち打して云く、「祖禪了せざれば、殃兒孫に及ぶ」と。師云く、「法燈 放去は太だ奢に、收來は太だ儉なり。者の僧身 白刃を挨して 義氣雲に薄る。檢點し將ち來れば、依前として未了せず。山僧箇の小院に住すること七年、拈泥帶水、手脚未だ乾かず、今日乍ち 報恩を領す、人事倥傯たり。若し是れ未了の公案ならば、敢て拈出せじ。何が故ぞ、恐らくは 先師を屈辱せんことを。」

次の日、徽宗皇帝の爲にする上堂、古佛過ぎ去つて亦久し矣、知らず何れの處にか 羣生に應ず。紫金光聚人觀がたし、空裏帷だ聞く仙樂の鳴ることを。

上堂、報恩に 三件あり、諸方に如かず、第一には 説到行不到、第二には 行到説不倒、第三には 響。拄杖を卓して、「人貧にして智短く、馬瘦せて毛長し。」

上堂、擧す、楊岐、慈明に問ふ、「幽鳥語喃喃、雲を辭して亂峯に入る時如何。」明云く「我れは 荒艸裏に行き、汝は又深村に入る。」岐云く、「官には針をも容れず、更に一間を借り得てん麼。」明 便ち喝す、岐云く、「好一喝。」明又喝す、岐亦喝す。明 連喝に兩喝す。岐便ち禮拜す。師云く、「喬木を下つて幽谷に入る。養子の縁、慈明 甚麼としてか連喝に兩喝す。」

上堂。拄杖子、尋常 口吧吧地にして道ふ、我れ 能縦 能奪 能殺 能活と、他に 遠法師、甚に因つて 虎溪を過ぎざると問ふに及

よとなり。
 祖禪。父の廟を禰といふ、清涼をさして云ふ。この語はこの話の肝心なり、殃兒孫に及ぶとある。
 放去太奢。ゆるしされば、のつしと重たげに、初めは柔かにかゝり。
 收來太儉。しまひは甚だ一文錢も惜しさうなり。
 挨白刃。挨は横におす、又「すれあふ」。この僧はすさまじき氣象なり。
 義氣薄雲。高義高天にせまるこの二句は性命を惜まずに修行するに譬ふ。
 檢點將來。能く見ると、依前としてやつぱり勘定が済まぬと。
 小院。興聖なり。
 拈泥帶水。どろまみれにて、手も脚も未だ乾かぬとは、清閑を得ざるを云ふ。

領報恩。領すとは住持となつたること。人事倥傯とは、賀儀や披露やと、事繁くして困苦すること、爲人垂手の處なり。倥傯は字彙に「暇あらず」と訓す。
 屈辱先師。先師は運菴なり、拈出せじは取り出さぬこと、恐らくは先師に耻かゝせることとなり、此の虛堂がいつておくなりと、屈辱ははじをうくるなり。
 徽宗皇帝。大宋の八主、在位二十六年なり。金の爲に擄にしが去らる、壽五十四にて崩す、報恩寺は徽宗皇帝の菩提寺なれば、入寺の翌日特爲上堂をなすなり。
 古佛。徽宗帝を謂ふ、佛法と王法と一般なり、天子は人民を恵み玉ふ故に、古佛と云ふ去亦久とあるは、帝の崩御より、九十九年になる故なり。

一には 説到行不到、第二には 行到説不倒、第三には 響。拄杖を卓して、「人貧にして智短く、馬瘦せて毛長し。」

上堂、擧す、楊岐、慈明に問ふ、「幽鳥語喃喃、雲を辭して亂峯に入る時如何。」明云く「我れは 荒艸裏に行き、汝は又深村に入る。」岐云く、「官には針をも容れず、更に一間を借り得てん麼。」明 便ち喝す、岐云く、「好一喝。」明又喝す、岐亦喝す。明 連喝に兩喝す。岐便ち禮拜す。師云く、「喬木を下つて幽谷に入る。養子の縁、慈明 甚麼としてか連喝に兩喝す。」

上堂。拄杖子、尋常 口吧吧地にして道ふ、我れ 能縦 能奪 能殺 能活と、他に 遠法師、甚に因つて 虎溪を過ぎざると問ふに及

羣生。何處に居つて一切衆生が利濟なされたのであるぞとなり。
 紫金光聚。法身の如來光明を紫金光と云ふ、これも徽宗を申して佛の光明と同じきに譬へる人難觀とは形は見えれども何の處にか惟だ聞く仙樂の鳴ることと。この微妙の仙樂も聞くと、紫金もよく掌を見るが如し、これこそ眞箇の徽宗帝なりとの意。
 有三件。件は分次なり。
 不如諸方。世間の叢林とは違ふぞとの意。
 説到行不到。口に云ふことは云ふが、身の行ができぬ、口に一尺説かんよりは身に一寸を行はんに如かず、説通未在なること。
 行到説不到。身の行はできるが、口不調法なり。八兩半斤なりと。

響。物を指すこと、言ふこと、ろは行が説には涉らず、唯だ直下に聞かん、さあ如何んと云ふこと。
 人貧而智短。貧すれば鈍するの意、貧になると、智慧がたらの羊になる、馬瘦毛長とは餌が足らぬとからだは瘦せて毛が長く見えると、宗旨の衰退に譬ふ、「吾が遺裏は賤劣にして如す」と龍溪は註せり五祖法演禪師の語を用ひたるなり、この二語は脱落身心の境、一眞實の義か。
 揚岐。方會禪師なり、慈明に嗣ぐ。
 慈明。楚圓禪師なり、汾陽昭に嗣ぐ。
 幽鳥語喃喃。幽鳥は「ひばり」なり。人の見知らぬ鳥が、「ちくちくちくちくちく」とさへづる。多語なり。「こりや揚岐が虎鬚を持つる乎」と珠長老

と云へり。
 辭雲入亂峯。辭雲とは法性の義、向上の青雲を辭し去りてなり、亂峯は草や木の生え茂りたる山に入りたる時は如何んと、「この意は尊を降り卑に就くの許可を望むことなり」と龍溪の註に見ゆ。
 荒艸裏。ひばら松原かき分けて、段々深村に入る、工夫の純熟すること、入深には同途を許さず、本分向上の深き所知音はないぞと。
 官不容針。公儀の前にて能く定りたるものなり。
 更に一問、學者の言葉を要す。「尙ほ容接を求む」と龍溪は註せり。
 明便喝。後面に到りて一向に把住すと。天地も破れ、佛界魔界も粉微塵に喝したり。
 好一喝。尙ほ主を辨ぜんことを要すと。あゝ好一喝、師を弄するなり。
 連喝兩喝。李母が耳、趙婆が眉なり。

岐便禮拜。「師弟のくんづころづの間答なり」と珠長老はいへり。
 下喬木入幽谷。これ尊を下り卑に就くの義、自分の向上を下つて幽谷第二義門に下る、獅子の子を育つるが如く、この語は詩經の小雅又孟子の滕文公篇に出づ。
 養子縁。つぎ木のようにて實はさうではなし、揚岐と慈明とは誠に養子の如し、慈愍容接なり。
 爲甚麼。心切丸辨ぜんことを要して、引續いて喝を下す一言中に響あり」と古人は抄せり。
 口吧吧地。吧々ば口まめなること、又大口の貌、争ふやうなる言葉。
 能縱。放行なり、瓦礫も光を放す能奪。把住なり、日月も眞くらやみなり。
 能殺。釋迦も達磨もなり。
 能活。骸骨もの云はせること。
 他。やい拄杖子よ。
 因甚。なんたることぞや。

達法師。晋の高僧、本姓は賈氏、廬山に卜居してより三十餘年、影山を出でず、客を送るごとに常に虎溪橋を界となす。
 虎溪。九江府にあり。
 便道不得。氣を呑み聲を飲む、きよろく途方にくれてさあいふてみよ、この病はどこにあると、那裡はどこにあるかなり。
 溪林葉隨。頃しも秋のことなれば谷の林々に葉がばら／＼落ちてこれ見の境界なり。
 塞雁聲寒。時雨が風か吹き來りて雁の聲も寒さやうなりと。これは聞の境界なり。
 見成公案。見たり聞いたり、そのまゝなり。
 大難大難。慈明も揚岐も虚堂もなみ大抵のことであるかと、以上の四句は任運天眞の境界、最大難と爲す。
 百雜碎。さつぱり殘さず、打碎くなり、大難や見成公案を奪ふなり

んで、
 便ち道ふこと得ず。且く道へ、病那裡にか在る。

上堂、
 溪林葉隨ちて、塞鴈聲寒し、見成公案、
 大難大難、百雜碎、
 鐵團圓、
 風に和して搭在す玉闌干。

冬至小參、
 天寒人寒、
 針頭に鐵を削る、
 滴水滴凍、
 畫餅飢に充つ。
 丹霞木佛を焼く、
 餓狗枯體を齧む。
 鏡清單を展べず、
 胡餅裏に汁を覓む。
 從上の老漢既に、
 把不定にして、
 未だ免れず、
 時に隨ひ節を逐ふことを、
 便ち見る、
 陰消し陽長じ、
 小去り大來つて、
 暖律灰を飛し、
 繡紋線を添ふことを。
 只だ、
 無陰陽地の如きんば、
 還つて、
 遷變ありや也た無や。
 拄杖を卓して、
 月彎弓に似て、
 雨少く風多し。

鐵團圓。齒も立たぬなり。
 和風搭在玉闌干。風と一つにして玉闌干にかけ置くなり、「一把柳枝收不得、和風搭在玉闌干」と云ふ詩あり。
 皆無難のことを云ふ。颯と吹きなびくこと。この二句は活機用にて満したるなり。
 天寒人寒。寒いなのんと雪はちらつく向ふ風。
 針頭削。これは著語の態なり無用處なりなどと云ふ。「杪は不可々々」と珠はいへり。天寒の辛辣を明すなり、いやが上にも針を立つるほどの寒さなりと。
 滴水滴凍。白水仁禪師の語なり一滴水一滴凍は則ち的的餘間に髪を容れざるの境界なり語の因縁は次に見ゆ、平たらいへば「ポイント」と落ちたる水は、直凍ると、これは如何と畫餅飢。繪にかいた餅、腹が

ふくれると。これも未だ實悟實得と稱せず、これも尊物語なり。
 丹霞燒木佛。丹霞が天寒に値ふて、木佛を取りて火に焚いてあると、院主呵責して、なぜ木佛を焚いたかと。師は杖を以て灰をあげいて云ふ、吾れ焼いて舍利を取らんと、主云く、木佛には舍利はなしと師云く、舍利がなければ兩脇立も焼いてしまふか、院主自後眉鬚墮落す。
 餓狗齧枯體。甚の滋味かあらんとなり。飢えたる犬が髑髏をかむやうなものなり。
 鏡清。鏡清道愆禪師なり、雪峯存に嗣ぐ。この因縁は傳燈錄の白水仁の章に、會元の本傳にも出づ。單は「ふとん」展は「しく」こと。このこと滴水滴凍とは同じ。人の縁なり。
 胡餅。白胡麻をまぶしたもち

堅いだん子のやうなるもの。已上は句著語を以て本則の機を奪ふなり。

① 從上老漢、瀉山、白水、丹霞、鏡清なり。

② 把不定。珠曰く、「各々本分を守らずして垂手爲人するは、これ把不定なり」と。

③ 隨時逐節。已下、向上の第一機より寒いといひ、單を展ぶる工夫はなしと。二義門に下る底なり。陰消陽長。やれ日が短い夜が長くとやかましきなり。君子は道長く小人は道消す。小は悪去り大は吉來るなり。

④ 暖律飛灰。さあ陽氣が至ると、律管からばちりと灰をばちく、今日から日が緩やかになると。

⑤ 繡紋添線。宮中が日の長短をばかり、冬至後は一筋づつでも針仕事がよくいに来ると喜ぶ故事を取るなり。唐時代の故事なり。

るか、この報恩寺にあると。
⑥ 有遷變。四時寒暑のうつりかはりがあるか。
⑦ 月似彎弓。彎月、弓張り月、これは即今現成底を以て結びたり、會元の睦州傳に、この兩句あり、冬が月始めにありし故に之を用ふ。
⑧ 洞山。良价禪師なり、雲岩晟に嗣ぐ。
⑨ 冬夜。冬至の晩なり。
⑩ 菓子。蜜柑か燒餅なり。
⑪ 泰首座。賜天泰か、唐時代の三聖惠然と同時かと、大活機のある人なり。
⑫ 黒似漆。眞黒なり、本分の正位。
⑬ 動用中。作務や托鉢や、喫茶喫飯の中にといふこと。
⑭ 收不得。偏正回互上、どうとも捉へることならぬ。
⑮ 在甚麼處。收不得の過なり。
⑯ 撥退菓卓。卓は案なり、食器なり。机をこつちへとれとなり。
⑰ 金地招手。天台の智者大師の因縁

神僧定光の居處を金地と云ふ、江陵は智者大師の出身地なれば、知音同士なれどもと、點頭は「うなづく」なり、金地は洞山に、江陵は泰首座に比す。諸人が知音底とばかり見るとなり。しかし「白水雲千萬里なり」と呵したるなり。
⑱ 長蛇偃月。八陣の中にあり、共に陣の名、形の上から附けたるもの軍のすまじき所を長蛇偃月と云ふ、丁度洞山と泰首座に比して云ふ長蛇はたての陣、偃月はよこの營陣。
⑲ 輸贏。まげかち、名將と名將なるが故に勝負が法戰場中、互に機鋒を見るのみにて分らぬ、あづかりじや。
⑳ 檢點得來。よく見ればどうもなり。
㉑ 劍去久矣。もうとしかぬとなり、論談眞を失する故に、迷ひのはなはだしき故事を引く。
㉒ 天基節。今の天長節のこと。宋の

復た擧す、^① 洞山、^② 冬夜に、^③ 菓子を喫する次

で、^④ 泰首座に問ふ、「一物あり、^⑤ 黒うして漆

に似たり、常に、^⑥ 動用の中に在り、^⑦ 動用の中

收不得、^⑧ 過甚麼の處にか在る。」泰云く、「過動

用の中に在り。」山、侍者をして、^⑨ 菓卓を撥退

せしむ。師云く、「盡く道ふ、^⑩ 金地手を招げ

ば、^⑪ 江陵點頭すと。殊に知らず、^⑫ 長蛇偃月、

未だ、^⑬ 輸贏を見ず。^⑭ 檢點得し來ることは、^⑮ 劍

去つて久し矣。」

① 天基節の上堂、② 南嶽の七十二峰、③ 華頂の

萬八千丈、④ 之を瞻るに際なく、⑤ 之を仰ぐ

に根なし。此の、⑥ 無窮の數を以て、用つて、⑦ 聖

明の君を祝したてまつる。

佛成道、⑧ 道上堂、⑨ 一日日、一時時、⑩ 臘八夜に

返到して、⑪ 眼上に錯つて眉を安ず、⑫ 東西辨

國譯虛堂和尚語錄 卷一

十四代の理宗皇帝正月五日に誕生せられたるなり。

② 南嶽。支那五岳の一の衡山なり、高さ九千餘丈、湖南省にあり。

③ 華頂。天台の中の一峯なり、總じて天台と名づく、高さは一萬八千丈、周廻は百里、浙江省にあり。

④ 瞻之無際。七十二峯の横を云ふ見わたせば數峯なるが故に目も届かぬ。

⑤ 仰之無根。根は界なり、萬八千丈のたてを云ふ、餘りたかくて頂は見えぬ。

⑥ 無窮數。福德壽無量に譬ふ。聖明君。今上皇帝の無爲有道かば、御祝ひ申すとなり。

⑦ 一日日、一時時。この兩句は六歳の苦行日時の過ぐるを云ふ、十九にて出家、雪苦不退なり。

⑧ 返到臘八夜。成道の果熟をい

ふ、返は物の投合するなり。

⑨ 眼上錯安眉。衆生本來成佛、今又成道とはこれを誤つて眼の上に眉を置いたと。見星の端的を云ふ。

⑩ 東西不辨南北狐疑。この兩句は等正覺の端的なり、どこもかしこも平等性智なり、然るに却つて疑ふと。狐疑は故事に孟賁の狐疑などといふ。

⑪ 從教。まよふといふ意。萬古業風吹。上世斯の如き惡業風の吹くことをとなり。しかし菩薩行でいへば、地獄に入り餓鬼畜生に入り、只だ一切を利するが願なり。

⑫ 待者。樂普なり。洛浦山元安禪師、臨濟に嗣ぐ。德山。宣鑑禪師なり、龍潭に嗣ぐ、唐時代の高僧。

⑬ 要打人。打つことを手柄にして居らるる故、迷惑に存じま

國譯虛堂和尚語錄 卷一

- ⑦接住。引捕へるなり、ぬからず引捕へとめよとの意。
- ⑧一送。すつと向ふへ推せと。
- ⑨管取。領取と一般なり。それでは打ちばしまい、構ふまいと。
- ⑩舉似。舉揚の舉で、借てとか何とか云ふてなり。似は示す。
- ⑪疑著。疑ふてある。疑者は賞揚の義にも用ふ、合點行かぬにも用ふ
- ⑫張鱗。淺瀬でえびや雜魚位をとる小魚を漁るなり、小機を接するにたとふ。
- ⑬淺潭下釣。深いふちで魚つりはできぬと、大機を接すべからざるを云ふ。
- ⑭荒艸堆頭。むしやくしやと草の積みある上に、うづめられ耻かよされたりと。
- ⑮擡身不起。無暗に體をあげ得ぬとなり「この話本録と少し異なるところあり、しかし舊參底は考へて見る話なり」と珠長老はいへり。
- ⑯拈拄杖。この下に云の字を脱する

- に似たりと古來の説あり、これは拄杖だぞよ拄杖だといへばとなり
- ⑰慙麼。それならなり、世間底なり。爲人なり。
- ⑱決定不肯。なるほどと納得せぬ、有功用道の故になり。
- ⑲不慙麼。それでなければなり、拄杖をはなれてといふ意。出世間底なり。
- ⑳檢責。檢點求責して親しく看るべし。無功用道の故に、とつくり工夫し盡して見よとなり。
- ㉑各自。自己を返照してめいゝの意。
- ㉒慙麼不慙麼。二世間輒交底なり。
- ㉓頓鼻棍。「ふんどし」のこと、人身兩ひざ以上穴あり、特鼻と名く、禪特鼻に至つて其の短に言ふと。卑賤にして無慙愧の漢を云ふ。
- ㉔滌酒器底。史記に司馬相如の故事あり。器は瓦器なり、食ふ毎にあらひすゝぐ、共に有功無功、雜亂不淨潔、無慙愧の漢を云ふ。

- ㉕有箇方便。上の三段を遮非して、正宗を示さんことを要す、一つの手だてがあるとなり。
- ㉖甘。うげがふなり、なるほどといふ意。
- ㉗靠。これが虚堂の方便なり、椅子のうしろへたてかけて、吾が宗の方便は無言説なりと。
- ㉘拈拄杖。拄杖に託して佛事を作す那一物に比すなり。
- ㉙礙東礙西。諸方に充塞して物を礙ふ、東にやれば邪魔になり、西にやれば邪魔になる。
- ㉚成立。山河大地世界ができるとなり。
- ㉛佛祖。釋迦や達磨なり。
- ㉜出興。出世興隆なり。
- ㉝鱗々々々。山形の景色すれくつたるなりふり。拄杖のかたちをいふ
- ㉞栗栗々々。己に本形を現出す、栗々は堅なり、しごまるなり、柳は音「しつ」、又は「そく」、二音あり、共に拄杖のことなり。

せず、南北狐疑す。 從教あれ 萬古業風の吹くことを。

上堂、擧す、臨濟、侍者をして、徳山に傳語せしむ。侍云く、「徳山人を打つことを要す。」濟云く、「汝但だ去つて伊が棒を拈せんと待つて、接住して一送を與へよ、爾を打せざること管取せん。」侍、教ふる所に依る、果然として打せず、歸つて臨濟に舉似す、濟云く、「我れ從來者の漢を疑着す。」師云く、「盡く謂ふ、徳山只だ淺水に鱗に張ることを解して、深潭釣を下すこと殊に知らず、臨濟父子、徳山に荒艸堆頭に埋在せられて、今に至るまで身を擡げ起さざることを。」

上堂、拄杖を拈じて、「若し、慙麼ならば、諸方決定して肯はず、不慙麼ならば、各自に

- ㉟他。拄杖をさす、徳山は平生拄杖を拈じて僧の門に入るを見て便ち打す。
- ㊱出氣。いきをせられたること
- ㊲芭蕉。清禪師なり、南塔涌に嗣ぐ、この拄杖の縁は頌古に見ゆ。
- ㊳齒豁。もぬげまげらになりたること。風漏は覺えず言語がもれること。
- ㊴禪和。箇々。禪和は禪坊主ども、箇々は人々、脚跟はきびす、他のは拄杖子をさす、みな影迹に隨ふて行するが故にいふ。
- ㊵年窮歲盡。臘月三十日に逗到してなり。
- ㊶不解轉身。蟄居して動かす、自己と身を動すとを知らず。
- ㊷節目不分。節目は拄杖のふし筋目も分らぬこと。道理で以て言譯することもならぬ、落在はにぎりこるされたること

- ㊸爾。爾は拄杖子なり。
- ㊹三陽交泰。三陰三陽なり、天地陰陽の氣相交つて和するときは、萬成物生なり、故に通泰と爲す。
- ㊺萬葉。彙は「たぐひ」、類なり、亨は通なり、「やはらぎ」、「うごく」なり。
- ㊻要。明日は正月なればなり。
- ㊼畫一畫。一の字を書いたのは一線路を通するの義なり。
- ㊽退後。そこで、拄杖のとほり道なり。
- ㊾香林。澄遠禪師なり、雲門に嗣ぐ。
- ㊿萬頃。頃ば百畝を一頃といふこと、には廣大の見を云ふ。
- 〇荒田。不耕不耘、未だ修證を求めず、誰か主宰とする、本分の田地なり、只だ自照すべきなり。
- 〇看々。此の語を取りて結座すいつの間にやら大晦日になつ

① 檢責して看よ。② 恁麼不恁麼は、③ 積鼻揮、酒器を滌ふ底、報恩、箇の方便あり。諸人還つて、甘ふや也た無や。④ 良久して拄杖を、⑤ 靠く除夜小參、⑥ 拄杖を拈して、未だ世界あらず、未だ佛祖あらざるときに、便ち者の拄杖子あり。⑦ 東に礎へ西に礎へ、世界成立し、⑧ 佛祖出興するに及んで、舊に依つて、⑨ 麒麟皴皴、栗栗柳柳、徳山、他の鼻孔を借つて、⑩ 氣を出す、⑪ 芭蕉、齒豁にして風を漏すことを覺えず、天下の禪和をして、箇箇他の脚後跟に随つて轉せしむるを致す。⑫ 年窮り歳盡きて、⑬ 身を轉ずることを解せず。⑭ 只だ、⑮ 節目分たざるに因つて、報恩が手裏に落在す。我れ也た、⑯ 懶を勘辨し得ること能はず、只だ諸人の、⑰ 三陽交泰、⑱ 萬彙咸く亨くると道ふことを知らんことを

たとの意。
 ① 坐致太平。四夷八蠻、天下の人の舌頭を坐斷す。
 ② 要且。とんとまあ、物の義理に通ぜぬと。
 ③ 一氣云々。押しつまつたる臘月に、一息に獅子奮迅して、快活俊逸となり、不回頭は振りむきもせぬこと。
 ④ 者般時節。者般とは身體現成底の時節なり。
 ⑤ 兜攪。とりこむこと。誰が他の封疆を荒すものがあるとの意。
 ⑥ 一椀燈。那一燈なり。珠長老は曰く、「私義を以て云へば人々具足の一椀燈がある、これは阿彌陀とも釋迦とも云ふ」と。
 ⑦ 東挑西剔。右へ掻き立て、左へしん切り、身を入れて世話するものがなしと。
 ⑧ 前街後巷。上の町も下の横筋

一四
 も、一體の碧綠青紅は燈籠の飾を云ふ。
 ① 總是眼中。皆之れ目ざはりばかり、この修行者の爲には那一椀と三十棒でも與へねばなるまいと。
 ② 雪峯。雪峯は義存、巖頭は全、共に徳山に嗣ぐ、欽山は文遂、洞山介に嗣ぐ、この三人を世に雪巖欽と云ふ。
 ③ 定上座。臨濟に嗣ぐ。
 ④ 健否。臨濟和尚は御達者で御座いますかと。
 ⑤ 已遷化。もう何時のことが遷化せり。
 ⑥ 大息。ため息つく、あゝと歎かれたるなり。
 ⑦ 赤肉團。五尺の形骸をいふ。
 ⑧ 無位真人。佛祖の位に居らず衆生の位にも居らぬこと。
 ⑨ 諸人面門。面前で六根門頭より出たり入つたり、自由を働

① 要す。脱し或は未だ然らずんば、② 拄杖を以て畫して、③ 大衆退後。④ 復た擧す、⑤ 香林因に僧問ふ、「⑥ 萬頃の荒田是れ誰か主と爲る。」林云く、「⑦ 看よ看よ臘月盡く。」師云く、「⑧ 香林能く、⑨ 坐ながら太平を致すと雖も、⑩ 要且つ物義に通せず、報恩に萬頃の荒田是れ誰か主と爲すと問ふものあらば、⑪ 一氣に走ること五百里、更に頭を回さず。何が故ぞ、⑫ 者般の時節に似たらば、誰か敢て許多の田地を、⑬ 兜攪せん。⑭ 元宵上堂、好、⑮ 一椀の燈、只だ是れ人の、⑯ 東に挑げ西に剔るなし。若し剔り得て分明ならば、⑰ 前街後巷碧綠青紅、⑱ 總に是れ眼中の屑。且く道へ、これ那一椀ぞ。⑲ 上堂、擧す、⑳ 雪峯・巖頭・欽山、河北に往いて

① 未證擔者。悟了分明のこと、無いものは見聞覺知の上にて於て、御目にかゝれとて看看と云ふ。
 ② 欽云。これは欽山はまだ參禪が熟せざりき。
 ③ 擔住。胸を引拘へて無位と非無位とどれだけの違あるか、相去ること多少ぞと、さあ云へさあ云へ、速かに道へ速かに道へと、こりやいやいと云ふ、さうすると欽山は色動いて青くなり、赤くなり、人殺しくと呼ばつてぐつとも對へぬ。
 ④ 勸解。何卒擔住の手をば放しやつてくれと。いやはや幾重にも御免下されと。
 ⑤ 者兩箇。この二人の老僧の顔に免じてやると、さもなくば貴様のやうな尿牀鬼子、いばりこき小僧、餓鬼をとの意。

一五
 聖殺は「しめころす」こと。凍膿面は「うだげれたやう」なる老人の顔のことなり。
 ① 爭奈何。雪峯や巖頭には、税のかかるのを缺くと。
 ② 懸素。白か黒かを分けること
 ③ 換盡。一度ならず二度も三度も茶碗をかへての意。定上座が強いが欽山弱いか、見分るならばなり。
 ④ 首座。これは前堂首座なり、大衆の頭にて宗師に代つて説法する人、それを虚堂が甘露和尚を推薦しられ、その御禮の上堂なり。甘露寺は鎮江府の北固山にありと。
 ⑤ 玉在石。石は玉を出して山暉き、水は珠を懐いて川暉ぶ、温は「うるはし」、媚は「明美」、水色がきれいなること、この語は下の正人云々を起す先に譬を擧ぐるなり。
 ⑥ 正人云々。正人は行解相應の

臨濟を禮拜せんとす、路に 定上座に逢ふ。峯云く、「臨濟和尚 健なりや否や。」定云く、「已に遷化し了れり。」雪峯・巖頭相顧みて 太息す、復た問ふ、「尋常何の言句あつてか徒に示す。」定云く、「赤肉團上に一 無位の真人あり、常に 諸人の面門に在つて出入す。未だ證據せざらんものは看よ看よ。」欽云く、「何ぞ非無位の真人と道はざる。」定 擒住して云く、「無位の真人と非無位の真人と、相去ること多少ぞ、速かに道へ速かに道へ。」欽山色動いて對ふるこゝと能はず。雪峯・巖頭 解せんことを勸む、定云く、「若し 者の兩箇の老凍膿の面を看ずんば 彌者の尿牀の鬼子を至殺せん。」師云く、「定上座、則ち物に對して税を收む、雪峯・巖頭を 爭奈何がせん。人あり 緇素し得出せば、蓋

人、叢林とは梵語にては僧伽と云ひ、譯して衆といふ、譬へば大樹の叢り集るを林といふが如し、綱目は規矩法度で、注令は成律如法、應機通變は甘露和上の分座說法は、衆の根機に應じて通達權變なり、毒藥をば甘露の妙味となし、曠志愚癡の無明をば慈悲哀憐に肯當せしむ、これは甘露寺の無明和尚と云ふより、轉用したるものなりといふ説あり。

① 第一座。先づ々々これへと前堂の首座第一に請じたるなり

② 知有底人。千聖不傳の妙處あることを知る底の人、甚麼の所にか去る。死後にはどこへ行かかと思ふとなり。

③ 山前云々。門前の庄屋殿の所に一頭の女牛になりて働いてゐる、そこで趙州は師の答話を對すとそれで落ち付ました

ありがたいと。南泉は又云ふ「昨夜三更月牕に到る」と兼中至兼中到の境界なり、三更は正位なりと、珠長老は云へり鷓鴣林も此の様な處を見て涙をかばさめは禪坊主でないと思せらる、前面は互に臉を弄し後面は各無爲と龍溪は註す

④ 王老師。南泉普願、姓は王氏自ら王老師と稱す。

⑤ 救手。手は助語。救手の刀子九寸五分利なりと雖も。すさまじい切れものなれどもと。

⑥ 滅盡法。孫子が故事、兵略なり、つまり言へば智を以て智を欺く、謀とに出合ふたとなり、智謀なり。

⑦ 幾乎。近いと云ふこと、蔡州を打破せらる、方語に「命懸絲の如し」とある、緊要を勸破するの義なり、この蔡州の故事は唐憲宗元和十三年冬十月李愬、夜蔡州を襲ふて大賊なる

を換へて茶を點じて 彌に供養せん。」

① 首座を請する上堂。玉、石に在るときは則ち温に、珠、淵に在るときは則ち媚なり。正人叢林にあるときは、則ち綱目正しく法令嚴なり。應機通變毒藥を以て甘露と爲し、無明を以て慈悲に當つ。此の人を見んと要す麼。拄杖を卓して下座。大衆と與に甘露和尚を拜請して、

② 第一座に歸せしめん。

上堂、擧す、南泉因に趙州問ふ、「有ることを知る底の人、甚麼の處に向つてか去る。」泉云く、「山前の檀越家に一頭の水牯牛と作り去る。」州云く、「師の答話を謝す。」泉云く、「昨夜三更月牕に到る。」師云く、「王老師、救手の刀子利なりと雖も、趙州に 滅盡の法を用ひられて、幾乎蔡州を打破せらる。」

吳元濟を擒にし、京師に檻送す、通鑑等の史に見ゆ。

① 一箇夢。雙樹林中にて涅槃に入りたもふとて、生死涅槃昨夢の如しとの相を示され、至レ今未レ醒で、善知識と稱する人々が狐魅にだまされてうるたへさせられてゐる。

② 寡不敵衆。あまり多數が睡り居る故に虚堂も中間入りしてゐると。換手推胸は左と右となり。

③ 蒼天々々。痛哭の切なるなり「あゝあゝ」と面を仰いで歎くこと。

④ 靈雲。志勸禪師は、長慶の大安に嗣ぐ、安は百丈に嗣ぐ。

⑤ 見桃。頌に曰く、「三十年來劍客を尋ね、幾回か葉落ち又枝を抽んづ、桃花を一見してより後、直に如今に至りて更に疑はず。」

⑥ 支沙。師備禪師なり、雪峯に

嗣ぐ。

⑦ 諦當。審實的當なり、一寸理風はあるやうだが、未だ敢保すて、證據に立つ老兄の未徹じや徹底して居らぬと。保は任なり。

⑧ 一人先行不到。この一人は靈雲を指す、先に立つたが、まだ大津あたりに居るとの意。

⑨ 一人未後太過。この一人は玄沙を指す、これは後から行いても、もう草津あたりで、魅した、これは二人太過不及にして中實を得ざるを云ふなり

⑩ 眼見鼻孔。能く不見の處を見るとなり、眼にて鼻の孔を見えぬ、これは他の是非を見ずして、諸人各々自知せよとなり。

⑪ 春風云々。唐の李賀の詩に、「桃花亂落して紅雨の如し」と、春の風はたび／＼桃の花を落して、丁度紅色の雨の如

佛涅槃上堂、釋迦老子、二千年前、一箇の夢を做す。今に至るまで未だ醒めず。兒孫の夢中に向つて、夢を説いて、後人を狐魅することを引き得たり。報恩寡は衆に敵せず、只だ手を換へて胸を推して、蒼天蒼天と道ふことを得たり。

上堂、靈雲、見桃花悟道の頌を擧して、玄沙道ふ、「諦當なることは甚だ諦當、敢保す老兄の未徹なることを。」師云く、「一人は先行到らず、一人は未後太だ過ぎたり。報恩尋常、眼鼻孔を見る。何が故ぞ、春風幾度か紅雨を落す。」深淺何ぞ曾て眼を着けて看んし。上堂、徳山の棒、雨の點するが如くなるも、要且つ皮下に血なき底を打ち得ず。臨濟の喝、雷の奔るに似たるも、要且つ耳朶に聰なき底

を喝し得ず。直饒ひ打ち得て悟らしめ、喝し得て省せしむるも、報恩未だ必ずしも、横點頭だもせず、何が故ぞ、我れを知り我れを罪す。上堂、擧す、黄昏襪を脱いで打睡し、晨朝に起き來つて、旋、行纏を繫ぐ。夜來風吹いて籬倒る、知事、奴子を普請して、箴を劈いて縛起せしむ。師云く、「諸方盡く謂ふ、舜老夫無事甲裏に坐在す。那ぞ知らん、三冬枯木の花、九夏寒巖の雪。」結夏小參、僧問ふ、「徳山小參答話せず、問話の者あらば三十棒と、此の意如何。」師云く、「虎を畫いて狸と成す。」僧云く、「趙州小參答話せんことを要す、問話の者あらば一問を置き將ち來れと、又作麼生。」師云く、「撓鈎搭索。」僧云く、「趙州徳山、用處止だ一般なること

しと、破家散宅に齊しと古人も歎く。深淺云々。任運天真で、何もまあ構ふことはない、花の色の好悪には目はかけはせんと、いふ意「一人は悟道と叫び、一人は未徹と抑ふ、共に平實を失するものなり」と龍溪は註す。如雨點。やたらにぶちたがること。併し皮下に血なき底を得ずと、此れは眞箇大死底の漢を云ふて、辨道の志のなき者は打ちばせぬと。似雷奔。臨濟の一喝は雷のがら／＼鳴るやうなものなりと併し耳朶に聰なき底と云ふて正念工夫の無きものは聞いてもだめなりと、此れ亦大無心の謂なり。横點頭。未だかぶりも掉らぬとなり。深く肯はざるなり。知我罪我。孔子曰く、「我れを

知る者はそれたゞ春秋乎、我を罪する者はそれたゞ春秋乎」と。これは我れに由つて他人に由らざる義なり、他に由つて悟らず、知音は賞し、不知音は笑はんとなり。旋。そろ／＼なり。行纏。脚絆をはくこと。知事。監寺と同じ、取締する役僧の名。奴子。力者の久太も權次も皆來れ、人夫等をいふ。劈篋縛起。竹の繩をさいて縛り起す、この話は舜老夫の上堂の語なり。舜老夫。雲居曉舜禪師なり、洞山聰に嗣ぐ、雲門五世なり。無事云々。これは石霜永和和尚と云ふが、翠巖眞和尚に傳語するの故事なり、大惠武庫にあり。無事甲裏とは棚板はだんにしてあるもの一番上の甲は何も載せぬものはそれを云

ふ、乙丙はまにあはせるもの三冬云々。舜老夫の活機は此の如し、豈に尋常の見ならんや。花の咲くまい所で花が咲く、炎天に雪を飛ばさしむる底、大自在活手段なり。徳山云々。徳山、不時の示衆は云はぬ／＼。有問云々。何とでも云ふものあらば打つて／＼打ちのめすと。畫虎成狸。徳山が何を云ふかと思へば、虎を書き損ふて狸となしたるやうなと、今好話錯擧を抑ふとなり。要答話。趙州は答話をしたがる。置將。置は設くるなり。撓鈎搭索。兜のしころに熊手を引つけかけひきよすること、趙州は只事が起れかし起れかと思ふて居る。用處。はたらきなり、止だ一

般なることなしやと、二つは御座るまいかと。鬼争漆桶。方語に無分曉の義と、鬼は陰冥に屬す、桶漆は亦黑色故、徳山と趙州とは反對である、丁度二つの鬼が一箇の漆桶を争ふやうなものなりと。牛頭。法融禪師なり、四祖道信に嗣ぐ。爲甚。異類のもの迄、ありがたがつて百鳥、花をふくんで供養したり。武陵春色早。湖南省常德府を武陵と云ふ、春色は桃源、人間世々は格別なり。臺樹綠陰多。土の高きを臺といひ、木あるを樹と云ふ、夏の景色なり。佛法も世法も澤山ある、見望んだ處がいやはや勝れた景色なり、この兩句は現成有功用底なりと龍溪は註す。

莫し麼。師云く、「鬼、漆桶を争ふ。」僧云く、「牛頭未だ四祖に見えざる時、甚としてか百鳥花を啣んで獻す。」師云く、「武陵春色早く、臺榭綠陰多し。」僧云く、「見えて後甚としてか百鳥花を啣んで獻せざる。」師云く、「破鏡重ねて照さず、落花枝に上り難し。」僧云く、「只だ學人今夏、和尚に依附するが如きんば、何の方便かある。」師云く、「麤粥淡飯、分に従つて時を過す。」僧云く、「若し樓に登つて望まざるば、焉ぞ滄海の深きことを知らん。」師云く、「賊は是れ家親。」

乃ち云く、「形聲未だ兆れず、岳に積み山に堆し、言跡纔かに彰はれて、影響を尋ね難し。所以に釋迦、室を摩竭に掩ひ、淨名口を毘耶に杜づ。以て西天四七、唐土二

●見後爲甚。廣く四祖より法要を聞いて開悟せられたときより、とんと百鳥も寄り付きもせぬと。

●破鏡不重照。馬鹿なやつ、破鏡でつらが見えるものか、落花枝に上りがたしと、落ちた花が再びさくものか、をしいけれどしかたなしと、この兩句は把住無功用底なり。

●依附和尚。命懸けて御頼みして居ますが、何の方便があるで、どう云ふ利益を蒙るでござります。依附は隨身なり。

●鹿粥淡飯。あさは粥を食へ、晝は飯をくへ、これほどよき方便があるかと。

●若不登樓望。問はずんば知らすの意なり、もし樓に登つて望まざるば、何とぞと御尋ね申したればこそ、祖師門下の甚深なることを承知仕りたれどなり、焉んぞ滄海の深きこと

●を知らんとなり。

●賊は家親。家のうちに居ながら、せりぬすみをしさうなやつなり。

●乃云。提綱なり、これは華論に出づるの文なり、肇は秦の鳩摩羅什法師の弟子なり。

●形聲未兆。本則は把住なり、形聲已前に、本有の如來の光明、山も河も、周遍したりしなり。

●積岳堆。一切に偏き故に、これは虛堂の着語なり、放行なり。

●言跡纔彰。本則は放行なり、出現已後、教内の教外の初にちよつと吐き出すと。

●難尋影響。所得なきが故に、虛堂の着語なり、把住なり、佛法と云ふたらば早やちがふ

●摩竭。摩竭陀、此には文物園と云ふ掩室とは世尊普光法堂に禪定す。

三、天下の老凍臙、機關を用ひ盡せども、手を挿む處なきを致す。只だ高きを平げて下に就くことを得たり。二千年前、用ひ着ざる底の斷貫を以て、天下の衲僧の鼻孔を穿つ。之を禁足護生、剋期取證と謂ふ。愈々狼藉を見る、報恩修行力なし。未だ免れず例に随つて顛倒し去ることを。拄杖を卓して、「鵬を射る手に因らずんば、誰か李將軍を識らん。」

●復た擧す、六祖因に僧問ふ、「黃梅の意旨是れ甚麼人か得る。」祖云く、「佛法を會する人得。」僧云く、「和尚還つて得るや否や。」祖云く、「得ず。」僧云く、「甚と爲てか得ざる。」祖云く、「我れ佛法を會せず」と。師云く、「高山流水子期故に善く之を聽く。然りと雖も、三十年後、人ありて報恩を罵ること存らん。」

●淨名。淨名は維摩の譯なり、毘耶は毘耶離、此には廣嚴と云ふ、維摩も言はざりき。

●以。「それで」なり。

●西天四七。拈花微笑、刹竿倒却、大迦葉より菩提達磨に至る二十八祖なり。

●唐土二三。達磨より六祖惠能に至るまでなり、教外別傳の見性成佛のと。

●天下老凍臙。五家七宗。機關。やれ州云く、無じやの。青州布衫じやの、何のかのと云ふても、無挿手處と云ふ、手も足もつかぬ。

●平高就下。高は毘盧頂行、下は道場外行。

●用不着。如來在世、とりあつかはずと。

●斷貫。ぜにざしなり、無用處を云ふ。

●天下衲僧。牛の鼻づなにたとへ、つきぬいてびつくりさせ

●禁足護生。夏の九十日は禁足して、ものゝ命をすくふて、やたらに歩いてふみ損することはならぬ、夏は蟲を多き故なり。

●剋期取證。九十日を剋期にて定むるなり。取證とはなんでもと此の公案を透過せんと、愈ますくで狼藉を見る、狼藉はとりみだすと云ふ、狼が草をしきものにして臥すと云ふより轉じて狼藉と云ふ。

●未だ免れぬなり。是非はない色々と云ふて人を顛倒させる禁足安居などと殘念千萬なりと珠長老は抄してある。

●不因射鵬手。くまたかを射るやうな上手の手でなくば、李公を知るまいぞと、この虛堂も知音底でなくば知るまい、常流の知るところではないと

次の日上堂、釋迦を呵し彌勒を叱す、衲僧家氣宇王の如し。甚麼としてか、今朝草繩自縛する。拂子を撃つて、火を寛めては煙に和して得、泉を擔つては月を帯びて歸る。

上堂、擧す、藥山久しく上堂せず、知事云く「大衆久しく和尚の示誨を思ふ。」山云く「鐘を打著せよ。」衆方に集る、山、便ち門を掩却す。知事云く、「既に大衆の與に上堂することを許す、甚麼としてか一言も施さざる。」山云く、「經に經師あり、論に論師あり、争か老僧を恠み得ん。」師云く、「古人物の爲に慈を傷す中に於て失あり、者の僧當時纔かに門を掩ふことを見て、便ち地上に就いて、一圓相を畫いて、各自に散じ去らば、藥山、門を開くこと得ざることを管取せん。」

なり。
①復舉。拈提なり。
②六祖。惠能大鑑禪師なり、五祖弘忍に嗣ぐ。
③黃梅。五祖大師の居るところ蕪州に在り、今の安徽省なり。意旨とは室中の一大事、このおれがじやと云はさうとか、た、甚麼人が傳へたとなり。會佛法人得。どつこいとすかして呑みこんだものが受け取つた、和尚はまた得たかと云ふと、おれは得すと。
④爲甚不得。そりや案の外なりなんとして得すとは我は佛法などは得はせぬと、こゝが五祖と六祖との意旨なり。あゝら面白ことかな、臍魂を失する場合があると、珠長老は抄してある。
⑤高山流水。これは只知音を貴ぶ、知音なくんば、聞きうることなし、黃梅の意旨なり。

⑥子期故善。子期は鍾子期なり。列子の湯問篇に、伯牙善く琴を鼓し、鍾子期善く聴く。故事を引く、知音同士のこと故、子期が死んだら伯牙は琴をこぼして仕舞ふた。
⑦人罵報恩在。三十年後とは一世といふこと、今一線道を開く故に、いらざる氣を付けて知音など見たくもないと罵るであらうと。
⑧呵彌迦。法に因ると法に因らざるとなり、氣宇王の如き、坊主は隨處に無畏自在なり、これがなにとしてじや。
⑨艸繩自縛。安居禁足といふやつにしばられる。
⑩擊拂子。拂子は佛の時、蚊をばらふために許されたものが今は法式に用ゆる、ことに禪宗は重要な法具は杖拂と云ふて、拄杖と拂子なり、この繫は虛堂が一機を呈した斗り

徽宗皇帝 大忌の上堂、聖人已なく已あらずといふこと靡し、塵刹を總べて是ならずといふことなし。之を毫釐に差ふれば千里に失す。仙仗廳飜として去つて還らず、從教あれ六合清風の起ることを。

上堂、擧す、南泉住菴の時、一僧到る、泉云く、「我れ山に上りて作務せん、齋時に飯を做し喫し了りて、一分を送り來れ。」其の僧飯了つて家事を將つて、一時に打碎して牀上に就いて臥す。泉伺ふこと久しけれども來らず、遂に歸つて僧の臥すを見て、泉も亦臥す。僧便ち起き去る。泉、住して後云く、「我れ往前住庵の時箇の靈利の道者あり、今に至るまで見ず」と。師云く、「王老师若し、錐頭の利なることを顧みずんば、者の僧起き去ることを要すとも、未だ

なり。
①寛火和煙。煙に用はなければも、つれてこればならぬ。泉を擔ふて來れば月はとも桶にうつりて來るなり、期剋の法を據りどころとして、自然に取證の妙を得る。いやでも佛法は其の中にあり、しかし悟後の修行もすんでじや。
②藥山。惟儼禪師なり、石頭に嗣ぐ。
③便掩却門。方丈の門をきりぎりびしやりと閉じた。
④既許。やあ、おそろしい和上やな。
⑤爲甚麼。それはまあ無慈悲ななされかたでござります。
⑥經有經師。此れはまあすぐれた語なり、經文は經文の講師あり、論部は論師あり、邪正を辨するほどに。
⑦爭怪。なんで老僧が一言施さぬとて、はら立つことはない

と。
⑧爲物傷慈。古人もとかくに人の爲に慈悲が傷ざる、傷は痛む、世で婆子が孫を可愛がると同じで、しまいには病人にする。於中有失は少ししぞこなひがある、中には慈悲の中になり。
⑨者僧。知事なり、あのとときちよつくら門を閉づるを見たならば、やにばに一圓相をまんなるとかいてみよ、各自に大衆は散じ去らば、藥山が門をひらくこと得ざることを、もう出づることも入ることもなるまいに、はたらけなんだ、残念々々。
⑩大忌。大忌は國忌を云ふて大と稱す。
⑪聖人無己。華法師の論に出づる語、己なしとは無我の義、命根截斷の時なり、已あらずと云ふことなしと、森羅萬象

得ず。然りと雖も、石壓して筍斜に出で、岸懸つて花倒に生ず。

上堂、擧す、洞山因に僧問ふ、「寒暑到來、如何が回避せん。」山云く、「何ぞ無寒暑の處に向つて去らざる。」僧云く、「如何なるかこれ無寒暑の處。」山云く、「寒の時は、閻梨を寒殺し、熱の時は閻梨を熱殺す。」師云く、「當時者の僧、但だ冷笑一聲せば、洞山身を隠すに路なきことを管取せん。」

上堂、始めて安居を見、又中夏に逢ふ。① 攷攷攷底、鬼神も其の由を測ること莫し。② 癸癸莫底、佛祖も他を辨じ出さず。報恩門下還つて此の人あり麼。家に③ 白澤の圖なし。上堂、擧す、寒山子因に衆僧茄を炙る次で、茄串を將つて一僧の背に向つて打つ。僧首を

一全身なり。言はば聖人は自己の別なし、故に博く民に施して能く衆を濟ふ、萬物を會して自己となし玉ふ、國土塵々刹々で、刹はクシエートラことなり、一切をひつくるめて是ならずといふことなしで、かやうなと云ふこと、みな帝の力なりといふべし、之を毫釐に差ふれば、わづかに彼我の異念を生ずれば、その失は千里もへだつるあやまりができる、清代も亂世も元は一分一釐からわかるなり。④ 仙仗飄飄。仙仗は帝の御とほりの行列殿かなり、飄飄は上り行く風なり、今は登還の事を逃ぶるなり、去つて還り玉はず、今は何處に、おはしますやら、まよふ六合天地四方に、清風は聖君の德風が凛々として起るので天威に觸るべ

からず。⑤ 上山作務。作務とは叢林では雜務をなすのを云ふ、この作務は今日はひよりなれば、枯れ木でもひるはんと山に上りてゆくなり、ひるになりたならば、御身はとつくりたべてその一分を送りて來いと命ぜられた、それに其の僧は自己は飯を腹一杯食つて家事、すなはち家具をもつて一時にぶちくだいてねどこの上にとり去つてしもふた、南泉は何ふこと久しうして、日はかたむいた、もう來さうなもの、來ないから腹はへるし、とうとうもどられたら、かの僧はぐうぐうれてゐる、そこで南泉もまたねてしまはれた、僧はこつそりと起きて、つつ走つた、南泉が南泉山の御住持さまになりてから、大衆へ昔物がたりに云ふには、「往前

住菴の時、これく靈利の道者があつたが、今ごろはとんと見當らぬ」と。

⑥ 不顧錐頭。きりのさきほどの銳利の小智恵あるこの僧をば、俗利と思はずに、すて置けばよいに、そのつれになりて傍臥はして見事は見事なり、臥せずんば僧は起さざるをせえぬに、それはさうじゃけれども。

⑦ 石壓筍。この詩は詩人玉屑の三に出づ、衡州の蔣道士の詩なり、應緣自然、軌則に拘はらずの意なり逸堂曰く、「此の僧逆境界をば行ふ故に、南泉亦逆境界を用ふ、石がおさへてもたけのこはよこに出る石は南泉に、筍は僧に比す、岸が懸崖じやで、花はさかさまに生えるかと思ふ」となり。

⑧ 洞山。良价禪師なり。⑨ 回避。今日でいへば避寒避暑の意とか云ふの意、閻梨は梵語で、こゝには軌範と言ふ、「この世の中が

何時も春や秋ばかりだと暮しよいが、土用のあついのと寒中の寒いのは、どうも大閉口です、何とかこれをさげる工夫はないでせうか」と尋れた、そこで洞山和尚は、「なぜに寒も暑もない處にゆきて、避寒なり避暑をせぬのじや」と答へた、その僧は理論がましく「無寒の寒、無暑の暑のところとはどこのことですか」と又問ひ返した、そこで洞山は「寒いときには貴僧を凍死せしむるほどさむく、暑いときは貴僧をやけ死にさせるほど暑いところこれなり」と、この話碧岩の四十三則にも出である。⑩ 冷笑。えへへと、せらわらひ也「笑ふたら洞山和尚も指をくはへたでらう」と珠長老は抄してゐるなり、安單したり、六月の且となつて中夏にあふ。⑪ 攷々攷々。攷々は波々なり、勤むなり、攷々は勞極なり、勤作なり

三時の勤行、四時の坐禪、晝夜骨を折つてゐる、鬼神でもそのわけを測り知ること六けしいとなり。⑫ 癸々莫々。「れつつけつ」は節目多きなり、すれくりものと云ふこと、不和合にして同居しにくきやつ、やれ知客だの、副寺だの、何のかのと云ふやつは、佛祖でも他を辯じ出さず、正とも邪とも分ちえず、こんな逆行無礙の物故に。⑬ 白澤之圖。まじなひの神獸の繪なしとなり、そのおれの處堂の門下にはかやうなげちなやつはないと衆僧。おほぜいの坊主が天台の國清寺で、茄子を炙りてゐたので、寒山はぶつきらぼう故、だれも茄の串一つくれぬ故、つゝと差して見せて「これなんぞ」とやつた、僧云く「風顛漢、このときちがひめ」と又傍の坊主に「お身はどうじや、云ふて見よ、多く鹽醬を費して飯を食ふと、くそく事より知らぬと、(功虚りに施す故と註して

回す、山、茄串を呈起して云く、「是れ甚麼ぞ。」
 僧云く、「風顛漢。」山却つて傍僧に向つて云く、
 爾道へ、者の僧多少の鹽醬をか費す。「師云く、
 「敵を欺くものは亡ぶ、者の僧還つて甘ふ麼。
 報恩若し他の茄串を呈起して、これ甚麼ぞと道
 ふことを見ば、便ち聽く勢を作さん、擬議
 せば茄串を奪つて便ち打たん。」
 上堂、五祖凡を衆に示すに、東邊に一句を
 掉ひ、西邊に一句を掉ふ。大いに雪に蘸し
 て冬瓜を喫するに似たり。喚んで楊岐の正傳
 東山の暗號と作す。特に知らず、法出でて姦生
 じ、事久しうして變多きことを。
 上堂、擧す、世尊、一日陞座、衆集り定まる、
 文殊、白椎して云く、「諦觀法王法、法王法如
 是。」世尊便ち下座す。師云く、「是は則ち是、

ある。そこで虚堂和尚は「敵
 を欺くものは亡ぶ」と、これ
 は者の僧が寒山、欺いて風顛
 漢といふたればなり、しかし
 者の僧還つて甘ふ麼で、「寒山
 が後語の多少の、鹽醬を費す
 とのことば、なる程尤じやと
 がてんが入つたかどうか」と
 と。串は串に作るべし、串に
 あらず、串は音「せん」で、又
 「さん」で、肉を炙る器なりと
 ある。
 便作聽勢。虚堂がもしあのと
 き寒山が茄子の串を呈起する
 のを見たならば、耳を傾け聽
 く勢を作さん、擬議したなら
 ばぶつてこまらさうにと。
 五祖。法演禪師なり、白雲端
 に嗣ぐ、五祖山は新州にあり
 東邊。没蹤跡の義、この二句
 は言語の跡をとめざるを云ふ
 掉。なぶりおだてるの意なり
 と、音「ちよう」、楚語、大

能掉小と、註に作なりと、搯
 なり振なり説なりと。
 大似蘸雪。方語に没滋味の義
 と、どうもこ味はるゝもの
 でない、百人が百人、はきだ
 す、崖を臨んで退くと云ふ五
 祖の宗旨なり。
 喚作楊岐。忝くも林才中興の
 祖ある、東山暗號とは東山
 とは白雲未來在から出た語で
 五祖演は東山に塔せらるゝ故
 に、暗號は密令軍中に用ふる
 秘密の通信の如し、法出姦生
 とは虚堂は五祖を抑へて法度
 があまりすぎると偽ものがで
 きる事久多變とは、正傳の、
 暗號のと、名付けて弊害が出
 來て殃が見孫に及ぶとなり。
 一日陞座。講肆には陞座、禪
 林で上堂と云ふ。
 白椎。椎は又槌とも書く、こ
 の文殊の白椎は世尊が法座に
 のぼらせられて、まだ何も御

只だ是れ椎を擧ぐることに、較重きこと些子。」
 監收を請する上堂、無生の田地、種あり
 收あり、時節到來すれば、自然に成就す。
 衲僧家、口を開着して、他を少くこと一時子
 も得ず。若し本色の人に非ずんば、以て滲漏
 を絶し難からん、且く那箇か是れ本色の人、拄
 杖を卓して、「公。」
 解夏小參、僧問ふ、「三月安居今已に滿つ、九
 旬功用の事如何。」師云く、「眼前舊に依つて
 急緝緝。」僧云く、「西天臘人を以て驗と爲す、
 甚の死急をか著たる。」師云く、「者の漆桶。」
 僧云く、「指示を謝す。」師云く、「黃連は未だ是れ
 苦からず。」
 乃ち拂子を擧げて云く、「恁麼は則ち易く、
 不恁麼は則ち難し。恁麼は則ち易し、結あり

説きならぬ先に、はや文殊
 はこの語を唱へて、「一切無用
 なり、何も法王法は如是なり」
 とやつた、世尊もそれでこの
 氣轉に大賛成して下座なされ
 た。
 諦觀法王法。あきらかに法王
 の法を觀るにとよむのが、訓
 讀なり、古來音讀するのなら
 はせなり。諦觀はよく注意し
 て見ること、か、熟視精究な
 どと同じで、法王法は佛陀の
 法で、正法眼藏涅槃妙心とか
 佛心印とかの意で、平易に言
 へば、佛様の御説法である。
 如是と云ふに參禪辨道も實悟
 實參もいるものである、たゞ
 某氏の和解のやうに宇宙に充
 満してあるゆゑ、法とて別に
 御説きなされるは無用じやくら
 めの話なれば、大死一番とか
 絶後に蘇生とか云ふほど骨折
 ることはなんのたげがする

ことぞ、如是か如是か、如何
 にかやうであるか、虚堂老師
 は次にいふてある。
 是則是。是は則ち是なるが、
 椎が重かつたさうな、がい
 手まが入つたと、未陞座の先
 きならばよかつたにとなり、
 些子はすこしばかりなり。
 請監收。監收は領地から年貢
 などをとりをさめる役なり、
 この上はその財分に托して説
 禪せらるゝなり。
 無生田地。人々具足底、佛に
 在つて増さず、衆生に在つて
 も減ぜず。
 有種有收。春種まけば秋收む
 種は發心修行、收は破相入理
 になとへるなり。
 自然成熟。菩提の果がしぜん
 にみのる。
 衲僧家。釋迦も達磨も、慧命
 かつたぐには田地の米がなく
 ば、一時もすこせぬと、宗旨

の本分にたとへて寸時もなければならぬと、開着の着は得ると同じにて、他を缺くは御米がなくてはとの意。

⑦若非本色人。本とうの衲子でなくば、相續無間なる能はず、監收は淳朴の人でなくば、難三以絶ニ滲漏一、と滲漏とはもれもらすで、無明煩惱にたとへる、粒米を一粒もわきへもらさぬとは六づかしい、公とは公平、無私なり、分明にして無私なりと。

⑧安居。禁足なり。

⑨功用。功勳受用なり。

⑩眼前依舊。まのあたり佛祖の模範の通りに規矩が、きつとして好かつたゆえと、緋はなはを以て物を直すを云ふ、きそくどほりに行はれたと云ふこと。

⑪臘人。臘は法臘を云ふなり、解制受臘の日を法臘といふ、長老幼者を序次して行業を驗むるなり。

⑫著甚死急。世俗に云ふ、何をしに

の寸尺をはかるのと一つなり。家の豊儉に随ふてとは身代相應のからひをする。

⑬解開布袋。禁網を出づる義、布袋の口をひらきて、勝手に分散する道著。「いひあてれば」なり。

⑭諱却。子は父の名を忌むといふか虚堂はきはねとなり。

⑮秋風渭水。この詩は賈浪仙が詩なり、謂ふ意は、そよと吹き出すともうくたまたまぬ、木の葉が雨の如く長安に一ぱいになる。この虚堂の名である、何ぞ諱却することはない、現成底か不現成底か時節底か、と古人は評してある。

⑯復舉。拈提なり。

⑰師僧。衆僧を指す、師父の義にあらず。

⑱只麼。只なり、止となすが正當なり。

⑲正因。心性のとりさばき、頓に正因をさるとは出塵の階級なり。

⑳響速。響は聲の振ふなり。「げちちと云ふなと」。

①有始有終。始終正念、四月十五日は始め、七月十五日は終り。
②無事不辨。凡そ修する所の事、成辨せぬことはない。
③逼生蠶。無理に悟らせる虚堂が、這裏はさうでない、枉げて錯鏈を下すを罵る、特牛は「をうし」むりなはなしじや。
④買朝相頭。自然に意を費す、機器を祭して應接する、帽を買ふに頭

解あり、**①** 纜を把つて船を放つ。不憚麼は則ち

難し、**②** 始めあり終あり、**③** 事として辨せずと

いふことなし。諸方は**④** 生蠶を逼めて繭を作ら

しめ、特牛、兒を産せしむ。我が者裏は**⑤** 帽を

買ふに頭を相す、家の豊儉に随ふ。覺えず也た

一夏を過了。來朝**⑥** 布袋を解開して、各自に

爾は東我れは西、前程忽ち人ありて、報恩が

爺の名を**⑦** 道著せば、**⑧** 諱却することを須ひざ

れ、何が故ぞ。**⑨** 拂子を撃つて、**⑩** 秋風渭水を吹

けば、落葉長安に滿つ。**⑪**

復た擧す、昔**⑫** 老宿あり、一夏**⑬** 師僧の爲に

説話せず。僧あり、嘆じて云く、「我れ**⑭** 只麼に

空しく一夏を過す、敢て和尚の佛法を説くこと

を望まず、**⑮** 正因の二字を聞くことを得ば也た

得。**⑯** 老宿聞いて云く、「**⑰** 閻黎**⑱** 誓速すること莫れ

①一字也無。正因の當躰は一字もないと。

②扣商。はをかちくとかみならす、後悔するなり。

③無端。ふと。

④好一釜羹。よい一つ釜のごちそう。

⑤兩顆。老宿の初説と齒を扣くと老僧は此の僧となす。

⑥一箇。蓋し隣壁の老宿をさすちつとか、つたところがある

⑦擔板漢。板をかついで右も左も見むきはできぬ。

⑧較些子。まあ、すこしは話になるとか話が出来るとかを云ふ唐宋代の俗語なり。

⑨懸鼓待椎。たゝかばならんと問話の者を待つ。

⑩入水云。人の水中に立てば身の長短をあらはすが如し、問はずんば知らずの意なりと云ふ、眞の爐鞴に入れて見れば、こいつは衲僧の機用ある

かなきは知れぬとなり。

①行住坐臥。之を四威儀と云ふ

②險。あぶないところがある、魔外もえよりつかぬところがある、行路難なり。

③檢點。「みつける」なり。

④許儂。祖師門下の眞の衲僧なり。

⑤天津橋。預め機微をしる靈利の漢を云ふ、天津橋は河南府の西南に洛水の上に架す、隋の煬帝之を建つと、これに故事あり、略す。

⑥險々。そりやあぶない、禪師に嗣ぐ。

⑦雲門。匡眞禪師なり、雪峰存禪師に嗣ぐ。

⑧洞山。守初禪師なり、雲門に嗣ぐ。

⑨近離。ちかごろどこからきたか。

⑩查渡。地の名。

⑪夏。在錫を夏と云ふ。

⑫湖南報慈。報應寺、天下の選

若し正因を論せば、一字も也た無し」と道ひ了つて、齒を扣いて云く、「我れ端なく恁麼に道ふ」と。隣壁に老宿あり、聞いて云く、好一釜の羹、兩顆の鼠糞に汚却せらる。師云く、「三箇の擔板漢、一箇は些子に較れり、報恩一夏、鼓を懸けて椎を待つ、佛法の二字人の問著するなし。何が故ぞ、水に入るに因らずんば争か長人を見ん。」

次の日上堂、行住坐臥、四威儀の中、常に一處の險あり。只だ是れ諸人檢點し出さず、若し檢點し出だすことを得ば、爾に許す是れ箇の天津橋上の漢なることを。若し檢點し出さずんば、九十日の内、枉げて精神を費さす。且く道へ、那箇の一處ぞ。拄杖を卓して、「險險。」

上堂、擧す、雲門因に洞山到る、問ふ、「近離甚の處ぞ。」山云く、「查渡。」門云く、「夏甚の處にか在る。」山云く、「湖南の報慈。」門云く、「幾時か彼を離れし。」山云く、「八月二十五。」門云く、「汝に三頓の棒を放す。」山、次の日問ふ、「昨日、和尚の三頓の棒を放すことを蒙る、知らず、過甚麼の處にか在る。」門云く、「飯袋子、江南湖南、便ち與麼にし去るか。」山言下に於て省あり。師云く、「見亡じ執謝して、方に本色の衲僧たり。洞山の錯は、何ぞ雲門の錯に似かん。」上堂、擧す、趙州因に僧辭す、州云く、甚の處にか去る。僧云く、「諸方に佛法を學し去る。」州云く、「有佛の處住することを得ざれ、無佛の處急に走過せよ。三千里外人に逢ふ

佛場なり。離彼。いつ出立したか。三頓棒。一頓は二十棒なり。すなはち六十棒うつところだが、放してやると云つた、頓は次なり。飯袋子。やい、くらひどうらんと。江西湖南。どこへいつて、その様なことをいふてまはるか有省。くわらりとさつた。見亡執謝。知見滅亡、執法謝去。錯。洞山の錯は、何ぞ雲門の大錯に似かん、洞山の錯は有省のところ、雲門の錯は飯袋子といひしところを云ふ。辭。いとまを告ぐること。有佛處。やつかいものなり、佛とか祖とか云ふ悟り臭い處にはとままること得ず、これは悟をひらいたからとて、いつまでも居れぬ。

めに上堂。維那。華梵兼れたる語、維那支那ことば、綱維那梵語で、羯磨陀那、此には譯して悅衆と云ふ、大衆のひきまはし役、今では經文を首唱しはじめる役になつてゐる。道人相見。知音底の相見は、雲の空に升起、水の谷にながれこむやうに、無心應現を表する也。張胡子。類は未審と古人も云へり、胡のあやまりとならん胡長三黑李四などの如し、品藻はしなだためとなり、是非をさうだんするなり。掃蕩。蕩殺はわかぬ不出來の飯と云ふこと、新長老の未熟の食を掃いて喫して居るを云ふ、無事閑話の條子なり、これは師と雲壑と寐もの語りなり。箇漢。具眼の一人飛び來りて

無佛處。佛見法見の沙汰のあはよくない、その反對で、悟り臭くないところも同じと急走。そんなところばさつさとほりすぎてしまへと。三千里外。諸方に徧歴してなり。不得錯舉。めつたにあごたかた、くまいぞと。與麼則。それならば參りませぬ。摘楊花。おさらばくと、離別の意なり、曲の名、陽春白雪高妙の曲。神警弓。名代の強弓なり。由基箭。養由基は楚の大夫、善く射るものなり。赤眉隊。前漢末の賊黨、大賊、あみにもちにもかうらぬ、耳を朱にして敵兵との見分けにしるとした。南禪雲壑。雲壑は未詳なれども來訪せらる、新維那とのた

これより已下は維那に係る。低聲々々。これはあまりことばが高いとなり。令嚴。法令嚴重なり。綱維の故に。人長短。人の是非長短なり。休し去るにて、虛堂もうわき嘶をやめにするとなり。禹力不到。これは虛堂が手のとどかぬところは、維那が令嚴で正すであらうと、不到はとどかぬの意、河聲流向西とは唐詩歸の三十五の周朴が詩の句なり、大禹の疏決するところ、みな東流なり、西に向ふはその反對で、維那の力でなければ大衆はをさまらぬとのこと。同參。興化と同じく修行したるもの同志。法堂。禪宗では「ばつたう」とよまず、これは説法をする堂なり、須彌壇を中央に高く

て 錯つて擧することを得ざれ。僧云く、「與
麼ならば則ち去らじ。」州云く、「摘楊花、摘楊
花。」師云く、「神臂が弓、由基が箭、趙州之
を用ふるに、的に中らすといふことなし。爭奈
せん者の僧、これ 赤眉隊裏より來ることを。」
南禪の雲壑和尚并に 維那を謝する上堂、
道人の相見、雲の空に升るが如く。水の壑に
赴くが如し。張翃子が領下に鬚なきことを品
藻し、諸方の 濕穀を擣いて飯を喫することを
罵詈す。忽ち 箇の漢あつて出で來つて道はん
低聲低聲、新維那 令嚴なり、人の長短を
説くことを要せざれと。山僧只だ休し去ること
を得。何が故ぞ、 禹力到らざる處河聲西に向
ふ。

上堂、擧す、興化 同參來つて纔かに 法堂に

くしつらへ、この上において
上堂はみなこゝにてするのが
本式なり。
喝。これは他を勘辨するが爲
の作略なり。
者漢。或は瞎漢にも作る。
作主在。主となりさへすれば
よいと思つてゐる。
擬議。言句がつまることなり
適來。さきにより、甚の觸忤
はぞんざいな、無禮なことが
ありましかなり。
權。方便を具して。
實。見性受用慥かなことで實
相なり。
照。鏡の照らし、凡か聖かと
學者をてらし見るなり。
用。互用また、臨機應變なり。
横兩遭。遭は匝と同じ字な
り、二三返手を横にぐるりぐ
るりとまはし、去ることは透
過し去ることはさすがのやつ
もびくともすることならぬ。

者般。これつらで、このやう
なと云ふ意。
劍刃上。活手段なり、騎馬の
名人けがはさゝぬ、聞いても
ひやいな、初め一喝よりおい
出す處までを云ふ。
火焰裡。安住不動で、一くべ
をいふ、この二句は奔流度刃
棒喝全提の大活手段を云ふ。
分外。分限外量、無端はひよ
つくらなり。
放乖。ひきつばなされて、か
まはぬを云ふ。
翻本。商人の語である。資本
をとりかへす。興化の此僧を
したゝめたる處を、諸人に知
らせん爲に上の如く云ふ也。
汝諸人。僧俗男女を指す。
聲色所轉。聞く上見る上で、
輪廻するなり、鼓聲未動で、
たいこの音のどん／＼音のせ
め先き、しづまり返つて居る
處で、法堂の前に来て行くこ

上るを見て、化便ち 喝す、僧亦喝す、化又喝
す、僧又喝す。化棒を拈す、僧又喝す。化云く
「爾看よ 者の漢、猶ほ 主と作ることに在り。」
僧 擬議す、化便ち打す。侍者云く、「適來者
の僧、甚の觸忤かある。」化云く、是れ他也た 權
あり。也た 實あり。也た 照あり。也た 用あり。
我れ手を將つて他の面前に向つて、 横兩遭す
れば、便ち去ること得ず。 者般の瞎漢に似た
らば、打せずんば更に何れの時をか待たん」と。
師云く、 劍刃上に馬を走らしめ、 火焰裡に
身を藏すことは、興化門下 分外と爲す。端な
く者の僧に 放乖せられて、却つて侍者の處に
向つて 翻本す。

上堂、 汝諸人 盡く 聲色の所轉を被る、
何ぞ鼓聲未だ動せざるに、法堂前に來つて、行

と一兩遭と、威音王以前、乃
ち父母未生前に、行道めぐり
にめぐるでなければとなり。
點火。らふそくをともしてお
前達のつらなみればならぬと
なり、子細に照鑑して始めて
證明すべしと。
開爐上堂。十月朔日なり。
丹霞。この因縁は上に出づ。
如蟲禦木。無心無義味のこと
丹霞の木佛を燒くのは、偶爾
は「おもひがけ」なり、成文即
ちいろどりしは院主なり。
些無明火。本分の那一火明、
焰に涉らざる底なり、常に汝
等諸人のかほのまへへあらは
してと日短夜長はなほ晝夜と
云ふが如し、時空しくすこと
ことなかれ、あぶない／＼に
な油断はならぬ、めい／＼に
足もとをみよとなり。
東去也得。無佛世界だもの、
繼續自在なり。

少林壁觀。達磨が嵩山の少林
寺に寓止、九年面壁して坐す
人之を壁觀婆羅門と云ふ。
雪庭墮臂。二祖惠可が雪の庭
に立つて自らの左の臂を斷し
て達磨に呈す。
一地裡人。一地裡は猶ほ天下
といふが如し。
重擔。二百貫餘の重荷、羊額
嶺は明州第一の高山杖錫山の
隣、形羊額の如し、峻嶮なり、
これは枉げて苦辛を喫するに
たふ。
箇仲冬。平常無事、黃連は苦
く、甘草は甘し、布衲赫赤は
玉泉皓禪師が赤ふんどしをこ
しらへて、歴代祖師の名を書
してまはしにしてゐて云く、
猶ほ文殊普賢のみあり、些子
に較れりとして帶の上に書す、
この因縁を云ふ、これは祖道
の端由は任運受用、別の清新
奇妙の事なきを云ふ。

くこと一兩遭せざる、然りと雖も、報恩更に

火を點じて、備が面を照すこと存らん。

開爐上堂、丹霞の木佛を焼くを擧して、師

云く、「丹霞は、蟲の木を禦むが如し、院主偶爾

として文を成す。報恩今日開爐、且つ木佛の焼

くべきなし、只だ些の無明の火あり、常に諸

人の面前に在り、日は短く夜は長し、各自に照

顧せよ。」

冬至小參、釋迦已に滅し、彌勒未だ生せず、恁

廢の時節、東に去ることも也た得たり。西

に去ることも也た得たり、端なく少林の壁觀

雪庭の墮臂、一地裡の人を引き得て、一百

二十斤の重擔を荷ふて、羊額嶺に上るが如く

に一般ならしむ。其の端由を詰るに及んで、舊

に依つて、箇の仲冬嚴寒、布衲の赫赤を出でず

久默斯要。この兩句は法華の

藥艸喻品に出づ、今言は者箇

天真の法なり、久默は機未だ

堪へざるを以ての故なり、速

説はいそいでとくなり、今ま

ではとかぬが、今日大衆の爲

に説き出すなり、虚堂は點滴

も施さずじやと。

復舉。冬夜の拈提なり。

曲祿。木のすちのまがつたの

に頓着せず。

無厭消老翁。五祖演をさすな

り、この胸欲な人と飽足なき

底なり。來處は菓子の出どこ

るなり。

一一知得。諸人に綿密に工夫

して契せよと、爲人の示しな

り、龜に入り細に入り、理に

入りて底を盡くせよとなり。

古德。疎山匡仁禪師なり。

冬來事。冬がきた、受用底如

何で御座らう。

京師大黃。現成直示の端的、

名古屋からは「宮重大根」、京

からは「みぶな」といふたやう

なもの、これは古德の境界を

知ると云ふ枕ことばなり。

金以石試。金は石でたゞいて

見れば、眞偽が分る、人はた

つた一言で到未到が知れる。

古人。疎山和尚が自分では金

壁歸ると、相如が和氏が壁を

得たので、秦の昭王が十五城

と易へてほしいとて、だんだ

ん交渉したが、うまくきりぬ

けて遂に秦王をたぶらかし壁

はやはり趙王のものにしたと

云ふ故事にたとへて云ふ、要

するに本分の處に疵もつかず

にと云ふの意なり。

不知身。身のむさくしいと

ころにあるを知らぬとなり、

「虚堂腕力さらに一轉あるを

知らしむ」と古人も抄してゐ

る。草裏は草庵位のことなり。

執事。執事は知事なり。

教化。托鉢なり。

家常添鉢。家常は平生のでき

あはせ、鉢盂を乞ふた。

門首。門前なり。

太無厭生。飽くことを知らぬ

なり。大ぐらひなどないふ。

閉却門。把住の處なり。

蠅見血。はへは臭きところに

よる、同機相求むるなり。

鶴捉鳩。くまたかばにらみす

ゑたらしてやる。

膠漆相投。ぶつたら一つにな

る、同類相感す。

拳來踢報。こぶしを以て打て

ば脚を以て踢る、拳は婆子、

踢は臨濟に比す、彼此勝負な

し、以上の四句は主客恰合の

義を述ぶるなり。

雖提協處。一等不淨潔、かへ

つてこれ好處」と、龍溪和上

は註してゐる、提撥はとつ

報恩 久默、斯要不務速説。
復た擧す、五祖演和尚、衆に示す、「但只菓子
を喫せよ、誰ぞ樹の曲祿を管せん。」師云く、
「者の無厭消の老翁、與麼に來處を知らざる
ことを得たり。報恩は菓子の貴賤、價數の高低、
也た諸人一一に知得せんことを要す。」
上堂、擧す、古德因に僧問ふ、「如何なるか是
れ冬來の事。」德云く、「京師に大黃を出す。」
師云く、「金は石を以て試み、人は言を以て試
む。古人自ら謂へり、壁を全うして歸ると、
知らず身の草裏に在ることを。」
執事を謝する上堂、一跳一躑、師子嘯呻
す、一新一舊、和氣春の如し。報恩 尺、寸
に如かず、羸ち得たり癡坐することを、何
ぞや家裏に人あり。

久默斯要。この兩句は法華の
藥艸喻品に出づ、今言は者箇
天真の法なり、久默は機未だ
堪へざるを以ての故なり、速
説はいそいでとくなり、今ま
ではとかぬが、今日大衆の爲
に説き出すなり、虚堂は點滴
も施さずじやと。
復舉。冬夜の拈提なり。
曲祿。木のすちのまがつたの
に頓着せず。
無厭消老翁。五祖演をさすな
り、この胸欲な人と飽足なき
底なり。來處は菓子の出どこ
るなり。
一一知得。諸人に綿密に工夫
して契せよと、爲人の示しな
り、龜に入り細に入り、理に
入りて底を盡くせよとなり。
古德。疎山匡仁禪師なり。
冬來事。冬がきた、受用底如
何で御座らう。
京師大黃。現成直示の端的、

一跳一躑。知事のはたらきを
云ふ。
師子嘯呻。師子のせのびする
を云ふ、勞倦をくつるぐなり
好き役位はとりまはしがよく
てこれにたとへる。
一新一舊。舊執事、新執事と
の交代は、和氣如春とてよく
和合すること、春のあたか
なるが如しと。
尺不如寸。その器各々用ふる
ところあり、尺は虚堂に、寸
は執事にたとへる。
羸得。もうけものなり、とり
えにはとなり、癡坐はむつと
すわりて、ぶじなのは何ぞや。
何家裏。よき執事があればこ
そ安心が出来るとなり。
京。ある抄には、東京であら
うと、西京は鎮州とはよほど
遠いと云ふこと、この因縁は
林才でなくして黃髮なりと云
ふ、この説可ならん。

上堂、擧す、臨濟、京に入り、教化して云く、
 家常添鉢。「一家の門首に到る。婆云く、「
 太無厭生。「濟云く、「飯も也た未だ得ず、何ぞ言
 ふ太無厭生と。」婆便ち門を閉却す。師云く、
 「蠅は血を見、鵲は鳩を捉ふ。拳し來れば
 踢をもつて報ず、膠漆相投す。提掇し難き
 處轉た風流。」
 天基節の上堂、「乾坤を定むるの句、今古
 共に遵ふ。虎兇を擒ふるの機、聖凡辨する
 こと莫し。此を以て無爲の化を助くるとき
 は、四海晏清に、此を以て無上の尊を視す
 るときは、萬邦璧を啣む、時聖誕に臨んで、
 預め珍筵を啓く、一句無私如何が舉似せ
 ん。」拄杖を卓して、「暗に消す溪畔の雪、輕
 く拆く壠頭の梅。」

①天基節。理宗誕生日、正月五日なり。
 ②定乾坤句。無明六賊を平げるなり、天下太平。
 ③今古共遵。天眞無私の句、故に久遠劫より久遠劫の後まで。
 ④擒虎兇機。兇は牛に似て一角青色、重きこと千斤、皮は堅厚にして鐵に製すべしと。
 ⑤聖凡莫辨。佛も衆生もつかはれぬ故なり、大活越格の機の故に。
 ⑥以此。乾坤を定むる等の語を云ふ。
 ⑦晏清。晏ははれて雲なきなり「をそき」なり、日はやく出づれば雨ふり、おそく出づればなり。
 ⑧無上之尊。天子なり。
 ⑨脚壁。歸降の義、歸降の義、後手にしはられて口にくむ、左傳に「僖公六年、許男

⑩面縛脚壁」とあり。
 ⑪預啓珍筵。御祈禱の法筵を啓建するなり。
 ⑫一句無私。無私に三あり、天私に覆ふこと無く、地私に載すること無く、日月私に照すること無しと、天子の御威徳をさす、天下版服する底の一句なり。
 ⑬暗消溪畔。雪は小人に比す。はや、いつのまにやら時節到來すれば、山々の雪もきえてと、現成底の無私を示すとこるを云ふ。
 ⑭輕析壠頭。梅は君王に比す、自然に壠は隴で、こだかき丘の梅がひらく、これ即ち皇化の無私を云ふ。
 ⑮徑山無準。徑山は支那杭州にあり、五山の二なり、無準は宋の名僧にして、名は師範、破菴先に嗣ぐ、佛鑑禪師と賜號をたもふ、日本でも東福開山

①徑山無準和尚至る上堂、擧す、
 東寺の師叔若し在さば、慧寂寂寞を致さず。「師云く、「仰山、水を飲んで地脈を貴ぶ。報恩、久貧乍ち富む、豈に敢て鬻に效はんや未だ免れず。一條の小路子を借つて行くことを。何が故ぞ。」拂子を撃つて、「花を移しては蝶の至るを兼ね、石を買つては雲の饒きことを得たり。」
 除夜小參、「去年の貧は未だこれ貧ならず、株を守つて兔を待つ。今年の貧は始めてこれ貧なり、賊を認めて子と爲す。去年の貧は卓錫の地なし、癩狗枯椿に繋ぐ。今年の貧は錐子も也たなし、臍に和して欸を納る。不與麼不與麼、三百六十日循環して已まず、不與麼不與麼、七十二氣候去つて復た還り來

聖一國師も、この師に參じて得法せられ、日本に來た佛光國師も鎌倉の圓覺を開きて請ぜられ、その法子法孫すこぶる多し。無準は虛堂の師叔なり。
 ②仰山。惠寂なり、潯山に嗣ぐ馬祖四世、虛堂も密菴四世なり。
 ③東寺。湖南、東寺の如會禪師は馬祖に嗣ぐ、師叔は法に於ては夫(をち)の意。
 ④慧寂。仰山みづから云ふ。不致寂寞。さびしくはあるまじいと。
 ⑤飲水地脈。仰山曾て東寺の法味をなめて、その所出の貴きことを知る。
 ⑥久貧乍當。今無準が來臨したが、急に富貴に法が繁昌するとなり。
 ⑦豈散效鬻。なには、かりなが

ら、仰山、小釋迦のまねを致すではござらぬ。仰山寂寞語なり。
 ⑧未免。まだのがればない。
 ⑨一條小路。やつぱりお影を蒙らねばならぬと、師叔の一路行なり、無準の一條の小路子を借りて我が法をとりひろめたきとなり。
 ⑩移花兼蝶。花と石は無準に比し、蝶は大衆に比す、雲は道能く潤澤に比す、兼は拜なり。
 ⑪買石雲饒。饒は多なり、おかげをかうむると云ふ、無準が御出なされたは、山門の光輝を添へるとの御馳走のため、この語を引き出せしなり、同門の和氣は花と蝶との如くなり。この詩は姚合が武功縣の詩の略なり、このあとに「自是心中樂、從他笑寂寥」の二句あり。
 ⑫去年貧。本則なり、香巖紫竹

る。○橋柱を抱いて澡洗する底、底に到ること知らず、○様に依つて葫蘆を畫く底、轉だ忘想を増す。○直饒○輓じて○結交頭に到るも、舊に依つて○眼晴烏律律。○報恩方便あること莫からん廢。○拄杖を卓して、○皇天苦屈。○

復た擧す、○疎山、衆に示す、「老僧○感通年已前、○法身邊の事を會得し、○感通年已後、○法身向上の事を會得す。」師云く、「古人○明に棧道を修し、暗に陳倉を渡る。○山僧○端平二年、此の山に住す、○長を牽いて短を補ふ、分に隨つて時を過す。○若しこれ法身邊の事ならば、○巢父牛に飲ひ許由耳を洗ふ。」○
○正旦上堂、○年年是れ好年、○日日是れ好日、甚としてか新あり舊ある。○若し箇の○隔手の句子を道ひ得ば、○爾に許す。○鐵輪峰頂に足を翹て、

ながら、歎は白狀すること、とりは致しませぬと云ふなり。

- 與廢々々。さうじやく、三百六十日。やれ、見おくれやれ、循環不已で、よるとなくひるとなく、去年も今年も、更に奇特玄妙はない。
- 不與廢。さうではない。
- 七十二氣候。五日を一候となす、一月に六候、十二月に合せて七十二熱候なり。やつぱり去復還來で、葉がおつるかと思へば、目つくるひをする環のはしなきが如し。
- 抱橋柱。古人の深致を缺くを云ふ、放手不得で、はしのはしらをだいて、みづあみするやうなものなりと、我と云ふものを抱いて、とらへて居てなり、底に到ることも知らずと。
- 依樣盡胡蘆。てほんによつて

第二の頌なり、師は毎句下語を附す。

- 守株待兔。愚癡の義なり、實に道貧ならずの故なり、故事あり、僥倖の心などを云ふ。
- 今年貧。無思想、無能見、無所見で、いつかなこと、びた一文もない。
- 認賊爲子。第六意識は賊なりこれを認めてはその家の財寶ついに成就せずと同じなり、破滅に及ぶ。
- 卓錫之地。きりをたつるところもなかつた。これは貧の極を云ふ、富者の田は阡陌に連る、佛法の知見はすつきりやむの意。
- 癩狗枯椿。かつたるびやうやみの犬の子を、かれくひになぐやうな不自由で、伎倆已に窮まることを云ふ。
- 今年貧人。能所泯滅なり。
- 和贓納款。贓は盜の物を持ち

大洋海底に沙を算ふことを。○然らずんば○野火焼けども盡さず、○春風吹いて又生す。

上堂、擧す、○藥山、衆に示す、「我に一句子あり、○特牛の兒を生ずるを待つて、○即ち汝に向つて道はん。」時に○僧あり、出でて云く、「○特牛、兒を生じ了れり也、○甚としてか道はざる。」○山、侍者燈を○將ち來れ」と喚ぶ、其の○僧便ち衆に歸す。○師云く、「○者の僧、衆に歸すること○太だ速やかにして、○藥山を蹉過す。」

上堂、○春風は刀の如く、○春雨は膏の如し。○
○衲僧門下、○何ぞ切切たることを用ひん。○
上堂、擧す、○資福因に僧問ふ、「○古人○拈椎豎拂、○意旨如何。」○福云く、「○古人○恁麼。」○僧再び問ふ、「○福便ち喝す。」○師云く、「○好大衆、○馬前の厮撲の如し、○者の僧、○若し恁麼ならば、○甚の資福

ふくべをかく、本形を見ず、自己の腕力なきを云ふ、だんく忘想をますだけなり。

- 輓。車輪の動くなり、ひつくるめての意。
- 結交頭。歳末年頭のつきあひ、死に至るまでなり。
- 眼晴烏律々。律々には烈々のごとし、高人の貌。今は只だ眼の黒貌を表す、まつくる眼玉が飛出ること。
- 皇天苦屈。時節の遷變は免れぬ、あれなげかはしく、むなしく一年を過ぐる故に、皇天を仰いで苦屈と叫ぶ、苦屈は大骨折損なり。
- 疎山。名は匡仁、洞山价に嗣ぐ、洞下の人。
- 感通。唐懿宗の年號。
- 法身邊事。悟道得力の時。
- 法身向上事。宗乘向上の大事を會得した時。
- 明修棧道。賊意人を欺くの計

略なり、ひるはかけはしの道を修理して、この道をとほるとみせかけて、夜は凍倉道を越ゆるとなり。

- 端平二年。理宗の年號。
- 牽長補短。制裁宜しき、従つて隨分過時、おれが器量相應にして暑いなら暑い、寒いなら寒いこと。
- 巢父飲牛。不欲聞の義なり、許由も巢父も堯の時の人、由は堯が天下を譲らんとし玉ふときいて、箕山の下に遁れ隠る、堯又召して九州の長とせんとするも、之を聞くことを欲せず、耳を颯水の濱にあらふ、時に巢父といふものあり、犢をひいて之に飲かはんと欲す、由が耳を洗ふときいて、吾が犢の口を汚すとて、上流に飲かはしむの故事。
- 年年是好年。去年も目出た、今年も目出た、吹毛吹

- ① けども入らずと。
- ② 隔手。碁の先手と同じ、新舊をへだつるの謂なり。
- ③ 鐵輪。輪は園と同じ、舊には鐵園山と云ふ、梵語には柘迦羅と云ふ、大洋海底に沙を算ふと、みな大活自在三昧なり、自在の用なり。
- ④ 野火燒。これは白樂天が艸の詩で「離々原上艸。一歲一枯榮。野火燒不盡。春風吹又生」これは隔手の句なり、外から燒いたのでは根が残る、もうきえたかと思へば、いかなやばり春風が吹くやうになれば、芽が生える、野火は舊年に、春風は新年に比せしなり。
- ⑤ 特牛。なうし「且つ道へ、聲前の一句か後句の一句か」と、或抄に出づ有僧。この俗樹の僧。
- ⑥ 將燈來。火を點じてきさまのつらをも一べん見てやらうと、便ち衆に歸すで、引つ込んでしもうた。
- ⑦ 太速。全體作用なり、しかし衆に

- 歸せずして、とくと藥山を蹉過させればよいこと、「未だ底裡を看盡さず」と龍溪も註してゐる。
- ⑧ 春風如刀。この兩句は楊岐の語なり、千紫萬紅、ふく風が萬卉を剪裁する故に、春雨は色つやを出して盛えさせ、成長をさすが、はるさめじや。
- ⑨ 衲僧門下。現成の端的、これが衲僧家の受用底なり、公案なり、何ぞ佛を求め祖を求めて、千辛萬苦することを用ひん。切々は憂勞なり、任運天真、何ぞかほをしかめることはないとなり。
- ⑩ 資福。名は如實、西塔穆に嗣ぐ、穆は仰山に嗣ぐ。
- ⑪ 古人。馬祖、百丈、滄仰等なり。
- ⑫ 拈椎豎拂。一境なり、説法のやうすなり、恁麼はまづかうである、再びくりかへし問ふたら、資福は喝とどなりつけた、金毛獅子の勢あり。
- ⑬ 好大衆。みんな見よ、こりゝしい

- 手きはじやないか、如馬前厮撲とは馬の前ですまうをとるやうなもの、たふれさへすれば取りくむことはいらぬ、「厮撲は資福と僧との手段の。間に髪と容れざる轉轡々地なるを云ふ」と或抄に出づ。
- ⑭ 若恁麼。この僧、初め問ふのみで休せば、資福の威勢もあるまいが、再問の上で、二人の作家手段が見えた、甚麼の資福を要することがあらん、古人の恁麼の如くにして頓脱せよとなり。
- ⑮ 重午上堂。五月五日午時を天中節と云ふ、五月を午の月となすを以て重午といふ。
- ⑯ 四百四病。四大の中、一つ損しても百一の病が起ると、四大みな損すれば四百四病一時に起る。
- ⑰ 毛病。人の毛穴は八萬四千あり、三毒の病に比す、瞋恚愚痴等。念起念滅、無量なるが故なり。善財童子が文殊に一枝艸を拈じて文殊に度與す、文殊提起して衆に示して

があらん。」

- ⑱ 重午上堂。人間の四百四病、毛病あり、唯だ毛病のみありて醫し難し。直饒善財手に信せて拈じ來るも、也た只だ是れ病に對して藥を與ふ。要且つ無病の藥を得ず、且つ作麼生か是れ無病の藥。「拄杖を卓して、「先づ口を忌まんことを要す。」
- ⑲ 上堂。涼颺乍ちに起つて、玉露初めて垂る。蟬は高梧に噪ぎ、蛩は古砌に吟ず。臨濟、黄檗の處に在つて、棒を喫する底の意旨を發揮す。誰か肯へて承當せん。直饒ひ言外に歸を知るも、也た是れ秤椎醋に蘸す。
- ⑳ 上堂。擧す、玄沙。鏡清に問ふて云く、一法を見ざる是れ大過患、汝道へ甚麼の法を見ざる。」清。露柱を指して云く、是れ者箇

- 云く「此の藥亦能く人を殺し、亦能く人を活す」と云ふ因縁を云ふて、信手拈來るものと引きて用ふるなり、無病の藥、悟なく迷なき底の無病の藥は得られぬ、要忌口と毒をくはぬやうにせよ、禪宗の毒たちは文字語言じやから、生死はこれ大病なり。
- ⑳ 涼颺乍起。すゞしき風がちよつくりおこりて、あはれもよほす秋の風。
- ㉑ 玉露初垂。じみじみ寒うて、まう露がおろる。
- ㉒ 蟬噪高梧。ひるはみいん／＼と蟬がたかい梧の木にないてゐる。
- ㉓ 蛩吟古砌。よるはきり／＼すがさびた敷き瓦の下などでなく、好箇清寒、白妙の時節なりこの四句は頭に顯露物々全眞のこと云ふ。
- ㉔ 喫棒底。臨濟が黄檗のところ

- で、三度棒を喫した意をいふ。風物が一々此意を發揮するなり。乃ち佛法の大意をば言外知歸。おれが云ふ言語を離れ切つて林才底の歸（おもむき）を知るも、也是秤椎蘸醋で、はかりの分銅の醋和會にしたやうなもの、沒滋味で口を下すところなげんと。
- ㉕ 上堂。この玄沙鏡清の因縁は古歌の意か「耳に見目にきくならば、うたがはじ、己れなりけり軒の玉水。」
- ㉖ 玄沙。名は師備雪峰に嗣ぐ。
- ㉗ 鏡清。名は道符、同じく雪峯に嗣ぐ。
- ㉘ 一法。心法なり。
- ㉙ 露柱。大黒柱なり。
- ㉚ 是者箇法。是れこれじやないかと、目のさきへひつ付けた。
- ㉛ 浙中清水。鏡清は即ち浙江の温州の人なればなり、おぬしが國の水や米は食ふのはかま

の法を見ざることを莫し麼。沙云く、「浙中の清水、白米は汝が喫するに従す、佛法は未だ未だ。師云く、「也た好し。莫是の兩字、會す麼。寒雲幽石を抱き、霜月清池を照す。」退院上堂、擧す、高亭江を隔て、徳山を見て便乃ち横越して去る。後來開法して徳山に承嗣す。師云く高亭、錐頭の利なるを見て、鑿頭の方なるを見ず、當時若し江を過ぎ來らば、豈に止だ住院のみならんや。人ありて會得せば拄杖子、兩手に分付せん。然らずんば、雲は嶺頭に在つて閑不徹、水は磧底に流れて太忙生。」

報恩語錄終

慶元府顯孝禪寺開山語錄

師入寺上堂、祝聖畢つて、次に拈香して、「律を革めて禪と爲す。功德主侍讀尙書の爲に、祿算を資陪し奉る。」師座に就く、乃ち云く「青蓮瞬視、微笑して歸を知る、遞代相承、滋蔓を圖り難し。直に得たり天回り地轉じ、虎嘯き龍吟じ、合浦珠還つて、雲山觀を改むることを。所以に道ふ、大人は大智を具し、大機は大用を得と、蜂房を翦つて獅子の窟と爲し、荆棘を變じて旃檀の林と作す。香風四に馳せ、狐兔跡を屏く、此を以て法幢を建て宗旨を立し、此を以て

はぬが、拈花微笑、的々相承の大事は、なか／＼じや、それで佛法は未だ未だ呵したるなり。莫是兩字、甚の好處があらんやなり。寒雲幽石、こは寒山詩の「庭際何所有、白雲抱幽石」の句を轉用したるものなり、にはの尤物がみどり子をだいて居るありさまなり。霜月清池、光と光が相映じて、歌にも詩にも述べられぬありさまなり。千古清風凛々地の境界じや、これは莫是の兩字の悠長を表示するなり。高亭、名は簡、徳山に嗣ぐ。高亭禪師は初め徳山の江岸に在つて坐するを見て、即ち江をへだて、問訊す、山扇を以て之を招く、師忽然契悟す横趁はうれしがつてよこぎりになつて往く、これを退院の事によせるなり、開法は住持

開堂なり。錐頭利。きりのさきのするどきとは契悟の處を云ふ、するどくきびよきところなり。鑿頭方。のみのさきの四角なるは、徳山に往かずして過ぎ去るを云ふ、今の退院のころへひやくすなり。豈止住院。當に人天の大依止とならんをしいとなり。兩毛分付。さつぱりをしげもなくくれてやると。雲在嶺頭。閑不徹は閑靜盡き絶えざるなり、大圓寂平等の大智でなくては、常寂光土安住はならぬ。水流磧底。よるひるちんつんちんつん流れて、ちつとしてはぬぬ、共に常無心の境界を云ふ、今進寺退院にたとへる。磧底は或は磧は潤、底は下に作る。

侍者無隱編

① 遞代相承。西天の四七、東土の二三と、今に至るまでをいふ。
② 難圖滋蔓。「しげりばびこる」。五家七宗と枝葉の續煩聯芳するをいふ。
③ 直得天回。存咄の力を以て、律を革め禪と爲すを云ふ、凡を轉じ聖と成すは虛堂の力なり。
④ 虎嘯龍吟。だん／＼、れきれきができて。
⑤ 合浦珠還。合浦は顯孝に、珠は師自らに比す、祖宗家の興復を表す、合浦は廣東廉州府にあり、珠多く産す、雲山改觀は寺の美麗に復するを云ふ。
⑥ 所以道。圓悟の語、もと雪豆の語なり。
⑦ 大人。大人は趙公に比す。
⑧ 大機。大機は虛堂に比す。
⑨ 蜂房。教律、小量小見の僧侶群居するは蜂の羣集するに似たり。
⑩ 獅子。虎や象の及ぶものでない格外のものの居處となつた。
⑪ 變荆棘。身うごきのならぬ又律僧の小見なり。
⑫ 旃檀之林。ふん／＼たる薫、旃檀の如き住み家となつた。
⑬ 香風四馳。禪風の四遠に達するなり。
⑭ 狐兔屏跡。獅子の威徳に恐れ、げけの皮の小根機はなれ

君親に報じ、聖化を助く。然も是の如くなりとも
雖も、且く君臣慶會の一句作麼生。拂子を撃
つて、「九萬里の鵬纔かに翼を展べ、一千年
の鶴便ち翱翔す。」

復た擧す、良遂座主、麻谷に參す。谷來
るを見て、鉏を携へて去つて艸を鉏く。次の
日又來る、谷便ち門を閉却す、遂此に因つて契
悟す。乃ち云く、「和尚、良遂を謾すること莫く
んば好し、若し來つて和尚に見えずんば、幾ん
ど十二分教に一生を誤却せ被る。」遂、房計
を將つて賣却して、一の罷講齋を作る、衆に
示して云く、「良遂が知處、諸人知らず、諸
人の知處、良遂惣に知る」と。師云く、「禮は
玉帛に非ざれば表れず、樂は鐘鼓に非ざれば傳
らず。是は則ち是、才を量つて職を補ふ。中

ぬやうになる、律小乗家に比
して狐兔といふ、
以此建法。此の禪林の虛堂は
見性成佛、直指人心の法幢、
五家七宗の大事なる宗旨を立
てる。幢はばたなり。
以此報君。侍讀尙書は此の功
徳を以て、天子や父母に報じ
天下太平の聖化を助けたてま
つる。
慶會。目出度い出合の一句子
は如何。
九萬里鵬。今上皇帝に比し奉
る、聖徳の翼をのぶると。
一千年鶴。侍讀尙書はおつと
まかせと、ふわりくとまふ、
二句は皇帝萬歳と群臣千秋を
頌したるもの也。
復擧。律を革めて禪と爲すか
ら引きだして。
良遂。麻谷實徹に嗣ぐ、谷は
馬祖に嗣ぐ。
座主。講教の者を高座の主と

云ふ。
拂鉏鉏。全體作用の直示な
り、次の日又來てきなふは不
機嫌なりと思ふて、不來見和
尙と一度兩回來て、あなたに
御目にかゝらなんだならばと
十二分教。一代時教を十二に
分ち、この十二分教につきま
はされて、一代をあやまるの
である。
房計。家具子なり、拂子見臺
皆賣つて。
罷講齋。講經をやめて一會の
齋供を營む、大衆を供養する
故に、罷講齋と云ふ。
良遂知處。水の冷暖、自知す
るが如くなり。
諸人知處。文字葛藤、一代藏
教。
禮玉帛。これは論語の陽貨篇
に出づ。玉帛で信不信が見え
る、悟は言説に非ざれば露は
れず、樂非三鐘鼓一而不レ傳、

に就いて些子の諍訛あり、只だ是れ人の檢點
して得出するなし。」

上堂、擧す、金牛和尚、毎日齋時に自ら
飯を將つて僧堂前に於て、舞を作して呵呵大笑
して道く、「菩薩子、喫飯來と。師云く、「等
しく是れ普同供養、誰か知る飯裏に沙あること
を。」

冬至上堂、僧問ふ、「羣陰消盡して一陽復た生
ず、衲僧家此に到つて如何が轉身せん。」師云
く、「老鼠牛角に入る。」僧云く、「和尚、忒殺だ
方便。」師云く、「仁者は之を見て之を仁と謂
ふ。」

乃ち擧す、趙州因に僧問ふ、「如何なるか是れ祖
師西來意。」州云く、「庭前の栢樹子。」僧云く、
「和尚、境を將つて人に示すこと莫れ。」州云く、

遂が知處等の言を見て、其の
契悟の實を知るで口で云ふた
斗り拍子がなくて、一曲や
らるゝものでない、曲調がと
とのはん。
是則是。良遂が悟處の如きは
是は則ち是なりだが、未だ分
外大達の人と稱するに足らず
その才器を量りて、その官職
を補ふ、是恰好の義、もとが
教者それ相應の悟りを仕て、
相應の受用する。
些子諍訛。些子は良遂の悟處
は諍訛なり、あやまりがある。
只是と特に一關を設けた。人
檢點得出ととくと、吟味する
ものがない。諍訛は失策とい
ふことばにあたる」と或る抄
にあり。
上堂。この話は碧岩の七十四
則にも出づ。
金牛。馬祖に嗣ぐ。
齋時。雲版がなると午食のと

き飯器を將て、僧堂の前に於
て舞をなすは、さあゝみな
さん御飯をあがれと、喜悅の
やうすゐあはして呵々大笑
す。からゝとあはくと満
悅の意をあらはす笑なり。無
我の笑なり。
菩薩子。菩薩は佛の下位に居
るものなれば、佛様の御子達
よと云ふ意。
喫飯來。來て御飯をおあがり
なさいと、雲水を好遇してあ
るのか、金牛和尚の得意であ
つた、受用親切の處なり。
等是普同。無差別で、法界の
有情に供養すると、誰知飯裏
有沙と金牛が手並は油斷はな
らぬ、もしも底に堅きものが
あつてはなり、上はやはらか
でも。
羣陰消盡。十月陰盛既に極ま
り、冬至はすなばち一陽また
地中に復生す。

「我れ境を將つて人に示さず。」僧云く、「如何なるか是れ祖師西來意。」州云く、「庭前の栢樹子。」師云く、「趙州己を割いて人を利す、明月夜光、多くは劍を按ずるに逢ふ。忽ち顯孝に問ふもの有り、「如何なるか是れ祖師西來意」と、只だ他に向つて道はん、山深うして過客なく、終日猿の啼くを聴くと。」

上堂、言ふて足るときは、終日言へども盡くに道なり、言ふて足らざるときは、終日言へども盡く物なり。且く道へ、道と物と是れ一か是れ二か、若し是れ一と道は、甚麼としてか、客山は高く主山は低き、若し是れ二と道は、甚麼としてか、天地一指萬物一馬なる。箇の裏緇素得出せば、爾に草鞋錢を還へさん。然らずんば、但だ來年蠶麥の熟することを願つ

轉身。二氣のかはるとき故に納僧にも出身の一路を得るでござる。
①老鼠牛角。あとへもさきへもゆきつまつた、伎倆のつきたところ、倒斷を見るより仕方なし。
②戒殺方便。いきつまつたところが、轉身の一路でござると早合點したので、戒殺は過分なこと、うまいことを仰せらるるとなり、方便がうまいとほめたるなり。
③仁者見之。これは見處の差別に任す、おぬしが見るところでは方便と思ふが、百姓は日に用ひて知らず、仁者はさうさう器量ほどにみて取つたとなり。
④庭前栢樹。にはのかしき、祖師已前の本分の事をさす、理路を着くべからず。
⑤將境示人。そのまゝにふれ

たけしきを以てなり。
⑥割已利人。賢愚因縁經に出る故事なり、飢人に我が肉を割いてくはせた様なものなりあまり慈悲過ぎたと云ふこと
⑦明月夜光。不知音の義。いふ意は趙州深切に人の爲にすと雖も、此の僧猶ほ境色の會を作す、好心好報を得ずじや、又くらがよりひよつと出せばきもなつぷすと。
⑧山深過客。此の顯孝寺は出て來る御客もない、山おくなればじや。
⑨終日猿啼。一日中さるがないてゐる、虚堂がこの二句は栢樹子と一般か兩般か」と或る抄に書いてある。
⑩言而足。莊子の則陽篇の語、禪宗の見解にすれば、己了底は「えへん」と云ふても三世古今威音已前已後、あらゆる佛教祖録一毛ものこさぬ、未了

て、羅喉羅兒に一文を與へよ。

上堂、杜宇不如歸、竹雞泥滑滑、深山巖崖の中、誰か道ふ佛法なしと。佛法あり、衲僧只だ三隻の襪あり。」
上堂、舉す、長髭、廊下にして僧の問訊するを見る。髭云く、「歩歩是れ汝が證明の處還つて知る麼。」僧云く、「知らず。」髭云く、「頼に汝知らず、若し知らば我れ甚麼を作すにか堪へん。」僧便ち禮拜す。師云く、「長髭釣を垂る、綆短うして深泉に構らず、者の僧放乖す、好し連腮に一掌を與るに。作家分上、鳳林吃之。」
上堂、「渾て今日に似たらば、達磨大師、多少の光彩をか添へん、更に若し踏歩向前せば便ち不是了也。」

底のものは足らざるときは、物みな是非憎愛となる、道は精なり、物は粗なり非言非默の中、自ら至極の義あり」と或注に見ゆ。
①道與物。事と理と也。
②客山高。偏位で、むかうの山は高いが、こちらの山はひくい、差別の義を表す。尋常には主山は高く、安山は低しと云ふを、今文を新にす。
③天地一指。これも正位で、莊子の齊物篇に出づる語なり、彼我是非、分別心を以ての故に、上だの下だの、山の川の猫の杓子のと云ふが、一指は箇の眞性。一馬も箇の眞性。緇素。僧俗が得失、言ふに足ると足らざると。
④爾草鞋錢。空しく行脚せずと草鞋錢を還し功に酬ゆること
⑤來年蠶麥。これは古人も、佛法の資糧を成せんことを願ふ

に比す。
⑥羅喉羅兒。乞食のことなり、梵語には阿修羅、秦には覆障と云ふ、月明を障ふるなり、又饑鬼の類なり、日本の厄はらひのこと、春ごまのやうなもの、福の神を持ちあるき、家々豊年の御祈禱をするものなり、今は學者のうか／＼と諸方に一言半句を求めまはるをいふ。
⑦杜宇不如歸。「ほぞんかけたか」。
⑧竹雞泥。水雞の木魚たゞくやうになく、夢窓國師の歌に、「月ばさす竹雞(くひな)はたゞく横の戸を、主がほにてあぐる山風。」
⑨深山巖崖。人跡不到の處、水鳥樹林念佛念法の義なり佛法なしと道ふべからず。
⑩三隻襪。一足半、かたあしかたあしの足袋なり、なんの用

上堂、顯孝力を盡せども、只だ中下の機の爲にし得たり、要且つ向上の機の爲にし得ず。拄杖子、覺えず出で來つて、冷笑して道く、「大丈夫の漢、等しくこれ人の爲にす、何ぞ他をして籠頭を脱し、角駄を卸し、白衣の拜相の如く一般ならしめざる、甚麼の向上向下とか説かん。」山僧道く、「拄杖子、爾果然として作家、我れ爾に如かず。」

除夜小參、一年去り年來つて、新を迎へ舊を送る。山僧諸人を謾すること一點も得ず、大盡三十日、小盡二十九、諸人山僧を謾すること一點も得じ、既に賓主相謾せざることを知る、彼此飯を喫して、須らく噎ぶことを論ずべし。衲僧家、各一片の田地あり、年頭より年尾に至るまで、裡許に在つて活計を作す。只だ是

れ踏不着、縦饒踏得著するも己靈を埋没し、先聖に孤負す。且く道へ、是れ甚麼の田地ぞ、拂子を撃つて、「春來艸自生す。」正旦上堂、拄杖を拈じて、「新年頭の佛法を道著することを得ず、禪和家、面壁地なり。那裡か肯て時に隨ひ節を逐はん。顯孝從來柳下惠、拄杖を卓して、「伏して惟れば、狸奴白牯、茲を履んで去る。各各水草常に甘うして、背長く毛瘦することを致すことなし。」上堂、擧す、大愚歸宗を辭す、宗云く、「爾甚れの處に向つてか去る。」愚云く、「諸方に五味の禪を學び去らん。」宗云く、「我が者裡、一味の禪あり、甚としてか學びざる。」愚云く、「如何なるか是れ和尚一味の禪。」宗便ち打す、愚云く、

にもたゝぬ、此は衲僧が受用の活處ぞ。
①長髭。名は曠、石頭に嗣ぐ。
②廊下。諸堂への通りみちの廊下。
③訊問。揖して、禮を展ぶるを問訊といふ、掌を合して少し頭を下ぐるなり、やあこきげんさまとの意。
④歩み。一あしづが證明、諸佛の證據立ち玉ふ、隻手の音をきき音聲を止めてゐるのじや、これを知りてゐるか。
⑤頼汝不知。そちは知らぬでさばひひ、もし知りたらば山僧が今垂手もあだ事で、何の用にも立つまいとなり。
⑥垂釣。大きな獲つるばつたが、繩(つるべなば)が短くて、そのそこまでも構らず、とどかぬ。
⑦放乖。僧の禮拜のところをいふ、放乖は放過でやりすこし

た、馬鹿利口といふこと、連腮は頰及び腮を掌する、主賓共に罪案を結するなり。
⑧作家分上。爲人底、宗師分上の長髭。
⑨鳳林叱之。方語杜撰の義、又胡亂義、これは東坡が弟の蘇子由を試みて、多聞にほころを誡めたる語なりといふ。
⑩渾似今日。休歇無事にして、當處湛然として、他日の走作に似ず、二六時中四威儀の中も、是の如く服横鼻直ならばなり。
⑪多少光彩。今日の如くならば達磨の威光も多少は増さうものな。
⑫更若踏歩。それならば、この上へ猶ほも進まんとしたらば不是にし了れりて、それでもないことにしてしまふ。
⑬要且。どうしてもまあなり。
⑭拄杖子。禪宗向上の大事に比

してもち出す。これなんのかたちかと。
①冷笑。「あざわらぶ」、欺き笑ふなり、これは虚堂和尚が笑ふなり。
②大丈夫漢。男たらんものはなり。
③等是。貴賤男女の隔てなくなり。
④他。大衆學者の爲めに。
⑤脱籠頭。人馬の口にはめるがごをいふ。ともある馬のおもがいなはづしてなり。
⑥卸角駄。牛の重荷をおろしたごとく、角に一種の装置するものを角駄ともいふ。
⑦白衣拜相。凡を轉じて聖と成すの義なり、無位無官のものが、天子の卿相大臣になるやうなもの、煩惱の中で、菩薩の頂上に上るやうなものなり。
⑧甚麼向上。八歳の龍女や廣額やが、成佛するじやもの。

①作家。俗利の漢をいふ、「しごとし」、又はさかしきやりての意に用ふ。
②我不如爾。向上向下の異はない、自己返照して見よなり。
③謾不得。馬鹿にすることならぬ、一點つめのあかほどもなり。
④大盡小盡。除夜の現成事を用ふ。
⑤賓主。賓は諸人、主は虚堂、喫飯。此れは古來禪林の語にて、驗崖手を撒する底にして、謾とも不謾ともいふべきなり。
⑥噎。食ふさかつて氣通ぜざるなり、これは悟時の端的をいふ。
⑦一片田地。本分一片の田地をもちながら、裡許に在り、本分田地の中に活計(くらし)を食ふたり飲んだりして居る。
⑧踏不着。諸人がふみいたることとは六づかしい。

「我れ會せり。」宗云く、「道ひ來れ看ん。」愚、口を開かんと擬す、宗又打す。師云く、「是は則ち是、青は藍より出で、藍よりも青し、若し其れ鋒を交ふるの際ならば、氷は水より生じて、水よりも寒しといふは、則ち未可なり。」

解夏上堂、「十五日已前は休す、十五日已後は住す、正當十五日、休するも也た休し得ず。住するも也た住し得ず。何が故ぞ、況んや諸人九十日の内各各所證の法門、未だ嘗て一一に引驗せざるをや。」拄杖を以て、畫一畫して過す。上堂、擧す、雲門因に僧問ふ、「初秋夏末、前程に忽ち人あつて問はゞ、未審し他に對して甚麼とか道はん。」門云く、「大衆、退後、僧云く、過甚麼の處にか在る。」門云く、「我れに九十日の飯錢を還し來れ。」師云く、「者の僧は是

① 踏得著。千に一つも隻手の聲でもきいたならばなり。
② 埋没已靈。もつたない、大切な、自己の彌陀を埋んでしもうて。
③ 先聖。釋迦達磨の本意にそむり。

④ 春來艸。向上の無功用の田地なり、されども春がくれば、げんげもよめなも蓬もあやめも、しぜん生える「虚堂がこゝへもつてきたは、東山下の暗號令がある」と珠長老はいふてある「當體即是のところじや」と或抄にあり。
⑤ 道著。心もことばも及ばぬ、目出たい。
⑥ 禪和家。和は和合の義、大衆いづれも。
⑦ 面壁々地。壁は口を閉ぢ、つむぐなり、「いかめしいつらつき」。口さきをとがらして。
⑧ 那裡肯。時節に拘はらず、時

に隨ひ、元日じや逐節大年じやと一向かまはぬ。
⑨ 柳下惠。魯の大夫なり、これまで虚堂は柳下惠のやうに可もなく不可もなし、爾は爾たり、我は我たり。温和簡漫にして好惡取捨の相なき此の如しと、この顯孝人情ばかまはぬ。
⑩ 狸奴白牯。狸奴は猫、白牯は牛也、彌太も平太も同じ。
⑪ 履茲而去。主丈子なり。
⑫ 各々水艸。水牯牛に付いてこれなにもあぢないものはない。
⑬ 背長毛瘦。ひだるい目に逢ふことがない、故にこれは祝語なり。
⑭ 大愚。歸宗常に嗣ぐ、常は馬祖に嗣ぐ。
⑮ 五味禪。五味は酸、鹹、甘、苦、辛、差別の法水法味を表す。
⑯ 是則是。我れ會せり也といふ

れ 王小波が艸鞋なり、雲門は 縦奪觀んべしと雖も、未だ免れず 暗中に箭に著ることを。」上堂、山僧は恰も 璞を抱く者に似たり、但だ風に臨んで涕泣することを缺く。世を擧つて人なしとは道はゞ、只だ是れ可惜許。」

上堂、擧す、玄沙、衆に示す、「諸方盡く道ふ、接物利生と。忽ち三種病人に遇はゞ、作麼生か接せん。患盲の者、拈椎豎拂他又見じ患聾の者、語言三昧他又聞かじ、患啞の者、伊をして説かしむるとも又説くこと得ず、若し接すること得ずんば、佛法靈驗なけん。師云く、「大凡 病豈に三種に止まらんや、玄沙人の接する能はざらんことを恐れ、又佛法に靈驗なきことを憂ふ。老僧眉毛を惜まず、試に此の三種の人を接せん看よ。」拄杖を卓して、盲聾瘖

① 其交鋒。「一場の法戦の際なれば、先達は先達、飯宗にすくれた大愚といはゞ、そりやさうでない、やはり未可なりで、大愚は敵勝の作なきことを」と龍溪も注してある、交鋒は「きりむすぶ」こと、一問一答の機鋒なり。
② 十五日已前。解夏の日の前後に寄せて、修行の因位果位を示す、休は萬機休罷、是れは則ち金剛無間道、過去のことについてばと見てよい。
③ 十五日已後。住は究竟安住、是れ則ち後智解脱道、未來のことについてのことに見てよい。
④ 正當十五日。前でもなし後でもなし、ちやうど今日なり、心頭がさわがしくて、これは

たも尤もなり、大愚は親にまさつてあるやうに見えるとなり。
⑤ 其交鋒。「一場の法戦の際なれば、先達は先達、飯宗にすくれた大愚といはゞ、そりやさうでない、やはり未可なりで、大愚は敵勝の作なきことを」と龍溪も注してある、交鋒は「きりむすぶ」こと、一問一答の機鋒なり。
⑥ 十五日已前。解夏の日の前後に寄せて、修行の因位果位を示す、休は萬機休罷、是れは則ち金剛無間道、過去のことについてばと見てよい。
⑦ 十五日已後。住は究竟安住、是れ則ち後智解脱道、未來のことについてのことに見てよい。
⑧ 正當十五日。前でもなし後でもなし、ちやうど今日なり、心頭がさわがしくて、これは

啞底、近前し來れ。又拄杖を卓して、老僧に孤負することを得ず、更に若し會せずんば、又爾が與に箇の註脚を下さん。拄杖を卓して、「平生肝膽人に向つて傾く、相識は渾て不相識の如し。」

上堂「尋常 口を開著して合すること得ざることは、蓋し語言の間に在らざればなり。若し語言に涉らば、摩竭提國遂に虚設と成らん、畢竟那裏に在る。」拄杖を卓して、「巡人犯夜。」上堂「常年の九日は、籬下の黄花榮然として目に在り、今秋早甚たしうして未だ一枝をも見ず。頼に 汾陽老人に、一句子あることを得たり。妨げず時に應じ節に及すことを。且く道へ、これ 那一句ぞ、 喝一喝。」

顯孝寺語錄 終

ざりますか。
我九十日。是奪なり、答話もえ解せず、むだぐひしたと云ふか。
玉小波。このやつは宋太宗淳化四年春二月青城の民なり、今時の社會主義者なり、財産平均を企てしもの、貧富均一を主張せしものなり、やつかいものなりといふこと。
縦奪可觀。さすがの雲門故、見事なものだけれども。
暗中著箭。おぼえず者の僧に見透さるとなり。流れ箭のこゝとを轉用したるなり。
抱璞者。これは韓非子の和氏篇に、楚人和氏、玉璞を得て之を厲王に獻するの故事による、璞は荒玉にて、未だ加工ざる玉なり、但缺臨風涕泣、あしきられればじや、悲しや〜と泣きはせぬ、舉世千人萬人の内、一人も無し、これが玉であると知るものがないとは、いはぬ、石じやなど、此の大事を知つたものはないではないけれども、只だ意到句到を盡したものが無い、只だ是可惜許、(許は助語)で「まだなか〜じや」と残念々々「是は深く學者の法寶の所在を知るもの少れなるを嘆する也」と龍溪は註してある、可惜許は唐宋時代の俗語である、「むしむべきかな」とみてもよい。
玄沙。晩年僧で、年三十で僧となつて、之は南臺江の漁夫であつた、この話は玄沙三種病人とて、碧岩第八十八則にも出てゐる。
諸方。あちらの老和尚も、こちらの老禪師も。
接物利生。人物に接し、衆生を利益するにて、こんにちの布教傳道なり。
三種病人。めくらでつんぼで

をしでと云ふ人なり、三とは盲聾啞を兼ねわづらふ人で、三人の病人ではない、作廢生か接せん、どう引き入れたものかと。
拈椎豎拂。これは禪宗師家の思想を表現するありさまなり別に椎を打ち拂子を豎起するのではない、他又不見で、いかな〜見えはせぬ。
語言三昧。三昧は梵語で、譯すれば一心不亂のこと、雀のやうにしやべり〜つゞけて見たところ、又聞かじで、かなつんぼで一つもきこえぬ。
教伊說。さあ云ふて見よと云ふても、又說不得で、舌がまはらぬ故え説かぬと。
若接不得。もしか、このやうなやつかいものを濟度をせぬようでは佛法無靈驗なり、何の利益、れうちがあらうぞと、今時の金のあるものだけだすけ、貧乏人を見かざる不届ものには、よき公案なり。
病豈三種。これは虛堂和尚、病は中々三種だけではない、玄沙

は他の老宿どもが接物利生をよくせぬを恐れ、又佛法にれうちがなきことを憂ふるが、老僧は不惜眉毛じや、しんないありきりほりだして試めにし、此の三種の人をたすけてみるべし、近前來は「ちかうひざもとへよれ」孤負は「そむくなかれ」下註脚は「はしきいひわけか言ふてやらう」なり。
平生肝膽。つねよりの密事、はらのそのこのこんたんも、其の方たちになみなくさつぱりまき出してしまつた。
相識渾。至極のなじみあひは出合ふたところ、なにごともない、不見不開のやうなもので、識と不識とは一如なりと。
開著口。著は助語なり、人の爲に朝から晩まで澤山さうに口をきけど、口をふさぐこともできぬのは、不レ在ニ乎語言之間で、終日言ふて未だ會て言はずにて、いくらほざいても、眞の妙道は。文字や、ことばのうちには在らざればなり。
若涉語言。萬一にも、ことばの上にあるものならばと。
摩竭陀國。摩竭に室を掩ふの事は

報恩錄にあり、虚設はむだごとと云ふものなり、畢竟即ちとつくと算用仕つめたところ、妙道は那裏即ちどこにあるか。
巡人犯夜。夜まはりをつけてはけは却つてそれが夜盜をなすやつなりと、この言句は東山下の暗號なり、これは虛堂和尚が自らを譴責するの語。
常年九日。毎年九重陽にはなり、黄花は菊のこと。燦然はてら〜うつくしいこと。今秋は日やけして、まだ一本もさかぬ。この早は佛法のおとろへてゐるにたとへたるなり。
頼には「かゝつたことには」なり。
汾陽老人。善照禪師のこと、一句子ありは「三玄三要の總頌に云く「三玄三要事難レ分、得意忘レ言道易レ親、一句明明該ニ萬象、一重陽九日菊花新。」
不妨應時。一枝なくてもよい、一句子でちやうど時節をえて、目出たく節句をする。
那一句。龍溪は注して「説破せざる處却つて親切あり」と。
喝一喝。やいみだか知つたかよ。

慶元府瑞巖開善禪寺語錄

國譯虛堂和尚語錄 卷一

侍者 梵閱編

師入寺、山門を指して、「出出入入、汝諸人と者の一路子を共にする非ずといふことなし、甚に因つてか門限の高低を知らざる。喝一喝。」

方丈に據る、「爐鑪の所、鈍鐵尤も多し、阿那箇か鉗錘を受けざる。」拄杖を以て畫して云く、「者邊に過ぎて立て。」

法座を指して、「説は飢を建つが如く、坐は山嶽の如し。」下きに就いて高きを平ぐ、牙を咬むこと爆爆たり。」

師、拈香祝聖畢つて、衣を斂め座に就い

① 瑞巖山。浙江の寧波府定海縣東南九十里に在り、上に青松峰あり。

② 梵閱。鏡潭と號す、虛堂門下なり。

③ 山門。三解脱門と云ふ、空、無相、無作を云ふ、吾が宗進院の人、必ず山門を指して法語あり、みな門の事に托して佛事を作す。

④ 出出入入。出でたり、入つたり、行つたり、來たり、おれもそちらもわき路はない、一切の賢聖、八千の夜叉、地獄、天堂、みな此の一路なり。

⑤ 門限。限は「しきみ」高いの低いのとありさまを知らぬ、喝

一喝と直に參取すべし。

⑥ 據方丈。室中の間なり。

⑦ 爐鑪。叢林に比す、鈍鐵は學者に比す。

⑧ 阿那箇。どれでも鉗錘を受けぬものはない、飽參の士を云ふ。

⑨ 過者邊立。鉗錘にあづからぬ眞箇のものをさして云ふ、立は住立せよとなり。

⑩ 指法座。法座の座なり、法堂の須彌壇をさして云ふ。

⑪ 説如建鉢。法座の法の字を形容して説と云ふ、たとひ富樓那も及ばぬ、建はくつかへすこと、「こぼす」こと、鉢は水かめである、その所説は此の如

て云く、「離婁力を極む、白浪滔天、罔象無

心神珠掌に歷、化儀に涉らず如何が相見せん。」僧あり出で、便ち喝す、師亦喝す。僧一圓相を打して便ち禮拜す、師云く、「恠力亂神。」

乃ち云く、「大道只だ目前に在り、要且つ目前に觀がたし。大道の眞體を識らんと欲せば、聲色言語を離れず。與麼の説話、大に草を折つて虚空を量るに似たり。衲僧家、諸聖を求めず己靈を重んぜず、眉毛を脛上すれば、早く已に蹉過す、甚麼の口頭聲色とか説か

ん。野狂鳴獅子吼、三千里外敢て眸を擡げず、直饒ひ臨濟德山棒喝交馳するも、且く請ふ之を束ねて高く聞け。何が故ぞ。」拂子を撃つて、「金革聲を銷して自從後、惟だ聽く堯

民擊壤の歌。」

く凝滞なきことを表す。

① 坐如山嶽。法座の座を形容して坐と云ふ、須彌高廣、安住不動で、阿修羅も動すこと能はず。

② 就下平高。凡夫の爲めの故に衆生の根機に上下あればなり差別の見を治して、中道に歸せしむることは、宗師家、説法爲人の體裁なり。

③ 咬牙爆々。はがみをならしてばりくすること、人を罵ること、火急にして近づくべからず。

④ 師拈香。此れは鈞語なり。斂衣。法衣をかきをさめて、法座に就いて云くなり。

⑤ 離婁極力。目のよく見ゆるにたとふ、智情を以て大道を求めば、白浪が天にはびこるやうに六づかしいとなり。

⑥ 罔象。かげぼうしのことなり寓して人の名となす、無心なり

ものなり、いつのまにか、神珠は掌に歷ると、神珠が道なり、聰明言辨はみな以て道を得べからず、無心にして後に得るなり。

⑦ 不涉化儀。此の端的はどう方便にわたらず眞箇の相見なり如何が相見せんやと。

⑧ 恠力亂神。論語に、君子は語らず、恠力亂神をなり、そんなあやしいことは話にもならぬ。

⑨ 乃云。提綱なり。大道眞體。大道の眞實本體。この語は誌公の大乗の讚にある語なり。

⑩ 與麼説話。これより以下は師の辭なり。折艸虚空。蓬一本をふりまはして、何百萬里とある、虚空を計るやうな馬鹿なせんさくなり。

⑪ 不求諸聖。石頭和尚の語なり

復た擧す、^①本朝の太宗皇帝、^②寶鉢を托起して、^③王隨相公に問ふ、「^④既に是れ大庾嶺頭提不起、甚に因つて寡人の手裡に在る。」相公對ふることなし。後來、^⑤慈明代つて云く、「^⑥陛下腕頭力ありと。師云く、「^⑦君臣慶會、日のごとくに照し天のごとくに臨む。若し是れ大庾嶺頭底ならば、^⑧物は有主に歸す。」
 當晚小參、僧問ふ、「^⑨承り聞く、和尚言へることあり、^⑩祈僧家、諸聖を求めず、己靈を重んぜずと、還つて、^⑪端的なりや也た無や。」師云く、「^⑫聽教あれ分曉なること。」僧云く、「^⑬只だ三條椽下の如きんば、甚麼邊の事をか明む。」師云く、「^⑭兩箇の石人相耳語す。」僧云く、「^⑮與麼ならば則ち徳山臨濟も、^⑯倒退三千。」師云く、「^⑰也た恐る此の如くならんことを。」僧云く、「^⑱人天交

① 眨上眉毛。眨は目を動す、「まじろぐ」なり、まゆ毛をうごかせば千里萬里くひちがふ、蹉過するなり。
 ② 口頭聲色。これは「口頭の聲色と點するは非なり、口頭聲色と讀むべし」との説あり。
 ③ 野狂鳴。こんく、うまく云ふてもなり、横説豎説、大活自在の義。
 ④ 三千里外。佛祖出で來つて大光明を放つとも、敢不擡眸なり、ふり返りて見もせぬと。
 ⑤ 棒喝交馳。たとひ臨濟や徳山が出合つて、棒する喝するしても、まあちよつど、どうか之を束れて一束にして高く聞け、天下太平を致せと。
 ⑥ 金革銷聲。金革は軍器なり、金はどら、革は大鼓、陳平、樊噲が出で來つて、うめめくと一聲にしかると。
 ⑦ 惟聽堯民。堯の民は天下平和

百姓無事ゆゑ、つちくれなうつて、哺を含み、腹を鼓し、太平を謳歌した、今は入寺開堂故に、言句や棒喝はよしにして、無爲の視を致すなり。
 ⑧ 復擧。拈提なり。
 ⑨ 本朝太宗。趙宋第二代主、諱は昚、名は光義。
 ⑩ 托起寶鉢。寶鉢は梵には鉢多羅、此には應器と云ふ、今略して鉢と云ふ、托起は手のひらへ捧げ上げてなり。
 ⑪ 王隨相公。王隨丞相は嘗て首山省念禪師に參じて、言外の旨を得。
 ⑫ 既是大庾。もはや大庾嶺で、明上座と云ふが六祖大師と争ふて力をつくしても、もちあぐることをえせぬになり、大庾嶺は南安府にあり、この事は六祖壇經に詳なり。甚に因つては「どういふわけだ」、寡人乃ちおれの手のうちに在る

接兩得相見の一句、作麼生。師云く、「^①大家者裡に在り。」僧云く、「^②但だ、^③大衆の觀光するのみに非ず、^④學人小出大遇。」師云く、「^⑤偷心の鬼子。」僧禮拜。
 師拄杖を拈じて云く、「^⑥若し、^⑦是れ我が虎丘ならば、^⑧直下に積世の富兒の一錢も亂りに使はざるが如くにして、^⑨箇箇生々獰獰、^⑩局局促促たり。只だ家法太だ嚴なるに因つて、^⑪以て門庭の冷落を致す。山僧、^⑫沒興にして也た者の保社に撞入す、^⑬人に喚んで松源の嫡孫と作さる。」^⑭謂つべし浪りに其の名を得たりと。今夜已に展ぶるをば縮めず、^⑮未だ免れず人の眼を著くるなき處に向つて、^⑯一星子を拈出して、^⑰也た諸人をして、^⑱十二峯頭に元靈芝仙艸ありと道ふことを知らしむ。」拄杖を卓す。

ぞと、寡人は天子が謙損して自を稱せらるゝなり、徳すくなしとのことか、されども王隨相公ばをしいことには、御對へをなにもせざりき。
 ① 慈明代云。よほど後になりてから慈明和尚が王隨に代りて云ふのにはなり。
 ② 陛下腕頭。陛下出身の一路ありて、うでさき御力がありますと、白雲端は一腕頭の力が天下に主たる力か」と拈じてをらるる。
 ③ 君臣慶會。太宗と王隨との目出たい出合ひ、徳光は日の如く照し、天の如く臨みて、四海に被らしむとなり。
 ④ 物歸有主。大庾嶺頭底ならば乃ち鉢盂のことならば、物歸有主で、君臣の義此くの如し、若し是れ祖宗下の事ならば、人人本具なり、なほ物のその主に歸して、奪ふべからざる

が如し、太宗を指して祝し奉るの意なるが、底意は虛堂にかゝる。
 ① 端的也無。なんと、これが眞にたしかなことござるかと
 ② 聽教分曉。まゝ、大だ分明に會取せよとなり。
 ③ 三條椽下。三條椽、七尺單とは僧堂の座位の區別なり、言ふは、もしかやうならば僧堂裏に工夫坐禪して、甚麼事を爲すとしたり、椽下は一人が居る床には、たるき三本うつから云ふたるなり、明むといふて、諸聖を求めず、己靈を重んぜずと、これを明めるなり。
 ④ 兩箇石人。石佛が二人集つてひそく、ばなしたしてある、堂裏の事、外人の知ることな許さずとなり。
 ⑤ 倒退三千。尻をかすみにおつばしらすものなと。
 ⑥ 也恐如此。わるくしたら、そ

復た擧す、感首座、法昌に問ふ、「昔日北禪、露地の白牛を烹る、今夜分歲何の施設かある。」昌云く、「臘雪天に連つて白く、春風戸に逼つて寒し。」感云く、「大衆箇の甚麼をか喫せん。」昌云く、「嫌ふこと莫れ冷淡にして滋味なきことを。」一飽能く萬劫の飢を消す。」感云く、「未審し是れ甚麼人か置辦する。」昌云く、「無慚愧の漢、來處も也た知らず。」師云く、「感首座、當時若し一飽能く萬劫の飢を消すといふ處に向つて箇の和尚の供養を謝すと道はゞ、法昌の貧を抜いて富と做すことを管取せん。」

元正上堂、「嘉熙運を紀め、淳祐圖を開く。曆數既に長じ、指を倒して數へ難し。且く道へ、今日是れ甚麼の日ぞ。」拄杖を卓して、辛丑の歳鳥飛兎走る。」

① 人天交接。これは法華の授記品に出である文、人間天上、一所に出合ふたる端的なり。

② 大家者裡。大家はれき、衆人同會、別處に在らず、天堂地獄もみな者裡に在り。

③ 大衆觀光。大衆が法席の光輝を觀光するのみではない。

④ 學人小出。私ちよつと出まして、大いに利益を得ましたとなり。

⑤ 偷心鬼子。てくせのわるいやつなり、猶ほ法見を存すと、僧の賊精を抑へるだが、僧はあり難うと禮拜した。

⑥ 師拈主丈。以下提綱なり、凡そ上堂は放膽、故に單に宗綱を提ぐ、小參は小心、故に細に家事を談ず、斯の文に據りて知るべし。

⑦ 是我虎丘。虎丘紹隆禪師は圓

悟に嗣ぐ、大惠は放行を専らにす、虎丘は把住を専らにす、直下はすぐさま、積世の富兒は累世代の譲りの金もち、一錢不亂使一は把住綿蜜の義、生生孿々はいきゝかひゝゝしく快活惡辣の手段、近かふりがたし、局局促促は鹹小のこと、「ちゞまりちいさくなる」こと、ものごと規矩たゞしくなり、只因一家法太嚴一は家らが餘りきびしいからなり、以致三門庭冷落一は門風が峻險なるにより、衲子共があまりよかつぬからさびしいと。

⑧ 沒興。不意のこと、存じよらぬ、也撞二入者保社一は保は堡と同じ、小城なり、この虎丘下の中間入りをする、撞入は飛び入るなり、保は保伍なり、同社を云ふ。

⑨ 可謂浪得。さうはいへらちも

天基節上堂、「河、圖を出し、洛、書を出す。雷霆の變化、鬼神も其の由を測ること莫し。且く道へ、是れ何の祥瑞ぞ。」良久して、「聖人復た生ず。」

上堂、擧す、趙州因に僧問ふ、「至道無難、唯嫌、揀擇、これ時の人の窠窟なりや否や。」州云く、「曾て人ありて我に問ふ、直に得たり五年分疎不下なることを。」師云く、「大海を觀る者には、水を爲し難し、聖人の門に遊ぶ者には、言を爲し難し。者の僧に因らずんば、趙州老子を見難からん。」

維那を謝する上堂、「古佛只だ椎頭に在り、毎日呼び來し喚び去る。惟だ綱令の清嚴なるのみに非ず、下下緇素を分たんことを要す。興化當年、錯つて用心す、月の明かなることは

ない、今夜已展不縮はまさに大に開展すべし、堪忍袋の緒がきれた、無三人著眼處一はまだのがれこばない、釋迦と達磨もめをつけぬ測り難くないところに向つて、一星子は些少の義、宗上向乗の一星子、すこしばかりを拈提してとなり。

⑩ 十二峯頭。此れ箇の瑞岩山の十二峯にひとりたち、靈芝不死の草、仙艸あり知らしむと、拄杖を卓すと、これで眞箇の靈芝仙艸を指示す、これは瑞岩の境致に託して、本分の事を開示するなり。

⑪ 感首座。黃龍南の法嗣、福嚴の慈感禪師と云ふあり、此の人か。

⑫ 法昌。名倚遇、北禪賢に嗣ぐ、雲門五世の孫なり。

⑬ 露地白牛。この語、前の興聖錄除夜小參に見ゆ、脱躰現成

の御佛の姿。神の姿、歳こしのにぎはひに。

⑭ 分歲。こちらではこのとしごしに、どのやうなるまひがござるぞ。

⑮ 臘雪連天。大晦のゆきは、あゝさむいな、徹骨じや、たまらぬやうなど。春風が戸のすきまからひうゝと、寒うござる、現成底なり。

⑯ 喫箇甚麼。大衆たちは何の馳走にあづからうぞ、臘雪の一句があるに嫌ふことなけれ、冷淡味はなけれども、一飽能消二萬劫飢一と、一口で盡未來際も腹はふくつん、未審はわかりません、誰か按排料理して、置辦で措置排辦してたもうぞ、無愧慚漢とはこのはぢすてどこるもしらぬやつ、來處也不知はどこからと功の多少を計り、彼の來處を知るか、食物に托して商量す、

豊に珊瑚樹に在らんや。

上堂、擧す、趙州侍者報じて云く、「大王來也。」
州云く、大王、萬福。「侍云く、「未だ到らず。」
云く、「又來也と道ふや。」師云く、「趙州年、老いて事を聽くこと眞ならず、侍者、王命已に行ず、猶ほ門外に在り。」

上堂、擧す、臨濟因に趙州遊山して院の、後架に到つて、洗脚する次で、濟便ち問ふ、如何なるか是れ祖師西來意。「州云く、「恰も老僧が洗脚するに値ふ。」濟近前して、聽く勢を作す。州云く、「會することは即便ち會す、啗啄して甚麼をか作さん。」濟、便ち方丈に歸る。州云く、「三十年行脚、今日錯つて人の爲に解註すと。」師云く、「金を攫む者は人を見ず、鹿を逐ふ者は山を見ず。」

五觀の中の語を借る。
御馳走、ありがたしと云ふたならばと。

● 拔貧做富。貧は感首座を引立て大知識にしてやること、法昌門下不レ致ニ寂寥」となり。

● 嘉熙。四年にして淳祐と改元紀は歳星天を一周するを云ふ。圖は曆圖なり、開は改なり。曆數既長。曆、日年漸延長、倒指はゆびををり算へてもかぞへられぬ、これは運祚の延長を祝す、甚麼日ぞ、いかなる吉日ぞと、辛丑は淳祐元年、鳥飛走は月日のたつことを云ふ。飛走は月日のたつことを云ふ。

● 天基節。理宗の誕生日正月五日なり。
● 河出圖。伏羲氏、天下に王たるとき、龍馬、河に出づ、遂にその文に則りて以て八卦を

畫す。禹、水を治するとき、神龜、文を負ふて背に列す、數あり、九に至る等の奇瑞なり。

● 雷霆變化。聖徳物を化育するに比す。
● 鬼神其由。春夏秋冬、冷暖の變化は、鬼神も其の端由を測りがたしと。

● 聖人復生。眞の聖人を指示す至道。向上宗乗の事、今の絶對の眞理などと云ふ、これが禪の極意、如來正法眼藏なり。無難。むづかしいものではない、孔子の道、遠きにあらす、即佛即心と云ふも、萬里をへだつとなり。この四字の合點がゆけげ、人天の師なり。

● 揀擇。差別的の見解、比較辨別の意をきらふとの事迷ふことなけれ、認むることなけれ、か、雪竇も楹前山深ければ、水寒し、言端語端、二にして二な

上堂、擧す、瀉山、仰山に問ふ、「寂子、心識微細の流注、無にし來ること幾年を得。」仰山敢て答へず、却つて云く、「和尚無にし來ること幾年ぞ矣。」瀉云く、「老僧無にし來ること已に七年。」瀉山又問ふ、「寂子如何。」仰云く、「慧寂正開、師云く、「古人玄微を及め盡す、猶ほ走作を恐る。今人只管、孟八郎にして道ふ、總に是れ五逆の人雷を聞くと。」
上堂、擧す、夾山、衆に示す、「若し、此の事を論せば、直に須らく劍を揮ふべし、若し劍を揮はずんば、漁父巢に棲むならん。」師云く、「夾山、未だ物と俱に化することを得ず、影艸の流をして、驢を認めて馬と作さしむることを致す。」
結夏小參、「等しくこれ、恁麼の時節、何ぞ便

らす、一にして一ならず、揀擇はこれは差別、明白はこれ平等なりと、これを追ひこして來いとなり、この六字、三祖の信心銘から出た語なり、揀擇明白、君自ら看よとなり。
● 時人窠窟。世の中の人々の、窠は鳥巢、窟は洞あな、けものなどで、つまり理論の根據ものではないかもしれませんが問ふたのである、みなが理窟のたれにしてゐるやうですがと。
● 曾有人問我。なるほど、そんなことを曾てわれにとふたものがあつたが、直下にじや、ほんとは、直下は唐宋の俗語である、それは五年の昔であるが、分疏は今の辯明不可能で、今にわしも辯解が出来ずにあると答へられた。
● 觀大海者。この二句は孟子の盡心章の意に出づるなり、「一

これは者の僧を扶整せんことを要す」と龍溪は註してゐる、遠州灘のやうな大海を觀たものでなければ、近江の湖水ぐらゐは自慢してはならぬと同じと。
● 不因者僧。言を爲し難きところにおいて、者の僧が言を爲す故に。
● 維那。維那は叢林の綱紀、大切な役なり。
● 古佛椎頭。白椎にて佛名を唱へるを云ふ、十佛名と云ふて清淨法身盧舍那佛をはじめ、それ／＼佛の名、これは維那の役、たゞ綱目法令の清規謹嚴なるのみではない、下下椎を鳴す音一つ一つ、それ／＼差別智が簡要、著者知法の眼を具すと云ふ。
● 興化。興化が克賓維那に對する因縁、むかし錯用心すと「ひよいといらざることに苦勞し

ち領取し去らざる。西天の廣額旃陀羅、屠刀を放下して、我れは是れ千佛の一數なりと、可憐だ性燥なり。若し衲僧門下に約せば、猶ほ是れ半提、而も況んや期を立て限を立つ、坐ながら化城を守るをや。麟に張らんと比擬すとも、兎にも亦遇はじ、息耕寮、尋常多くはこれ三句の前兩句の後に向つて、一線地を放つて、諸人の與に手脚を整頓せしむ。若し也た慚を知り愧を識らば九十日の内、老僧を忘却することを得ざれ。

復た瀉山の大安和尚、衆に示す、「有句無句は、藤の樹に倚るが如し、疎山參問する次でといふを擧して、師云く、「矮師叔、當時若し瀉山の未だせざる已前に向つて、箇の瞥脱の處を得ば、聲色を認むるの流の、東にトし

てなるに、この虚堂は我慢を云ふたが」と珠長老はいふてゐる。
①月明堂。珊瑚は石の上にはえる、月を感じて生ずと云ふ。言は興化は克賓を接すること「微困にして用心太だ過ぎたり、人人具足、箇箇圓成、月の明かめること、豈に珊瑚樹に在るのみならんや」と龍溪は註してゐる。
②大王。鎮州の大王と本録に見ゆ。
③萬福。やれ、こきげんよう先づあれへ御通りあらせられよと。又來也と道ふと、先刻大王が御出じやと云ふたではないかと。
④年老聽事。年がとると、耳はとほく、氣もとほくなるので、ききちがへする。
⑤王令已行。大王來也のとつづき奏者はしたれども、猶在二

門外で、未だ大王に對すること能はずとなり。
⑥後架。うしろのたなの下。
⑦老僧洗脚。ちやうど老僧があしをあらふところへ出くはした。
⑧作聽勢。れきへよりて、へいときくまねをする、是れ賊々となり。
⑨會即會。合點したならばしたでよい。
⑩啞啄。鳥の啄むやうに、ほぜぐりちらかしてどうするぞ。是れは勘驗の大切なるを云ふ便歸方丈、全鉢作用、趙州を取りて險崖より推墮すの機あり、すうと方丈へかへられた、そこで趙州は云ふ、「三十年行脚、東走西奔とてあちこちへめぐりたれど、巴鼻を見せたことばないが、今日錯爲レ人解注」と云ふてゐる、これは主客相應の義、互に他を勸ぜ

西にトすることを免れ得ん。今既に漏返す、千古の下。豈に人なしと曰はんや。拄杖を卓して、住みね住みね、人を趕つて趕ひ上すことを得ず。

次の日上堂、「一人あり、日に萬兩の黄金を銷す。此の聖制に同じうすれども、只だ是れ人の認得するなし、若し人ありて認得せば、却つて伊をして、日に萬兩の黄金を銷することを許さん。

上堂、擧す、五洩初め、石頭に參す、洩云く、「一言に、相契は即ち住まらん、契はずんば即ち去らん。頭坐に據る、洩便ち行く。頭云く、「闍梨。洩首を回す、頭云く、「生従り老に至るまで、只だ是れ者箇、頭を回し腦を轉じて、甚麼をか作さん。」洩言下に於て大悟す。師云く、

んとおもふて、他の己を勸ずるを知らなかつたとなり。
①攫金者。これは列子の説符篇に、むかし齊人、金をすりとるの故事あり、逐鹿もそのとほり、互に脚下がおるすじやと「心迷ふところあれば此に至る」と龍溪は注してゐる互に西來意一枚になりきつてゐるゆゑに、わきめばふらぬとのこと。
②仰山。惠寂禪師、瀉山に嗣ぐ、瀉は百丈に嗣ぐ。
③心識微細。心識は阿梨耶識なり、第八識なり、習氣はぼんなうを云ふ、中下根にあるものなり、意識なり、微細は三細の中の無明業相なり、流注とは水の流れそよぐ如く、未だ始よりしばらくも停まらずこの話は爲仰宗の骨髄なり。
④無來幾年。さつぱりとして、なん年程になるぞ、仰山は敢

て答へて、彈り恐れて直には返答せぬ、却つて和尚は無にし來りて何年程になりますかと。
①正開。問はいそがはしきこと朝から晩までもちやくちやと心識微細の流注だらげじやとしかし「正開大に工夫あり、尋常の看を作すへらす」と龍溪はいふてゐる。
②古人支微。瀉山、仰山などの謹嚴なる宗師、山の頂、海の底、さがしにさがした上、至極なきはめつくしてゐるが、猶恐二走作一は、なほも大切を踏まるで走作は念の紛飛を云ふ。
③孟八郎。「とりしまりのないこと」を云ふのを「まんぼらう」と云ふ、ではうだいに斗り、孟浪の言などと同じ、只管はくちぐせのやうに。
④總是五逆。頓悟死の義、五逆

「**①** 梱ね載せて往き、橐を垂れて歸る。」

上堂、擧す、巖頭衆に示す、「大凡そ **②** 唱教は、

須らく無欲の中従り三句を流出して、只だ是れ

③ 咬去咬住し、去らんと欲して去らず、住せ

んと欲して住せず、或時は一向に去らず、或時

は一向に住せざることを **④** 理論すべし。」 **⑤** 應菴

拈じて云く、「**⑥** 從上の老漢、**⑦** 須らく箇の些

子の説話を得べし。」 **⑧** 師云く、「巖頭 若し一丈を

行せば、應菴只だ八尺を行せん、巖頭若し一尺

を行せば、應菴只だ二寸を行せん。何が故ぞ、

從來 **⑨** 把本の修行、敢て因果を棄嫌せず。

とは父を殺し、母を殺し、佛

身血を出し、阿羅漢を殺し、和

合僧を破る、要は滂仰の如き

も尙ほ此の如し、況んや今の

人、工夫著實ならず、空腹高

心にして、只管に道ふは頓悟

を得べしといふ故に、特に之

を戒るなり、大死一番底でな

くてはとなり。

⑩ 夾山。この話ばありがたい語

なれば、虚堂和尚、之を擧し

て評するなり。

⑪ 論此事。此の向上の一大事を

いふならば、直須揮劍と、物

來らば照せと云ふものなり、

佛來祖來、きつて三段となす、

悟りも迷もこなみぢんなるが

若不揮劍ならば漁家のおやぢ

が木の上の巢に止つてゐては

水の上に住まれば不恰好なり

と、若し當頭に直截サすんば、

道と相應せざるの義なり。

⑫ 未得與物。夾山は人と申がわ

るい故に、未だ無爲の化を得

ぬゆゑに。

⑬ 影艸。之流。これは魚が草の

かげをばみとめて、その下に

あつまり居るを云ふ。あなた

こなたへたよりまはる驢を認

めて馬と作さしむることを致

すで、馬をとらへて鼻をかむ

やうなことをさせる、人をま

どはするなり、龍溪は誤つて

「直截を認めて道と作す可

ればなり」と注してゐる。

⑭ 等是。大衆を指す、煩惱に非

ず、菩提に非ざる底。

⑮ 憊屢時節。この結夏は面前露

堂々となり、直下便ちこれ平

等天真なり、急に須らく領取

すべし、何ぞ便ち領取し去ら

ざるや、ぐつぐつしてゐるぞ、

ひつとりてしまへと。

⑯ 廣額旃陀羅。これは涅槃經に

出てゐる、波羅奈國に廣額と

云ふ、旃陀羅は此に屠兒と云

瑞巖寺語錄 終

ふ、日本では穢多非人であるが、
屠肉の刀をほりだして、わたくし
も佛種はござりますから、やはり
千佛中の一人でござると、大乘門
中には善惡邪正のきらひはない、
是ればはなはだ性燥で、てばしか
いやつなりと。

① 衲僧門下。約するば、「あて、みれ
ば」なり、的相承の處よりみれば、
なほこれ半提で、半ぶんみて十分
でない、而るをましてをや、みな
のやうに結夏なりと。三月安居な
りと、坐りてゐて化城といふて、
諸佛方便國城を化作すると法華の
化城喻品にもある、坐禪するも化
城なり、之を守るをや、寶所に進
まずてはなるまいと。

② 比擬張麟。これは虚堂和尚が學者
を接する底なり、網を張つて麒麟
を獲やうと、比擬は量りしも、兎
すらもえとりえぬ、麟や鳳のやう
な衲僧をこしらへやうためこそ
あれ、小知見の坊主にもあはぬと、

大事と小事に比したのである。

② 息畔麥。息耕は師の別號で、麥は
老人の稱。

③ 三句前。言ふは、尋常から多語に
涉らず、三句兩句の間に於て箇の

一線地を放つて、入路を示してと
なり、みなものをして整頓手脚

と、穩坐底の自由を得せしむと。

④ 知慚知愧。自らに耻づるを慚とい
ひ、他に耻づるを愧といふ、自心に

耻ぢて惡を輕拒す、「今知三慚愧」
は、法を得るものを云ふと龍溪注

に見ゆ、實悟の處。

⑤ 忘却老僧。吾が開示に依りて得法
のものは、この九十日の内、吾が

微困を忘るゝとなり。

⑥ 大安。百丈に嗣ぐ、懶安と號す。

⑦ 有句無句。有と云ふも無と云ふも
となり。

⑧ 如藤倚樹。彼此無心、どこからど
こまでかはる如くなる義なり。

⑨ 矮師叔。疎山和尚はせがひくうて
時の人「ちびをしゃう」と呼ぶ。

⑩ 未厠已前。滂山和尚が未だ氣息を
出さざるまへにと云ふ義なり。未

説已前なり。

⑪ 瞥脱處。目をちらりとするを
云ふ、頓脱と一般なり、はつきり悟

られたところを得たならばなり。

⑫ 認聲色之流。色を見、聲を求むや
うな庸流、すなはち文字言語を認

むるやうな。手あひは東にトし西
にトして、推量ばかり、有句じや

の無句じやのと云ふことは得たで
あらう。

⑬ 今既漏逗。今と虚堂和尚がはや
漏逗した、此の本則の意をもらし

た、千古の下で像季のすゑの今で
も、豈曰レ無レ人て、舜何人ぞ、

我れ何人ぞやだ、住住と。よせよ
せと、拄杖を。ぼんとついで、趕レ

人とは疎山和尚をば趕ひ上すこと
を得ず、あまりきつうせめるなど

なり。

⑭ 有一人。那一人ありて、眞の出
兒、面前露堂々と、明眼の人なら

ば日銷ニ萬兩黄金ニともとなり、
同ニ此聖制で如來の立制ゆゑ聖制
といふ、みなが禁足安足して居て
も、諸人が度夏を認得せらるゝこ
となしと、もし認得しければなら
ば、虛堂和尚から許してやらう、
認得した人にじや。

⑤五洩。名は靈獸、馬祖に嗣ぐ。

⑥石頭。名は希遷、青原に嗣ぐ。

⑦相契。一言の下におさとりがで
ましたならば、おりますが、さそれ
なんだならば、外へまゐります、我
がまゝ千萬なやつなり。石頭は坐
位になほられる、洩は便ち行く、
さらばおいとますると、石頭云く、
閣梨、おいぼうさまと、洩、へい
とあたまをさげる、石頭は生れる
から死ぬるまで、只だ是れなり、
その通り頭をさげたり、腦天をま
はしたりと、なにをするのじやと、
こゝで五洩はいかにもと大悟をし
た。

⑧稻載而往。これ管子にもとづく語

なり、籠頭角駄と同じ、大げん袋
一ぱい背負つてもち來つて、から
つぽのかぶるにしてかへると云
ふやうな譯になる、五洩が従前の
所得底を脱して契悟するにたとふ
稻は五洩、藁はそこなきふくろ、口
がそこでしめくるふくろなり。

⑨唱教。唱導教示で、爲人説法は無
所得の心で、無欲の中よりこれが
法の根源なりと維摩經の觀衆生品
に「從無住本位一切法」とある。

⑩咬去咬住。咬去は放行なり、咬住
は把住なり、截流の機を奮つて、
倒退三千とも隨波逐浪衆流截斷と
云も同じこれは下根の人を接する
なり。

⑪欲去不去。家舍をはなれて途中に
在らず、中根の人を接す、上は放
行の中に把住あり、下は把住の中
に放行あり。

⑫一向不去。上上の根機を接するな
り。

⑬理論。方便門より弘く一切を度す

るなり。
①應菴。名は曇華、虎丘に嗣ぐ。
②從上老漢。岩頭ばかりではない、
佛祖とても同じことだ。
③須箇些子。委悉を要するの義、些
子は三句を云ふ。
④若行一丈。「巖頭は放行なり、應菴
は把住なり、優劣の處に於て強ひ
て優劣を辨す」と龍溪の法に見ゆ、
一丈は放行、八尺は把住、一尺は
放行二寸は把住。
⑤把本修行。本法を把りて修行す、
超越せざるの義、巖頭の示衆の如
きは、吾が宗の本法のみ、若し之に
據らば、豈に豁達の空の因果を棄
嫌するが如くならんや。中峯山房
夜話の中に、古人謂く、「持戒學道
是れ把本の修行」と、應菴は因果
を恐るるの人なるが故こ、明りに
放行せず、眉毛を惜取す。

慶元府萬松山延福禪寺語錄

侍者 德 盜 編

師、啓霞に在つて、請を受けて、衆を辭する
上堂、拄杖を拈じて云く、「此の事は通人分上
に在つて、言を以て言ふべからず、跡を以て跡
はすべからず、設使へ言跡雙泯するも、猶ほ
斷常の見到落つ。而も況んや朝遊夕處、賓主
歴然、梟知鶴長、彼此有ることを知るをや。
①萬松孤頂の雲と作ると雖も、終に霞峯の老人
石を憶はん。②風に臨む一曲別に希聲あり、
水遠く山長し。如何が指を按せんといふて。」
拄杖を卓す。
復た擧す、長慶、衆に示す、「道伴に撞著

④延福。行狀に「侍郎黃公、堅
請して之を主らしむ」とあり
⑤德盜。斷常と號す、育王に在
りて都寺と爲る、不幸短命な
り。
⑥啓霞。山號なり、寺を華嚴と
いふ、凡そ二三年居る、
出世を杜絶して單に大器を接
す、瑞岩を辭してこゝに居る
なり、只だこの上堂并に偈の
みあり、故に延福録に入る。
⑦受請辭衆。延福の請を受けて
啓霞の衆を辭す。
⑧此事通人。この一大事の因縁
は、通方の作者分止に在りて
は、不レ可ニ以レ語言ニて、毘
耶、口を杜ぢ、不レ可ニ以レ跡

跡ニて、摩竭掩室じや、この
語は肇論中より出でしなり。
⑨言跡雙泯。大事をきはめると
き、なほ斷常の見到落つ覺へ
えず外道斷常の見到落つると
なり、未だ二邊の内を免れず。
⑩而況朝遊。ましてや、朝遊夕
處で、啓霞に在りては、しば
らくであつた、賓は大眾、主
は虛堂が歴然で、全機處に隨
つて彰はると。
⑪梟知鶴長。この句は興聖錄に
見ゆ、長あり短ありで、彼此
知ありで、頭々顯露、物々全
眞なり、彼は實此は王なり。
⑫萬松孤頂。この虚堂は萬松の
住持となるけれども、終に熱

して肩を交へて過ぎば、一生參學の事畢んぬ、也た是れ靈龜尾を曳く。山僧芝峰を退いてより、跡を茲に託して、三び寒暑を歴、又他の古人に勝れるもの多し矣。今海山を過ぐ、攀感なかるべけんや、一偈を綴り成して以て分違を表す。

歛影窮原懶出局 曉雲如送又
如迎 因思執手經行處 幾聽沙泉
遠磬鳴

師、入寺上堂、祝、聖畢つて座に就く。僧問、聲前の一句常機に隨せず、位を轉じて功に就く、如何が相見せん。師云く、問訊して手を出さず。僧云く、且く道へ、天子萬年作麼生。師云く、瑞草嘉運を生じ、林花早春を結ぶ。云く、直に得たり。九州四海、

處難忘で、霞峯老人石、啓霞の境致にある老人石を憶はんで、此の地に退蔵して休歇無事なり、落草なき故に。臨風一曲。送離の行路、風に臨む一成の離曲は別にはなり山河大地の琴聲は希聲あり、大音あり、希は多く見ざるなりで、之を聴けども聞えざる底なり、老子のいばれし如く。

水遠山長。水遠ははるく、おくゆかしい、山長は高山深長、流水までも知音希なれば、どうして彈じ様と思ふぞ、按はおすなり、おさへるなり、沒絃の一曲とでもいふか。

卓拄杖。さあ、高山流水が大音か小音か、那の一曲かと。長慶。名は慧稜、雪峯に嗣ぐ。示衆。この話は聯燈廿四に出づ。撞著道伴。大道の伴子、那一

人をさす、肩を交へて過ぎばは、啓霞の大家への挨拶なり。參學事畢。參禪の大事はさつぱりしまひなり。靈龜曳尾。方語、拂跡々生、しりつぽがみえたと。也是。「この上に師云の二字を脱す」と古人は注してある。芝峰。瑞岩なり、茲は啓霞。三歴寒暑。この啓霞に退居すること三年、その間に頌古代別を作られた。

他古人。古人は長慶にすぐれたところが、今啓霞は道伴多きを以ての故に、たくさんござると。今過海山。海山とは霞嶼は湖中に在る故に、海山こえて、攀感は攀仰感傷で、嗚呼なりをしいとなり。

分違。分は別違、離なり、偈を作りて別離の情を表す。歛影窮原。窮原は僻陬の地に

雷動き風馳すること。師云く、門を出でては惟だ恐る先づ到らざることを師云く、如何なるか是れ延福の境。師云く、天の高きも蓋ひ盡さず。僧云く、如何なるか是れ境中の人。師云く、月中峰に到れども未だ歸らず。僧禮拜す。

師乃ち云く、迦葉門前、箇箇踏著。之を問へば則便ち道ふ知らずと、老胡帯び來つて人人有ることを知る、之を叩けば則便ち道ふ會せずと。衲僧家刺蝟子の如し、儻が近傍の處なし、甚に因つてか鐘聲を聞いて、各七條を披す。與麼に會し去らば、純ら無爲の化を樂み太古の風を追回して便ち見ん、田を耕し井を鑿つて、曉に作き夕に息ふて、自然に敢て時に違ひ、候を失せざることを。然も是の如くなりと

靜退すべきの處なり、出世を好まず、肩(どほそ)を出づるにもういとなり。曉雲如送。世人と相交らぬを表す、無心の曉の雲も、なごり心で見れば、袖ひきとめるやうにも、手をとりに迎ふるやうにもみえる。因思執手。別後延福に在りて思ひ出すと、かなたの山やこなたの水のあたりを、道伴と手をひきあふて經行(うんどう)したところばと。幾聽沙泉。これは無心の道友の交情を述べてある、なん度もつれづれにきいていた、ちんつん、沙泉はすな川の谷をぐるぐるまはつてながれてある音を思ひ出せば、泣き出したくなる、出立でなり耳についてあるから行くのもいやになる。師入寺。延福寺へなり、師六

十歳の時なり。聲前一句。聲前の一句は向上の妙旨、千聖不傳底なり、爭か敢て常機則ち常流の分別計で較に墜せんやとなり。轉位就功。これは入院の垂手なれば、本分の正位轉じて、第二義門の功勳邊に下り就いてと。如何相見。正位の中に賓主なきが故に、世諦と如何が交渉してとなり、是れば洞上の宗旨でよく云ふところなり。問訊出手。手を出さずしては簡慢の義なり、須らく合掌して問訊すべきが故に、非常の禮數を以て本分の相見を表す無禮の義なり。日道天子。そりや、まあそれでよい、視聖の一句承りたい。瑞艸嘉運。靈芝ひじりたち、嘉祥運氣を生ずで、林花結早春とは萬木も春めきわたる、

雖も畢竟何を以てか驗と爲ん。拂子を撃つて、

九阜鶴舞ふ威音の外、三島花敷く大塊の

初。

復た擧す、孝宗皇帝、佛照禪師に問ふ、

「世尊雪山六年、成す所の者何事ぞ。」佛照奏し

て云く、「將に謂へり、陛下忘却すと。」師云く

「君臣の慶會、日のごとく照し、天のごとく臨

む。造化の元樞を斡旋し、風雷の大用を奮

發す。然も是の如くなりとも雖も、還つて太平

象なきことを知る麼。」

當晩小參、僧問ふ、「安居禁足、西天令嚴なり、

和尚甚としてか、明かに知つて故に犯す。」師云

く、「樵子の徑に因らずんば、争か葛洪が家

に到らん。」僧云く、「文殊三處に夏を度る、

未だ衆疑を決せず、和尚、霞峯より來る、

一々、悟つても悟らなくても

り、之を問へばと、他の恩を

問へばとなり。

老胡帶來。達磨が西來してか

ら、各々不傳の妙道あること

を知るとなり。

叩之則便。問ふてみれば、し

らぬと云ふ、人々具足なり、

何の知らぬことがあるとなり

如刺蝟子。げはりねすみなり

近くよるとちくりとさす、衲

僧家、向上を手に入れたるも

のならば、上件の迦葉門前や

老胡帶來を知つた人ならば、う

げはりねすみみたまやうに、う

つかりと傍へはよれぬ。

聞鐘聲。雲門の云はれし午齋

の鐘を聞けば、各々七條の袈

裟を披す、この話は親しらす

子しらすと云ふほどの難關な

り、與歴に會去とはかくの如

くに會したならばなり。

純樂無爲。さつばり外ごとは

群心鶴望す、還つて文殊と相去ること多少ぞ。」

師云く、「好事匆忙に在らず。僧云く、「大善知

識、豈に方便なからんや。」師云く、「老僧が

罪過、僧禮拜す、師云く、「我れを謾すること

は即ち得たり。」

乃ち云く、「大家者裏に在つて、誰か敢て、爾

諸人を謾せん、若し各々、頭を道はゞ尾を知つ

て、人我の擔子を去却せば、自然に、長者は、長

法身、短者は短法身ならん、目連鷲子も爾が

眼を著くる處無からん。山僧尋常、曾て人の與

に、註脚を下さず、爾若し、山を隔て、煙を

見て、便ち是れ火なることを知る處に向つて會

し去らば、又争か得ん。今夜已に展ぶるをば

縮めず、未だ免れず。東に拏ひ西に撮ること

一上子して、且く、死馬醫と作すことを。」

いはゆる和氣、春の如し。

九州四海。世界國土は聖徳化

その速なること、雷動は速に

徳化のゆきわたるを云ふ。

出門惟恐。出格のものでなく

ば、かなはぬを云ふなり、來

朝するものは、その國門を出

づるに、人に後れて徳化に赴

くの遅きを恐ると。

天高蓋盡。本分の境を示す。

月到中峯。半夜の謂なり、歸

は月の西に入るを云ふ、「奪

人底の語なり」と或る抄に見

ゆ、「この虚堂の三句の答話は

東山下の暗號令あり」と球長

老はいへり。

迦葉門。千聖不傳底、向上の

一路なり、迦葉の金襴傳衣せ

られし外に、この何をか傳ふ、

阿難の問ひしに迦葉は門前の

刹竿を倒着せよと、我慢の幢

を立て、言中に鋒を藏すをや

めよとの因縁を云ふ、箇々は

ない、拈花微笑、單傳心印を

と、無爲鼓腹壤撃の歌をなし

て、太古の風を追回し、達磨

や迦葉のむかしの門風を思ひ

やられる、堯舜の御代にもか

ばらぬめでたい、耕田鑿井は

これも世間事といへば、みな

帝の恩力で、何ぞ我にあらん

やとなり、本分の田地を耕し、

法性やすむと、自然にまあ時

にも候にもたがはぬやうにな

る、天下の豊げさ知るべしで

ある。

九阜鶴舞。やれ目出度いや、

鶴は九阜とて九折つゝらなり

にないて、佛の出世已前でも、

威音王則ち空王佛已前もとな

り。

三島花敷。三島は海上の三神

山なり、蓬萊、方丈瀛洲を云

ふ、天地未分已前より、春の

まつたゞ中に此の花は開いて

あるぞで、大塊は天地の初め

大古の無爲無事又は境界を云

ふ、この語、始は宗綱を提げ、

與歴より下は國家を祝す。

復舉。この話は與歴にもあ

り。

孝宗。南宋の第二主なり。

佛照禪師。徳光、大惠杲に嗣

ぐ、育王靈隱等に住す、この

話は師靈隱に住する日、帝

詔して道を問ひ、留めて内觀

堂に宿せしむ。

將謂陛下。如來會上、我が法

は國王大臣に付すと説かせら

れた、今ま帝には忘却すべし

と、還つて記得してめされる

と。

斡旋造化。萬物を造り出す、

即ち自性の妙用、元樞は根元、

樞は本なり、斡旋は帝の間に

御はれをり申すこと、八識を

轉じて三身四智と成す底なり

風雷之大用。風は順なり、雷

は逆なり、大機大用を奮發す、

復た擧す、雪竇、衆に示す、「龍泉と刀斧と同じく鐵にして、利鈍懸に殊なり、驚駘と驥馬と同途にして、遲速異なることあり。酌然、一出一入、半合半開、平展の流、試に縑素を辨せよ。」師云く、「明覺は一代の龍門なり、只だ是れ取捨の心未だ泯せず、山僧は、毛凡道等なれども、一目して之に歸す。何が故ぞ、切。」

上堂、擧す、瀉山、仰山に問ふ、「大地の衆生、業識忙忙として本の據るべきなし、子作麼生か他の有と無とを知得せん、」仰云く、「某甲箇の驗處あり。」時に僧あり、面前より過ぐ、仰召して云く、「閣梨。僧首を回す、仰云く、「者箇便ち是れ業識、忙忙として本の據るべきなし。」師云く、「仰山 知人の鑑あり、只だ是れ用處

照の答を云ふ、互に佛事を成就す、無爲の大化を助くる故に。

●太平無象。徳化自然に行はるゝ故に、底意は雪山の事、本分の處なり。

●明知故犯。西天印度の佛制で夏中令制が嚴重で、禁足するなり、虚堂和尚茲に知る、夏破りて來つて入寺せらるる故にことさらに犯すと云へり。

●不因樵子徑。これは問はずんば知らずの義、向上の一路を樵子にたとへる、犯も不犯もその境界に至らざれば知らぬ

●爭葛洪家。虚堂自らに比す、葛洪は仙人、どうして仙人のすみかへこられるものか。

●文殊三處。この話は興聖錄に見ゆ。

●來自霞峯。啓霞より延福に來る。

●羣心鶴望。僧俗男女、貴賤老

少、悦ばしく思ひくびをのばしてまつてゐた、文殊は衆決、虚堂は鶴望。

●好事忽忙。好事をとききかせうにも忙しき時はならぬ、住持事繁の故に、よくゆるく思案せれば云へぬものじやと

●豈無方便。まさか第二義門に下つて、何ぞ方便あらう。

●老僧罪過。夏中にあちこちしたのは、われ方便なし、もとより罪過なりと。

●謾我即得。這箇の禮拜、これ却つて我を謾すとなり、こしやく千萬な佛法は未在なるほどに不會不會なりと。

●大家。一會の大家れきく。

●設備諸人。人天交接の故に。

●道頭知尾。靈利の義、回也、一を聞いて以て十を知るが如しのるゐなり、未レ擧已前に擧一明三、目機鋒兩なり、去二却人我擔子一で、人我と云ふ

おもにをわろしてしまへば差別の異見をばなりと。

●長者長法身。一物一太極なり。形質は長短ありとも、法身を成するに至るまでは、即ち平等なり。短者短法身で、やつぱりかばらぬ、佛の全身なり。

●目連驚子。目連は神通、驚子は舍利弗の譯名。智慧。この二つがそらうても、無備著眼處で、法身ともいかゞとも、手もつけやうはないと。

●註脚。うんだとも、つぶれたとも。

●隔山見煙。隔てゝは山ごしに、頓機伶俐底なり。あゝ法身は無形無相なり、などと思ふて、是れ火なることを知るとも、會し去りてもまた争か得んとなり。虚堂和尚の妙處はこゝなりと。

●今夜已展。展は放行縮は把住、今入寺したからには。

●東攀西撮。あつちへひこじり、こつちへひこじりで、所謂かけづり

まはる、第二義門に下りて、東語西語一上子は一回すればとなり。

●作死馬醫。或抄に、「荒療治の義」と既に是れ死馬なり。「無用處なるが、化度門に下りて向下に入るを云ふ」と龍溪の註に死は罵辱の謂、死郎當等の例の如し、馬醫と賤術なり。宗師家は衆生之病を療するに依つて、自ら謙して死馬醫と稱す、珠長老は乃ちこれ上にある人我の擔子を去却するの語を指すなりと云ふ。

●復擧。この示衆は雲門宗の宗旨一。

●雪竇。名は重顯、明覺大師と賜ふ。

●龍泉。鐵劍三枚の内なり、狀、高山に登り、深淵に臨むが如しと云ふ名劍なり。刀斧はただのまさかりだの、普通のきれものを云ふ、同じく鐵でこさへたものなるが、龍泉は利で、吹毛刀斧は鈍、ばた／＼してもきれぬ、大分そこにだんがある。

●驚駘與驥馬。驚ばせんだれで、驥は千里のばやごま、一途にかけたして遲速に異なりて。無差別の中に差別あることを證據だてて、酌然こは是非分明であると、酌は灼に作るが正當なり。誤りてあるとなり。

●一出一入。出は放行、入は把收、合は把收、開は放行、皆差別の義を明すなり。

●平展之流。平常展演で、無事の見をなすの漢、子細に是非を知らざる底を云ふ、試辨縑素とは縑素は黑白の意味にて、善惡邪正を辨別せよとなり、これ實に衲僧が奪命の神符なり。

●明覺一代。雪竇和尚は道望一時に挺拔するの意なり、龍門は活脫自在の儀表なり、只是取捨の心未泯とは取捨は是非の義、鈍を捨て利を取り、遲を捨て速を取るの心がうせぬと。

●毛凡道等。この虚堂老僧は。毛道梵

には婆羅と云ふ、行心不定なほ輕
毛の風に隨つて東西するが如き云
ふと、凡夫を毛道と云ふ、これは
きつい御謙退、ふけばとぶやうな
ものと云ふ、上の一代の龍門に對
して、しか云はれしなり、一目而
歸之とは入寺の始め即今一見して
此の延福に歸す。更になんの縮素
得失をか辨せん、ちよと見れば、
なる程と合點すると一致の處ない
ふ。

切。なぜならば、切は急なり、間
に髪と容れず、況んや餘心をや、
この一字は慈明の傳にも、楊大年
問ふ、「如何なるか是れ上座爲人の
一句、師曰く、「切」とあり。
業識忙忙。このわれ、凡夫衆生
は、無始よりこのかた、業識と云
ふて、見聞覺知、うか／＼と六道
輪廻して、忙々いつもいら／＼進
むも退くも、本の據るべきなしで
取りつきやうがない。地獄へ行く
やう畜生へゆくやう、さあ無念無

住が本になつてゐるとなり。
有之與無。なんとらちをあけると
なり、他は現前の衆を云ふ、有と
無とは業識を云ふ。
有箇險處。や、よろしい、子細は
このむれにあると出た、人をしる
の鑑ありとなり。
知人之鑑。邪正善惡を知るの明鑑
はあるが、たゞこれ用處太過ぎた
り、あまり用ひやうがひどかつた、
ただ過ぎたりで、者箇便ちこれ業
識忙忙の句をさす。
我稽首。山僧ならばさうでない、
かれがへいと首を回さらばおれは
稽首せず、頭を地につけて禮儀
をつくしてやる、折半裂とは一は
ぼろぎれのこと、つゞれ、二つに
ひつさけて三つにひつさけてと云
ふこと、襟を捉へると肘かである。
今勸せざるに自ら破する意を取る
護鷄。昔身命を惜まず、鷄をかば
ひし戒律僧の故事あり、雪の如し
と持戒の潔白をたとへる。

守臘之行。報恩解夏、小參に見ゆ
法歲長幼行業染淨。
田單火牛。田單は齊の國の疏屬、
(うときたぐひ)なり、これは護鷄
守臘の二行を兼修するはみななり
と。
三吳百越。會稽を吳郡となす、す
なはち吳興丹陽とて、二吳となす
百越は南蠻の惣名なり、みな無碍
自在を云ふなり。
正恐坐在。遊戲自在の窠窟に坐在
するを恐るとなり。
有箇道處。上の二途を離るるを云
ふ。諸人は大衆たち、道處は云ひ
ぶんがあるとなり、しかし大衆た
ちはがてんゆくまいぞと。
茶黃。鄂州の茶黃和尚は南泉願に
嗣ぐ、趙州は昆弟なり。
作甚麼。やれ、ことありげに、な
にをめさると。
探水。清水禪海は深いか浅いか、
枝を以てさぐつた。
一滴也無。わきに行いてさぐれ

ただ過ぎたり。山僧は則ち然らず、他頭を回さ
ば、我れ稽首せん。半を析き三を裂いて、襟を
捉れば肘を見はす。
解制上堂。護鷄の戒は雪の如く、守臘の行
は氷の若きも、也た是れ。田單が火牛なり。衲
僧家、朝には三吳暮には百越なるも、正に
恐る者裡に坐在することを。萬松 箇の道處あ
り、只だ是れ諸人未だ肯て點頭せず。
上堂、擧す、趙州 茶黃を訪ふて、「法堂に上つ
て東に觀西に觀る。」黃云く、「甚麼をか作す。」
州云く、「水を探る。」黃云く、「我が者裡、一滴
も也た無し、この甚麼をか探る。」州柱杖を以て
壁に掛けて出づ。師云く、「盡く道ふ、一滴
も也た無しといふて、滔天の浪を鼓起すと、
殊に知らず、趙州平白に、一條の杖子を失却

、已に滲漏を絶するなり
と。
盡道。世界國土、みな／＼い
ふてゐる。
滔天之浪。大つなみをうたせ
たとなり、世間只だ把住の處
即ちこれ放行なることを論ず
るのみ。
趙州平白。平白は「ひるひな
か」道忠曰く、明白の義、き
つぱりとの義、なぜか趙州和
尚はこう云ふた。
一條杖子。ひたすら、他を驗
みんことを要して、自ら失ふ
ことを覺えず。
監收。米麥を收納するを取り
立つる役なり。
千鈞大器。梵鐘を云ふ、千鈞
は三千鈞のことを云ふ、萬鈞
とも云ふ、十六兩を一斤と云
ふ、三十斤を一鉢と云ふ。
已自陞樓。鐘を挂くるを云ふ
時節いたればなり。

萬斛。瓊球。米を云ふ、瓊珠
は米粒をさして云ふ、途方も
ない諸侯の知行ほど。
屢。くらなり、是れは監收を
謝する語なり。
捧腹昇堂。鐘を聞いて僧堂に
上る。
開單辰鉢。雲板がなると自分
の單を出て、持鉢を展ぶる、
これも監收を謝す。
是少林客。これは艱難辛苦を
云ふ、監收の役に比す、此の
甚深の恩力識者にあらずんば
以て話しがたし、少林の門下
のものでなければ、雪庭は二
祖斷臂の辛苦を話すことはな
らぬとなり。
法身還。說法。「佛は法を以
て身と爲す、清淨なること虚
空の如し」と、華嚴經の六に
あり、みな法身の說法の故に
きてがない、天親菩薩の偈
に「報化は眞佛に非ず、亦説

すること。

新鐘を掛けて、監收を謝する上堂、「千鈞の大器、已に自ら樓に陞り、萬斛の瓊珠、已に自ら、廩に入る。衲僧家、腹を捧へて堂に昇り、單を開いて鉢を展ぶ。且く道へ、誰が恩力を承く、柱杖を卓して、是れ少林の客にあらずんば、雪庭を話するに難爲ならん。」

上堂、擧す、仰山因に僧問ふ、「法身還つて説法を解すや也た無や。」仰云く、「我れ説くこと得ず、別に一人の説き得るあり。」僧云く、「説き得る底の人、甚の處にか在る。」仰山、椅子を推し出す、瀉山聞いて乃ち云く、「寂子、劔刃上の事を用ふ。」師云く、「瀉山の一宗を、滅却することは、只だ此の語に因る。」上堂、擧す、趙州、僧に問ふ、「曾て此間に到る

法者にあらず。」

① 我説不得。合點して居るとも居らぬとも云ふ事はならぬ。② 別有一人。別にわけ子細を云ぶ人がある。③ 推出椅子。或る抄に、「此の法身に説法させた、」椅子の製法寄歸傳に委し、略之。④ 寂子。仰山の名は惠寂。知見解會を截斷する、生死の根元をきるころの劔を用ふ。⑤ 滅却。瀉仰宗は三世にして斷絶した、即今盛りと思ふていはれたが、但しは滅却と思ふて、虚堂が云ふたが面目坊にきげ。⑥ 只此語。劔刃上の古事を用ふ故に抑揚なきの機なし、太だ潦倒の故に此の判あり。⑦ 喫茶去。お茶まぬれ。⑧ 一處打者。茶をふるまひ得たりうちおほせた活人じや

三四

① 一處不打者。うちはづした殺人なり、趙州は一等に道ふ、今師特に分開す。② 不招茶。お茶をのめとも云はぬ。③ 不相問。曾て到るか到らぬかともいはぬ。④ 賢聖法來。佛弟子となつてよりこのかた。⑤ 未嘗殺生。逢レ佛殺レ佛逢レ祖殺レ祖」の手段は趙州の手段なり、上の句とこの句とは、鶯痴摩羅經及び增一阿含經三十一に出づる語なり、「我れ人をして疑殺せしめざるなり」と龍溪は抄してゐるが、「十重禁を會得した人でなくば、なんとも沙汰は出來まい」と珠長老はふてゐる。⑥ 僧。守廓侍者なり、興化に嗣ぐ、此の縁會元十一に出づ。⑦ 從上諸聖。釋迦、達磨より歴代の祖師、向ニ甚麼處ニ去る

麼。」僧云く、「曾て到る。」州云く、「喫茶去。」又僧に問ふ、「曾て到る麼。」僧云く、「曾て到らず。」州云く、「喫茶去。」師云く、「趙州、一處は打著、一處は打不著、萬松僧を見れば亦、招茶せじ、亦、相問はじ。何が故ぞ。」賢聖の法に従つて自り來、未だ嘗て殺生せず。」上堂、擧す、徳山因に、僧問ふ、「從上の諸聖甚麼の處に向つてか去る。」山云く、「作麼作麼。」僧云く、「飛龍馬を勅點すれば、跛籠出頭し來る。」山休し去る。來日山浴する次で、僧茶を過す。山、僧の背を拊つて云く、「昨日の公案作麼生。」僧云く、「者の老漢、今日方に始めて、瞥地なり。」山又休し去る。明覺拈じて云く、「徳山は、己を以て人に方ぶ、者の僧還つて同じく屈を受く。」師云く、「盡く謂ふ、恒山の蛇、之に

と、天堂へいつたか、地獄へいつたか、山は作麼、どうかなあ。① 飛龍馬。徳山の作麼の機鋒を奪つたところ、馬は凡そ八尺以上を龍馬と云ふ。天子が馬を召すを勅點すといふ。② 跛籠出頭。あしなへで、へたへたとした。③ 瞥地。ちらりと、この老漢、今日ははじめてやうやう氣がついたとなり、山又休去とばなかなか手にあはぬ。④ 明覺。雪竇なり。⑤ 以己方人。これは論語の憲問篇の語をとりもちふ。それ相應に應接せねばならぬに、鑑察がとゝかぬ。還同受屈とは屈は苦屈とて、辱を受くと、ほねをりぞんのくたびれまうけなり、徳山は己を以て人に方ぶ、早く休して再勘せず、故にこの僧氣を出す處なくし

て、同じく屈を受くるなり。⑥ 恒山。北嶽なり、常山とも云ふ、孫子に此の語出づ、徳山と僧との出合せ。すさまじい、よりつかるるものでない、この首尾俱應すとは、主客相應の義なり。⑦ 一得一失。東をふめば雨があらる。⑧ 傍不甘。傍には虚堂が承知はいたさぬぞと。⑨ 遠在。兩處休去の機を扶起す要見は雪竇の見處では、まだ及ばぬとなり。⑩ 處々。京も田舎も、燈籠をつるしてゐる。⑪ 享上帝。上帝は太乙星、享は祭るなり。⑫ 普請。あまねくもらさず、しやうだいてと。⑬ 四聖。聲聞、緣覺、佛、菩薩なり。⑭ 六凡。六道の衆生。

觸るゝときは則ち首尾俱に應ずと、殊に知らず
一得一失なることを。雪竇是は則ち是、傍
に甘はざるあり。徳山を見んと要せば、遠き
こと在り。」

元霄上堂、「今夜、處處、燈を焼いて以て、上帝
を享す、萬松例に隨つて也た一椀を焼いて、
普く、四聖、六凡を請じて、同じく此の、影子
裏に入れて、頭出頭没せしむ。設し入らざる
底あらば、徳山の杖子を拈起して、劈脊に便
ち打たん。何が故ぞ。過去燈明佛、本光瑞如
此。」

佛槃涅槃上堂、「今日は則ち有、明日は則ち無、
釋迦老子、一生賣峭す。死に臨んで、自ら敗鬪
を納れて、後代の兒孫をして、箇箇蝦を以て
目と爲さしむることを致す。萬松、丈人、屋上

の鳥、之が與に救はん看よ。「拄杖を拈起して
吹一吹す。

上堂、「破家散宅、祖を毀り宗を滅す、一條
絲を掛けず獨り、象外に超ゆ。此の人只だ
接手の句を會得して、未だ透關の眼を具せず
若し能く、面を洗つて鼻を摸著し、茶を啜つて
背を濕却せば、爾に許す是れ、半箇の衲僧な
ることを、未だ全く鉢盂を展べて、飯を喫すべ
からず。」

上堂、「一線道を放つときは、四方八面遮欄
を絶す、一毛頭を收むるときは、無邊利海、
煙塵起る。收めず放たざるときは、萬松、口
鉢盤に似たり、是れ汝諸人、也た須らく、救取
すべし。」

上堂、擧す、白雲の端和尚、衆に示す、「古人

●影子裏。燈籠の光明の内へな
り。
●頭出頭没。ねたり起きたり。
●劈脊便打。急に打つを云ふ、
肩よりせなかへせばねがぶち
くだくるほどぶちてやらうに
と。

●過去燈明神。これは法華の序
品にある語なり。過去の故に
之を用ふ。人々自己燈影あり
何ぞ入らずと言ふことを得ん
本光瑞如此、いつもかはらぬ
那一椀の燈。
●今日則有。この語は涅槃經後
分上の意にとる、この續輯に
詳かなり。
●一生賣峭。峭は高峻なり、言
ろは一生自ら高尚にして貴價
を求むとなり。高賣りをせら
れた。三賢四果も目も及ばぬ
人天八萬、ふんでも見ること
ならぬ。
●自納敗鬪。今日は有、明日は

●接手句。本分の手引をする迄
如上の見處、只だ人を接する
ことを會す、接手は和諺の「あ
ひて」なり。
●未透關眼。なほ自らの大悟を
缺くとなり、自己分上の眼を
もたぬ。
●洗面云云。この二句は皆自得
を表す、よく見徹したならば
東山下の暗號令はしれやうぞ
●半箇衲僧。まだ、半人前の
坊主なりと。未全展鉢盂喫飯
とはまだ、禪宗の飯はく
わせぬ。
●放一線道。緣起法界、則ち放
行なり。
●四方八面。諸佛淨土なり、遮
欄は關に作るべし、遮きるな
り放處に收ありと。
●無邊利海。緣起無性、則ち把
住なり。
●煙塵越。收處に放ありと。
●不收不放。二途の外に超出す

無と。
●箇々以蝦。箇々とは自己の天
眞佛を知らず、外に向つて有
相の佛を求む、蝦は蝦に作る
べし、自己の分なきを以て、
爾來歸依佛の故に。
●丈人屋上。丈人は釋迦を、鳥
は虛堂を指す、蓋し佛家に依
止する故なり。杜詩に「丈人屋
上鳥。人好鳥亦好」と、之が
與めには佛が其の敗鬪を救は
れる。
●吹一吹。氣を出すこと急なる
を吹と云ふ、緩なるを嘘と云
ふ、ふつ／＼これで救はれた
かどうかしれぬ。
●破家散宅。淨躰々赤洒々の境
界なり。
●跋祖滅宗。四七二三、らりこ
つばい。
●條絲。寸條寸絲なり。
●超象外。萬物の外へ立ちて乾
坤只だ一人。

●口似磔盤。磔はいしづゑ、盤
は磔を承くる石なり。不動の
義を取る、おれが口はにつこ
りとせないと義なり。
●救取。不收不放の處を會得せ
よとなり。
●白雲端。楊岐會に嗣ぐ。
●一言半句。無一物なり、無字
なり、柏樹子なりと、なにの
爲めぞ、知見生死の根を切り
とり、大解脱の梯となさしむ
留下は垂示と同じ。
●撞著鐵壁。難透難解なり、血
眼になつて、ゆすつて見ても
行くものでない。
●使是鐵壁。自らに由つて他に
由らざること、是れ什麼ぞ、
これなんぞ。
●依文解義。これははいねいに
鐵壁を解釋するを云ふ、文に
隨つて義を取るは、三世の諸
佛の怨なり、速に我が法を滅
す」と像法決疑經にあり。

の留下する。一言半句、未だ透らざる時は、鐵壁に撞著するに相似たり。忽然として一日透り去らば、方に知る自己、便ち是れ鐵壁なることを。且く道へ、如今作麼生か透らん。乃ち云ふ、「鐵壁鐵壁。」師云く、「白雲人の會せざらんことを恐れて、只管文に依つて義を解す。衲僧家、萬象を目前に融し、虚空を掌上に搏るも、猶は是れ轉句、況んや那邊の事を耶。」上堂、擧す、臨濟、衆に示す、「我れ先師の會中に於て、佛法の大意を問うて、三度打たる、蒿枝の拂ふが如し、如今一頓を得んことを思ふ。誰が爲に手を下さん。」時に僧あり、出で云く、「某甲手を下さん。」濟捧を拈す、僧接せんと擬す、濟便ち打す。師云ふ、「者の僧其の實は只だ臨濟を、見盡さんことを要す。」

●萬象目前。無礙解脫、萬物萬象を一つに融合するはと、
●虚空掌上。神通自在なり、大活現成の境界なり、搏は「まろめる」なり。
●轉句。轉身の轉、えいやつと法身分際なり。造作にわたるの義物に轉ぜらるゝの義なり
●那邊事。向上全提を指す、こつちに大事のことがある、存じもよらぬ、自己の那邊の鐵壁においてをや。
●先師。黃檗希運禪師なり。
●蒿枝拂。こつづいには徹せぬちやうどこれはよもぎの葉で臉をなでたやうな、仙術家にも小兒の無病無災を咒するによもぎのはでなでる。
●一頓。一うち、黃檗に代つてこの老賊を。
●某甲下手。私が黃檗の名代を仕らうと。
●擬接。棒をひつたくらんとし

●要見盡。林才の手本を見盡さんと云ふ語なり。
●拄杖。拄杖に向つていふ。
●面赤。慚色をいふ。
●道。拄杖に向つてしかいふばでなければごろじやな、珠云く、和レ盤托出夜明珠をまき出した。嗚呼見事々々。この一章は無聞無説の端的也。
●巖頭。徳山に嗣ぐ。
●西京。長安なり、京兆とも云ふ、(唐末代)今の西安なり。
●黃巢。これは唐の僖宗時代の軍事的掠奪團の首領の名である。黃巢の賊團の意、不平家である、社會主義である。雪峯はこの賊の起つた四年前に雪峯山に住してゐる。
●收劍。拾つてきたか。
●引頸。岩頭がそれならば、その劍でわしの頸をはねてくれ

上堂、拄杖を拈じて、「面の赤からんよりは語の直からんに如かず、道へ道へ。」拄杖を掛けて云く、「拄杖子、是れ患聾にあらすんば便ち是れ患啞。」
上堂、擧す。巖頭、僧に問ふ、「甚の處よりか來る。」僧云く、「西京より來る。」頭云く、「黃巢過ぎて後、劍を收め得る麼。」僧云く、「收得す。」頭近前して、頸を引いて云く、「因。僧云く、「師の頭落ちぬ也。」頭呵呵大笑す、僧後に雪峯に到る、峯云く、「甚麼の處よりか來る。」僧云く、「巖頭より來る。」峯云く、「巖頭近日何の言句か有りし。」僧前話を擧す、峯打つこと三、十拄杖して趁ひ出す。師云く、「者の僧當時、若し巖頭の笑裏に向つて機を知らば、雪峯の拄杖子更に長きも、世た他を打つこと著じ。」

と云ふ勢を示す。
●因。これは日本人の「えー」とか「こわーあ」とかに當る。支那人のこゑを形容した字で、きばりごゑなり。
●近前。ちかより。
●師頭落也。この僧も大ぶん出來たとみえる、あなたの頭はおちてしまひました。
●三十拄杖。こゝのはたらきはどうも、そんなうっかり坊主はおれの手にはおけぬとて、おひ出してしまつたと。雪豆は三十山藤且輕想、得二便宜一是落二便宜一と頌せられた、碧岩六十六則にもこの因縁出づ。
●雙林。傳大士の開基なり、次の寶林寺。
●入息陰界。胸中のことによせ

ていふ。
陰は色受想行識の五陰。界は根塵識の十八界。
●出息萬縁。刹那の間、無住無念なり。萬法にことよせて云ふ。萬縁は朝より暮に至り、古歌に「古里と定むるところなき人は、いづくへ行くも家居なりけり。」
●爲甚麼。言は此の如く本分に安住する人は、甚として取捨去就あると。
●會得。拄杖裝具を高く閣いて行くまいにと。
●一生定力。こなたの叢林、あなたの叢林と、宿業の餘風に轉ぜられて如此也と、逍遙任運底、行藏は論語の述而出づ、用レ之則行、舍レ之則藏」と

① 雙林に赴いて衆を辭する上堂、② 入息陰界に居らず、③ 出息萬縁に涉らず、④ 甚麼としてか萬松を棄て、雙檣に入る。⑤ 會得せば挂杖子之を束ねて高く閣かん。然らすんば自ら笑ふ。⑥ 一生定力なうして、行藏多くは業風に吹かるることを。」

延福寺語錄終

國譯虛堂和尚語錄 卷二

婺州雲 黃山寶林禪寺語錄

師入寺、山門を指して、「① 彈指を勞せず、豈に思惟に涉らんや。② 現成の門戸、到るものは方に知る。」
 佛殿を指して、「③ 前釋迦、④ 後彌勒、且く道へ阿那箇か是れ正主。」⑤ 喝一喝。
 帖を拈じて、尋常 雲水家、⑥ 或は疑り或は流る。初めより 固必なし、甚に因つてか ⑦ 者箇の手に入ることを得て、便ち者裏に従つて住する。試に ⑧ 一轉語を下せ看ん。」

侍者 惟俊 法雲 編

① 婺州。浙江省にあり、又金華府とも云ふ。
 ② 雲山。義烏縣の南にあり、一名松山と云ふ、梁の傳翕大士此に於て行道し、黃雲盤旋して、その狀ち蓋の如し、相傳ふ山に玄熊赤豹多し、大士之を化度す、後また出でずと寶林寺はその山の下にあり、大士を開山とす、七境あり、支那十刹の一なり。
 ③ 惟俊。虛堂に嗣ぐ、天台の萬年に住す。
 ④ 法雲。承天の閑極法雲なり。虛堂に嗣ぐ、無衣と號す。
 ⑤ 彈指。傳大士は彌勒の應身なれば、善財が彌勒の樓閣に到つて、暫時念をさめて、彌勒が彈指一下すれば、閣門開くといふ、この意をとりもちふ、まさか善財の思惟にわたらず八字に開いたにて、桃紅李白八字に開くじや。
 ⑥ 現成門戸。言は今この現成天眞の門戸は、彌勒の彈指を勞せず、又善財の思惟にも涉ら

諸山の疏、居は必ず隣を擇ぶ、鑑は止水に非ず、明暗相凌ぐ、言猶ほ耳に在り。山門の疏、門を關著すれば、盡く是れ自家屋裏、何ぞ須ひん、冷言冷語して、暗地に人に敲くことを、信せずんば、下文を聴取せよ。

法座を指して、草を聚め石を積んで、有と説き空と談す。古を取るに尙ほ餘かなり、一時に拈却す。何が故ぞ、別に一路子あり。師、陸堂、祝、聖畢つて座に就て云く、大凡そ善く射るものは、發するときは必ず的に中る、若し的に中らざれば、徒に羽を没するに勞す。善く射るもの有ること莫し麼、試みに一箭を發せよ看ん。僧問ふ、天従り降らず、地従り湧かず、須彌山甚れの處従りか得來る。

師云く、突出辯じ難く。僧云く、只だ者箇眞の消息を將て、用ひて吾が皇の億萬春を祝したまへ。師云く、巢は風を知り、穴は雨を知る。僧云く、雙檣の勝所、大士垂化の方、應菴の雲孫、今の虛堂、高く其の轍を踏む、還つて端的なりや也た無や。師云く、人を誣るの罪、罪を以て之に加ふ。僧云く、爭奈せん、是非已に傍人の耳に落つることを。便ち天河を挽いて洗へども清からず。師云く、面の赤きよりは語の直からんには如かじ。僧云く、只だ判府直院侍郎の、和尚を請じて此の名山に住せしむるが如きんば、何の方便かある。師云く、劍は飢人の手に握る。僧云く、還つて學人が箇の消息を露すことを許さんや也た無や。師云く、杜鵑啼く處花狼藉。僧

ず、只だ到入のもの皆方に知るとなり、更に隠すことなし盡十方世界、これ箇の解脱門なり、この虛堂も方に諸人も方に知るとなり。
前釋迦。釋迦已に滅す。
後彌勒。未だ出現せずにて、傳燈二十七に善慧大士傳に、天嘉二年、陳の文宗時代に大士松山の頂に於て連埋の樹を邊つて行道し、七佛相隨ひ、釋迦前に引き、雞摩後を授することを感ず、唯だ釋尊のみ數たび顧みて共に語る、我が補處なるが爲めなり。
阿那箇。且道は中間底なり、正與麼ならばどれが正主じやと乾坤只だ一人の主ぞ、これは二佛に於て正主を辨せんことを要す、二佛の中間に於て正主を辨すべし、即ち虛堂自ら當れり。
喝一喝。やい見たか、正主の

端的意氣をば。
拈帖。守護職よりたまはるところの虛堂和尚を請する公帖なり。無碍自在に說法開示せよと云ふなり。
雲水家。修行してゐる僧をいふ、凡そ沙門の世に處するば風雲流水の去住無心なるが如きを云ふ。
凝は雲なり、流は水なり佛法世法にとどこほらぬを指して云ふ、所謂一所不住の境界なり。
固必。これは論語の子罕篇に子四をて絶つ、意母く、必母く、固母く、我母しとあるに取る樹下石上の境界なれば、固はこること。執偏なり。必はかざるあての義なり、こびつかぬなり。
者箇。公帖なり、者裏はこの寶林に請を受けて住持する端的はどうじやと。
一轉語。學者たちに、從來去住自由ナニヨツテ公帖を受

けて此の寶林に住することを得るか、諸人に一轉語を下して看よとなり、竹意隨筆に「轉語は眞實大悟大徹の中より流出すべきものなり」とあり、轉語は今日の言葉でいふならば、小感想の意で、或は格言の意である、通俗的に云へば洒落文句である。
諸山疏。列刹よりの請、すなはち勸請の疏なり。拈出するときは唱へる謝語なり。
居必擇隣。所謂擇んで仁に處らずんば、焉ぞ知ることを得んか、孟母三遷の教育の如き、兎角に好き人に交はるやうにする、仕合なことに近くはみ梅檀の叢林。
鑑非止水。世間なみくゝの勸疏ではない、この語は莊子の德克符の仲尼の曰く、人流水に鑑みること莫くして止水にかんがむ」と云ふにとるなり。

今諸山を望むに止水にあらず臥龍の宜しく鑑むべきところなり、珠長老は曰く「其の人に鑑みて水に鑑みるに非ず」と。
明暗相凌。明は放行、暗は把住なり、これは隣交の交情を述べ、言ろは平昔交會の間、明暗相凌奪して、理論商量するなり、無着曰く「明暗は相反するの法なり」。
言猶在耳。その言なほ耳に在りて忘れざるなり、慶賀勸勉の言は入寺以前に在り。
關著門。門を關鎖する、しめつくるなり、無着曰く「我れ未だ門に入らざる已前は、我れ亦他家の人、若し既に門に入り已つて、却つて門を關鎖し畢つて、之を視ればじや」と。山門の故に門内の事を用ふ。
自家展裏。一家の父子と同じ

禮拜す。

師乃ち云く、「一絲掛げざるも、猶廉織に渉る、獨脱無依なるも、未だ極則とせず。」
 僧家、去來象を以てせず、動靜心を以てせず、冥運無方、群機頓に顯る。便ち見る雲黃峰頂、鐵樹枝を抽んで、小白華邊、風なき浪を起すことを。處處普門の境界、頭頭彌勒の道場。萬線に應せず、靈然として自得す。直に得たり、堯風舜日、共に昇平を樂み樵唱漁歌、咸く聖化に霑ふことを。畢竟何を以てか驗と爲ん。「拂子を撃つて、崑山歩み入つて祥麟穩かに、海樹飛び來つて白鳳閑なり。」復た擧す、閩王、羅山を請じて開堂せしむ。纔かに座に登つて、手を以て僧伽梨衣を斂めて、大衆を顧視して便ち下座、王、近前して

や、兩序勤奮とて、東序西序五侍者などと云ふて、役々の僧たちをば同じく本分家裏の人なりと、自家はこの寶林寺のことなり。

冷言冷語。冷は陰の義、當陽に言語せず、冷眼冷笑冷地等の類の如し、かげ口なり、みなく骨肉の内なれば、さやくやうに言ふことはいらぬとなり。

暗地敲人。あからさまに扣問せずして、疏に憑仗するなり人に手をとらせるやうなことはせぬと、暗地はかたかけ、敲は問ふなり、質問の矢をはなつなり。

下文。疏の文を指して云ふ。維那がまだ疏を讀まぬ前に、此の法語を唱ふ、故に下文と云ふ。

聚艸積石。草座石床に坐して如來は隨宜說法す、說法する

ことは古の風儀なり、石を積むとは生法師と云ふ人は羅什の弟子なるが、石を以て聽徒と爲して說法せし故事あり、佛も忉利天、善法堂の金石に坐して說法し玉ひしことあり

說有談空。有は阿含部、空は般若部、第二義門に下つて、或は有と説き、或は空と説じ玉ひしも。

取古尙除。除は遠なり。今年代が深遠にして取るべからず故に又有相の座にして方便權教を談ず、之を空王已前に此するに、太だ遠きことあり、それは昔のものがたりなりと云ふこと。

一時拈却。拈は指にて物を取るなり、此れは捨てしまらうごと、古きことはひつかたげと、雪竇頌古に「去却一拈得七」は、みなこの意なり。

別一路子。古を取らず、別に

通霄の路あり、釋迦の法によらず、達磨の法にもよらず、方便を假らずとなり。

大凡。これ以下は索話なり。

徒勞沒羽。勞して功なしとあたつたら矢をつひやす、没はかくすこと、たゞぐつと中へいこむなり、こがす」と訓す。

試發一箭。これは釣語なり。堞生招箭をいふ。

不從天降。そら矢か、あだ矢か、由基が矢乎。

須彌山。唐には妙高と云ふ、これは即今法座、すなはち須彌壇上の法座を指して、虛堂和尚に商量しかける。甚處より得來ると、これは本分の大事を以て須彌山に託す。

突出難辨。端的是面前に突出する故に辨じ難しと也、その處は返事はちよとしにくいと天よりも下らず、地よりも湧かずして、ひよつと出た故に、辨じがたしとなり

眞箇本分の須彌の端的ぞ、珠長老

國譯虛堂和尚語錄 卷二

は「合頭乎是什麼ぞ」と云ふてゐる。

者箇眞消息。者箇すなはち須彌山には、突出辨じがたしと仰せられしは、合點しましたが、このあつばれ不思議の大陀羅尼なる消息やうすをもつて吾が皇の今上皇帝の萬々歳を祝國して下されと。

巢知風。巢居は鳥鶴のるい、穴處は狐狸のたぐひ、己がみちみちを能く知つた、眞實祝しやうは、知る人は知る、其の方共の知つたことではなしと、今は他の指數を待たずと云ふ知分相應のあいさつなり。

雙橋勝所。この雲黃山は一名松山と云ふ、傳大士は松山の頂の雙橋の樹に因つて寺を創む、故に雙林と名づく、勝所は名所と云ふこと橋木のかれてくひのやうになりて

いる木なり、大士は傳大士、又は善慧大士と云ふ、大士とは大心大行あるを云ふ、傳大士はこの婺州

生れで、法號は善慧、本名は傳翕五月八日生、北周の武帝、天和四年化す、日本の欽明帝三十年に當る、垂迹化導の方は處なり地なり。

應庵雲孫。玄孫の子を雲孫といふ虛堂は應庵五世の法孫なり。

應庵曇萃——蜜庵成傑——松源崇岳——運庵普岩——虛堂智愚。

今虛高。應庵も曾てこの寶林に住せられた。故に虛堂もその途轍あ

とをばふむとなり、還つて端的なりや也たいなやとは、正理である

かまださうでないかとなり、なんとそれが眞實でござりませうかと

なり。

師云誣人。師云は自己を把任するなり、誣は無を以て有と爲するなり、難を云ひかけるなり、以罪罪之はおはせる罪をおれにおわせるかなり、重罪の義なり。

爭奈是非。あゝまうらちあきませぬ、皆人がかくれもない運庵の子じやと知つてゐますゆへ、しかた

がないと傍人は諸方の人をさす。便挽三天河一洗不レ清とは天の河をせきとめて耳を洗ふ也、虚堂の是非をば、龍溪は「たとひ把住細密なるも、已に人耳に落る」といへり。

⑤面赤語直。または把住なり。面赤はうそをいふ也。綺語妄語を云ふには愧をかくより、正直にいへと。

⑥判府。ところの守護職、直院とは學士院に直することとのみせしむ、侍郎とは諸殿門を宿衛するを通して侍郎と云ふ。

⑦住此名山。この雲黃名山に住持せしむる、方便爲人の處があるかと。

⑧劍握甌人手。權柄手に在り、殺活時に臨むの義なり、甌人を以て自らに比す、それはしれたこと、この虚堂が住持するからには、活殺はおれが手の内にありと楚王と眉間尺との故事あり、略す、甌山と云ふところの客あり云云とあり。

之に因りて甌人と云ふ。

⑨學人箇消息。學人にこのありさまをのべることを御許しになりませうかど、おそろしいやつなり。ちと申し上げたいことがござりませう。

⑩杜鵑啼處。ほととぎすが花を啼き落して散々なものになしたとなり。杜鵑は此の僧の言句にたとふ、現成天真、甚の消息を通ずる處かあるとなり、僧禮拜とははいありがたふござりますと、珠長老曰く、「録中にこれほどの問答はあるまいおもしろい」。

⑪一絲不挂。これ以下は提綱なり、全體を拂ひつゝして一絲も掛けざるとは、無想無念なり、面目に逢ふたものでなければ、かうはまるらぬ。まだそれでも廉纖に涉るとて微細に些子物のある在りて、明師にあはねば、こりやとれぬ、これは阿修羅が藕絲孔中にかくるゝのところ。碧岩の第三則の垂

示に大廉生とあり、些細なやつの義。獨脱無依。たとひ佛菩薩等を取らず、三界の殊勝を取らず、迥然として獨脱して物と拘はらざるも、尙ほ未だ極則とせずで、途中家舍に在らず、向上の宗のと云ふともまだ中々ゆるさぬと、至極の法則とはせぬ。

⑫衲僧家。かくの如くせんさくしつめた、去來は十年二十年、數箇所の住持すれどもびくとせぬ、歩いたことない、像通じて象と作す形なり、眞聖の入寺の語にも見ゆ。

⑬動靜以心。去來動靜とも無形無心である。

⑭冥運無方。無形無心は冥運靈通で無邊無方にして羣機頓に顯發する也所謂直下更に纖翳なし全機處に隨つて齊しく彰はるゝ故なり、冥運はくるゝ歴つて京の田舎の地獄の天堂の、方所わけへだてはない、羣機は一切來機に盡く應じ利

山の手を執つて人々靈山の會、何ぞ今日に異ならん。山云く、將に謂へり、爾は是れ箇の俗漢と。師云く、羅山當時、者の一着を下す妨げず群を驚し衆を動ずることを。頼に大王是れ佛法中の人なるに遇ふ。今日忽ち人あり、新寶林に問はゞ、只だ他に對して道はん將に謂へり、人の知音なるなしと、自然に頭正し尾正しからん。

益するなり、この語までは結前生後なり。
①雲黃峰頂。上の冥運無方群機頓顯の證語なり。
②鐵樹抽花。咲くまい木にも花をさかす。
③小白華邊。梵語、補陀洛迦、こゝには小白華と云ふ、觀自在菩薩の遊舎、傳普敏は文殊の化身、慧集は觀音の化身、同じく來つて贊助す、此の山中慧集所居のところを小白華と稱す、觀音應化の跡を欽する耳。
④無風起浪。四海の衲子寂定海中に四弘願に鞭つてとなりこの二句は皆山中の奇瑞を表するなり。
⑤處處普門。これは小白華を結ぶの語、どつちへ向いてもこつちへ向いても、觀音圓通の世界なり、圓通を出て又圓通に入るとなり。

⑥頭々彌勒。この語で雲黃峰を結ぶ、傳大士は彌勒の應身なるに依りて、閑寂修道の處なり、頭々とはどつちもこつちもといふ意、傳大士は遺命して、上に浮圖を建て、彌勒の像を以て、其の下に處く。
⑦不應萬緣。頭々處々、眞箇の境致、故に萬種の諸緣に應ぜず、胸中和平、靈然として測るべかざる不思議に、おのづから得るとなり、引いて國家の和樂に歸せんことを要すで妙應無方の意なり、こちらから無理には應ぜぬ、自然自得となり。
⑧直得幾風。一件の通りなれば太平の御代となつてと。
⑨咸霑聖化。國の爲に開堂して皇化を翼賛す。
⑩崑沙步入その證據には麒麟がゆたりゆたりと歩み入るとなり、崑沙はまつ角の處、即ち

中に一箇半箇の、^①髣髴髣髴地にして、是れ舊時の相識なるありて、^②行道塔の風鐸の亂鳴を指出し、^③梁の寶公の多口饒舌を罵破す。^④便ち見る、^⑤主賓の和氣彼此疑なきことを、然も是の如くなりとも雖も、且く道へ、^⑥慈氏宮中、今日甚麼の法をか説く。「拄杖を卓して、^⑦鋼刀利なりとも雖も、無罪の人を斬らず。」復た擧す、^⑧當山の善慧大士、因に^⑨天竺の嵩頭陀に遇ふ、曰く、「我れ汝と^⑩毘婆尸佛の所に誓を發す、^⑪今兜率天宮に、衣鉢現在す何れの日か當に還るべき」といつて、大士に命じて、^⑫水に臨んで形を觀せしむ。^⑬圓光寶蓋を見る、^⑭大士之に謂ふて曰く、「^⑮爐鞴の所鈍鐵多く、^⑯良醫の門に病人足れり。」師云く、「^⑰好笑好笑、當時他の請ふ、大士水に臨んで形を觀よ

太平無事の家なり、誰か此の徳に應ぜぬものはなし、莎はすげ也、海樹食來自風閑。風風がふらり〜と飛び來ると、海樹は海邊の樹より風枝を動かさぬ世の中、いづれも祝語なり、この二句は雪竇の祖英集の下にある「曾推官が嘉遁に示すの什を和す」と云ふの偈頌の句なり、錯綜の句法でさかさまに云ふた句勢なり、今取りて祝語と作す。^⑱閻王。後唐の王審知なり、字は信通、光州固始の人、後唐の同光三年卒す、忠懿と諡す長子延翰立つ。^⑲羅山。道閑禪師、巖頭に嗣ぐ。閻の帥、その法味を飲み、請じて羅山に居らしむ、法寶禪師と號す、この因縁は禪林類聚一に出づ。^⑳僧伽梨衣、僧伽梨は唐には重複衣と言ふ、正に僧揭胝と云

ふべし、此には和合衣と曰ふ威儀をつくるひ、しやんと坐してとなり。^㉑王近前。希代な貴い大王なり靈山の一會は世尊の拈花微笑の一著子は、何ぞ今日と異なることはなからうと。^㉒將謂爾是。還つて遺教の事を知ると俗漢と思ふておたならば、佛法中の人でありしよと。^㉓當時下者。羅山があのととき下座の一著を下してゐる、すさまじい、妨げず群を驚し衆を動すで、佛祖も氣を呑み聲を飲むなり、頼にこれ大王が佛法中の人でありしに遇ふてよかりしが、若し知音がなれば羅山も一場の懽懽でありしならん。^㉔問新寶林。閻王の問ひの如くこの新命寶林にそは、無人知音で、俗漢と云ふのは、言龜なればなり。

①自然頭正。かう云ふたらよからうものを、どこやら全備して、意句共に叶ふで座しきぶりがよからうとか。われはどことなく、頭が正しければ、尾も正しと云ふておく意なり。^②往々多是。今時往々に江西でも湖南でもとじゃ、未だ面目を見ざる底。^③著草影邊。めとぎぐさのかげのあたり、これは言句の影像に向つて胡卜し亂卜すで、推量してあつちへ占ひこつちへとらはる、諸經論などを引き出してまよひまはる、中庸にも見「子著龜」とあり、うらなひにいふくさの名。^④今夜諸人。おし推量斗りで居る故こよひみな爲に卦文（うらなひの文句）を。古今の葛藤を割破すると「務は割なり」古則公案も佛教祖録をも取りのけてしまふ。^⑤欸欸出來。欸は徐なりで、心しづかになり、中情欸欸などと云ふて心にまことあることなりて、た

きて商量をせよと。^⑥師乃云。これより以下は提綱なり^⑦客是主人。客は大衆、主人は虛堂相師とは人相見る物ぞ。客はいつでも亭主の氣に合ふやうにする役なり。善く主人の是非善惡を見るものなり、主客相應の義なり。^⑧未到寶林。まだこの寶林に來ぬ、それでずんで、何の申分もないが一たび到らばとはさらば來てみれば、この虛堂が伎倆はだ、智慧才覺はとなり。^⑨諸人探頭。みなが探頭は勘驗の義吟味してとなり、一觀とば、一目みておいたに。不出はもればせぬとなり、よいもわるいも、皆が見る通りなりと。^⑩頼堂中。心安いことが、堂中乃ちこの修行場の中で一箇半箇は一入半人かなり、あまり澤山はないものなりと。^⑪髣髴髣髴。にたか依たかの様なものもある、知音を舊時の相識とい

ふ、舊道友に相似たりと。^⑫行道塔。行道塔は寶林七境の中の一なり、「傳大士が此に於て行道す、七佛菴行道塔あり、風鐸は塔の四方の風鈴が風で、しきりになるをと、指出は評判して其の方違をあひてにしてとなり。^⑬梁寶公。梁の寶誌和尚が、武帝に奏して、「傳大士を請じて壽光殿に於て金剛經を講せしむ、大士、座上に登りて案を揮ふこと一了乃ちまへの机をぐらつかせて、さつさと下座せられた、武帝はおどろいて、寶誌和尚に問はせらるには、「これはなんとしたことか」と、誌公云く、「陛下はまう御わかりになりましたか」と、帝云く、「不會」誌公云く、「大士はもはや金剛經を講じてしまひました」と、このことを誌公の多口饒舌と云ふて、いらぬことをくちや〜おしやべりしたものでなりと、どなつてゐること、この公案は碧岩の六十七

と道はんを待つて、門椎拍板を拈起して、劈背に便ち搥たば、尙ほ且つ一半を救ひ得ん。更に甚麼の爐輔の鈍鐵良醫の病人とか説かん、本を翻得し來るも、劔去つて久し矣。山僧尋常、理に黨して親に黨せず、大士の爲に主と作る底あること莫し麼。如し無くんば、夜深珍重。

上堂、擧す、晏國師、衆に示して云く、「鼓山門下、咳嗽することを得ざれ」と。時に僧あり咳嗽すること一聲す。山云く、「甚麼をか作す。」僧云く、「傷風。」山云く、「傷風ならば即ち得てん」と。師云く、「是は則ち是、梁生りて箭を招く。若し一向に與麼ならば、道絶え人荒れん。」結夏小參、拄杖を卓して、必ずしも善財念を歛め、彌勒彈指せざれども、普く四聖六凡を

請じて、此の大光明藏に入らしめて、互に主伴と爲つて快に禪病を説いて、瞽者をして明かに、聾者をして聴き、迷者をして悟り、縛者をして脱せ使めて、是の九十の期に於て、各本法を證して、然して後雙檣の堂に升起、息畔が室に入つて、無星の等子上に向つて、其の重輕を較べて、以て賞勞に憑らん。會す麼。」拄杖を卓して、力団啼、咄咄。復た擧す、天平漪和尚、行脚の時、西院に參す、毎に云ふ、「道ふこと莫れ佛法を會すと箇の舉語底を覓むるに也た無し」と。一日西院召して云く、「從漪、平、頭を擧す。院云く、「錯。」平行くこと三兩歩、院又云く、「錯。」平近前す、院云く、「適來者の兩錯、是れ西院が錯か、上座が錯か、平云く、「是れ從漪が錯か、

則にも出でゐる。
便見賓。そこで皆うちとけてと、客はこれ主人の相師の故に、その道話自然に相似て同じとなり、無疑はすなはち隔心なきなり。
慈氏宮中。彌勒を慈氏と翻す所謂彌勒の道場、これも寶林七境の一慈氏堂あり、この事によせていふ。
鋼刀雖利。拄杖を指して云ふ堅鐵は銳利なれどもと、この虛堂の所持の寶刀は無爲無事の人ばかり申さぬと、これは賢聖衆前には法を説くべからずの意なり。
富山。寶林寺の開山なればいふ。
天竺嵩頭陀。達磨大師と云ふ説あれども非なり、別人なりとの説多し。
毘婆尸佛。亦維衛と名づく、此には勝觀と纏す、七佛の首

と。
一 好笑好笑。をかしいわい、をかしいわいと、大士何をほざき出すと、上の臨水觀形事を弄す。
門椎拍板。門椎は大きな木の槌、拍板は拍子をとる板なり、この二具は傳「大士の隨身所持の具なり、初め武帝、大士の神異を聞いて、即ち試みに關人をして預め諸門を鎖さしむ大士心に先づ知る、預め大木槌一双を作る、先づ一門を扣くに、諸門悉く啓く、拍板は大士之を執りて經を唱ふ。
劈背便搥。口のいがむほどほぼげをたゝかばなり、上の發誓と云ひし口さきをば、尙ほ且つ一半を救ひ得んと、十分ではなけれども、まあ半分はたすけ得たであらう。
翻得本來。これは虛堂が我れ今代りて本手を取りかへさん

なり。
發誓。一切を利益せんと欲すと。
兜率天宮。兜率陀此には妙足と云ふ、佛地論には意足と名づく、謂ふ意は後身の菩薩中に於て教化して、多く意足を修するが故に、衣鉢現在すと今そのまゝある。
臨水觀形。大士の本形を水鏡にうつして見せた。
圓光寶蓋。後光がさして寶蓋おさしかけた、徧身圓滿の光明なり。
爐輔之所。佛如來のみもとには、あら金が多くつんである鈍鐵で佛とも法とも知らぬ凡夫が多いと。
良醫之門。耆婆、扁鵲の如き名醫の門には、四百四病の患者が一杯つまつてをると、方に度生を急にすべし、何の暇あつてか兜率などを思はんや

と思ふても、已に落節し去りて今披本し來ればなり、もはや遅八刻なり、劔去久矣で、これは楚人舟を刻むの故事で圓悟心要に「爾、方に舟を刻む、豈に曾て夢にも祖師を見んや」とあり、おそい、船は赤問關を越して、とつくに神戸か大阪に着いてゐる、蹉過了也だと。
黨理。これは偏頗なきを云ふ親でも子でも天理にはくみするが、世間の親交にはくみせず、「傳大士はこの山の開基なれども、爲三大士一作レ主底あることなしやと、さあ大士の味方となつて、一と合戦するものはないか、作主で、なるものはないか、如し無ければないか。」
夜深珍重。夜が深けた、ねやれ、禮話なり、小參の故に云ふ、珍重は大切にの意善

院云く、「錯。」平休し去る、院云く、「且く者裏に在つて夏を過して、上座と共に者の兩錯を、商量せんことを待て。」平當時起ち去る。後に住院衆に謂つて云く、「我れ當初行脚の時、風に吹か被て、思明、長老の處に過つて、他に連りに兩錯を下さる。更に我れを留めて、夏を過して商量せしむ。我れ那時に錯るとは道はず南方に發足せし時、早く錯り了れり也。」師云く、「藏を慢せにするは盜を誨ふるなり、容を治かにするは淫を誨ふるなり、雙林今夏、還つて箇の兩錯を商量する底あり麼。」次の日上堂、「箇箇天を頂き地を履む、甚麼としてか、二千年前底の影子を踏著して、便ち一動子を做すこと得ざる、者の影子を踏まざる底あること莫し麼。」王丈を卓して、「有る

加保重のこと。
 晏國師。福州鼓山神晏與聖國師、雪峰に嗣ぐ、この話は聯燈二十四に出づ。
 咳嗽。方書に痰なくして聲あるを之を咳と云ふ、痰ありて聲なきを嗽と云ふ、鼓山のこのおれの處では、鼻もかませぬ、せきばらひもさせぬ、泥んや言句をやとなり、時に僧ありて、くつしやん、えへんうじや」と、僧の云ふのには「私は傷風で風を引いてをります」と、山云く、「風引きなればそれはゆるす」と、得てんといはれる、疎山の樹倒れ藤枯の時如何と云ふに似てゐる。
 是則是。虛堂はよいはよいが梁なりて箭をまねくで、一箭射かけて來いと待ちかけた、箭は僧にたとへる、此の示衆

は來間を招くが爲め而已。
 若一向。もしひたすらにそれの語を指す、道たえ人もすさまじと、法堂前艸深きこと一丈、掃地の人を求むるも得べからず。
 善財童子。五十三問の中の五十一參の下、「善財、教を受けて海岸國に至る、大莊嚴園といふあり、その中の廣大樓閣を毘盧舍那莊嚴藏と名づく、一心に彌勒菩薩に見えんと願ふ、彌勒彈指して聲を出す、其の門即ち開く、善財に命じて入らしむ」と、新華嚴七十九に出づ。
 四聖六凡。あまさずもらさずにと、四聖は聲聞、緣覺、菩薩、佛、六凡は地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上の衆生をいふ、入三此大光明藏」とは脱體現成の處なり、即ち神

ことは則ち有り、只是れ今日來らず。
 頭首の秉拂を謝する上堂、「壇を以て將を拜するは、活國の英を求むるが爲なり、拂を以て人に授くるは、枯心の士に見えんと要してなり。雲黃峰下、象龍の歸する所なり。虛堂、薄處先づ穿つ、龜を證して鼈と作すことを引き得たり。」
 開山忌日の上堂、「正法像法、知んぬ他は此れ幾年ぞ、尙ほ且つ拈弄し出さず、那ぞ堪へん忍俊不禁にして、出で來つて攪行奪市するも、既に末だ箇の補處を得ず。又却つて恣麼に去る、是にして去るか非にして去るか。」
 拄杖を卓して、「露。」
 上堂、擧す、興化因に僧問ふ、「四方八面來の時如何。」化云く、「中間底を打す。」僧便ち禮拜

通光明の藏なり。
 禪病。圓覺經の普覺章の大慈悲尊、快に禪病を説くと、註に禪病は四相なりとある、作止任滅の四病なり、一に作病即ち心に造作を生ず、二に任病、即ち縁に隨ひ性に任す、三に止病、即ち妄を止め眞に即く、四には滅病、即ち寂滅の謂なり、亦云く、「禪豈に病あらんや、參するもの、用心差錯するにあるのみ」と圭峰はいへり。
 迷者縛者。煩惱菩提の縛が、ぐわらりとほどける、めくらが見え、つんぼがきこえるなり、まるで弘法大師のやうなことなり。
 九十之期。夏の結制九十日の期限に於て、各々として僧俗男女が、本法を本來の面目、父母未生前の本參の妙法を證して悟りて、然後それから雙橋

の堂に升るで明師の室に入得し、これは入口で淺いが、この息畔が室に入るは深いぞ息畔は師の別稱である。
 向無星等。目なしの秤、本分の秤子也、面目坊なり、本分の勘驗をするの具に向ふて、その重き輕さをひきくらべて賞勞に憑らんで、よく骨折つたと褒美を下さる慰安せらるゝなり、夏明きの月を償勞の月と云ふ。
 力因啼。力因啼はいいやらさあえいやらさあと聲と力を出ふ、えいやらさあ〜力を出して物を引く聲なり、咄咄咄はうぬぬ〜〜〜なり、大機大用、大自在なり、卓主杖の機用なり、咄々は物を拂ひのけるやうなことに用ふ。
 天平。平は「びやう」と音するよみくせがよろし、天平山の從漪は清溪進に嗣ぐ、進は玄

沙に嗣ぐ。

⑤西院。名は思明寶壽沼に嗣ぐ、沼は臨濟に嗣ぐ。

⑥每云莫道。每云は口ぐせに天平は尋常悟りじまんが、有つた故、箇の舉話底を覓むるに、また無しと、古則さばきをする舉話は話しのできるやつなり。

⑦一日西院。向上の舉話底を示してもよからうと思ふ。

⑧錯。そりや取りちがへた、うぬほれるなよとしかられた。なんとこしやくな事を云ふとなり。

⑨平行三兩。祖宗門下にはめづらしからぬ御示しなりと、活處を彰はした、然れどもてぬるい不平面して自分の室へゆきかけた。

⑩近前。近寄つて何を云はんとするとなり、やかましいことを云ふと思ふて、些子擲擲の勢ありとな

り。
⑪適來。前刻より、このわしは二度もおまへに錯と云ふたがと。

⑫是從滄錯。私がかす妄想大きなは

きちがへでありましたと、院云く錯、まだか、平休し去るで、はらもたてられず、なきもならずなり、這裏は思明の寺、休去は安心すること。

⑬商量兩錯。兩錯で、筋骨をぬくべくらちあけやうと思ふたに、商量とは議論しやうと、あきうどの量り目を以て中平を失はず、御得意先きの信用を保つより出でし語なり、祖庭事苑に委し、西院のとめるのもきかずに、「平がそのときふつと起ち去りたは佛法」とをやすらかに覺えたせい、殘念じやと或る抄に云ふてゐる。

⑭被風吹。業風に吹かれてとは因縁がありましたのでなく、日本でいふと狐にばかされて位のところなり。

⑮長老。たつとんで和尚をいふ。
⑯過夏商量。親切なことなりと。
⑰那時錯。那時は西院に見るときに

那時はそのときといふこと。

⑱發足南方。南方は西院のところへ行脚するとも、早や錯なりと、天平は相州、西院は汝洲なれば、天平からは南方にあたる。

この話は碧岩の九十八則にも出てゐる。

⑲慢藏。此の兩句は易の繫辭上一傳の文なり、西院の關鑰の嚴ならざることを罵りて、今天平を留めて兩錯を商量せんことを要するが故にくらをゆるがせにするはとは、西院が老婆心切に垂手する故に、天平の那時に錯と道はず等の語を引き得たり、此れ盜が淫を誨ふるゆゑなりと、前句は西院放行の所、後句は奇特玄妙の處をはき出せばなり。

⑳雙林今夏。吾がこの會下に、今夏にはこの兩錯を議論するものがあるかと。

㉑箇箇頂天。人々かうべには天をいたゞき足には地をふむすべて欠少

する所なしと、頭午夜の月を戴き足黄金の地を踏む、なんとしてか眼横鼻直をば知らんやとなり。

㉒二千年前。釋尊が二千年前にきめておかれた安居禁足の佛制作法の教迹(かげぼうし)を踏著して(守りて)と。

㉓使做一動。安居禁足とて、九十日のあひだ、身うごきもようせぬのはと。

㉔者影子底。これは虚堂が自問である、二千年前に涉らざるかげぼうしありやいかゞと、所謂圓覺の伽藍にも住せず、三期をも守らずといふ底ありやなしやとなり。

㉕有則有。これも自答である。餘味あり、不去不來といふことあることはあるが、けふは御留主か、此の様な自由なことを云ふが、唯だ「知音がない」と珠長老はいへり。

㉖頭首。これは「てうしゆ」とよまず又は「ちゆうしゆ」とよまず、謹

林の役位に東序西序といふて、これは西序の方の首前堂首座である人が四節といふて、年に四度衆の爲めに住持に代はりて、乗拂といふて拂+を取りて説法す、住持は別の日に之を叙謝といふて、御禮の上堂がある、今は冬至と結制との兩度だけ之を行ふなり。

㉗以境拜將。これは史記の韓信が傳にある、蕭何が漢王に告げて曰ふのには、「諸將は得易いが、信が如きえらものは國士の中でも二人とない」と、王曰く、「それでは大將にすべきか。」何曰く、「幸甚々々」と、そこで王は信を召して大將としよ

うと思召す、何曰く、「王必ず信を大將となされようとならば、良き日を選んで齋戒して、壇場を設けて禮を具へばよろしからん」と、王之を許すと、これをこゝへもて来て、頭首の面々に配したるものなりなせなれば、爲レ求ニ活國之英一

で、いはゆる無雙の國士と同じであるから、亂賊を平け天下を蘇活するの手腕を有すると。

㉘以拂授人。これは禪坊主であれば拂子を以て頭首人に授與するは、枯心則ち生氣なき眞箇無心の衲子大死一番して、その上に心識をころし盡したるものをみつけ出さうと要してゐる。

㉙象龍。龍象とかくのを顛倒したるなり、この雲黄山は衲子たちよりあつまるところなり、龍は水行中の力大なり、象は陸行中の力大なり」と智度論にあり、今鉅禪碩師のえらものたちを、之を龍象に比していふ。

㉚薄處先穿。これはうすきところさきにうくと、あなたがあくと云ふに比して、米のうすきところは一番さきにあなたがあくと云ふより用ふる語なり、薄徳にして濃厚ならず故に頭首等を引き得たり、これを謙損して虚堂がいはれしなり。

㉛證龜作籠。これこの虚堂が胡亂に

す、化云く、「昨日箇の村齋に赴く中路に、一陣の狂風暴雨に値ふ。古廟裏に向つて避け得て過ぐ。」師云く、「興化、者の僧に無刃の斧子を拈出せら被て、便乃ち高く降旗を豎つ。寶林當時若し他の禮拜するを見ば、便ち休し去らん何が故ぞ、且つ者の漢をして、一片の板を擔ふて空しく一生を過さしめん。」

大士生日の上堂、「一たび嵩頭陀に道破せられて自り後ち出た來らずんば是れ好手。端なく貧時舊債を思ふて、再び家醜を揚ぐ、大士を見んと要す麼。」拄杖を卓して、空手にして鉦頭を把り、歩行にして水牛に騎る。」

上堂、擧す、臺山路上に婆子あり、凡そ僧ありて、臺山の路、甚麼の處に向つてか去ると問へば、婆云く、慕直に去れ。僧纔に行く、婆

證據すとなり、重んじやうもしらないで、名人にしたいは山々なれども、これは虚堂が我儘が、それでも五家七宗がこもつてあるので、しかたがない」と珠長老は抄してゐる。

開山忌日。傳大士は陳の大建元年四月二十四日示寂す、日本欽明天皇三十年に當る。

正法像法。釋迦の正法、世に住すること五百年、像法一千年、末法一萬年、或は正法を一千年とす、此れ佛法一萬と二千年。

知他是。今は知らずの義、他は大士を指す、言ふ意は正法像法の間は知らず、大士は幾年を歴て、當來龍華三會の曉に於て成道する故に、尙ほ且つ拈弄し出さざると云ふ、またまあ、さばきができぬ、工夫拈弄が成熟し出かさぬとなり

一六

これは、傳大士は彌勒の化身なれば、釋迦が補處の菩薩なり。

那堪忍俊。どうしてたへられやうぞ、忍俊は俊發を忍ぶに堪へざるの義なり、こらへかねて、龍華三會を待たず。

出來捲行。「さんかう」はおしうり、奪市はおしがひ、行市は市場で貿易する處。やれ布袋じやの傳大士じやのと強ひて出世し來つて、衆生を惱亂するとなり。

既未得箇。まだ、時節が到らぬ。故に補處乃ちあとつぎの成佛を得ぬ、五十六億七千萬歳を経て、釋迦に補處として、成佛すべしとなり。

又却恁麼。畢竟虚生浪死す也、今日今日寂滅し去るを謂ふ。

是去非去。一拶して結座す、つまりいへば法にかなふて去

云く、「好箇の師僧、便ち與麼に去る。」趙州聞き得て云く、「我が去つて者の婆子を勘せんを待て。」州到つて前の如く問ふ、婆亦前の如く答ふ。州院に歸つて云く、婆子我れに勘破し了らる也。」師云く、「者の婆子、寸艸生せざる處に向つて、箇の陣子を打す、趙州韜略を施さずして、直に之を破らんと欲す。鋒を交ふるの際に及んで、又却つて利を失して道ふ、我れに勘破し了らると。大いに別人の棺木を扛いて、屋裏に歸して哭するに似たり。趙州の爲に主と作る底あること莫し麼。」拄杖を卓して、勘過し了つて一道に打たん。」

上堂、「水中の鹽味、色裏の膠青、祖師只だ箇の相似底を認得す、何ぞ楚人の鷄を以て鳳と爲るに異ならん。我が者裡、任ひ爾、三頭

るか、法にかなはずして去るか。

露。拄杖を卓して、さあだらじや、露と雲門大師にまかせた、是非を抜却して大士を點出す。

四方八面。法戰の敵を受くる底の時節なり、これは參話なり。

打中間底。獨坐大雄峯で、正しく此の僧を打着する手段なり、且く道へ、中間底これ什麼れの處ぞ、僧禮拜をしておいて興化の刃を奪はんとす。

昨日箇村齋。この僧に禮拜せられて、南無三寶、しまつたと。

向古廟裏。中間底は古廟裏なり、「再釋一遍す、義知るへしである」と龍溪は注してゐる。

無刃斧子。はもないをのをひねり出して、これは禮拜を云ふたのじや、この禮拜が最毒

一七

なり、高豎降旗、又一遍するが故に、かうさんした様なことを云ふたとこれは虚堂でなくば見えまい。

擔一片板。檐板漢で、一代をあだに了らせんと、中間底と云ふ、板をになはして融通のきかぬものにしてしまふたであらう、「好評なり、子細に參究すべし」と、珠長老も抄してゐる。

大士生日。傳大士は南齊の明帝建武四年五月八日生る、日本の仁賢天皇十年丁丑に當る。

嵩頭陀。嵩頭陀が何れの日か當に還るべきと云ふたよりこのかた、ひつこんでしまへばよいとなり。

貧時舊債。毘婆尸佛のみもとに共に、誓を發せしことを舊債と云ふ一切を度せよと思ふた、古借金得力省覺のものがあれば、富貴と云ふものなり

六臂にして、其の來機を盡すも、也た爾が湊泊の處なけん。何が故ぞ。三尺の喙を將つて、五湖の僧を罵倒するに慣ふ。」

上堂、擧す、雲門、衆に示す、「直に觸目滯りなきことを得れば、名身句身に達得す。」

一切の法は空なり、山河大地は是れ名なり、名も亦不可得なり、喚んで三昧性海俱に備ると作す。猶ほ是れ風なきに市市たる波あり、直に知を覺に忘ずることを得れば、覺即ち佛性なり矣、喚んで無事の人と作す。更に須らく

向上の一竅あることを知るべし。師云く、「雲門大師、今日、爾諸人の髑髏裏に入つて、横三堅四すれども、爾が不覺不知なるを見て、乃ち云く、土曠く人稀にして、相逢ふもの少しと。」

解夏小參、僧問ふ、「長期已に満じて、布袋

山上に五つの峰ありといふ、大原府の五臺山なり、今の山西省にあり、文殊が垂迹の山なりといふ、文殊は理智圓融の菩薩である、理は心の體なり、智は心の用なり臺山の路上とは五臺山へ行く路すがらどう行けばよろしいと問ふたり、これを祖宗門下に於ては死活當頭の二路、大智の發する處を云ふなり、圓智圓理の一路本有の路を、活文殊の境界を問ふたるなり、この公案は無門關にも出でゐる。

○ 齋直去。まつすぐにゆきなさいといふ、これは當頭の一路を指すなり、こゝで此の僧にすこし活機あらば婆子をはねとばして去るべきなれども、纒に行くと三五歩とはてぬる、そこで婆子は好箇の師僧も恁麼(あれもあ、ゆく)にし去るとは能く心得られたる御坊様

好きものがない。再揚家醜。夙世の悲願を満つるが爲に、再び佛家の大化を稱揚す。龜と説き細と説く、我が家の大事なり。○ 空手鉦頭。これは傳大士の法身の頤の上の二句なり、下の二句は「人從三橋上一過、橋流水不レ流」これ圓融一際の際界、蓋しこの偈は本法身の理を明すのみ、今拈起して大士の眞法身を見んと要す、これは無相の義を云ふたるものなり空手の處がはやすきのあたまを把つたもので、歩行の處が則ち水牛に騎たもので、これは華嚴の四法界が手に入ると、この様なことはからよいのことじや、法性現前すると面前了了と、此の句通りが見える。○ 臺山。この山は支那の高野山ともいひうるものなり、この

頭開く、江南江北、舊に依つて水郷。黄葉黄花、秋色に非ずといふことなし、學人便ち與麼に去る時如何。師云く、「地を掘つて深く埋まん。」僧云く、「與麼ならば則ち、柳栗横に擔つて人を顧みず、直に千峰萬峰に入り去らん。」師云く、「露濕ふて艸鞋重く。」僧云く、「若し、芳餌を垂れずんば、争でか碧沼の深きことを知らん。」師便ち喝す、僧禮拜す。

師乃ち云く、「一葉落ちて天下秋なり、奴を認めて郎と作す。一塵起つて大地收る。猶ほ跡の在るあり。初秋夏末、直に萬里無寸艸の處に向つて去るべし。乾茅火を引く、門を出れば便ち是れ艸。人の富貴なるを見て、常に懽喜せよ、心頭を把つて火の焼くに似せしむること莫れ。恁麼恁麼、四路の葛藤

たちよ、百千の佛祖も我れもおまへさまも、此の一路をばかやうに去ると、この僧の一向足もとが定まらぬやつよとした、か罵破するなり。○ 勘破了也。検査してしまふとか取調はまうすんだとかの意。勘は元罪人を鞫問するより出し語なり。○ 寸艸不生。自分の地位に居して劍客を待つ洞山の所謂萬里無寸艸處なり、何の要害もなき處に龍虎の陣か偃月の陣かを張つた、こはものなり。これは蕪直に去るといふを評したじや」と珠長老はいへり。○ 不施韜略。六韜三略の兵法を施しませず、前僧の模様で直に婆子を勘破せんとおもふたさて交鋒の際に婆子に出逢ふて大にしくじつた。○ 又却失利。へらずぐちをたゝどどこじやない。どこか利を

失するか。しくじりながら云ふことなり。○ 別人棺木。他の死人を内へかきこんで、ないてゐるにひとしいと、自分には何の所得もない、自己勘破の分なし。○ 爲趙州。趙州のかたんずるものがある乎、趙州をたすけるものはあるかと。○ 勘過了。一道は一列の義、趙州も婆子も及び、作主底も共に一列にぶつてやらうにと、「和尚の棒、誰をして喫せしめん」と珠長老はいへり。○ 水中鹽味。この語は傳大士の心王の銘にあり、此の次の句に云く、「決定是有、不見見三其形一心王亦爾、身内居停、而門出入」とあり、人々此の通り、諸佛の心性を具して居れば水中の鹽の味の如し、膠が醬の具の彩色の青黄等の中にありとも、にかはの色は見えぬと

①一時に拈却す。不恁麼不恁麼、九旬の功用、驗今霄に在り。②十洲三島遊に任せ鴈蕩天台出沒に従す。③只だ雲門の我れに九十日の飯錢を還し來れと道ふが如きんば、又作麼生。

復た擧す、黃檗因に臨濟辭す、檗云く甚れの處にか去る。濟云く、是れ河南にあらずんば便ち是れ河北。檗便ち打す、濟棒を約住して遂に一掌を與ふ。檗呵呵大笑す。侍者、百丈先師の禪板拂子を持ち來れ」と喚ぶ。濟も亦、侍者、火を持ち來れ」と召ぶ。檗云く「汝但ぞ將ち去れ、已後天下の人の舌頭を却すること不在らん。師云く、明投暗合することは、則ち二大士なきにあらず、爭奈せん久しうして弊を成すことを。寶林に僧ありて、

同じで、脱躰現成の時向上宗乗の大事がある、知るものは知るで、まことに鹽味や膠青の如くなり。

②祖師只認。祖師は傳大士を云ふこの段では佛でも似せものを、水中の鹽味の何のかの云ふのは相似は似よりなり。

③楚人以鷄。昔時楚人が山鷄を擔ふてとほりしに、路人が問ふ。「何の鳥ぞや」と、之を欺ひて曰く、「鳳凰なり」と、路人曰く我れ鳳凰と云ふ鳥は今始めて見る、汝之を賣らんや請ふ、千金を償はん、與へざればもつと金を出す」と、之を買ひ之を楚王に獻せんと欲す、一ばんで死んでしまつた遂に王之を聞いて召して厚く之に賜ふ、鳥を買ふの金に過ぐることを十倍すと、これと同じで、まがひものでごまかさうとするなり、之とかはつた

ことではないと。
④三頭六臂。我者裡、この虛堂のところでは、たとひおまへたちが不動に成りても、降三世明王に成りても、傳大士をさしてなんぢと云ふ、八部衆三頭六臂なりみな奇形。
⑤盡其來機。神通三昧を、しつくしても、吾が宗では爾がつまだてさするまでもない、傳大士ばかりではない佛祖ともに、溱泊は碇泊のこと無溱泊處とはとりつくしまがないといふこと。
⑥將三尺喙。喙は音けい、鳥のくちはし、長きときは鳴くこと能はず、口まめに人の是非を云ふなど、五湖と云ひ四海と云ふはすべて惣天下の事、天下中の坊主共を罵り倒すが慣ふはくせになつてゐる、五湖は支那には大なる湖水が五つあるところより云ふたるも

の開山の居士でも許さぬとなり。
②雲門示衆。これは雲門録に出てゐる「この録中の名語じや」と珠長老はいへり。

③直觸目滯。直に法身を得ると、うんと云ふてもすんと云ふても、泣いても笑ふても、眼處に於てとりまはさうことなしや、直得の二字を「たとひ」と訓するかな付けもある。

④名身句身。「名は自性を詮す、句は差別を詮す」と、成唯識論にあり、身は依聚を義とす、名は能説の法、句は所説の法、これみな幻法也と達得するなり。

⑤一切法空。已上の名句とも幻法なれば眞實の妙法にはあらず、故に達得したる上においてみれば、わいわい云ふところに靜なところがある。

⑥山河大地。堂じやの宮じやの、松じやの杉じやの、男や女やのと名を付けたもの、名亦不レ可レ得とな

り、空名なり。

⑦喚作三昧。「三昧は定性、海は慧、俱備は圓明じや」と珠は云ふ、三昧は此に正定と翻す、亦正受とも譯す、「言は一切法空の眞理を證して、諸の名句を受けず、正定に安住するときは、性上無量無邊海の功德、俱に備つて、皆慧明を得るなり」と龍溪は注せり。

⑧猶是無風。一は周なり、無事に事を生ずるなり、市市はうちかへし／＼なり、まだ／＼なさないことには、ふつと津波が打つて家財がしまはるゝことがある。

⑨直得忘。分別して知るのを知と云ふ、自身に覺するを覺と云ふ、知は隻手の聲を聞いた處なり、本覺の自性を忘れることができれば、覺はず佛性である、楞嚴五の上「知見無見斯れ即ち涅槃の意也」と、さると云ふこともなく、悟らると云ふこともなしと、喚似ニ無事人ニで、無爲無事、凡夫中間

はぬけたと。

⑩向上一竅。竅は關、竅は關要の義、穴なり、向上の一路と同じ。

⑪備諸人。雲門大師が即今日備らるがほていつばらの中に入りてと、鬪機は五臟六腑なり、横三豎四とはよこに三返、堅に四返、たてよこ十文字にけりまはられて、見二爾不覺不知一でいたいたいとも痒いとおぼえずしらず、死人同様なるを見られてとなり。

⑫乃云土曠。そこで云はれるには、京も田舎も、ところがひろうて、人もちらほらてであふものも、一向すくないと、これはつまり知音なきの義、雲門の示衆と虛堂の評とはたてが違ふたやうなこゝに妙がある。と珠長老はいへり。

⑬長期。閏月あるゆゑなり、長期は百二十日、中期は百日、短期は九十日。

⑭布袋頭開。雲水のものともときほどけてに比す、禁足安居の自恣の

目を云ふ。

⑦ 江南江北。あちらへ行つてもこちらへ行つてもなり、依レ舊水郷とは皆澤國の故に、水澤山なり。

⑧ 黄葉黄花。程途の時とて、一條に展開する物々全眞なり、古歌に「なにとなく心ぞとまる官城野は、花のいろ〜虫のこゑ〜」と、みなものが便ち與廢(そういうよう)には、此の如く脱體現成のときとてござると。

⑨ 掘地深埋。虚堂は之を把住して、生死煩惱にからまつてゐるから、地を掘りて七尺埋めんと、僧の見處を招く。

⑩ 御栗横擔。與廢(さやう)ならば塵遁仕りますでござりませうと、御栗は栗に似た木にて、支那ではよくこの木を杖に用ふる、この一本の杖を擔ひて、千峰萬峰、奥深き山の中に入りて、白雲を友として宇宙の美觀を讚美しやうと云ふ意。鏝艸濕鞋。秋の露で、濕ふてわら

ちが重たい、まだ〜足が重たい。若芳餌。問はずんば知らずとなりよきゑさを以て釣を垂れたればこそ、碧沼湖水の深いことがしれた口を開いて問へばこそ、法海の甚深がしれた、芳餌は學人に、湖沼は虚堂和尚自らに比す、しかし虚堂は便ち喝して「くそぬかせ」と、直下に那箇の消息を示さる。

⑪ 葉落。桐「葉落ちて天下の秋秋をしると、蓋し聰明の故なり、眞淨の語なり。

⑫ 認奴作郎。これは下語である、ちやうど下男をつかまへて檀那とするやうな事、若し聰明を取らばとなり。

⑬ 一塵起。これは洛浦和尚の語。雲門錄上に見ゆ、これは頓機なり、一點の塵があつても、地が包含されてゐると云ふこと、宇宙の眞理なり。

⑭ 猶有跡在。かやうに頓利頓發なるも猶ほ蹤跡の在るあり。

⑮ 秋のはじめ夏の末、これより洞山の語。

⑯ 萬里無寸。草一葉、穀が一とめもないところむいて行け、これは洞山の示衆をこゝに出して云ふ、この録の徑山後録に見ゆ、正位なり、正中來なり、掃蕩貧窮底。

⑰ 乾茅引火。これは習氣の滅盡せざるに喩ふ。無寸艸の本地を認む、同氣相應の義、枯れたかやには火はつきやすしと。

⑱ 出門便是艸。これは洞山無寸艸の代語、石霜の語、建化門爲三富貴。一兼中至なり、門は建化門なり、富貴底なり。

⑲ 見人富貴。鬼家の活計なれば、腕酒を認むる故に、こゝに位がある。兼中至なり、人の富貴を見ては、常によろこぶべしと、嫉妬や瞋恚の心を生ずるなど、之を猛火のやうに似させるなど、石霜冷地に此の語を下す、次に嫉妬を生じて瞋恚を發するに似たり、この兩句

は古語なり。

⑳ 恁麼恁麼。さうだ〜と、物を肯定することば、支那の唐宋時代の俗語である、瓦礫も光を生ず、恁麼は建立、これほ縦なり。

㉑ 四路葛藤。上の一葉落ちてより以下、の古語を擧げて著語するなり、眞淨、洛浦、洞山、石霜。

㉒ 一時拈却。拈却は掃蕩、ひとくくめにうちやつてしまふ。

㉓ 不恁麼。さうでない〜と物を否定することば、唐宋の俗語である。眞金色を失ふ、不恁麼は掃蕩、これは奪なり。

㉔ 九旬功用。九十日の骨折も、悟未悟透不透も、今宵は結算の金拂なり、これは不恁麼を以て試験する也。

㉕ 十洲三島。これは四海九州、あすからは、心のまゝに、いづくなりとほしいまゝに遊べと、十洲は海外、諸國の附く所、一には祖洲、二には瀛洲、三には玄洲、四には長

洲、五には炎洲、六には元洲、七には生洲、八には鳳麟洲、九には聚窟洲、十には檀洲、三島は延福錄に見ゆ。

㉖ 鴈蕩天台。鴈蕩は浙江温州府にあり、此の山天下の奇秀。谷遂うして峰疊あり、谷に十八寺を列らぬ同じく臺州府に天臺山國清寺、天封寺等の名刹あり、高野山へまゐらうとも叡山へ上らうとも、それはかまはんと、解夏請暇分散底なりと。

㉗ 還我九十。又作塵生、雲門大師が道はれたやうに、汝等が分散し去るに任すと雖も、今夏の中の所得如何、若し無所得ならば徒に佛飯を費したるなり、さあおれに九十日の飯代をかへせ。さあどうじやと。

㉘ 黄檗。この語は臨濟録の行録に出づる語なり。

㉙ 不是河南。珠云く、「一顆の明珠じや」と。

㉚ 槩便打。珠云く、「駕三與青龍」。

㉛ 約往棒。臨濟は黄檗のもちし棒をひとらまへて、一掌は手のひらでびつしやりと一つまいつた。此れは是れ臨濟打斧之拳なり、「たゝかせぬとは出来したりな」と珠はいへり。

㉜ 呵呵大笑。おのれ横ぢやくものめと「是れ證明か嘲笑か」珠は云へり。

㉝ 百丈先師。百丈は黄檗の師、「その傳來の禪板と拂子とを侍者にもつて來い」と、これは臨濟を印可をしてやるに依つてとなり、拂子は臨濟録には几案に作る、これは付法の信證なり、禪板は佛制には倚板と云ふて、除勞の爲に畜ふることを許さる、そのつくり方は三尺ほどの板にて作る、今は除眠の具とはなり、業林に用ひてゐる。

㉞ 將火來。臨濟はなんの禪板の拂子のと、なんのみたくもない、なんの印可のじや、火でやいてこまき

出で、辭せば劈脊に便ち棒せん。何が故ぞ、寧ろ堂上に苦生すべくとも、終に人を引いて艸に落さじ。

上堂、擧す、雲門因に僧問ふ、「如何なるか是れ超佛越祖の談。門云く、「胡餅。師云く、「弓を傷らるゝの鳥は、曲木を見て高く飛ぶ。人あり、雲門に見え得ば、善く我が爲に辭せよ。」施主、田を捨して、達磨忌を建つる上堂、「達磨大師、汝諸人の飯を喫して鼻孔裏に向ひ去らんことを恐る。所以に得得として西天自ら來つて、既に見得分曉せしめつて、還た西天に復り去る。今道人、劉善富といふものあり、路不平を見て、膏腴を捨して常住に入る、年年此の日に於て供を設けて、他の鼻孔を穿たんことを要す。今第一供に當れり、且く

うと、火をもつてこいといへり。天下人。世間の人が、臨濟は黄檗の直傳ではあるまいなど云はんとときの證據に、此の禪板や拂子を見せたならば、信を天下に取らんとなり。明投暗合。機相投合すること、黄檗臨濟の二大士が、明暗等の諸處に於て、師資の道が互に相呈露する。争奈久而。どうも、しかたがない、末世に成りて、烏焉馬となりて、にせが澤山できてはと。有僧出辭。この寶林が處で僧がありて、けふ請暇をするものがあれば、せなかをくだけるほど、棒でぶつてやるに、何が故ならばと。堂上苦生。珠云く、「此れは大事の拈語じや、なくてはならぬ子細あり、其の故に虚堂の法

は今日でも盛んじや」と、これはたとひ法堂の上に艸が一ばいに生えても、無雜作には印可はせぬぞよとなり。終引人。今時は法がおとろへて、東道西説する故に、特地にことさらに全提し、之を救はんと要するなり」と龍溪は注す。超佛越祖。佛も越し祖師も越した談話で、絶對も相對も超越した説はどうでござると、佛臭くない祖師臭くない御談をうかどひますと。胡餅。白胡麻饅頭なり、一つどうです、これも佛臭いかと胡餅ともかく、支那では外の皮に白い胡麻をつぶした饅頭を製するが是なり、不立文字と口さきばかりでは面白らござらぬ、實際社會に於ての有様や思想界の趨勢は、屁理屈ばかりでは満足は出来ませぬ

道へ者の老子還つて來るや也た無や。拄杖を卓して、金屑貴しと雖も、眼に落ちて翳と成る達磨。初忌の拈香、六宗の執を破して、道五天に被らしむ。二祖の疑を斷つて、光華夏に流ふ。以て齒を撃たれ毒を服することを致す。何ぞ斯に由ることなき。言ふことを休めよ、隻影流沙を渡る、熊耳峯前月晝の如し。瓣香杯茗、遺音を追慕す、一念萬年、眞風墜ちず。上堂、擧す、黄檗、衆に示す、「汝等諸人、盡く是れ唾酒糟の漢、與麼に行脚せば、何れの處にか今日あらん。還つて大唐國裏に禪師なきを知る麼。」時に僧あり、出で、「云く、「只だ諸方の徒を匡し、衆を領するが如きんば、又作麼生。」槩云く、「禪なしとは道はず、只是れ師なし。」

との間なり、碧岩の七十七則にも出でゐる公案なり。傷弓之鳥。あらおそろしの胡餅やなり、これは史記かなんぞに出でゐる語なり、「胡餅の下で悟つたと聞いても、身の毛がよだつ」と珠は云へり、「舉動有禮、曲木の下を過ぎてわしりて之を避く」と宋の徐伯珍はいへり、雪竇も「超談禪客問偏多」と頌せられた。善爲我辭。これは論語の雍也の篇にある季氏と閔子騫との問答にある、使者をして善く己が爲に辭せしむるを云ふ、龍溪は「今此の話を聞いて見ゆることを欲せず」と註す、珠長老は其の胡餅、とんと望みがござらぬと云ふ。建達磨忌。十月五日の達磨大師を御祭する法要を建立するなり。喫飯鼻孔。達磨さん皆のもの

が、只だ教義に依りて悟らんとして飯を食ふに鼻に飯を食ふことを氣の毒に思召されてとなり。得得。わざ／＼西天からござつた、それは支那には大乘の根器ありと知りてなり、既見得分曉了とは支那では二祖惠可を始めとして皆のものをして法を傳へしめ。また故郷戀しとおかへりになつた。劉善富。大檀越がありて寶林寺の常住の太平でないのを見て、捨膏腹は上田を捨施して、常住は臺所に入る。穿他鼻孔。他の鼻の孔を穿開し、氣息を通ずるの義、他とは祖師に差排するなり。今當第一供。今日は御齋の始まりなりと。者老子。者の老子は達磨大師が還り來りて、供を受けめさるや、そこで虚堂は拄杖をば

師云、「箇の些子の説話、蹉過するもの多し。眞點胸の道く、霧豹毛を澤しうして、未だ嘗て食に下らず、庭禽勇を養つて、終に人を驚かさんことを待つ。也た只だ其の士を養ふの心を知つて、死灰裏の火蛇の面を焼くことを知らず。透得せば親しく黄檗を見ん、然らずんば切に忌む、唾酒糟の漢の處に向つて會し去ることを。」

冬至小參、僧問ふ、「文殊は是れ七佛の師、甚に因つてか女子の定を出づること得ざる。」師云く、「家鬼祟を作す。」僧云く、「罔明は是れ下方の聲聞、甚に因つてか却つて出し得る。」師云く、「半幅全封す。」僧云く、「不落因果、甚に因つてか野狐に墮す。」師云く、「池を鑿りて月を待たざれども、池成りて月自ら來る。」僧

云く、「不昧因果、甚に因つてか野狐を脱す。」師云く、「錦に特石を包む。」僧云く、「老觀、僧に逢ふて麵を引く時如何。」師云く、「錢あれば鬼を使ひ得て走らしむ。」僧云く、「魯祖、僧に逢ふて、面壁する時如何。」師云く、「寸艸生せず。」僧云く、「學人今日、小出大遇といつて便ち禮拜す。」師云く、「腦後に一錐を少く。」乃ち云く、「衣穿つて肘露はれ、戸破れて家残ぬ。」否極り泰來ることを知らんと要せば、自然に時あり節あり。衲僧家更更夢を做す、一日、一日を越得せば是れ好手、誰か管せん、爾が布視洗ふに懶く、臥單を展べざることを。縦饒ひ、十二時を使ひ得るとも、贏ち得たり口邊に白醜を生ずることを。寶林與麼の告報、只だ淨潔の毬子を打す。和泥合水して、物と

んとついで、達磨來也と。金屑雖貴。なんほど黄金のかなかそが結構でも、眼へはいつたならば眼病となると、龍溪は「認取せば不是なりとの釋義」を註す。「達磨が來ても釋迦が來ても、寄せつけんと云ふ勢じゃ」と珠は云へり。一絲云く、「金屑は佛の言句なりこれを求めて入道の助とせば翳膜となるべし。」

初忌。田地寄進の初めの達磨忌第一供なり。六宗之執。これは正宗記や達磨傳に其の國に僧あり、佛大勝と云ふ、六宗を建つ、一に有相宗、二に無相宗、三に定慧宗、四に戒行宗、五に無得宗、六に寂靜宗と、學者之に趨くもの甚だ多し、その徒各千百に下らず」と、達磨一一其の執着を拆破す。五天。五天竺中に單傳心印の

妙道を光被せしむ、これは西天の事迹なり。

二祖之疑。それから二祖惠可大師の安心等なり。

光流華夏。見性成佛の光明が華夏乃ち支那中に流布すこれは支那の事跡なり。

擊齒服毒。傳説に達磨が支那に來りて、流支光統等の諸法師と論議す、法師等、論に屈せず、當門の兩齒をうちかくと、これは傳説に止まるといふこと、服毒のことは、第二忌の語に見ゆ。

何莫由斯。この本分の道に出ることなきが故に、此の難を受け玉ひしなりと。

隻影流沙。隻影は獨身をいふ流沙は沙州の西八十里に在りその沙、風に隨つて流行す、故に流沙と云ふ、尊者は梁の大通元年に熊耳山に葬る、其

の後魏の使宋雲といふもの、西域より歸る、達磨と葱嶺に相過るときは、その獨隻履を携へて威儀を備へて征くを見る。

熊耳峰前。熊耳は鄭州で、河南省の中の少林山五乳峰、嵩山等列立するなり、「眞箇の面目、儼然として明白なり」と龍溪は註す。

瓣香杯茗。それで報恩の爲め一ひらの香を炷き一杯の御茶を備へると、其の微供を謂ふ瓣は切れなり、茗は茶の芽なり。

追慕遺音。遙に其の德音を飲み慕ひ奉ると。

一念萬年。念は刹那、此に念と譯す、千古萬古の心、今古變らぬ。

眞風不墜。一念萬年、終に宗旨遺風は、どこまでも地におちずとこれは祝語のつもりで

虛堂がいはれたるなり。

唾酒糟漢。これは唐宋時代の俗語で、圖悟の評唱に「唐の時愛して人を罵しるに唾酒糟漢と作す」といつてゐる、善意で人を罵るの意である、日本の俗語「さかしほに酔つたやつ」と云ふに似てゐる。行脚は諸方を徧歴すること、黄檗が座下の禪僧達に向つて、

お前達は「さかしほねぶり」と云ふやつなり。あの寺に百日この寺に五十日と方方歩きまはつてばかり居るが、そんな乞食雲水は何時までたつても悟りの一つも開けるやうなことはない、今日あらんとは安心立命乃ち立脚地は何處に行つたつて、手足を安ずることが出来やうか、伸ばすところ

が出来るものか。

大唐國裏。この大唐國中に、參禪の師家などを尋ねても一

人もをりはせぬぞよ、それがお前達には分らぬか、大死一番底の漢でなくばと叱りつける、すると一人の僧が飛び出して、現に大唐中に處々方々に陣を張る師家が澤山ござります、あれはみな大禪師ではないのですかと。

⑦不道無禪。いや禪がないとは言はぬが禪は天地間に充滿してゐる、目前に露布して居るが、唯だないのはその禪を教へるよき師家なしと。

⑧些子說話。この大事のはなしは蹉過するもの多くして、あやまるものが澤山なりと、やりすごすことしくじるとも失敗とも譯してよい

⑨眞點胸。翠巖、可眞は慈明圓に見えて來りて、爽氣逸出、機辨迅捷で、氣諸方を壓す、人眞點胸と稱す。

⑩霧豹澤毛。この事は興聖錄にも見ゆこれは眞の衲子は長養聖胎で、容易にいかなく餌はみをはせぬ

殊は深く善權に入りて衆生を化す故に道をば未だ取らずと。

⑪因甚女子。文殊が女人を三匝し、指を鳴すこと一下す、そこで托して梵天に至りて其の神力を盡せども、而も出づること能はず、世尊云く、「たとひ百千の文殊なりとも、亦此の女人の定を出づること得じ」と。女人の定とは業識の正定なり。元來無作の妙覺の位に近きことなり。神通力の及ばざることろなり、それで世尊はたとひ百千文殊でも、智見を以て出さんとせば出し得まじと、古則にある女子出定なり、無門關に出づ、參照せよ。

⑫家鬼作祟。「家の鎮守、虛堂門下の大事じゃ」と珠は云ふ、女子の自作自受なりと、女子の定相を表す或抄には「家の先祖などが鬼と成り、却つて崇るなり、文殊は大乗なる故に、大乘が崇る」と。

⑬罔明是下。罔明は頌古の部には委

黄檗が爲人手段は心切なりとのことを比して云ふ、把住底なり、「眞胸點は黄檗の老婆心切なる、大用をば知らぬ」と或抄に見ゆ。

⑭庭禽養勇。靈禽輩ばす鳴かずなり遅かれ早かれ、終始の處に世界國土の人を驚き動さんことを待つてゐること、黄檗が氣を養ひ物を隠して居るを云ふ、これも把住なり

⑮也。只知。これから以下虚堂の評、只だとは、眞點胸は養士の心で、衲子をそだてることは知りて居るがと、翠岩は語意を拈破するなり言るは翠岩は只だ黄檗の自ら雄機を養ひ得るを知りて、這の僧をして、冷地に禪中の師に見えしむることを知らずと。

⑯死灰裏。水がめから閻魔王の鬚に火がついたことはしらぬ。死灰はひえきつたはひの其の中に火蛇は火のもえ上るなり、かほを焼くのもしらなんだ、これは禪の中に

しく出づ、四十二位の初位を下方

と云ふ、十地の初めの觀喜地なり初心の菩薩なり、世間から見れば何の事か分らぬが、遂に佛は罔明に勅して文殊のするやうに、女人の前に於て指を鳴すこと一下す、女人に立ち去れと云ふ、女人は是に於て定より出でたが、たゞ出でよと云ふたので、出たままで、別に何でも心持も無きことなり、罔明の無智と女人の業識と流通するなり、自然の時節なりと、是れが正定は是の如く見るべきなり、白隠の歌に「きかせばや信田の森の古寺の、さよあけ方の雪のひびきを。」

⑰半幅全封。半幅の紙を以て全くの封皮と作し露はさざるなり小乗の罔明が女子の小定を出し得るが如し。

⑱不落因果。これは百丈野狐の話とて、やかましい公案である、人間ではござらぬ、過去の迦葉佛のと

師のあることを知らずとなり、「大悟の端的を表するの語なり」と龍溪は註す。

⑲透得親。黄檗の示業や虚堂の評唱をばなりと、死灰裏のところを、見透さにや、まのあたり黄檗には御目にかゝれまいと、然らずんば乃ちさうでなくては切に忌む、いや／＼ながら唾酒糟の漢の處へ行つてしまへと、「一向に呵罵の處に就いて領會すべからず」と龍溪も註してゐる。言句の上に向つて會するなと云ふ心なり、あながち唾酒糟の處にあらずとこの話は碧岩の十一則に見ゆ。

⑳文殊是七。これは普超三昧經に云く佛の言はく「我れ今佛身を得る皆文殊の恩、本是れ我が師、過去無央數の佛、皆其の弟子、當來の者も亦これ恩力の致すところ、文殊は即ち佛道中の父母なり、爾時衆念へらく、文殊佛前に在りて、何ぞ成佛せざる耶、佛の言く、文

き、釋迦已前にこの百丈山に住してゐましたものなり、その時、ある學人が大修行底の人は還つて因果に落つるやと問ふたとき、私は

不落因果と云ふたその罰で五百生野狐身に墮しました。なんと、和尚さまどうぞこの野狐に代りて一轉語を與へ玉へと。

㉑鑿池待月。「これは野狐心にたとふれば、受生の端的を云ふ任運受生は月の池に沈むが如し、求めずして殘勝至る、是れ自然相應の境界今墮を以て相應の順境界と作す頌古の部の調達の則の如し」と龍溪は註す。

㉒不昧因果。百丈和尚は不昧因果と仰せらる、中々因果歴然じゃぞと也、只だ凡夫の因果に落つるとは別なり、凡夫の因果は因果に繫留す、善知識の因果は因果に繫留せられず、因に落つるかとは因果に果に果に落つるかとは因果に、玉の盤に走るが如し、生死岸頭に

俱に化する底あること莫し麼。近前來、我れ爾を識らんことを要す。良久して、拄杖を以て畫して云く、「將に九仞の山を成さんとして、一箕の土を進めず。」

復た擧す、明招衆に示す、衆纒かに集る。招云く、「者裏風頭稍硬し、且く暖處に歸して商量せん」といつて便ち下座す。衆隨つて方丈に至る、招便ち打つて云く、「纒かに暖處に到れば便ち瞎睡を見る。」師云く、「暗鳴叱咤、萬人氣索くることは、則ち明招なきにはあらず、只だ是れ未だ甲を棄て兵を曳く者あることを見ず。同死同生底あること莫し麼」といつて、喝一喝。

於て大自在を得と云ふも同じ無因果と見れば空見なり、惡見なり、故に野狐身におちるなり、こゝで不昧因果はうけたまはりて、野狐身を脱して死んだ、あくの日僧の亡者の式を以て禮葬をせらる。

三〇
いました、「觀曰く、是は即ち是、祇だ一概を得たり」と。
有錢使得。放行如意なり、珠云くやかましいことを云ふな

天泰を明め得れば、吉にして利あらずといふこと無けん。然らずんば、岫巒峰頭神禹の碑。天基節上堂、「風に磨するも劫石堅うして猶ほ潤ふ、雪に傲つて孤松韻轉た青し、四海隆平にして煙狼靜なり、斗南長く見る老人星。」

棒少はゆるす與へてくれんものぞと、禮拜をおさへた。
一衣穿肘露。延福錄の襟を捉へ肘を見るの類、徹骨の貧窮淨

と無事でよい。
布裙懶洗。この二事は報恩錄に見ゆ、それにはかまはぬ、精をだせ、玉泉の故事と鏡清の故事となり、誰か節せんは爾に任するなり。

作する底を超出して更に高きこと一重なり、俱に化する底と無事底があらんとはなり。

① 將成九似。まあこちらへ來い、我は爾等を試験しようとおもふてゐる、とやゝ久しうして主丈で、一まはりとなつてなり、似は八尺を云ふ、七十二が九似か、さうではない、大きな山なり、一簣は一つともつこの土をもちあげもせぬこれは衆を警策する爲に云はれる。言ふは山成りても但だ一簣を少くその止むもの、吾れ自ら止むのみ「蓋し學者自ら強ひて息まざるときは少を積んで多きを成す、中道にして止むときは、前の功盡に棄はと龍溪は註す」この語は實に絶唱難々と珠は云へり。

② 明招。名は德謙、羅山閑に嗣ぐ、閑は崑頭峩に嗣ぐ、徳山四世なり。者裏風頭。きびしい者裏はおれのところ、禪堂か法堂かを指すならん、寒風が稍乃ちちく／＼かたい

の智光を回復するときは、則ち陰暗の惑障、自ら剝盡す、故に吉無不利なり、地獄も天堂もと。珠云く、「面前了了分明なれば、何でもかでも、吉無不利じゃ」と。

③ 响壁峰頭。然らずんばさうでなくばなり、衡州府の响壁峰は高一千五百丈と云ふ高山なり、別名は南嶽といふ、これは禹が天長地久、國泰民安の八字を刻める碑あり、此に云ふは長劫久遠須く修練すべきを云ふ、方語無分曉と云へり、字が磨滅してよみにくいから、この方語があるものなり。

④ 天基節。理宗の降誕正月五日。風磨劫石。風磨するは寶祚の長久なること、風が(劫石はごつ石ともいふ)固きことが劫石をする如くに堅固で、石のせい、つや／＼してゐるやうに、御目出度いと申し上げるなり。

⑤ 雪傲孤松。萬年の松を以て聖跡の寶算にたとへ雪が松におもるやう

強きで、たまらぬ、またぬくい處の方丈へうつりて商量をしようと云つて、法座を下られた、大衆はその方丈へついてゆくと、招はんと拄杖をついて。ちよつとぬくところへきたと思へば、はやぐう／＼ぬむりをする、是れは大衆は未悟の處にたとへて云はれる也。

⑥ 暗鳴叱咤。鳴は唾に作るべし、大いにしかることなり、史記の項王暗鳴叱咤千人皆廢と云ふが如し閻魔王の怒りうなるやうな、うぬめにくいやつと憤る、暗鳴は虚堂の作用なり、叱咤は明招の機鋒。⑦ 萬人氣索。氣を失ふて、おそるゝこといきもえせぬこと大活機用は敵し難き也。⑧ 則不無明招。此の如き大活機用は明招に於て見るべしと。⑨ 只是未見。なさないことには、其の威に觸るゝものなし、棄甲曳死兵とはよろひをなげすて、戎器

をすて、敗走するの義「明招がうなる下に、煩惱も菩提も迷悟も打ち捨て、仕舞ふものがない、むだ狂言じゃ」と珠長老は云ふ。⑩ 同死同生。「明招が知音相應底なり、喝一喝と虚堂自ら知音と爲る底、この金剛王寶劍の喝は知音底の機用を示す」と或る抄に云へり。⑪ 寥寂之景。群陰剝盡して、又命根盡き大死一番し、蘇息し來た上なりこれは世縁の闊熱を杜絶してとなり。⑫ 清白傳家。清廉潔白を以て吾が納僧家に傳はるなり、祖々傳來なり、むまみがない、無欲ですりきつたところなり。⑬ 應萬緣。無心にして縁に應ず、全く世累なしで、石人も掌を拊ち露柱も點頭して稱賞すと、珠云く、「面前六塵の諸法に少しもさへられざるときは、石人も拊掌をよろこぶ」と。⑭ 明得地天泰。一陽來復なり、陽明

にいささきよきゆゑ、風がふけば松風が韻く、その音が轉た青しとは其の堅固不變を表していふ。⑮ 四海隆平。天下中が盛隆太平で、煙狼はいくさのろしもあがらず静謐であるゆゑなり。⑯ 斗南長見。南極の壽老人の一星は天子の御寶算御長久に比し奉る。⑰ 入出不深。出家、此れが大事なり、重々無盡、百煉千鍛。⑱ 見山不脱。成道、悟りなり、見地が昏うては煩惱の臭みも菩提の臭みもとれにくいと。⑲ 引得漆桶。漆桶は無明にたとへるもの、わからぬものなり、後代の宗習の兒孫なり。⑳ 排頭忘想。排は列で、つらねてかたばつしから、定坐觀心の忘想がとれぬ。㉑ 有箇見處。寶林は釋迦のはじすゝぐことを知りて居ると、只是不説とはこれが不説は見處の端的なりなぜならば。

⑳ 臘月苦寒。即今はおしつまりて、しはすのことなれば、風雪の苦みにたへられぬ、急々に身を抽づるも、早くこれ遅じと、にはかに身をおつたてゝ方丈にかへるもはやこれ、遅くなつてしまつた、この故に説き出す間がないと其の意味は別に長し」と龍溪抄にあり。㉒ 僧問雪覆。これは僧がむかし曹山本寂禪師に問ふた、答へて云く、「須らく異中異あることを知るべし」云く、如何なるか是れ異中の異、答へて云く、「諸山色に墮せず雪がどのやまもこの山も一ぱいっもりしに」と。㉓ 孤峰不白。一つの峰ばかり黒いのであらうか、なぜなればと。㉔ 龍王多少。珠云く、「雲を拏ひ霧を擣むの勢あり」と、曹山と云ふ人は、すさまじい八大龍王を尻にひつして、大雨小雨をふらせる、風は威風なり。㉕ 大小大。さすが、さばかりのなど云

利。師云く、「手臂終に外に向つて曲らず。」僧云く、「普化木鐸を揺して、空に騰つて去る。」未審し甚麼の處に向つてか去る。師云く、「三九二十七。」僧云く、「畢竟甚麼の處に向つてか去る。」師云く、「人の屎概を咬む、是れ好狗にあらず。」僧云く、「學人今日、小出大遇」といふて便ち禮拜す。師云く、「窮鬼子。」乃ち擧す、百丈因に僧問ふ、「如何なるか是れ奇特事。」丈云く、「獨坐大雄峰。」僧禮拜す、丈便ち打つ、師云く、「百丈は故に是れ大機大用、若し、劔手相酬ゆるに非ずんば、幾乎と落節せん。」除夜小參僧問ふ、「舊歲送るに去らず、新年迎ふるに來らず、新舊本無情、去來誰か擬すべき。」師云く、「門前の石敢當。」僧云く、「只だ舊歲已

ふ義多少の人と云ふこと。竺仙楞伽に云く、「大小大は北人を罵る發端の語なり、大小の徳山と崑山の云はれしごとく嘆徳の義なり、小の字には義なし、この虚堂と云ふのは、いかなる虚堂も褒揚せり、今日失利とは貶抑なり、敗軍なり。

② 手臂終。珠云く、「さうさう」しかたがない、老僧住持事繁しとの意に同じ、龍溪は「理常に如是」と註す、格外の處は知るまいと。

③ 普化木鐸。これは前に見ゆ、鐸は大鈴なり、普化全身脱去す、祇だ空中に鈴の響くこと隠隠として去るを聞くと、論語の八佾篇に、木鐸の註あり「金口木舌」とあり、未審は不詳のこと。地獄へいつたか極樂へいつたかなり。

④ 三九二十七。「三九は即ち二

十七なり。甚の來去の處がある」と龍溪は註す、又の義は鐵槩子、又は去處の端的なりと、此れはいくさの奥の手なり、世上只だ没滋味に去れ。

⑤ 畢竟。善化はつまりいづくへ往つたのだらう。

⑥ 咬人屎概。「人の小便をかぎまはるやうなやつは、よい狗ではない、どこまでも跡を追つてくる、それより三九二十七を見よ」と珠は云へり。

⑦ 窮鬼子。龍溪は「與麼の禮拜は偷心の窮鬼子なり」と註す貧乏がみめと云ふこと、とりえはないと、小餓鬼目なり。

⑧ 百丈。百丈山は江西省南昌府にあり、吳源の水倒出して、千尺を飛び下る、故に百丈と號す、其の勢、羣山に出づるを以て、又大雄山と名づく、下に大智院あり、百丈は山の名で、大智は寺名で、通名は

に去り、新歲已に來るが如きんば、衲僧家、還つて寒暑の所遷を被らざる底あり麼。師云く、「あり。」僧云く、「那箇か是れ不遷底。」師云く、「堦下の雪師子。」僧云く、「舊に依つて跳不出。」師云く、「蒼天蒼天。」乃ち云く、「寒暑不到の處、露柱證明、歲月改遷なし、道人眼活す。所以に一年三百六十日あり、年頭従り數へて年尾に到るまで未だ嘗て一日も、一日の用を作さずんばあらず、今日、正當臘月三十夜、將に謂へり、寒灰燄を發し、枯木重ねて榮えんと。子細に思量するに及んで、元來前頭大いに雪の在るあり、寶林與麼の告報、自ら窮厮煎じ、飯厮炒すと道ふことを知る、諸人の與に箇の鬧熱子を做すべきなし。何が故ぞ、曾て霜雪

懷海、唐の玄宗開元八年に生る、日本の元正天皇養老四年に當る。その示寂は唐の憲宗元和九年、日本の嵯峨天皇弘仁五年である、日本では空海が高野山を開くは弘仁七年である、非常に學者僧であつたことは、百丈清規を製しられたので知れる。

⑨ 奇特事。これは今日の言葉でいへば、和尚さま、何かめづらしい斬新なことはございませぬかなり、はいからなことがありはしませんかなり、超越祖、別に禪師の大事なこととがと。

⑩ 獨坐大雄峰。百丈は、相も變らず私は獨りで、この大雄山にすわつてゐるとさうすると僧はありがたがつて禮拜をする、それに妙な和尚さまなり、その僧をびつしやり打つ、これは虎鬚をなぐるに似たりと

古人は評す、實に危險なり、びしやつとせられたも無理はない、持はなざる、ひつばるなり。

⑪ 百丈故是。百丈和尚がわざと大活動のていなりと、これは百丈と僧とはよき出逢だけがもなかつた、大機大用はしへもらつてはとてと〜となリ。

⑫ 劔手相酬。「利劔と好手と相得て酬ふ」龍溪は註す、僧が禮拜はこれ劔手、丈が便打は劔手を以てむくゆるなり、劔手は兵法の手なり。

⑬ 幾乎落節。落節は俗語のしごこなひ、幾乎はちかひなり、龍溪は「若し此の如くに非ずんば殆ど節度を落失する也、是れ者の僧を扶助す」と註すあぶない加減で、づんばりとやられん。けがをするところであつたと、落節と云ふこと

の苦を經で、楊花の落つるにも也た驚く。復た擧す、北禪、歲除に衆に示す、「年窮り歲盡く、諸人と與に分歲すべきなし。一頭の露地の白牛を煮て、黍米飯を炊ぎ、野菜羹を煮、楳柑の火を焼いて、村田樂を唱ふ。他の門戸に倚り、他の墻に傍ふことを見ることを免る」といつて、便ち下座す。時に僧あり、出で、「云く、「和尚、牛を宰す、甚に因つてか筋角を納めざる。」北禪、帽子を抛下す、僧拈起して云く、「天寒、和尚に帽子を還す。」師云く、「簫韶九成すれば、鳳凰來儀す。」上堂、毎日蒲團上に妄想す、爾が手を挿む處なし。以をもつて南に奔り北に走ることを致す、鴨の螺螄を呑むが如し。山僧今日、聲氣を動せず、爾諸人をして、箇の入處あらしめ

は、本は賣買の上にて損をすることなり」と方語解に見ゆ。去來誰擬。人々新舊の去來は知りてをるが、誰がなにものが去來を自由にする。擬は擬議で、思量安排の義なり。門前石敢當。これは諸人明見の義なり、輟耕錄に「今人家の正門の巷陌橋、道の衝に當つて、俗に云ふつきあたり則ち小石將軍を立つ、鑄つて石敢當といふ、石敢當といふのは支那の五代時代の力士なり、これは無心去來の當位也つまりいへば門前の石にしっかりと書きある、みてゆけと。塔下雪師。きざはしの下のこまいぬ。今ちようど雪團子がその形に似てゐる、日が出ると、じみくきえる、此れは千變の上に於て、不遷變底を示すなり、これも諸人明見の義。

依舊跳不。それは日がでると直に消える、未だ所遷底を出でずと。蒼天蒼天。これは僧の領會せざるを歎息するなり、珠云く「世上一統に皆さうじや、それでは如來の正法は滅絶す、嗚呼かなしや〜じや」と。寒暑不到。寒も暑もいたらぬところは、皆人に具してをるなり。露柱。上の着語なり、大黒柱が證明をす。歲月無改。「天地開闢以來、かばりはないと、此の處をけやぶると、眼睛皮ほころびて、須彌を盡す」と珠は云へり。道人眼活。人々の面目には衰老はない、來機を辨じ縮素を分つこと、此れば提綱の中の肝要のところ。所以。この二字が下の一日の用までに蒙むる、珠は「滄一

ん」良久して、手を拍して云く、「一半は入得、一半は入不得。」上堂、擧す、龐居士、薬山を辭す、山、十禪客に命じて、送つて門前に至らしむ。士空中の雪を指して云く、「好雪片片、別處に落ちず、時に全禪客といふものあり、云く、「甚麼の處にか落在す。」士便ち一掌を與ふ、全云く、「居士且く、艸艸なること莫れ。」士云く、「居士又一掌を與ふ、師云く、「則ち是れ兩掌なりと雖も、其の間擡あり、收あり放あり。」小師、供を設くる上堂、擧す、章敬因に小師、遊方して回る。敬云く、「汝此間を離ること多少時ぞ。」僧云く、「已に八載を經。」敬云く

物の無盡蔵」と云へり。未嘗一日。「功用間斷なき也」と溪註に見ゆ、之が寒暑不到の處を知らんと思へばなり。臘月三十。結尾究竟の時節。將謂。「正しく思ふてゐたらば、大いに相違じや」と珠は云ふ。祭灰發燄。ひえきつた處に春の氣をだす、これは三陽交泰の時節なり。枯木重榮。かれきも花が又さきさかゆる、この二句は溪註に「皆大悟の端的で、所謂絶後に再び蘇生する底を云ふ」と。元來前頭。自然智の開發を示すとなり、まだ寒氣はゆるまぬ、さむい十月よりの雪をもつてゐるゆゑ、めつたにはあたたかにはなるまいと。前頭は前頭なり、即ち前頭なり、又已前の義にも用ふ。

自知。これ把住なり。除夜の供物なき底の意、闍熱に説破せざるの義、思案も工夫もつかぬと自知した。寢斷煎。炒は炒に作るが正し音さう、熬なり。いるなり、皆迫切の義なり、煎じつめ、あぶりつめなり、貧窮なり。闍熱子。溪註に「窮と餓と互に急迫の故に、闍熱の分歲を傲し難し」と、馳走することほできぬと云ふことなり、丁寧の供養はせられぬと。曾經霜雪。何ぜなればなり、雪霜にも堪へて身をやつした故に楊の花がおちるのを見ても、びつくりすると。五家七宗の大事に骨を折りてまりぬいてをる故、ちよつとしたことにも驚く、溪註に「闍熱に説破せざるの意也」と。一頭露地。これは前に見ゆる故に略す、體験現成、妙法蓮

華じゃ」と珠は云ふ。

⑦黍米飯。きびめしに大根葉のごちそうなり。

⑧燒槽拈火。こけらくづ、ほだの火をたき、村の太鼓でもならしてひなうたでもうたつてと。

⑨他門戸他牆。溪注に「皆是れ自家本具の物、今之を用ふ、他に馳求することを免る」と。

⑩宰牛。牛を料理する、宰はきるなり、牛皮錢と云ふて、筋や角は官へ納むるなりと、御法度を破つてござると。

⑪北禪。智賢禪師、福嚴雅に嗣ぐ、雲門。洞山初。福嚴雅。北禪賢。

⑫簫韶九成。簫韶は北禪の示衆に喻へ、鳳凰は此の僧に比す、示衆がよければ九返まで奏すれば鳳凰來り舞ふて、容儀をなすと、此の兩句は書經の益稷の文なり、簫韶は舜の樂の總名なりといふ。

⑬毎月。汝等諸人。

⑭備挿手處。坐禪工夫すと雖も、未

だ下落の處を知ずと、鐵壁銀山くわらりと打ち破ることはならじ、これは工夫純熟ならぬによると。

⑮鳴吞螺螄。方語に眼睛突出すと、つらを見れば目玉ばかりひよりりと出て、吞むことも吐くこともならぬ、更に所入なし、かもがしどみがいや。たにしをのむようなりと。

⑯不動聲氣。音聲、氣息(いき)をもせず、言語造作をもせず、面色をもかへぬ。

⑰入處。悟入なり、見性なり、良久して、手をうつところを見よと。

⑱一半入得。一半入不得、一人の半分は見性悟入するが、一人の半分はえせぬと、良久の端的に於て入得不入得を分つ。

⑲廬居士。衡州の人、儒者なり、後襄州に居る、字は道玄、名は蘊、馬祖に嗣ぐ、廬居士語録あり、この話は碧岩四十二則にも出てゐる。

⑳藥山。名は惟儼、唐の玄宗の天寶十年、日本の孝謙天皇天平勝寶三

年に生る、唐の敬宗の太和八年、日本の仁明天皇、承和元年に示寂す。

㉑居士。意味から云ふと、處士と同義であるが、處士は仕官せず、風流を友とする儒者など、日本でいふ布衣と云ふと同じ、禪的悟りを開くが居士なり。

㉒禪客。參禪のためにきてゐる坊主たち十名に門前まで見送らせた。

㉓好雪片々。時恰もこれ冬の日なれば、雪がちら／＼と空中を舞つてゐた、詩人肌の居士はこの雪景色にみとれて空中の雪をさして、どうも美しい雪ですな、雪片は別々になりてゐますが、決して別々の處にはをちて居ませんよ」といつた。

㉔落在甚麼。その十人の禪客中に一人の全禪客と云ふものが、かしこげに口を出して、「元來あの雪片はどこにおちるのですか」と云ふた。

箇の甚麼をか作し得る。「僧地上に就いて一圓

相を畫く。敬云く、「此の外更に有ること莫し

や。」僧近前して圓相を畫破して、作禮して退く。

師云く、「嚴師好弟子を出す、二林は子を養つて父に及ばず。但だ只だ伊をして大衆に

供養せしめて、必ずしも見解を呈せしめじ。何が故ぞ、恐らくは薄禮怨を致すことを。」

上堂、僧問ふ、「露雲、桃花を見て悟り去る、學人も毎日也た一枝兩枝を見る、甚に因つてか

悟らざる。」師云く、「血を含んで人に噴く、先づ其の口を汚す。」僧云く、「甚と爲てか。」玄沙、

他を肯がはざる。」師云く、「他は是れ他の屋裏の人。」僧云く、「學人者裏に到つて、大いに胡孫の生鐵を咬むに似たり。」師云く、「彌只管に頭に上り面に上ること莫れ、僧云く、「也た

⑳便與一掌。これを聞いた居士は、何に全禪客の頰をびしやつと打つた、打たれた聲をあらうげて。

㉑且莫艸艸。草卒のことである何をなさいます、あまり亂暴をなさつては、承知しませんよ」と云つた。

㉒慙麼禪客。居士は「君はあの雪の落處をもわからずして居て慙麼にして禪客などと洒落れた、生意氣な名を擔いて居る」と。

㉓閻老子。閻魔王は、とても君をのがすようなことはあるまい、君のやうなうぬぼれはと云つた、今生で禪客が死んだら閻王が云はすまい。

㉔居士作麼。全禪客はます／＼せきこみ「居士、あなたは一體あの雪片がどこにおちると思つて、あらつしやるのですかとせめかけた、居士は又び

しやつと打つておいて云くと碧岩の本則には「打云、眼見如し盲、口説如し啞」との語あり、これは君等は眼はあるが無樁子の看板じゃ、開いてはゐても一向知れはせぬ。」盲人と同じ、口は巾着の看板だ、あけたところでも啞と同様じやと、(雪寶は別にて云く「初問處但握雪團便打」と、はじ

め居士が好雪片々不落別處なんかと、悟つたやうなことを云つた時に、すぐさま雪だまをこしらへて、彼の頰にぶちつけて、あの高い鼻を挫いてやればよかつたものを、殘念なことをしたものと、雪團打、雪團打、龐老機關、沒可把じゃ、このやうに雪寶自ら頰してゐる、沒可把は把捉すべきことがなし、盡くるの意なり。

㉕有擡有擡。上へあげたり下へ

和尚の委悉せんことを要す。」

師乃ち擧す、雲門首座に問ふ、「山河大地と自己と是れ同か是れ別か。」座云く、「同。」門云く、「一切の物命、飛蛾蟻子と自己と是れ同か是れ別か。」座云く、「同。」門云く、「好好に借問す、何ぞ于戈をもつて相待することを得たる。」師云く、「雲門は見易く、首座は見難し、何が故ぞ。蓋し、他は無變異の郷に坐在せず、所以に同と曰ふ。」

智者和尚至る上堂、「淨餅裏に潔洗し、古檣下に終身す。彼此寸は長く尺は短し、何ぞ妨げん、忝く切隣たることを。相見又無事、來らずんば還つて君を憶ふ。杜鵑啼き断えて月晝の如し、尋常空しく春を過すに似かす。」

結夏小參、「此の事は青天白日の如し、一絲頭許りも、障を爲し礙を爲すなし。自らはれ爾諸人、智眼高からずして、區宇に墮在す。故に我が竺乾の居士を勞して、期を立て限を立て、病に對して藥を與へて、以て中下の機の爲にせしむ。若し是れ上流ならば、豈に肯て爾が者般の茶飯を受けんや。況んや今夏、恰かに一百二十日なるをや。爾諸人甚麼の處に向てか、手を挿まん、若し手を挿む處なくんば則ち笠乾の居士に、孤負せん。若し、箇の手を挿む處を得ば、期の満するを待つこと莫れ。便ち請ふ、説かん看よ。何が故ぞ、蓋し老僧急に、明窓下に安排せんことを欲す。

復た擧す、首山、衆に示す、「咄哉、巧女兒梭を擲つて織を解せず、看よ他の鬪鷄の人、

をしつたり、珠云く「虚堂それはしれたとき、みたくもないことを云ふ。」と

有收有放。收は奪、放は縱、「一喝賓主を分つ機」と溪はいつてゐる。

小師。梵語には鐸曷羅、唐に小師といふ、受戒十夏已前は西天皆小師と稱す、今は所度の弟子をいふ。

設供。大衆のために施齋を設ける、ごちそうを振舞ふ、今時でも臨濟宗の上堂では、この例あり、或は僧、或は俗よりの施主にて設くる也。

章敬。名は懷暉、馬祖道一に嗣ぐ。

遊方。遍參、行脚のことなり此間は師匠敬の下をはなれて幾年になるぞと、已に八年もたちましたと。

一圓相。まん丸い〇をかく、敬云く、「この外になにも得た

ことをないか」と、僧はちかよりにて、その圓相をこはしてしまはれた、此の僧は好くでかした、全禪客とは大ちがひなり。

嚴師出好。きびしいよき師匠にはよき弟子が出来る。

二林。雙林と云ふこと。

養子不及。ひとつもおれにたやつがないゆゑ。

但只教伊。器量なければしやうが無い、大衆へ振舞でもさせて、不三必呈三見解とは章敬の弟子のやうに圓相を畫いたり、畫き破つたりするやうな見解を早せしめはせぬと、なぜなればと。

恐薄禮致。このわづかの設供は薄味にして、大衆の恚念を生ぜんことを恐る、珠云く、「設供の一挨拶はない、好き人の多く出來たのも道理なり」と。

靈雲挑花。この話は報恩録に見ゆ。

合血噴人。「來問賊意の故に」と、溪注にあり、問端毒氣あり、故に之を抑下する也、悟道などと云ふはけがららしいことなり。

不肯他。靈雲の桃花を見て悟道の頌、玄沙が聞いて云く、「諦當なることは甚だ諦當。」これは一寸理屈あるやうなるが、未だ徹底して居らぬと、それで敢保す老兄の、猶ほ未徹在なることをと云へり。

他是他屋。一つ家内の人なり他は靈雲、下の他は玄沙、同じく是れ箇中の人、故に時に臨んで抑揚すと、靈雲は大安に嗣ぐ、百丈三世なり、玄沙は雪峰に嗣ぐ、徳山三世なり、豈に一家と謂はんや。

胡孫生鐵。沒滋味、解不得の義なり、胡孫はさる、一名王

孫、一名胡孫。只管上頭。胡孫に寄せて禮度なきことを罵る、上頭上面は此は僧の再犯を責む、うぬめはさるがしことと云ふこと。

和尚委悉。和上さまも御用心なさりませ、あたまからのぼらうやら、面にのぼらうやらと、委悉はがてんすること。

雲門首座。雲門録下にあり。山河大地。依報、正報なり、これは器世間を問ふ。

座云同。山河の器界は自己唯心の所變の故なり。

一切物命。これは有情、世間を問ふ、共に細蟲に至るまでと。

座云同。物命の根身は自己唯識の所變の故なり。

好好借問。如法(ねんごろ)に問を設けたこと、借問は試に問ふこと、何得三千戈相待」とは如法の答を以て干戈と作す

水牛も也た識らず、咄哉拙郎君、巧妙人の識るなし。鳳林關を打破して、靴を著いて水上に立つ。師云く、「首山自ら謂へり、臨濟の正傳を得と、却つて野狂鳴を作して、天下の兒孫をして、箇箇拖泥帶水ならしむることを致す。」

次の日上堂、擧す、「應菴 師祖、昔日事を當山に謝して、夏を淨明に奇せて、衆に示す、「三十三州、七十の僧、驢馬領、人の憎を得たり、諸方若し羅籠の手を具せば、今日淨明に到るに因なけん。」師云く、「當時の龍象を想ひ見るに、拙孫褊短にして、敢て諸方を貶刺せず、只だ多くは幾州子を得て、暗地裏に他に養ゆるのみ。何が故ぞ。」拄杖を卓して、「君に勸む、荆棘を栽うることを用ひざれ、後

其の意。情解すべからず、雲門と首座との出合にて奥ぞこがしれぬ。
①雲門易見。溪注「也たこれ格外の物を著く」とあり、一首座は同といふ處に、權あり實あり照あり用あり、故にその機を測り難し」と或る抄に云へり。
②無變異郷。なぜならば、まあ俺が押しはかつて見るに、他の首座は無變異、則ち同の郷(ところ)に坐在せずと、じつとしてはぬわい、無變異は佛祖も識らず、正位にも偏位にも居らぬくせものゆゑに、其の意は情解すべからず。
③所以曰同。「故に能く同といふに自在なり、別と云はゞ變異なるが故に」と或る抄にいへり、「實に虛堂和尚は此の言句は、雲門宗のちやきくを出した」と珠長老は云へり。

④智者。婺州の智者、廣福禪寺の和尙なり、教者と見ゆる金華府にある寺なり。
⑤淨餅裏。此の句は智者の淨潔の操履を述ぶ、淨餅澡洗は故事あり、以下押韻の句なり。
⑥古橋下。これは虛堂が自身の寶林雙橋下に在りて、身形を薰修するを述ぶ、わしは古るさびた木かげで、修身鍊形してゐると。
⑦彼此寸長。彼此は智者と寶林とを謂ふ、寸長尺短は一味無差別の境界なりと、宗旨宗旨に依つて好きことも悪きこともある、互に同道一味平等の境界なれば、佛法護持の人と云ふものなり。
⑧何妨添。なにもさはりもないかたじけなないことには、となり合はせなりと、切は近なり彼此共に金華府に在り。
⑨相見無事。互に義理ばつた挨拶

抄もいらぬ。
①不來還憶君。見えねば戀しい、警策高標あり。
②杜鵑啼斷。その時の景象を述ぶ、夜話しが過ぎてほととぎすの啼くまでしてゐた、月の明いことは、まるで晝の如しと。
③尋常空過。今智者和尙に對して道話を打する故なり。以上四句は押韻なり。いつもの夜話とはちがふて不似なり、空しく春をこえて好き和上に出合つた故、覺えず月の落ちるまで話した、珠長老は「これ輕薄か追従か、めつたほめたばかり乎」と云へり。
④此事。人々具足の面目なり。青天白日とは法々隱藏せず、古今恒に顯露す。
⑤爲障爲礙。本際眞箇、此の如し。
⑥智眼不高。諸人、如來の五眼を具足して居るけれども、手前からくらまして居る。
⑦區宇。楞嚴九にも「色陰の區宇」と

あり、性眞を區局す、故に區宇と名づく、今は道場安居の境界に隨在するを云ふ、火うちばこで年を取つてをるなり、區宇は和語の「くぎり」なり。
⑧竺乾大士。釋迦如來を云ふ、わざわざ御苦勞をかけてと。
⑨對病與藥。一切衆生の病に對してと。中下根器の病になり、道場加行の藥を與へる、頓漸秘密不定等の與藥なり。
⑩者般茶飯。これつらの食ひのこし釋迦達磨のおせわにあづからん、日用受用底なり。
⑪恰恰。丁度きつかり。
⑫一百二十日。長期也、蓋し今夏は閑餘あるのみ。
⑬挿手處。巴鼻を摸著するの義なり悟處なりいづれの處に向つて會せんとなり、無くんばはもし一句を云ひ得ずんはなり。
⑭孤負。苦勞のかけぞんなり。
⑮箇挿手處。本來の面目を取つてま

わす、若しとは佛も足をふみこまれぬ「これが手の挿みやうじや」と珠抄にあり。
⑯明窓下。明窓下は高賓を接遇し、尊宿を管侍するの所、即ち方丈の内在り、安排は安置なり、おしなほして馳走せんとなり。
⑰首山。名は省念、風穴延沼に嗣ぐ、臨濟三世なり、この示衆は正燈錄にある三首の中の後の二首のみをあげ、綱宗の偈の三首なり、汾陽の註あり、之をこゝに出す。
⑱咄哉。しかるこゑ、佛祖にもつらだしをさせぬ。やいと云ふかけごゑ巧女兒。利口發明のむすめ、汾陽の註に「妙智と圓融と理と」
⑲擡梭解織。無間の功立せず、不解織は蓋し純無漏相續無間、然して其の功に居らず、大巧は拙の如き故なり。
⑳他闍鷄人。旁觀審かにあしくびをあげ、功を争つて自ら傷らず、小男を云ふ。

① 水牛不識。全力能く負ひて頭角を露はさず、水牯牛も也た識らずと人の知ること希なこと。

② 咄哉拙郎。汾陽の註に「素潔條然」と。つたないかな、あはうな殿御。

③ 巧妙無人識。何をさせても機妙なり。大巧は拙の如し。

④ 鳳林關。首山の居らるゝ近くに湖廣の襄陽府に在り、首山は南陽府の汝州に在り、それで隣境なり、汾陽注に「玲瓏性を蕩盡す」とあり鳳林關の嚴密なるに喩ふ、「究竟解脫する也」と溪注に見ゆ。

⑤ 著靴水上。汾陽注に「塵泥自ら異なり」と、蓋し究竟解脫の故に、自在三昧を得て活潑々地なること、此の如く他の塵泥に立つものと自ら異なりと也。

⑥ 首山自謂。「傳法綱要の偈なる故に、これは又どうしたものでじや」と珠はいへり。

⑦ 作野狂鳴。何だかかへつて野抓のなくやうにぎやうくと。

⑧ 箇々拖泥。箇々は人々、拖泥とは人の此の傳法偈を帶着するを恐る故に此の語を拈して著く、拖泥帶水は第二義門に下つて化度するを云ふ、人を引き立つるには、老婆心切、又は大きくじりのことにも用ふ。

⑨ 應菴。諱は曇華、虎丘に嗣ぐ、臨濟十二世なり。

⑩ 師祖。虛堂は師より五世なればなり。

⑪ 謝事當山。この寶林を退院せられたと、寄「夏淨明」とは寄假は寓なり、淨明は饒州の莞山と云ふところに在り。

⑫ 三十三州。淨明に聚會する僧が、三十三州より來りて都べて七十員なり。

⑬ 驢馬領。いづれも人のいやがる大惡口。開いて佛祖を呵罵する事や方々を貶刺するやで、人に憎まれるの活漢、驢馬は龜形異相なり。

⑭ 諸方若。世間に若し惡刺宗匠、奪

命の神符をにぎる人はなり、羅鐘は龍鳳の手段、諸方は諷刺諸方の意。

① 今日淨明。淡泊顧みず、俺の隨伴してと。

② 拙孫福短。福は衣の小なり、陋陋なり、拙孫は處堂が卑下して云はれる、福短は智徳がせばきゆるなりと。

③ 貶刺諸方。あちらこちらを是非せぬと。わるくは云はぬと。

④ 得幾州子。三十幾個國の人。

⑤ 暗地裏。どこともなくなり、他には應菴先師に、賽はむくゆにて告報するなり、「應菴よりはまさりすぐれたところがある」と珠は抄せり。

⑥ 勸君。應菴を指す、又末代の兒孫を指す。

⑦ 栽荆棘。荆棘は必ず六づかしいことを云つてをかしやるが、後代の者は大に難義する、後代兒孫惹き著衣」とは兒孫の虛堂が、今又舊

代の兒孫衣を着著せん。

上堂、擧す、肅宗皇帝、忠國師に問ふ、

「百年後所需何物ぞ。」國師云く、「老僧が爲に

箇の無縫塔を造れ。」帝の云く、「請ふ。師塔

様。」國師良久して云く、「會す麼。」帝云く、「不

會。」國師云く、「吾れに。付法の弟子。耽源とい

ふものあり、却つて此の事を諳んず。」國師遷

化の後、帝耽源に詔して之を問ふ。源云く、

「湘の南潭の北、中に黄金ありて一國に充つ

無影樹下の合同船、琉璃殿上に知識なし。」

師云く、「肅宗當時、若し國師良久の處に向つて

一喝を下し得ば、耽源の坑に墮ち壘に落つる

ことを致すことを免れん。無縫塔を見んと要す

麼。」拄杖を卓して、君に勸む此の一杯の酒を

盡せ、西のかた陽關を出づれば故人なから

規に習ふは、棘に衣をひつか

けられたるものと同じなり、

① 肅宗皇帝。この話は碧岩十八

則にも出づ、肅宗は李唐第八

主、名は亨、玄宗の第三子な

り、唐の玄宗、肅宗、代宗の三

皇帝は、中々えらい佛教信者

である、日本では元明、元正、

聖武、孝謙、淳仁、稱徳、光仁の

七帝の在位と同時であります

から、唐でも全盛の時代で享

樂主義の太平時代なり、肅宗

と代宗とが昔から間違つてゐ

ると云ふこと。

② 忠國師。南陽慧忠國師なり、

唐の西京の光宅寺に住せり、

この人は南陽の白崖山に四十

年間も隱者生活を送りて居た

唐の肅宗の上元年に、帝の請

ひを受け、山を出で早速宮中

に迎へられて、皇帝の侍僧と

なりたり、日本の道鏡と同じ

識の高い坊さんは名利に耽り人間に懸着すとまで云つて、大事な忠國師を罵詈雑言した位なり、忠は六祖慧能大師に嗣法す、代宗太暦拾年に示寂す、日本の光仁天皇寶龜六年に當る。

③ 百年後。これは肅宗が忠の病を問ひ給ひて仰せられしなりこの需は碧岩には順の字に作る、百年後は死んでのちのこの需はもとむるで、つまり使用するの義「あとにのこされた弟子共は、あなたの紀念を致したものでせうか」と。

④ 無縫塔。立派な三重塔や五重の塔には及ばぬ、土饅頭の墳墓で澤山でありますと、卵形の塔を無縫塔といふ。

⑤ 請師塔様。これは帝が無縫塔の形は御存じがないゆゑ、卵形か鐘形か尖字形かと、その形狀を問はれたり。

ん。」

上堂、僧問ふ、「參は須らく、實參なるべし、悟は須らく實悟なるべし、作麼生か是れ實參。」師云く、「^①歷歷寂寂。」僧云く、「^②長期已に半を過ぐ、^③猶ほ冷水に冬瓜を浸すが如し、^④和尚何の方便かあらん。」師云く、「^⑤精精靈靈。」僧云く、「趙州、僧に示して、鉢盂を洗ひ去らしむ、其の僧便ち悟る、此の意如何。」師云く、「^⑥錢を燒いて鬼を引く。」僧云く、「^⑦我れ等粥を喫し了れり也、鉢盂を洗ひ了る也、甚と爲てか悟らざる。」師云く、「^⑧甜瓜は蒂に徹して甜し。」僧禮拜す、師云く、「^⑨果然。」乃ち舉す、^⑩鹽官一日、侍者を喚ぶ、「^⑪犀牛の扇子を將ち來れ。侍云く、「^⑫已に破れぬ。」官云く、「^⑬扇子既に破れなば、我れに、^⑭犀牛兒を、^⑮還し

① 良久。病んでくるしきときゆゑ、やゝ久しくしてなり。
② 付法弟子。これは禪宗では得度の弟子、嗣法の弟子とある後者なり。
③ 耽源。名は應眞、吉州耽源山に居す。
④ 却諳此事。とつくりとよく知りてゐる。
⑤ 湘之南。湘も潭も川の名で、湘水はその源を零陵の陽海山から發し、潭水はその源を武陵の成玉山から發して居る、無縫塔を形容して云ふ、これは隻手の聲であると云ふのが雪竇の着眼するところ湘水は北に流れ、潭水は南に流れてゐる。即ちこの天下には黄金が充滿してゐる。
⑥ 無影樹下。この宇宙を無影樹といふ、合同船とは乗り合ひ舟、この宇宙に充滿して居る有象無象、有形無形、有心無

心、あらゆるものを集合的に表示したる詩句である。
⑦ 瑠璃殿上。これもやはり詩人的の表現である。この宇宙を樂觀的方面から形容したものの知識とは知音とか知人友人とかの意で、世間でない知識、えらい人ではない、何人も唯我獨尊、各自佛様であり、神様であるから、怨親平等なるが故に、従つて故人の記念に塔を建てると云ふやうなものも畢竟無用の業であると云ふのが耽源の着眼點であるであらうと、或る抄に見ゆ。
⑧ 墮坑落堙。あとへもさきへもならぬと云ふこと、采の目の難義なり、さいの目をよくふらねば目がこされぬと云ふこと、「耽源が本分の理に循はずして、漫に註脚を下せば也」と溪抄に見ゆ。
⑨ 勸君云々。この二句は唐の王

來れ。」侍對ふることなし、師云く、「^①鹽官侍者の不在なることを恐る。」^②二林が扇子は、^③暑月用ひんことを要す、^④必ずしも侍者を勞することあらず。若し是れ犀牛兒ならば、^⑤國師に、^⑥輸與す。」

上堂、「^⑦二林、^⑧初めより門戸の人に與へて近傍せしむるなし。」亦之を、^⑨無何有の郷に置かず。^⑩只だ諸人の鐵の土に入つて土と俱に化して、^⑪然して後以て發越すべきが如くならんことを要す。其の糞を運んで入るもの、^⑫如きんば、^⑬吾れ之を如何ともする未し。」
上堂、僧問ふ、「^⑭法身病めば色身不安、^⑮色身病めば法身不安、^⑯作麼生か免れ得ん。」師云く、「^⑰口上より著。」僧云く、「^⑱色身の病めること故に之れあり、^⑲法身作麼生か病む。」師云く、「^⑳他の

維が、元二か安西に使用するを送るの詩の三四句なり、勸君とは學人を指す。これさう云はずにもう一杯まゐれと、この一句は無縫塔の當體なり、「これは知音の用處なるが故に、知音で無くては、この無縫塔をば知るまいぞ」と或る抄に云へり。
① 西出陸關。故人は處堂自らを云ふ、他所へ往つたならば、俺如き知音底はあるまい、やれきたかと云ふ人もあるまいと
② 實參實悟。功用と無功用と深く云へばなり、參中に悟あり悟中に參あり。
③ 歷々寂々。歷々はありくとみえること。乃ち權實照用なり、寂々は萬機休罷で、二名一體、更に異時にあらず、珠云く、「ありや燈籠じや、柱じや、こりや胡餅じや須彌山じや」と、これは修心の要なり、

謂つべし實參底と、正位じや」と或る抄に云へり。
④ 長期已過。百二十日もつい六七十日も過ぎてござる。
⑤ 冷水冬瓜。沒滋味の義なり、言うは半夏を過ぎて未だ當悟を得ざればなり、法に於て滋味を得ずと妄想も分別もなくなり、味もしや〜らもか
⑥ 和尚方便。此れは實悟を問ふ和尚さま、どうぞ仕方ばござるまいかと。
⑦ 精精靈靈。直に明了の心體を開示す、生死の本、無量劫の本體なり、やはりさうしていと也。これほどよき方便はないと。
⑧ 趙州示僧。これは與聖錄に曰ゆ。
⑨ 燒錢引鬼。珠云く、「趙州が此の如く示して、此の僧此の如く悟つたも、紙錢を燒いて歸

病最も苦し。僧云く、「大いに維摩老子の以て衆生に代るに似たり。」師云く、「爾他を識ること未だ盡さず。」僧云く、「是れ佛手も遮ること得ず、人心は等閑なるに似たること莫しや。」師云く、「波を撥つて水を求む。」僧云く、「畢竟如何。」師云く、「爾が鼻孔、氣なからんを待つて、却つて汝に向つて道はん。」僧便ち喝す、師云く、「死を怕るゝの漢。」乃ち云く、「水牯子、數日より來、水艸に快からず、蓋し之を牧ふに功なし。若し一回艸に入り去らば、驀鼻に拽き將ち來れと言はば此れ又未だ是れ牧牛の法にあらず、且つ作麼生か牧せん。」禪牀を撃つて云く、「叱叱叱、者の畜生。」

鳳林庫を建つる上堂、「鳳は竹實に非ざれば

鬼を祭り、もてなしていんでもらうやうな」と、「これは得悟の機を抑ふ」と溪注にあり。甜瓜・蒂甜。まくはうりを甜瓜と云ふ「各々法雨の種性」と溪注に見ゆ、あまいものはどこまでも甘い、その方が悟らぬほどどこまでも悟られぬと云ふこと、さてこの鈍まん漢なりと。

● 果然。そりやこそ云はぬことかと。

● 鹽官。この話は碧岩の九十一則にも出でゐる。杭州鹽官の海昌院齊安國師、馬祖に嗣ぐこの國師を日本の嵯峨天皇の皇后檀林皇后が、日本の承和元年、特に慧尊を唐に遣して御招待になりたり、されど老體であるから、その弟子の義空を日本に送りたり、それで洛西の嵯峨に檀林寺を建立して、禪を御研究なされた。

● 侍者。これは禪寺住持の秘書官である。五侍者など云ふて、五人の侍者が本来あるのが叢林の制度なり。

● 犀牛扇子。扇子の面に犀牛玩月の畫を描いてある。

● 犀牛兒。この兒は子供の兒ではない、日本語の犀牛のやつと云ふのである、この公案を平たく談話體にいへば、ある日のこと、鹽官齊安和尚が侍者を呼んで、「侍者あそこにあつたあの犀牛の扇子を持つて來ておくれ」と云つた、すると侍者はありていをつみ隠さず、「あゝ、あの扇子でございますか、あの扇子はもう破れてしまつて居ます」と答へられた、これを聞いた鹽官は「扇子が既に破れてしまつたならば、あの扇面にかいてあつた犀牛のやつを賠償して持つて來い、扇子の破れたのは

構はないが、あの犀牛はをしい、あの犀牛をもとの通りにしてをくれ」と云つたが、これに對して侍者は何とも返答が出来なかつたといふことなり、或抄に「元來この公案の眼目は何であるかと云ふと佛教哲學の常套問であるところの現象對實體論である、扇面に犀牛の畫である當體は現象即實體の表現とも見られる」と云へり、又云く、「扇子を以て宇宙一箇の靈體じや」と、犀牛の扇子は誰でももつてゐる、無限の清風、無限の頭角雲雨去來それはそれのごとく、追求も把住も不得じや」と、又或抄に云く、「此の犀牛扇子の話は、翠巖眉毛の則より八疊も高しと白隱和尚も評せられてゐる、「頗る向上に拈弄せられた公案じや」と。

● 還。重々の慈悲心なり、扇子がもう破れたならばと、これこゝでは賠償の意の還で、かへすの意ではない。

● 鹽官恐。一古徳は學人の造次の間も、此箇の中に在らざらんことを恐る、故に物に托して以て激發すと溪注にあり、「不在は工夫の中に居るか悟の中に居るか」と珠は云へり。

● 二林扇子。この雙林の虛堂が扇子は葵の月にも他の力を假らず、自ら用ひんと要すれば便ち用ゆ。なんで侍者などはつかはぬと。

● 輪輿國師。珠云く、「若し是れ虛堂が齊安國師に送り與へると云ふたならば、鹽官はなんと云ふか、云ふて見たいものじや、扇子の外に犀牛兒をばじや、これは龍溪注に云く、「意に云く、我れ唯扇子を要して、犀牛兒を要せざればなり」と、虛堂は入らぬ程にと、輪は任なり、送なり。

● 初無門戶。珠云く、「宗乘向上ははじめからさりたがつてあがくけれども、こゝからと教ふるところはない、教ふる處あれば生死の根本」

● 無何有郷。無何有の郷は廣莫の野なり、言は自然の造化は至道の中に、自ら樂むべきの地あり、それならばどうじや、目前におけどもめつたには見えぬ、平常無事の事にもと。

● 只要諸人。師資の道、自然に冥合し根器成熟してなり。これ鍊鐵の事なり、冶工器を造るに、先づ鐵を以て泥土に和して、後爐鞴に入れて以て精光を發越すべし、鐵は學者に、土は大道に、化は融に比す、是れは學者の千鍛百鍊を歷て後、大器を成すべきにたとへる、發越は千聖に超越するなり、大活用を得るなり。

● 運糞入者。「これは根器未熟下劣の漢を謂ふ」と溪注にいへり、珠云く、「佛語祖語今の内に入れるは私修行」と、この語は報恩經の文より出づと百丈廣録三に見ゆ、又珠云く、「二乘聲聞に取り付いては。

なれないものは。ゆきたいところへゆけと。除糞と云ふこと法華の信解品にあり、あくたをはらふ、見思を斷ずるを佛法と思はしむなり、あくたをはらふ」と訓ぜり。
 ⑤ 吾末如何。吾れは何ともしやうがない、この語は論語の子罕篇に出づ。
 ⑥ 法身病。忠曰く、「古語乎、このとき虛堂和尚、微疾ゆる此の間あるか。
 ⑦ 法身不安。幻化の空身、即法身の故なり、この語も古語乎。
 ⑧ 口上著。珠曰く、「うぬらの病は口上より出来る」と、溪註に「病は即ち汝が問頭に即して得」と。
 ⑨ 他病最苦。他は法身を指す、乾峰の法身に三種の病ありといはれしが如し、俺は命にかけてやう／＼まめになつたと。
 ⑩ 維摩老子。これは維摩經の問疾品に維摩詰の言く、「癡に従つて愛あり、則ち我れ病生ず、一切衆生の

病を以て、是の故に我れ病めり、若し一切衆生の病滅せば、則ち我が病滅す」と。
 ⑪ 備識他。他は維摩を指す、「今只だ他の一等を見る故に」と溪抄にあり、他は法身の病なり、「維摩と同じことなりと云ふが中に維摩の足もとをも知らずして」と珠は云へり。
 ⑫ 佛手遮。遮は斷なり。たとひ佛手も遮斷すること、此の病にはできぬと、古句に佛手も他を醫すること得ずとある類なり、珠曰く、「いかな私でも、遮ることは得ずじや法身は遮ることできぬ」。
 ⑬ 人心等閑。珠曰く、「日に用ひて相知ずじや、況んや凡夫心分別を計る者は、いたつらごとではあるまいか」等閑はむだごと。
 ⑭ 撥波求水。「今尋問する底が即ち是れ病なり、直下に休歇する、即ちこれ藥なり、是を離れて別に求めば、是れ則ち波即ち水なること

を知らず」と溪抄にあり、珠曰く「色身を撥つて法身を求む、喩へばなみをはらひのけて水を求むるがごとしじや」。
 ⑮ 備鼻孔。「求心頓に息んで大死一回の時節じや」と溪抄に見ゆ、珠曰く、「そなたらが死に盡して盡しきつて、氣息なき時節、山河大地に云はせる」と。
 ⑯ 怕死漢。大悟を欠くなり、珠曰く「此のしにぞこなひめ、臆病もの死にかねる」と。
 ⑰ 水牯牛。めうしなり、忠曰く「師自ら病を得るを逃ぶるなり」「水牯子病あり、水草を喫することを得ざる也」。
 ⑱ 不快水艸。不安、工夫しかねる、食事がうまくないと。
 ⑲ 牧之無功。珠曰く、推量して見るに、牧いやうが無功な、とつくりのみこます」と。
 ⑳ 鷲鼻將來。珠曰く「すぐにじや、一州云く、「無とひきもち來る」と。

食はず、醴泉に非ざれば飲まず、甚に因つてか却つて板橋村に在る。① 挂杖を卓して、② 林あれば自らこれ眞の棲處、③ 風淡くして惟だ聞く静夜に鳴くことを。④
 ⑤ 上堂、擧す、雲門因に僧問ふ、「佛法は水中の月の如し、是なりや、否や。門云く、「清波に透路なし。」師云く、「雲峰道く、「雲門の禪は九轉の透餅丹の如しと、若し果して是ならば恐らくは未だ是ならじ。」
 ⑥ 上堂、諸方は、朝咒暮咒し、爾を兜へて羹飯の主と做さんことを要す。⑦ 我が者裏は、疥狗生天を願はず、爾若し、人行なき處に向つて、一條の路子を尋ね得て、⑧ 蕩蕩地に、機に臨んで自由自在ならば、便ちこれ我が同流。」
 ⑨ 解夏小參、僧問ふ、「初秋夏末、衲僧家氣宇王

① 此又未是。珠曰く、「禪宗の向上よりみればまだくなり」馬祖下の石磴の故事を、こへもてきて云はれたるなり、且作麼生。牧はまたどうして牧するぞと。
 ② 禪牀。僧堂内に於ける坐禪する場處、住持は椅子、雲水は單位なり。
 ③ 叱叱者。虛堂は自分のこしかけてある曲録下を、一つとんと挂杖でうつて、日本でいへば一むちあて、ちよいちよい牛をおふ、こんちくしゃうと、これは活機用なり、當機直示なり。
 ④ 鳳林庫。庫倉の名、板橋にあり、村は必ず寶林寺の莊地、領地の内なる耳、今此の地に於て、新に庫倉を建て、鳳林と名づけて、特に上堂して以て記念とするなり、年貢庫なり。

⑤ 鳳非竹實。鳳凰は竹の實でなくば食せず、鳳は瑞鳥にて太平の世には則ち見はる、梧桐にあらざれば栖まずと、醴はあまきいづみ。
 ⑥ 板橋村。こゝには鳳も醴泉も、竹實もなきこと。
 ⑦ 有林自是。「庫倉が豊饒なれば大衆を安居させる所以を云ふ」と溪註に見ゆ、忠曰く「梧桐があれば棲遲する、師家道徳盛大にして、叢林が繁茂すれば、僧中の英傑や麟鳳が集まる、庫内の一物が澤山なれば自然に大衆が寄り附く」と林とは珠曰く「禪宗坊主の工夫公案、これを林と云ふ、棲處は遍一切處じや」と。
 ⑧ 風淡惟閑。これは祝語なり、淡はやはらかにそよ／＼と、静中に鳳鳴を聞く、一段こちよし、これは衲僧の類、道徳に歸して潛行密用和樂する

の如し、^①雙林を離却せば、途中如何が受用せん。^②師云く、「踏著すれば爛れて泥の如し。僧云く、「只だ者れ便ち是れ途中受用底なること莫し麼。」師云く、「南辰北斗。」僧云く、「領」師拂子を以て一指す、僧禮拜す。

師乃ち云く、「一夏伽藍地上に行く、未だ嘗て敢て重歩して、常住一片の靴を踏著す。^③來朝期滿つ、合に作麼生か賞勞すべき、若し首座板頭従り數へて、^④聖僧侍者に到るまで普く請じて之を與にせば、猶ほ諸人の以て山僧緇素を分たすと謂はんことを恐る。更に若し其の重輕を較へば、又山僧が惠心普からざることを見ん、^⑤作麼が相當ることを得去らん。所以に道ふ、^⑥重賞の下には、必ず勇士ありと。重賞は則ち故に辭せず、阿

ありさまなりと、溪抄に「此の又鳳に託して衆の棲止を述べ」と、これが鳳林の境致なりと云はんばかりなり。

① 水中月。金光明經の四天王品に、佛の眞法身は猶ほ虚空の若く、物に應じて形を現す、水中の月の如し」とあり。

② 清波透路。珠曰く、「さつき、さざ波のたつところへ月のうつる、沙汰はないすきまはない、此の句は入りくんだ語なり、雲門宗の大事をいはんが爲めなり、波に月の透る路がどこに有らう」となり。

③ 雲峰。この話は會元十七に出づ、雲峰悦は大愚芝に嗣ぐ、芝は汾陽に嗣ぐ、これは虛堂と雲峰と同じく歎美す。

④ 九轉透餅。鐵を點じて金と作すは九轉の丹砂なり、九返循環を九轉と云ふ、九度やけばもとの色になる、透餅丹とは

瓶を漏る、いれものに依つてもらぬこともある、これは出處わからず、鐵をきたふるにもちゆると金になると。

① 若果是。珠云く、「雲峰の喩へて云はるゝやうならば、清波の句も似たるもの喩へるものあり、喩へるものあらばよくないほどに。

② 朝咒暮咒。咒は呪と同じ、詛なり、願なり、まじなふことねがふことなり、諸方の宗師は且夕に教授してと。

③ 兜儻傲羹。兜はとらへるとあるが、惑なり、亂なり、學者達を惑亂さして付法の弟子となし、寺院の主人となさんと要してゐると。羹飯主とは粥飯の主人と言ふ意なり、お齋に行つたり布施をもらつたり、檀那にせよと云ふと云ふやうなもの、忠の抄と珠の抄と同じきゆゑ、一つにする

那固か是れ勇士。」驀に拄杖を拈じて、指して云く、「これ爾。」

復た擧す、^①黄檗因に臨濟、半夏に山に上つて問訊す、^②檗の看經するを見て濟云く、我れ將に謂へり、是れ箇の人と、元來是れ^③淹黑豆の老僧」と。住まること^④數日にして乃ち辭す。檗云く、^⑤汝夏を破つて來る、何ぞ夏を終へて去らざる。濟云く、「暫く來つて禮拜す。檗便ち打つて、其れをして去らしむ。濟行くこと數里にして、^⑥其の事を疑ふて、再び回つて夏を終ふ。師云く、「^⑦黄檗當時、若し大機大用にして臨濟の偷心を死し盡せば、今日子孫、未だ尾巴焦黄することを致さじ。檗林に再び來つて夏を終ふる底あること莫し麼。」喝一喝と。

上堂、僧問ふ、「世界與麼に廣闊なり、甚

このやうなものなり。

① 我者裏。俺の處では疥狗(やまひいぬ)が天へ上らうとはせぬと、分を守り神妙に骨を折つてゆくゆゑなり、疥癩なりとある、只だ素分を守るの意なり。

② 向無人行。人のとほらぬところ、向上嶮崖なり、一人の香も佛の香もない、打成一片の田地じや」と珠は云へり。

③ 一條路子。珠曰く、「十方の佛もつらのぞきのならぬ處のたび路へとび出る。」

④ 蕩蕩地。大なり、廣平のこと大手を振つてなり、さはりなきことなり。

⑤ 臨機自由。これは朝咒暮咒を待たず、自悟自得の方なり、應機自在なり、臨は當るなり。

⑥ 是我同流。これは豊干の語なり、佛祖寒山語に見ゆ、「虛堂が中間なるが故に、お茶まゐ

れ」と珠は云へり。

① 初秋夏末。三期の制を過ぎ、なり、隨往自在無礙の故に、この語録は報恩錄結夏次日の章に見ゆ。

② 離却雙林。今日までは和尚に隨侍す、今はなれてはと。

③ 踏著爛如泥。氣宇如王をおさへたるなり、「本分の途中を示す」と溪注に見ゆ、あまりふみつけると、とろける、へたに見るとつちがふ。

④ 者莫便是。爛泥の如しと、その處直に途中受用修行底ではござらぬか。

⑤ 南辰北斗。遙かに天涯を隔つ南辰は南斗なり、遠くして遠しとなり。

⑥ 領。がてんしました、遠うして遠しといふところを、とつくり呑みました。

⑦ 一指。點破の義なり、珠曰く、領したるは其の方が、僧禮拜

はぬからぬかばでじや」と。

①伽藍。衆園と譯す、興聖錄に見ゆ雙林の伽藍なり。

②重歩。重は去聲によませてある、「ちよう」しかとふみつけて、謹嚴のこと。

③一片。庫裏よりこゝまで来たか。しき瓦一枚をも踏まぬと、自分の履踐を云ふなり、夏中のこと故、虫もころさぬと。

④來朝期滿。あすのあさ、解制なりと。

⑤合作。合は畢竟の意なり。

⑥板頭。板は版にあらざるかと思ふがいかにや、首座は前板後板との別があるが、僧堂の上位より下位に到るまで、數へては次第にかぞへて最下位に至る。

⑦聖僧侍者。これは僧堂の本尊の御守り役で兼て、堂内の大衆の世話役をするもの、僧堂の本尊は文殊菩薩り。

⑧普請。残らず呼び寄せて、御茶で

だ。どこが上堂らしいことがあ

る崑崙に棘を呑むやうにしておい

てはなるまい、能く能く咬みわけ

よ」と。

⑨儼。だれと云はず、拄杖をさして云ふ。

⑩看經。經文を看てをられしなり、珠云く、「未到底は古教を以て照心し、已到底は心を以て古教を照す」と。

⑪淹黑豆老僧。措又は淹に作る、臨濟の本録に措に作る、措は「ひろふ」「かぞふ」淹は「ひたす」、日本で云へば、黑豆かぞふると云ふ義に當る、黑豆は經文の文字に喩へる、文字禪の老師かとおもふたとなり。

⑫數日。四五日にして、いとまこひし去る。

⑬暫來。あからさまになり。

⑭數里。二三里ばかりにしてなり。

⑮疑其事。これはいかさま子細あらんと。

⑯

ものめと、之れとともにせば賞勞

なり。

⑰不分。俗に云ふ、黒いか白いか見わけぬと謂はんを恐ると、氣づかうこと、骨折つたものも折らずして、ものも見分けがないと。

⑱較其重輕。人の行熟を重とし、行不熟を輕とす、えこひいきをしたならばとなり。

⑲惠心。「けいしん」慈悲の心なり。

⑳作麼相當。どうしたならば諸人の氣に叶ふやうになるであらふ。

㉑重賞之下。これは三略にある文なり、されど士を夫に作る、大功あるものには急度褒美をくれると、身命を捨て、忠孝をする武士が出て來ると。

㉒重賞則故。重賞のことは、この虚堂はしらぬではない。

㉓阿那箇是。どれが法のため身を碁石にすつてもひるまぬものだ、珠云く、「虚堂の上堂は此に在る、これを虚堂が上堂じやと云ふこと

に因つて 鐘聲を聞いて七條を披す。」師云く

①「水淺うして魚なし、徒に釣を下すに勞す。」

僧云く、「長期已に過ぎ了る、中間の事作廢

生。」師云く、「一向に收拾し來らず。」僧云く、

②「鐘樓上に念讚し、牀脚下に菜を種う、甚

麼邊の事をか明す。」師云く、「皮を刮げて骨を

見る。」僧云く、勝首座、猛虎路に當つて坐

すと道ふ、③「響。」師云く、乞兒の席袋。」

乃ち擧す、④鶏鳴丑、愁ひ見る 起き來つて還

つて漏返することぞ。⑤裙子 偏衫筒も也た無

し。⑥袈裟形相此些有り、⑦棍に腰なく袴に口

なし。⑧頭上の青灰三五斗、⑨修行して人を利

濟せんことを指望す。⑩誰か知る翻つて不啣

と成らんとは。」師云く、「⑪趙州新婦面上に笑靨

を添ふ、⑫又繡幕裏に向つて行く、⑬只だ是れ

⑭再回終夏。再び回つて密々の商量をなす。

⑮黄檗當時。黄檗はそのとき悟りもはたらきもぬるいと云ふ

⑯臨濟偷心。臨濟の偷心は生死の命根を斷じてしまふたならばとなり。

⑰尾巴焦黄。尾巴は「をだれ」焦黄は「霜がれ」表替を云ふ、尾

巴は魚の水がなくなつて死するるとき、尾赤くなるを云ふ。

⑱橋林。この雙橋林、則ち寶林に再び來て、夏ををふるものあるかどうかと。

⑲上堂。解夏後、數日しての上堂なり。

⑳世界與麼。これは雲門錄の上

に示衆の語あるを問端とす、世界はこんなひろいが一袈

裟の田地なり、珠云く、「これ甚麼ぞ、雲門宗の骨髓、大事の語じや」と。

㉑聞鐘聲。禪宗では、ひるの御

齋の時の前に鐘を鳴らすと、

大衆は七條の袈裟を着して飯

に赴くなり、茲は雲板をなら

すなり、七條衣は食衣なり、五

條は行脚九條は說法、二十五

條は入滅に用ゆる袈裟なり。

⑳水港無魚。一向にこの漢に非ざるを抑下するなり、あゝ雲門が大魚をつらうと思ふたがさんゝ淺瀬で有つて」と珠は云くり。

㉑中間事。結制と解制とのあひだの事はどうでござる。

㉒一向收拾。一事も記憶せずと「這裡舊曆日を收めずの類なり」と溪注にいへり、「中間の履踐、所得の事を勘定し持ち來るものはない」と珠は云へり。

㉓鐘樓上。かねつきだうの上で念佛念經禪牀の脚もとでは野菜つくりをする、これはどう云ふことを明したのでござ

八の見ることを得ること少なり。」

運菴先師忌の拈香「老和尚、死し去つてより二十五年、誰ありてか門を撐へ戸を挂へん。」

松源と同日に行くと雖も、松源の三轉語を會せず、父子背馳して面なりに相觀ず、直に如今に至るまで莽鹵なることを成す。露冷に風高うして秋意深し、久しいかな矣、藜黍を薦むる心なきこと。」

中秋上堂、僧問ふ、「靈山には月を語り、曹溪には月を指すと、意旨如何。」師云く、「胡を欺き漢を謾す。」僧云く、「謝三郎甚麼の過かある。」師云く、「人を誣ふるの罪。」僧云く、「恁麼ならば則ち天上月圓に、人間月半なり。」師云く、「老鴉、蟬を啄む。」僧圓相を打して云く、「者箇作麼生か明めん。」師云く、「之を明む

りますと、此の一條は黃龍の語である、末の納牌普説にくはしく用てゐる、これ黃龍宗の骨髓なり。
刮皮見骨。忠曰く、「徹底爲人の手だし、これは恐ろしい語なり、皮をこそげて骨をあらはすようなり。
勝首座。惟勝眞覺禪師なり、瑞州黃檗に住す、黃龍南に嗣法す。
猛虎當路。この語は上の鐘樓上の語に對して、勝首座が答へたる語なり、これで黃檗の法席を付せらる、これは近寄り難きを云ひなるものなり。
問ひつめることばなり、ものをきくに用ふ、えーとかへいとかなり。
乞兒席袋。こじきのかます、「これ不淨潔底拈出するに堪へず」と龍溪は注す、「勝の語はきたない、尻もふぐりもみ

えると珠は云へり。

雞鳴丑。これは趙州十二時頌の初篇なり、朝六つ時をいふ。起來漏逗。漏逗はとりみだしたので檢束なきなり。
裙子。楚語、泥縛些那(ないばさな)、唐に裙と云ふ、又舊譯には內衣ともいふ、下著衣なり。
偏衫。此には覆膊衣と云ふ、右のかたとわきとをかくす、三衣の褌すしたかさねにして身に近づくの故なりと。趙州にはこれもない、貧乏で箇も也た無しといふ、上着衣は今は單に衣と云ふこれなり。
袈裟形相。袈裟は具には迦羅沙曳と云ふ、此には不正色と云ふ、又壞色とも云ふ、袈裟だけはやぶれながらも、かただけすこしはあるとなり。
褌無腰。これはともに破れて著用できぬものばかりなりと

頭上青灰。落葉をひろふてきたく故、あたまの上にはほりか澤山なり。
修行利濟人。飛ぶ鳥をも蹴おとし、生藤をもちぎらんと思ふたがと、指は趙州録には比に作る、指望は心に指しつめの類ひなり。
誰知翻。翻と成とは本録には變と作とに作る、溜は溜に作る、神も佛も御存じあるまい不啻増乃ち鈍漢じゃ、ちあかざるものになつたと、以上は五更正坐徹底無心沒可把の境界。
新婦面上。或抄に「徹底無心沒可把の境界」とあり、はなよめのかほにゑくぼをそへたるなり。
繡幕裏行。をしいことに錦の幕の中に居て蘭麝の煙の中に居てと行はあちこちしてもなり。

是人見。をしいことには人からすこしも見えない、これは趙州の境界は知つたものはないと云ふ意。
有誰撐門。扶豎するものなきを謂ふと、溪抄にあり、誰か法道門風を護持するものがあらうぞと。
與松源同日。これは松源崇岳は運菴の師にして、蜜菴に嗣ぐ、宋寧宗帝嘉泰二年八月四日に寂す、運菴は宋の理宗帝寶慶二年八月四日に寂す、遷化も同月同日とは父子縁ふかく中のよいやうなものなり。
松源三轉語。語はこの録の頌古の部に見ゆ。言ろは松源と同生同死すといへども其の語を會せずと、これは餘味又枯崖漫録の中にも出づ參照すべし。
父子背馳。孤負の謂なり、源と菴と君は瀟湘に向ひ我は秦

れば則ち瞎す。」僧云く、「師の指示を謝す。」師云く、「屢生子。」
乃ち云く、「華亭の満船猶ほ足らず、南泉の驟歩踏不著。自餘は眼底紛紛として、搥に道ふ、月を見て指を忘ると、拄杖を卓して、「月響。」
上堂、僧問ふ、「仰山、香巖に謂ふで云く、「如來禪は、師兄の會することを許す、祖師禪は未だ夢にも見ざること有り」と此の意如何。」師云く、「蛇、竹筒に入る。」僧云く、「仰山平白に屈を受く。」師云く、「爾に和して脱不得。」僧云く、「作麼生かこれ如來禪。」師云く、「鐵壁鐵壁。」僧云く、「如何なるかこれ祖師禪。」師云く、「楚甸雲寒く、越山風暖なり。」僧云く、「如何なるか是れ和尚の禪。」師云く、「爾これ

顛する耶狂する耶。僧云く、「學人此れ從り問話せじ。」師云く、「更に須く勘過すべし。」乃ち擧す、大原の孚上座、初め、雪峰に參ず門に跨る纒かに雪峰を見て、便ち、主事に參す次の日、却來して禮拜して云く、「昨日、和尚に觸忤す。」峰云く、「是れ般の事を知らば便ち休せよ。」師云く、「盡く謂ふ、雪峰、陷虎の機ありて斬蛟の劔なしと。殊に知らず、養子の縁寛にして恕あることを。」

重九上堂、僧問ふ、「理事を逐つて變せず、事は理を逐つて遷らず、九九の日、甚と爲てか鼓を過つて、陸堂す。」師云く、「理事他を拘すること得ず。」僧云く、「他これ甚麼人ぞ。」師云く、「頭輕く尾重うして脚邏沙。」僧云く、「錯つて人に指示し了れり也。」師云く、「山僧

に向ふと、中がわるくなつてみむきもせぬ。直至今。莽園不分明無分、曉なり。やくたゝぬとりさがした。露冷風高。八月四日の忌景見るべし、景に對して其の人を思ひ慕ふの深きなり。久矣黎黍。二十五年にもなれば、蔬藜黍米の非薄の供へもの、乃ち御茶湯をも供へやうと思ふ心はない、眞箇無味の享祀なり、珠云く、「この語路は見性已後の詮索じや」と。靈山話月。これは修多羅の經は月を標するの指と、玄沙師備禪師の傳に「吾れに正法眼藏あり、大迦葉に付囑すと道ふが如きんば、我れは道ふ、なほ月を話するが如し、曹溪拂子を豎つるは還つて月を指すが如し」と。胡漢護漢。胡は靈山、漢は曹

溪、珠云く、「玄沙がまゝじや佛祖をないがしにしたこと。」謝三郎。玄沙は支那の唐の閩の謝氏の子、幼にして好んで釣を垂る、後衆に云ふ、「釣魚船上の謝三郎、欺瞞した過はどこにござる」と。誣人之罪。珠云く靈山曹溪もと此の事なし、玄沙ことさら之を誣ふるなり、釋迦と六祖に無實を云ひかけた。天上月圓。恁麼ならば只だ是れ現成底のみなりと、天上の月はもと圓缺はないか、人が月は缺けたと見る如く、御月さまは天上にまゐる、人間界は月の十五日なりと。老鴉啄蠅。あほうがらすが蠅がらをこつぐが、石も一しよに吞吐不下なり、これは珠云く、「おのれがやたらにのみこみさへしたらよいと思ふて」と。

年邁けたり。」僧云く、「汾陽道く、「重陽九日菊花新なり」と、此の意如何。」師云く、「我れに隔水の犀なけれども、自然に塵染ます。」僧云く、「汾陽今日落節す。」師云く、「那裏にか汾陽を見る。」僧便ち喝す、師云く、「弋すれども宿を射す。」

乃ち云く、菊を東籬の下に採つて、悠然として南山を見る。陶靖節は是れ箇の俗人なりと雖も、却つて些しき衲僧の説話あり。然りと雖も、他はこれ晉の時の人、未だ全く信すべからず。」

開爐首座を謝する上堂、僧問ふ、「趙州道く、「我た喚んで火と作す。爾喚んで火と作すことを得ず」と、此の意如何。」師云く、「撓鉤搭索。」僧云く、「今日趙州を見ることを得たり。」師云

打圓相。眞月を顯し、己が會處を呈す。明之則暗。元來明暗なき故、惡ぞう木ぞうの眼が瞎す。屢生子。愚漢の謂なり、鈍漢なり、この録の頌古夾山次話に見ゆ、うぬうめくなり、臨濟錄の瞎屢生と同じ、屢或は婁に作る。華亭滿船。珠云く、「船子いつかど思つて云ふたれど、のせをふせぬ」溪注に云く、「藥山下の秀州、華亭の船子德誠禪師偈あり、曰く千尺絲綸直下垂、一波纒動萬波。隨夜靜水寒魚不食、滿船空載三月明歸。」南泉驟步。驟は馬の疾歩なりこばしこく取りまはしたやうなれど、この縁はこの録のしまひに見ゆ。自餘眼底。珠云く、「上の兩箇の外は光影を弄する底で、紛亂して分明ならず、あの道理

この道理とてじや。總道見月。すべてがいふ。おらまう佛教祖錄には用はないとこの語は楞嚴の第二と圓覺の清淨慧の章の所説に出づ、此れ猶ほ理觀に涉るを抑ふるなり。月聾。觀面指出である、珠云く、「聾といふ字に深密の義あり、珠云く、「月を見よと云ふことかみるなと云ふことか」と。仰山。惠寂、瀉山に嗣ぐ。香嚴。智閑瀉山に嗣ぐ、この縁は會元香嚴の章に出づ。師兄。香嚴は仰山の先輩、兄弟子。如來禪。この解は下の問答をみよ。祖師禪。下の問答を見よ。蛇入竹筒。方語に「曲心猶在」智度論廿三に云く、「一切禪定攝心皆三摩提と名づく、秦に

は正心行處と言ふ、謂く、是の心無始より已來、常に曲つて端しからず、是の正心行處を得れば、心則ち端直蛇の竹筒の内に入るが如し」珠云く、「仰山は曲りたくてならねども、しかたなく直に云つた」仰山平白。日晝に屈辱を受く、珠曰く、「仰山もひる中に大はぢをかいたと申すものである。」

和備脱。その方どもに一しよになり、仰山と同じやうに屈を受くべし。

鐵壁々々。手脚を著くところなし或抄に祖師と同時にこたへんに、こゝに心をつけよ」と。

楚旬雲寒。楚旬は郊甸なり、郊外のこと、六十里をいふ支那での野原なり、これは此の現成直示にして、畢竟祖師禪意地を提ぐなり、雲寒は或抄「把住或は魔界に入る底を取るなり。」

越山風暖。溪注に、「處處任運に現成す」風暖は或抄に「放行或は佛

界に入る底を取る、所謂祖師禪は或は佛界に入り、或は魔界に入る把住放行殺活自在なり。」

顛耶狂耶。差別の不正問を發起する故にと珠曰く、「顛はなんと取りちがへて居るか、狂はうぬは氣が違ふたかなり、或抄に「禪は多途なし、汝は二に別ち三に別つこれ本心にあらざるべし。」と。

學人從此。非を知るの謂なり。珠曰く、「ぶてうはふ仕りました、まう申しますまい、如來禪、祖師禪尋ねることはまうない」と。

更須勸過。或抄に「それによることではない」と、珠云く、「うぬがなにほど利口めいた顔しても、おれが穿さくせねばゆるさぬ。」

大原孚。雪峰存に嗣ぐ、初め楊州光孝寺に在り。

雪峰。義存なり。

主事。知事なり、知事に四員あり一に監寺、二に維那、三に典座、四に直歲。

却來。方丈へかへりきたる。

觸忤和尚。犯逆なり、慮外をいたした。

知是般事。これほどの事を知つたならば、だまつてしまつてをれぬの義なり、又是般とは日本のこれしきの事をば知つたよと云ふて休すと又是れほどのはたらしきえせま

陥虎之機。令を行ぜざるが故なり珠曰く、「大機は具足してゐるれど手に物がながい、残念なと斬蛟とは唐の開元の末、靜江車灘の中、雷公、一の黃蛇を遂ふて灘上に盤繞す、之を視れば一銅劍を得たり

世説と云ふ書には、周處と云ふ人少かりしとき凶強にして、氣を使ふ、郷里の爲に患へらる、義興水中の蛟と南山白額の虎と周處を并せて三害と爲す、處は虎を殺し蛟を斬り、遂に自ら改勵して忠臣孝子となると云ふ。

殊不知。宗師の手前は、とんとち

がふたものなり。

寬而有恕。ゆつたりと思ひやりがある、或抄には「大慈悲心を以て人を利す、虛堂も下心は陷虎の機あり」といふ。

重九。九月九日の重陽なり。

理逐事。「理事法爾として雜亂せず、互に變遷せざる也」と溪注に見ゆ、珠曰く、「理が事をさまたぐることもならぬ、又事理不二にして、理は理事は事と分ちてある、柳は綠花は紅じやと或抄に事を逐ふて變ぜずで、端午或は重陽等日好日年々是好年の處じや、理を逐ふて遷らずで、事理分明差別混雜せざる也」と。

九九之日。九々の上にかぎつたことではない、「已に理事共に變ぜず、九日は事なり、上堂は理なり」と。陞堂。大佛殿の法座にのぼりて、説法堂がある。

理事拘他。珠云く、「理と云ふものがせきとめることはならぬ、理事

も拘はることはならぬすきなことをするぞ。」

頭輕尾重。これは他を形容す、沙は遮に作るべし、邏は巡なり、しどろもどろといふこと。今は非常の意を取る。珠云く、「よろ／＼とよるめいて、あるきえることではないと云ふこと。」

錯指示人。「和尚、此の人、形相もと人に指示すべからず、而も和尚の指示す、實に錯り了れり」と珠は云へり。

山僧年邁。そらとぼけた賊意なり年邁た故、いひそこなひもする。汾陽道。この語は顯孝語録に出でゐる。珠云く、「三玄三要事難レ分。得意忘言道易レ親、一句明明該三萬象、重陽九日菊花新」とありしなり。

我無隔水。眞の犀角なれば水に入れば一尺は三尺に開く、自然ときれいに水がすむと云ふ、これは先聖を慕はざれども、任運に欠少す

る所なければなりと、珠曰く、「其方がなんぼど問ひかけても、それにひつつきはせぬはやい、又不染は汾陽の語を指すなり。」

汾陽今日。屈を受くる故なり、珠曰く、「それでは汾陽ももと手を取り失ふたと云ふもの、をちどなり」

弋不射宿。これは論語、述而篇にある語、弋はいぐるみ、弋射と云ふて鳥類を弓にていてとるを云ふけれども宿鳥とて巢に居る鳥はとらぬ、空飛をとるの義でなくばこれは利劍は死漢を斬らすの義なり珠曰く、「うぬがやうな、ねばうには、こちはかまはぬと。」

乃云。提綱なり。

く、「**①** 爾他の東壁に葫蘆を挂くことを會す
麼。」僧云く、「**②** 也た是れ家常の茶飯。」師云く、
「**③** 互郷の童子。」

乃ち云く、「**④** 霜風曉を戒め、**⑤** 黄葉雲を堆
うす、**⑥** 我が門庭の如きんば、一般に冷落す。
⑦ 有る底は道ふ、「老子尋常、多くは是れ**⑧** 貧を
闘はしめて、富を闘はしめすと、**⑨** 山僧以謂らく
然らず、何が故ぞ、**⑩** 但だ板頭に人あることを
得て、**⑪** 自然に暖氣相治し。」

達磨第二忌の拈香、「**⑫** 葱嶺に宋雲を見ざれど
も、**⑬** 全身豈に熊耳に在らんや。**⑭** 石火電光
も殊に擬すること莫し、**⑮** 雙檣堂上再び相逢
ふ、**⑯** 究竟して何を曾て兩齒を缺く。**⑰** 雪際に
心を傳へ、**⑱** 灰を篩して鬼を厭ふ。**⑲** 後代の兒
孫誰か爾を采らん、**⑳** 龜羹淡飯殷勤に當つ、**㉑**

④ 四海の香風、此れ従り起る。

上堂 僧問ふ、「**㉒** 布袋の長年落魄、**㉓** 盤山の猪
肉案頭、**㉔** 觀音の手裏の魚籃、**㉕** 大士の門推拍
板、**㉖** 者の一絡索、**㉗** 虚堂面前に到る時如何。」
師云く、「**㉘** 蘇嚙蘇嚙。」僧云く、「**㉙** 凡夫を轉じて賢
聖と爲し、**㉚** 賢聖を抑へて凡夫と爲すことは、**㉛**
則ち和尚なきにあらず。」師云く、「**㉜** 家狗人を咬
む。」僧云く、「**㉝** 布袋闍裡に向つて打開して、件
件拈起して云く、『看よ看よ』と、此の意如何。」
師云く、「**㉞** 勘せざるに自敗す。」僧云く、「**㉟** 且く道
へ、**㊱** 門推拍板と相去ること多少ぞ。」師云く、「**㊲**
窮餓相煎す。」僧云く、「**㊳** 手裏の魚籃は則ち問はず
猪肉案頭の事麼生。」師云く、「**㊴** 地獄門前鬼脱
卵。」僧云く、「**㊵** 此の問を伸べずんば、**㊶** 一生を蹉過
せん。」師便ち喝す。

く、世に靖節先生と號す、潯
陽柴桑の人なり、曾祖侃は晋
の大司馬たり、淵明は遠法師
と友たり。

却有些衲僧。なか、どこか
にすこしは衲僧の說話に似た
ることがあるけれどもと。
他是晋時人。晋の時は達磨大
師も、この支那に來り玉はず
些しき無心の說話を解すと雖
も、未だ活祖意を見ず、故に
吾が宗の無師自證と同じくま
た全く信するわけには參らぬ
或は劍去りて久し矣言迹を逐
ふべからずとなり。

開爐。爐開きの上堂なり。
我喚作火。珠云く、「こりや背
觸をとつくり呑み込んで來な
ければ相談はならぬ、おそろ
しい、この語は趙州錄の下に
出でる、汝は火なりと云ふ
ことを知らぬかとなり。
機釣搭索。機は搔なり、通じ

今は僧の惡覺を責むるなり、
珠云く、「うぬめは人がらのわ
るいやつ、慮外千萬じや」と。
霜風戒曉。あきあらしなり。
黄葉堆雲。秋の末の葉ちりつ
もる、この二句は開爐の風物
を序す。

如我門庭。珠云く、「我が禪宗
達磨の門庭は、虚堂が處も秋
枯れの景色と一やうにひえき
りてゐる。これは其の節に應
ずるなり。
有底道。ある人たちはいふと
老子は虚堂自らを云ふ、尋常
のくせなりと。
鬪貧不鬪富。「貧をばかちと
す、矮子の勢くらべは矮をか
ちとするちつとも、衆人の賑
ひ勇むやうなることは云はれ
ぬ」と珠云へり。
板頭有人。これは首座を謝す
るなり、「道德兼備の單頭師が
出で來ればじや」と珠云へり。

て機なり、珠云く、「ひつか
りをこしらへんがため、」或抄
に「趙が僧を接せんとて引き
よせた、方語には大煞分明と
あり、爲人の心ぞ。
今日得見。師の判に據りてな
り、「みかげををがむうれしさ
よ」と珠は云へり。

爾他東壁。葫蘆はひやうたん
是れ没巴鼻の機なり、栢樹子
や麻三斤の類の如し、又この
錄の徑山後録解夏の次に出づ
珠曰く、「其方は趙州に相見し
たと云ふが、此の語が合點な
らよい、さもなくてはまだまだ
ぞ」と。
也是家常。理會するにたら
ずと、珠云く、「それは御きづか
ひなさりますな」と。
互郷童子。互郷は論語の述而
篇「互郷難與言」とあり、註
に「互郷は郷名、其の人不善に
習ふ、與に善を言ひがたし、

自然暖氣。おのづと人の心へ
入りわたつて和合しどことも
なう春の陽の入渡つた如く、
衆心悅可することとなり、洽は
和なり、この語は開爐を結ぶ
と珠云へり。
達磨第二忌。劉善富が田を捨
て、忌を營むよりこのかた、
第二忌にあたる。
葱嶺宋雲。「これは初忌に出
づ」と珠云へり、是れ面目か
ら云ふと、葱嶺で宋雲が達磨
に御目にかゝらずとも、これ
は有相の達磨なり。
全身豈在熊耳。理當是の如く
なるべし。
石火電光。これは上の意を斷
送したるなり、擬はなぞらへ
るなり、はやいことのとたとへ
にするか。
雙檣堂上。それじやのにこの
達磨に二度も御目にかゝるは
と目前露堂々なりと。珠云く

乃ち擧す、羅山初め崑頭に參ず、便ち問ふ
 「起滅停らざる時如何。」頭云く、「咄、これ誰か起滅す。」山豁然大悟、師云く、「崑頭則ち孔を見て楔と著くと雖も、他の羅山を累はして起滅不停の處に坐せしむ。」
 上堂、僧問ふ、「若し戰を論せば也、箇箇力めて轉處に在りと、此の意如何。」師云く、「猶ほ是れ死法。」僧云く、「作麼生か是れ活法。」師云く、「逆風に帆を張る。」僧云く、「二林今日自ら敗闕を納る。」師云く、「年老いて精と成る。」僧云く、「大力量の人甚に因つてか脚を擡げ起さざる。」師云く、「師子人を咬み、韓獹塊を逐ふ。」僧云く、「口を開くこと、甚に因つてか舌頭上に在らざる。」師云く、「臟を抱いて屈と叫ぶ。」僧云く、「明眼の衲僧、甚に因つてか

「着語す。」
 ① 究竟何曾。珠云く、「ほんたうの處はおれが二度見たが、齒はぬけぬになぜ大師は兩齒をかいた」と。
 ② 雪際傳心。これは二祖惠可が雪中に少林にて斷臂傳法を云ふ。
 ③ 篩灰厭鬼。厭は懼と通ず、穢なり、灰を篩ふて不祥を穢ふことは、和漢とも通俗なり、今は傳心の怪をはらふなり、珠云く、「みこやかんなぎのするやうなことをして、或は鬼は二祖にたとへる。」
 ④ 後代兒孫。虛堂などもその様な後代では、臂を斷つたり、雪に立ちたりするやうなことは、と珠云へり。たとひ兒孫といへども豈に傳心の怪を取りて法とすべけんや」と溪注に見ゆ、采汝はかまはぬこと。
 ⑤ 齋淡飯。此れは祭の事を述

ぶ、菜大根のけんちゃんや大唐米の味のないごちそう、虚堂が心一ばいのもてなしなり
 ⑥ 四海香風。言ろは天下宗の起るところ、故に殷勤に吊祭を致すとなり、珠云く、「天下中に最上の禪入り渡つたと云ふも、その根本は此の和上が仕出かしたることじや。」
 ⑦ 布袋。布袋の事跡はこの録の佛祖贊に見えたれば、今は略す、落魄は志行衰悪の貌、おちぶれたること、珠云く、「鄺肆聚落おちぶれたるていたらく。」
 ⑧ 盤山猪肉。これも報恩入寺録に見えたり、珠云く、「入鄺垂手のありさま、屠家にて精底一斤を割き來れ、那箇か精底にあらざると云ふところにて於て省あり。」
 ⑨ 觀音手裏。これもこの録の佛祖贊に見ゆ。

脚跟下、紅絲線不斷。師云く、「貪多くして嚼細ならず。」僧云く、「昔日の松源、今朝の和尚。」師云く、「牢く記取せよ。」
 ① 乃ち云く、「此の事甚だ易し、走作するに因つて、反つて以て難しと爲す。何れの處かこれ走作。眼に見耳に聞く、これ走作、鼻に嗅ぎ舌に嗜む、これ走作、運奔執捉これ走作、覺觸攀緣、これ走作。以至、舉心動念、參禪問道、古今を穿鑿し、人我を是非するは、悉くこれ走作なり。只だ一處の不走作あり、以て諸人に説向し難く。若し説かば者の不走作底に和して、一時に走作し了らん也。」
 ② 冬至小參、僧問ふ、「黑豆未だ芽さざる時如何。」師云く、「黑鱗皴地。」僧云く、「芽して後如何。」師云く、「黑鱗皴地。」僧云く、「芽と未芽

① 大士門推。この大士は傳大士これも前に見ゆ上の四大士皆鄺中の佛事を作す底の者なり門推は袖うらの木推、手中の拍板、之を執つて經を唱ふ。者一絡索。一からげなり、一段落と云ふが如し。
 ② 虛堂面前。師の事に歸するの謂なり、珠云く、「虚堂の手前きたならば如何と云ふ程の意。」
 ③ 蘇盧々々。梵には蘇盧都訶、此には梵音決定と云ふ、所謂一道の眞言、義解すべからず或抄に「そろはよみかへる、虚はかくるなり、をしむなり、則ち甘露の水を洒かれて蘇みかへるを云ふか」と。
 ④ 下無和尚。大活自在の手段を嘆ず、この様な大活和尚ないではないと。
 ⑤ 家狗咬人。家賊の我なり、てがひ犬がかむやうなものなり

⑥ 布袋向關。袋をひろげて件件拈起して云ふ、看よ看よで袋中の物事を見てくれ、下駄も燒味増も一々とんとだして。不勤自敗。自らの件々敗露する故に、珠云く、「小首かたげるには及ばぬ、早や敗北降参する布袋が、我と自らはいけつした。」
 ⑦ 窮餓相煎。一齊に抑下す貧乏神が共にせりやつたどれもこれもやくに立たぬと。
 ⑧ 地獄門前。これは龍溪注などはまるで違ふてゐると、碧岩方語解附録に出づ脱卵と云ふのはもと官府の語なり、吏の衙門へ詰るとき明け六を定めとす、上官の前で一々これを點檢をするを點卵と云ふ、着到帳に姓名を記載するを畫卵と云ふ、脱卵は其の日の上官のぎんみをはづれたるを云ふ又轉じて凡そ事の仕落ちなど

のあるをも脱と云ふなり、さればこの鬼闍魔王のぎんみをはづれたるなり、相脱卯すは。そそうしをちなり。水滸傳第四十五回に云ふ、「次の日五更楊雄起き來つて、自ら去つて晝卯し、官府に承應すと又三十九回にも書中箇の老大脱卯あると云ふ、珠云く、「帳はづれ、闍魔の手にも俱生神の手にもあはぬ、帳はづれ。」

② 師便喝。珠云く、「くそぬかせ、うぬくまだくせいをだせ」と、又或抄に、「承當らしいところに當つて喝す。」

③ 乃舉。拈提なり。

④ 羅山。道閑、嵩頭齋に嗣ぐこの話は初めに石霜に問ひ、再び嵩頭に問ふたのである。

⑤ 起滅不停。念起念滅で煩惱と妄想なり、嵩頭は云く、「咄、これたれか起滅す」と、起滅するものはないやなり。

⑥ 見孔著楔。合好の義ちやうどもつ

てまゐつたれどの義、又能く物を仕合の義で、羅山をよく見てよりかつかうしたとなり。

⑦ 果他羅山。「氣毒なことには難義をさせて、虚堂嵩頭の宗風をよくのみこんでいくゆゑに此のやうなことを云ふた」と珠はいへり。

⑧ 論戰也。この録の瑞岩録にも見ゆるが、嵩頭云く、「若し戰を論ぜば也た箇々に須らく咬猪狗の手段なるべし」とあり、又碧岩第十則の垂示にも、「若し戰を論ぜば也た箇々轉處に立在す」とあり、戰を論ぜば法戰を論ぜばなり、古來この語のよみかたは「戰を論ぜば」と讀んでゐるが、それでは意味が通ぜぬ、「論戰せば」と訓して、「理窟を云ふならば」の意に解すべき字である」と近來或抄にいへり。

⑨ 箇々力在。力(つとめて)の字恐らくは立乎と珠も云へり、これは平たく云へば、「どうでも理窟はたつ」で、今日の言葉でいへば、議論

の出發點」とか、「立論の根底」とか云ふ意味、立在は「證據して居るとか」「基因して居る」とかの意、箇々は何れの議論の意味なり。

⑩ 猶是死法。抑下で、不自由なり。

⑪ 逆風張帆。大自在の活法なり、珠云く、「これはなんじや、箴にまんぐわ、横に車か、是れが宗師の爲人か。」

⑫ 今日自納。虚堂の機用を抑下す、虚堂もをしくぐりなされた、既敗露する故に。

⑬ 年老成精。精は邪精、精魅みな魔の謂なり、或抄に「うか／＼とうるたへまはる體を云ふ、ばけものになつてゐるなり、ばかされることなどを云ふ。」

⑭ 大力量人。下の二問に通じて松源の三轉語なり、頌古の部に三頌あり、其の意を解す、珠著語して云く、「因レ甚明眼衲僧擯レ眉底、擯レ脚不起、終行曾不レ行」と、擯はあぐるなり、大力量人とは一大人也、

との時如何。「師云く、「黑鱗皴地。」僧云く、「若し

與麼ならば、甚の分曉かあらん。」師云く、「

無分曉の處に向つて、黑鱗皴地を識取せよ。」僧

云く、「學人今夜、白衣拜相」といつて、便ち禮

拜す。復た僧あり、出でて問ふ、「如何なるか

冬來の事。」古徳道く、「京師に大黃を出す

此の意如何。」師云く、「短處に長を求む。」僧云

く、「忽ち人あり、和尚に冬來の事を問ふ、

擗。」師云く、「雪後に衣を添へば、定んで是れ

寒からん。」僧云く、「元來古徳猶ほ在り。」師云

く、「汝はこれ、安祿山。」

乃ち云く、「葭灰未だ動せず、律管先づ知

る、暗に去り明に來る、未だ嘗て遷謝せず

所以に衲僧家、理に就き事に就いて、順水

に舟を流る。殊に知らず、無陰陽の地、

なり、この三轉語は無門關に

も出でゐる。

① 獅子咬人。俊利の人、大力量

の人の上なり。

② 韓搯逐塊。田犬なりと云ふ、

搯は犬と通じて虚に作る、黒

狗なり、塊は言句にたとへる

珠云く、「言句に取りつかず」

と、なせ本心本性にかへらぬ

かと。

③ この故事は戰國策に出づ、天

下の疾犬なりとある、淳于髡

が齊の宣王に説きし故事、韓

子虚を略して云ふ。

④ 抱贖叫屈。舌頭上に在らず、

却つてこれ眞箇開口の處なり

癡漢は此の意を知らず、徒ら

に言跡を認む、猶ほ賊の贓物

を抱いて叫ぶが如し、珠云く

、「この馬鹿め、人の物をぬすん

で來て、やれ耻じや悲しやと

大聲上げて泣いて居るやうな

もの、我はぬすまぬに迷惑な

どと云ふやうなものなり。

⑤ 脚跟下紅。珠云く、「甚に因

つてかと云ふはやそれが生死

のきづな、明眼の衲僧も油斷

すれば、生死の紅絲線なり、

生死のきづななり。

⑥ 食外嚼不細。むさぼるものは

嚼細からず、故に滋味を辨ぜ

ず、古句精喚、飽き易し、細嚼

飢ゑがたしと、珠云く、「うぬは

やたらに古則古案透ればよい

と思ふて、口ぐせに咬みわけ

もせで」と。

⑦ 昔日松源。古今二路なし、達

者共に途を同じうす。

⑧ 牢記取。又是れ賊意とおぼえ

てをれとなり。

⑨ 乃云。珠云く、「この上堂は學

者の骨を碎き髓をとる。」

⑩ 此事。至道無難の故に、珠云

く、「無上菩提、一大事因縁。」

走作。散失の義、又物念の義

塵勞妄想に轉せられて走作す

るなり、五塵六欲に轉ぜらるゝに因つてなり。

- ① 反以爲難。唯嫌揀擇の故に。
- ② 何處是赴作。徴起す。
- ③ 眼見耳聞。珠云く、「男を言ては男と思ひ女を見ては女ととむ、もと男女不二もとの本心と鏡を取りうしなふ故に」と。
- ④ 運奔執提。上は足、下は手なり。
- ⑤ 覺觸攀緣。上は身、下は意、珠云く、「見性の者は佛心に覺觸して、其の上に外に攀緣す。」上は寒輭麤下は是非憎愛。
- ⑥ 以至。いまし、その外、それからなり。
- ⑦ 是非人我。人を是とし我を非とする毀讚なり。
- ⑧ 悉是赴作。珠云く、「そんなら立ち白も鐵棒も、法成就のもの乎。」
- ⑨ 一處不走作。珠云く、「けれど其の中にあるで、「あれ牛過窓檻一じゃ」州云く、「無じやのと」云ふて、難透難解を以て平生用心す、

さうでなくば皆走作じや。」
 ⑦ 一時走作。「それは睡で矢をはいだではないか」と珠長老は云へり。
 ⑧ 黑豆未芽。冬夜の菓子に寄せて一機未生、渾然たる本分の正位を表す、珠云く、「混沌未分、空劫已前である、空諦門である、佛祖も來つてつらを出さぬ、是れすなはち納僧放身捨命の處じや、一陽來復のときゆえなり。」
 ⑨ 黑鱗皴地。無分曉、沒巴鼻なり、拄杖を見よと、こくりんしゆん地じやほとんど、すさまじい手もつけられぬ、以下みな同じことである。

- ⑩ 芽後。假語門なり。
- ⑪ 芽未芽。中道門なり。
- ⑫ 有甚分曉。どろ田を棒でぶつたやうなものなり。
- ⑬ 向無分曉處。珠云く、「此處に於て無分曉をとめるな、必ず見よこなふ」と、これは年よつてあんまり漏逗なる故なり。
- ⑭ 白衣拜相。凡を轉じて聖となす、顯孝錄に見ゆ、珠云く、「龍かきかにはかに大名になつたやうなものなり。」
- ⑮ 冬來事。さむくなつて來た時、一大事はどうござらんと。
- ⑯ 古德道。疎山の仁和尙、報恩錄に見ゆ。
- ⑰ 短處求長。此の話を擧するを抑ふ又不相應の義、古德の荅を抑ふ、珠云く、「あまりせんさくして求めたが、づつとよい枯骨上求汁の義好荅じや、京師出三大黃」がいきかへる。
- ⑱ 疊。物を指し云ふ、こりやどうじやと。
- ⑲ 雪後添衣。直示なり、冬至の端的底なり。
- ⑳ 元來古德。虛堂を弄するの意珠云く「とりも直さず、和尚は直に疏山和上じや」と。
- ㉑ 安祿山。安祿山は唐の逆臣、玄宗時代、恩幸無比、却つて反逆を致

し、唐室をくつがへすの陰謀を企つ、今此の意を以て此の僧の賊精を責む、珠云く、「面前ほむるものは背後必ずそしるものあり」。

① 葭灰。よしのはひ、葭管などと云ふ、冬至の事、報恩錄に見ゆ、大地山河、不レ改二相形一なり。

② 律管先知。一陽來復し、悟つて見れば山は山なり、河は河なり、先知は陽氣の至ることを知るとなり。

③ 暗去明來。陰と陽となり、妄想習氣の暗が去りて、妙明心性の明來る、

④ 來管還謝。これ何物ぞ、根本かはりはせぬ。

⑤ 就理就事。理に就いては未遷謝底、事に就いては暗去明來底。

⑥ 順水流舟。機に臨んで運用、自然に力を費さず順水に舟を

荆棘天に參はり、契券ある邊、蕪藜地に滿ちて、春生じ夏長するの徒をして、卒に近傍し難からしむることを致す。二林一著を放過して、曲げて今時の爲にす。

復て擧す、瀉山、仰山に問ふ、仲冬嚴寒年年の事、晷運推移する事若何。仰山近前又手して立つ、瀉云く、「誠に知る、子者の話に答ふることを得ざることぞ。」香嚴至る、瀉前話を擧す、嚴云く、「某甲偏に者の話を答へ得ん。」瀉復た擧す、嚴も亦近前して、又手して立つ。瀉云く、「頼に寂子が不會に遇ふ。」師云く、「瀉山若し後語なくんば、儘自ら包裹し得去らん。」其れ用處太だ過ぎて、以て栓索俱に露るゝことを致すことを奈せん。」

上堂、秉拂を謝す、僧問ふ、「智、師と齊し

流る如く自由自在、今時那邊盡く手に入る。

① 殊不知。已下は向上の一轉なり、珠云く、「上の順理順事を貶斥す、大宗匠はわけが違ふ」

② 無陰陽地。本分なり、面目坊の世界、無陰陽から生じたるものでなければ、やくにたゝぬ。

③ 荆棘參天。出頭すべからずなり、いはら松原なり、珠云く、「釋迦選磨、衲僧も此の中へなげこむ。」

④ 有契券邊。手形證文きつとした處、現成建立なり、珠云く「面目を見る」と、慥のこと。

⑤ 蕪藜滿地。足を描くべからず共に把住綿密珠云く、「宗師法窟の爪牙、奪命の神符を以て接得する底。」

⑥ 春生夏長。隨時に遷變する底なり、珠云く、「菩提をうゑて佛を求むる等のやからなり。」

きは、師に半徳を減ず、智、師に過ぎて、方に傳授するに堪へたり。那箇の智か師に過ぎたる。師云く、「忽ち去り忽ち來りて、今古を坐斷す。」僧云く、「學人瞻仰するに分あり。」師云く、「狗口を合取せよ。」僧云く、「若し與麼ならば、首座、藏主、遂に虚設と成らん。」師云く、「是れ苦心の人にあらすんば知らじ。」僧云く、「却つて些子に較れり」といつて、便ち禮拜す。師云く、「急に頭を抽んでは是れ好手。」乃ち云く、「深山大澤は、象龍の所なり、雷霆の變化、一時の間に在つて、艸木自然に光潤す。構林の下、此の瑞あること莫し廢。」拄杖を卓して、「園梨を疑殺す。」上堂、僧問ふ、「天雪ふらんと欲して未だ雪ふらず、梅花さかんと欲して未だ花さかず。」

① 放過一著。珠云く、「一手放してどこへ何を一手ゆるした、是を名けて荆棘參天と云ふ、達磨の宗風を直に以て來ては今時にあはぬゆゑ、曲げて今時の爲にず」と、又或抄に「放過はほんやりしてゐるじや。」
② 瀉山問仰山。珠云く、「この話は仰山悟後、鍊り得て日用の履踐如何と試みらるなり。」
③ 仲冬嚴寒。珠云く、「これは瀉仰宗の風彩、ぬらりとふくべで、ほゝをなでるやうにやはらかにかゝる。」あゝさむくてこたへん、辰の年巳の年になり。
④ 鼻運推移。珠云く、「日かげがうつり行く事は受用することなり、どんなことじやな、老牛舐犢のやうなど。」
⑤ 誠知子答。珠云く、「瀉仰宗の奥ふかい語じや、」不得とはかねてそうこそ思ふた、一千五

⑥ 百人の師家に見ゆること。
⑦ 香嚴。仰山の師弟（おとうとでし）。
⑧ 近前叉手。ちかづききたりて叉手と云ふて兩手をこまぬいて立つなり、珠云く、「なんのことかはしらんが、をんたうのものなり。」
⑨ 頼遇寂子。作麼々々なり、其方幸の義なり。
⑩ 若無後語。頼遇三寂子不會、と云ふの語なくばなり。
⑪ 儘自包裹。珠云く此の禍はみな瀉山が背擔へかゝへてはしるべきが、自領出去なり、儘は皆なり、極なり。
⑫ 其奈用處。珠云く「奈んせんはあんまりせんさくすぎてはばけがあらはれたがなり、殊の外見にくい、極はくじじめ索はなはじめと、虚堂がこれ宗風どこに釘目が見える、好評好評と。」

① 乘拂。この乗拂は藏主首座などをして乗拂せしむるを謝するなり。
② 智與師齊。この語は百丈の語で、百丈の傳に出づ、傳燈錄六に見ゆ。
③ 那箇智。珠云く「その智と云ふものは、どんな、わらうでござる」と。
④ 忽去忽來。「那一人、舊職は去り新職來る、四威儀逆順竟界なり」と珠はいへり、坐斷は佛を罵り祖を罵る。
⑤ 學人瞻仰。自ら相見と稱す、珠云く「私もその智、師に過ぎたる人を瞻仰することが出来ます。」
⑥ 同取狗口。珠云く「いちぢたないことを云ふやつ、臭い口を以てたゝくな、瞻仰し及ぼす所に非ず。」
⑦ 若與麼。即今分座說法底の人なり、珠云く「瞻仰することもならぬ、向上の事ならば、首座藏主乗拂して說法等はむだごとと申すものでないか。」
⑧ 不是苦心。珠云く「刻苦取證の者でなくんばしらぬと、」或抄にはこ

の事にてつていの人ねんごろの義知音でなうては知るまい。
① 却較些子。唐宋の俗語なり、珠云く、その不知が些子ばかりのことぞ、ふかしいことあるまい、又すこしははなしになると云ふこと、すこしはわかりました。
② 急抽頭。急に衆に歸するなり、にげるが上手の意なり、抽頭はくびぬけするなり、好手は上手なり。
③ 深山大澤。左傳の襄二十一年の條に「深山大澤、實に龍蛇を生ず」と註に非常の地多く非常の物を生ずとあり、深山は實林の道場を指し象龍は名衲子のあつまるを云ふ、所謂六處の聚落をはなれて、深山大澤に入ると云ふところ。
④ 雷霆變化。これはこの録の瑞岩の天基節にも見ゆ、今は乗拂の頭首を贊す「變化は凋枯せる草木を生かへらすといふにたとへる」と珠長老は云ふ、又法雷を振ひ、法鼓をうつなり。

① 一時之間。一時片時の間もと。
② 艸木自然。名山巨刹は宿衲の居るところ、纔に分座提唱せば、則ち一言の下衆生自然に益を得て艸木もともにしぜんに光がうるほふと。
③ 莫有此瑞。虚堂が處にもかういふめでたいことはないか。
④ 疑殺園梨。これは乗拂の人を指す疑殺は其の提唱の不可思議なることを譏嘆するの謂なり、珠云く、「たつた獨り心もとなひものがある。」
⑤ 天欲雪。珠云く「事では雪ふりさうで降らぬ、陽和に向ふたが理では行者工夫凝結して、打成一片の時節陰陽沙汰には及はぬ。」
⑥ 梅花欲花。珠云く「理では工夫熱して未だ發せず、事では陽和至りて花がひらかぬ」と、この二句は時節を序して、心機交徹を表す。
⑦ 好箇西來意。その端的達磨のつらだま。